茨城県教育財団文化財調査報告第146集

伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4

前田村遺跡G・H・I区
(上　巻)

平成11年3月

茨　　城　　県
財団法人　茨城県教育財団

210.231
Y67
1
NK

茨城県教育財団文化財調査報告第146集

伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4

前田村遺跡（まえだむら）G・H・I区
（上　巻）

平成11年3月

茨　城　県
財団法人　茨城県教育財団

寄贈
歴史・人類学系
平成　年　月　日

00603029

前田村遺跡遠景

縄文時代中期人骨（第2463号土坑）

中峠式土器（第2853・2859・2945号土坑）

土偶（第2567号土坑，第463・464B号住居跡）

序

茨城県は，周辺環境との調和を重視し，多様なニーズに対応した住居環境を整備しつつ，新しいまちの形成を図るために，公共施設の整備改善と宅地の利用増進を進めています。

その一環として，「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業」を進めており，その予定地内に埋蔵文化財包蔵地である前田村遺跡，高野台遺跡，西ノ脇遺跡が確認されています。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と開発地域内の埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び，平成４年４月から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は，既に「伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書１，２，３」として刊行しました。

本書は，平成７年度に行った前田村遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が，学術的な研究資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深めると共に，教育，文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である茨城県から賜りました多大なる御協力に対し，厚く御礼申し上げます。

また，茨城県教育委員会，伊奈町教委員会，谷和原村教育委員会をはじめ，関係各機関及び関係各位からいただいた御指導，御協力に対し，衷心より感謝の意を表します。

平成11年３月

財団法人　茨城県教育財団
理事長　橋　本　　昌

例　　言

1　本書は，平成７年度に茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した茨城県筑波郡谷和原村大字田字合ノ内915ほかに所在する前田村遺跡Ｇ・Ｈ・Ｉ区の発掘調査報告書である。

2　前田村遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

理事長		橋本　昌	平成７年４月～
副理事長		小林秀文	平成６年４月～平成８年３月
		中島弘光	平成７年４月～
		齋藤佳郎	平成８年４月～平成10年３月
		川俣勝慶	平成10年４月～
常務理事		一木邦彦	平成７年４月～平成８年３月
		齋藤紀彦	平成９年４月～
事務局長		齋藤紀彦	平成７年４月～平成８年３月
		西村敏一	平成９年４月～
埋蔵文化財部長		安藏幸重	平成５年４月～平成８年３月
		沼田文夫	平成８年４月～
埋蔵文化財部長代理		河野佑司	平成６年４月～
企画管理課	課長	水飼敏夫	平成４年４月～平成８年３月
		河崎孝典	平成９年４月～平成10年３月
		鈴木三郎	平成10年４月～
	課長代理	根本達夫	平成７年４月～
		清水　薫	平成９年４月～平成10年３月
	主任調査員	海老沢　稔	平成６年４月～平成８年３月
		小高五十二	平成８年４月～平成10年３月
		池田晃一	平成10年４月～
	主任	川崎教司	平成10年10月～（平成10年４月～平成10年９月主事）
経理課	課長	小幡弘明	平成５年４月～平成８年３月
		鈴木三郎	平成９年４月～平成10年３月（平成７年４月～平成８年３月主査）
		佐藤　健	平成10年４月～
	主査	田所多佳男	平成８年４月～
	課長代理	大高泰夫	平成７年４月～平成９年３月
		清水　薫	平成10年４月～

経理課	主任	小池　孝	平成7年4月～平成10年3月
		宮本　勉	平成9年4月～
		木下光保	平成10年4月～
	主事	軍司浩作	平成5年4月～平成8年3月
		小西孝典	平成9年4月～平成10年3月
調査課	課長(部長兼務)	安藏幸重	平成5年4月～平成8年3月
		沼田文夫	平成8年4月～
	班長	根本康弘	平成6年4月～平成9年3月
	主任調査員	野田良直	平成7年10月～平成8年3月　調査
	主任調査員	小島　敏	平成8年1月～平成8年3月　調査
	主任調査員	川村満博	平成7年4月～平成7年9月　調査
	主任調査員	柴田博行	平成8年1月～平成8年3月　調査
	副主任調査員	成島一也	平成7年4月～平成7年9月　調査
	副主任調査員	吹野富美夫	平成7年4月～平成8年3月　調査
整理課	課長	小泉　光正	平成9年4月～平成10年3月
		川井　正一	平成10年4月～　(平成8年4月～平成10年3月首席調査員)
	首席調査員	萩野谷　悟	平成10年4月～
	主任調査員	宮崎修士	平成9年10月～平成10年3月　整理・執筆
	主任調査員	柴田博行	平成9年10月～平成10年3月　整理・執筆
	主任調査員	吹野富美夫	平成9年4月～平成11年3月　整理・執筆・編集

3　本書の編集は吹野が行い，第3章第4節1を宮崎が，第3章第4節2・3・4を柴田が，それ以外を吹野が執筆した。

4　本書で使用した記号等については，凡例を参照されたい。

5　人骨・獣骨等の同定・分析については西本豊弘氏・姉崎智子氏（国立歴史民俗博物館），縄文土器の胎土分析については井上巌氏（第四紀地質研究所），和鏡の金属組成分析については平尾良光氏・早川泰弘氏・榎本淳子氏(東京国立文化財研究所）に玉稿をいただいた。分析結果は付章として報告する。

6　本書の作成にあたり，縄文時代の遺構と遺物については大村裕氏（千葉県立千葉高等学校）と鶴志田篤二氏（ひたちなか市教育委員会）に，古墳時代の遺物については比田井克仁氏（世田谷区立博物館）に，平安時代の和鏡については青木豊氏（國學院大學）に，中世の遺構と遺物については笹生衛氏（千葉県教育庁文化課）に御指導いただいた。

7　発掘調査及び整理に際して，御指導，御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

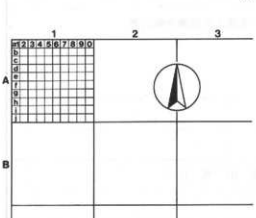
8　遺跡の概略

ふ り が な	いな・やわらきゅうりょうぶとくていとちくかくせいりじぎょうちないまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書　　名	伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書
副 書 名	前田村遺跡G・H・I区
巻　　次	4
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告
シリーズ番号	第146集
著 者 名	吹野富美夫　宮崎修士　柴田博行
編 集 機 関	財団法人　茨城県教育財団
所 在 地	〒310－0913　茨城県水戸市見和1丁目356番地の2　TEL 029－225－6587
発 行 日	1999年（平成11年）3月19日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
前田村遺跡 （まえだむらいせき）	茨城県筑波郡谷和原村大字田字谷ノ内915ほか （いばらきけんつくばぐん やわらむら おおあざ たあざ やいうち）	08483－19	36度 0分 11秒	140度 2分 6秒	20m～ 22m	950401～ 960331	36,280㎡	伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業の事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前田村遺跡	集落跡 墓跡	縄文時代	竪穴住居跡　121軒 土坑　872基 遺物包含層　2か所	縄文土器　石器 土偶　土版　耳飾り 人骨　獣骨　魚骨	縄文時代中期の埋葬人骨が良好な状態で出土。 縄文時代後期後葉から晩期の土偶・土版が完形の状態で出土。
		古墳時代	竪穴住居跡　11軒	土師器	
		平安時代	竪穴住居跡　6軒	土師器　和鏡	
		中世	掘立柱建物跡　3棟 地下式壙　8基 井戸　12基	土師質土器	

凡　　例



第１図　調査区呼称方法概念図

1　地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし，前田村遺跡はＸ軸＝＋500m，Ｙ軸＝＋17,480mの交点を基準点とした。大調査区は，この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西，南北に各々10等分し，４ｍ四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へＡ，Ｂ，Ｃ……，西から東へ１，２，３……とし，「Ａ１区」，「Ｂ２区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は，北から南へａ，ｂ，ｃ……ｊ，西から東へ１，２，３……０とし，名称は，大調査区の名称を冠し，「$A1a_1$区」，「$B2b_2$区」のように呼称した。

2　遺構，遺物，土層に使用した記号は，次のとおりである。

遺構　住居跡－ＳＩ　土坑－ＳＫ　井戸－ＳＥ　溝－ＳＤ　埋設土器－Ｍ　焼土遺構－Ｆ　ピット－Ｐ

遺物　土器・陶器－Ｐ　土製品－ＤＰ　石製品－Ｑ　金属製品・古銭－Ｍ　拓本土器－ＴＰ

土層　撹乱－Ｋ

3　遺構・遺物の実測図中の表示は，次のとおりである。

竈　粘土　炉・焼土・赤彩・遺物包含層・柱痕

黒色処理　繊維

● 土器　□ 石器・石製品　△ 土製品・金属製品　☆ 骨

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。

5　遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法については，次のとおりである。

（1）　住居跡や土坑等の遺構は60分の１に縮尺することを原則として掲載した。

（2）　遺物は原則として３分の１の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり，それらについては，個々にスケールで表示した。

（3）　「主軸方向」は炉あるいは竈をとおる軸線を主軸とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　Ｎ－10°－Ｅ，Ｎ－10°－Ｗ）。炉あるいは竈がない場合は，長径方向を表示した。なお，〔　〕を付したものは推定である。

（4）　土器の計測値は，Ａ－口径　Ｂ－器高　Ｃ－底径　Ｄ－高台径　Ｅ－高台高　Ｆ－体部径とし，単位はcmである。なお，現存値は（　）で，推定値は〔　〕を付して示した。

（5）　遺物観察表の備考の欄は，実測番号（Ｐ），土器の残存率，出土層位及びその他必要と思われる事項を記した。

目　　次

―上　巻―

序
例言
凡例
第1章　調査経緯 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査経過 …… 1
第2章　位置と環境 …… 3
　第1節　地理的環境 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 4
第3章　前田村遺跡 …… 8
　第1節　遺跡の概要 …… 8
　第2節　基本層序 …… 9
　第3節　G区の遺構と遺物 …… 10
　　1　縄文時代の遺構と遺物 …… 11
　　（1）竪穴住居跡 …… 11
　　（2）土坑 …… 155
　　（3）土器埋設遺構 …… 360
　　2　平安時代の遺構と遺物 …… 361
　　（1）土坑 …… 361
　　3　中・近世の遺構と遺物 …… 362
　　（1）掘立柱建物跡 …… 362
　　（2）方形竪穴状遺構 …… 366
　　（3）土坑 …… 369
　　（4）地下式壙 …… 373
　　（5）井戸 …… 374
　　（6）溝 …… 378
　　4　遺構外出土遺物 …… 382

―中　巻―

第4節　H区の遺構と遺物 …… 397
　　1　縄文時代の遺構と遺物 …… 397
　　（1）竪穴住居跡 …… 398
　　（2）土坑墓 …… 432

（3）土坑 …… 433
（4）焼土遺構 …… 563
（5）土器埋設遺構 …… 564
2　古墳時代の遺構と遺物 …… 565
（1）竪穴住居跡 …… 565
3　中・近世の遺構と遺物 …… 590
（1）方形竪穴状遺構 …… 591
（2）長方形土坑 …… 599
（3）地下式壙 …… 604
（4）井戸 …… 610
（5）堀 …… 613
（6）溝 …… 616
（7）ピット群 …… 618
4　遺構外出土遺物 …… 619
第5節　Ⅰ区の遺構と遺物 …… 633
1　縄文時代の遺構と遺物 …… 634
（1）竪穴住居跡 …… 634

－下　巻－

（2）炉跡 …… 681
（3）集石遺構 …… 683
（4）土坑 …… 684
（5）遺物包含層 …… 781
2　平安時代の遺構と遺物 …… 807
（1）竪穴住居跡 …… 807
3　中・近世の遺構と遺物 …… 819
（1）墳墓 …… 819
（2）土坑 …… 821
（3）地下式壙 …… 822
（4）井戸 …… 825
（5）溝 …… 827
4　その他の遺構と遺物 …… 829
（1）方形竪穴状遺構 …… 829
（2）土坑 …… 831
（3）焼土遺構 …… 833
5　遺構外出土遺物 …… 834
第6節　まとめ …… 849

1　旧石器時代 …… 849
2　縄文時代 …… 849
3　古墳時代 …… 852
4　平安時代 …… 852
5　中世 …… 852

付章 …… 861
前田村遺跡D・G・H・I区出土の人骨と動物遺体 …… 861
前田村遺跡出土縄文土器の胎土分析 …… 868
前田村遺跡から出土した和鏡の自然科学的研究 …… 883
鉛同位体比による産地推定の原理 …… 890

写真図版

挿図目次

第1図　調査区呼称方法概念図
第2図　前田村遺跡周辺遺跡位置図 …… 7
第3図　前田村遺跡調査区設定図 …… 8
第4図　基本土層図 …… 9
第5図　G区全体図 …… 10
第6図　第336号住居跡実測図 …… 12
第7図　第336号住居跡炉実測図 …… 13
第8図　第336号住居跡出土遺物実測図 …… 13
第9図　第337号住居跡実測図 …… 14
第10図　第337号住居跡炉実測図 …… 15
第11図　第337号住居跡出土遺物実測図(1) …… 16
第12図　第337号住居跡出土遺物実測図(2) …… 17
第13図　第338号住居跡実測図 …… 18
第14図　第338号住居跡出土遺物実測図 …… 19
第15図　第339号住居跡実測図 …… 20
第16図　第339号住居跡出土遺物実測図 …… 20
第17図　第340号住居跡実測図 …… 21
第18図　第340号住居跡出土遺物実測図 …… 22
第19図　第341号住居跡実測図 …… 23
第20図　第341号住居跡出土遺物実測図(1) …… 24
第21図　第341号住居跡出土遺物実測図(2) …… 25
第22図　第342号住居跡実測図 …… 26
第23図　第342号住居跡炉A実測図 …… 27
第24図　第342号住居跡出土遺物実測図 …… 28
第25図　第343・344号住居跡実測図 …… 29
第26図　第343号住居跡出土遺物実測図 …… 29
第27図　第343・344号住居跡出土遺物実測図 …… 31
第28図　第345号住居跡実測図 …… 32
第29図　第345号住居跡出土遺物実測図 …… 33
第30図　第346号住居跡出土遺物実測図 …… 33
第31図　第346号住居跡実測図 …… 34
第32図　第347号住居跡実測図 …… 35
第33図　第347号住居跡出土遺物実測図(1) …… 36
第34図　第347号住居跡出土遺物実測図(2) …… 37
第35図　第348号住居跡実測図 …… 39
第36図　第348号住居跡出土遺物実測図 …… 40
第37図　第349号住居跡出土遺物実測図 …… 40
第38図　第349号住居跡実測図 …… 41
第39図　第350号住居跡実測図 …… 42
第40図　第350号住居跡出土遺物実測図 …… 43
第41図　第351号住居跡実測図 …… 44
第42図　第351号住居跡出土遺物実測図 …… 45
第43図　第352号住居跡実測図 …… 46

第44図　第352号住居跡出土遺物実測図 …… 47
第45図　第353号住居跡実測図 …… 48
第46図　第354・355号住居跡実測図 …… 49
第47図　第354号住居跡出土遺物実測図(1) … 50
第48図　第354号住居跡出土遺物実測図(2) … 51
第49図　第356号住居跡実測図 …… 53
第50図　第356号住居跡出土遺物実測図 …… 54
第51図　第357A・B号住居跡実測図 …… 55
第52図　第357A号住居跡出土遺物実測図 … 56
第53図　第358号住居跡実測図 …… 58
第54図　第358号住居跡出土遺物実測図(1) … 59
第55図　第358号住居跡出土遺物実測図(2) … 60
第56図　第359・360号住居跡実測図 …… 61
第57図　第359号住居跡出土遺物実測図 …… 61
第58図　第360号住居跡出土遺物実測図 …… 62
第59図　第361号住居跡実測図 …… 63
第60図　第361号住居跡出土遺物実測図 …… 64
第61図　第362号住居跡実測図 …… 65
第62図　第362号住居跡出土遺物実測図 …… 66
第63図　第363号住居跡炉実測図 …… 67
第64図　第363号住居跡実測図 …… 68
第65図　第363号住居跡出土遺物実測図(1) … 69
第66図　第363号住居跡出土遺物実測図(2) … 70
第67図　第363号住居跡出土遺物実測図(3) … 71
第68図　第364A・B号住居跡実測図 …… 73
第69図　第364A・B号住居跡出土遺物
実測図 …… 74
第70図　第365号住居跡実測図 …… 75
第71図　第365号住居跡出土遺物実測図 …… 76
第72図　第366号住居跡実測図 …… 78
第73図　第366号住居跡出土遺物実測図 …… 78
第74図　第367号住居跡実測図 …… 79
第75図　第367号住居跡出土遺物実測図 …… 80
第76図　第368号住居跡出土遺物実測図 …… 81
第77図　第368号住居跡実測図 …… 82
第78図　第369号住居跡実測図 …… 83
第79図　第369号住居跡出土遺物実測図 …… 83
第80図　第370号住居跡実測図 …… 85
第81図　第370号住居跡出土遺物実測図 …… 86
第82図　第371号住居跡実測図 …… 88
第83図　第371号住居跡出土遺物実測図 …… 89
第84図　第372号住居跡実測図 …… 90
第85図　第373号住居跡実測図 …… 91
第86図　第373号住居跡出土遺物実測図 …… 92
第87図　第374号住居跡実測図 …… 93
第88図　第374号住居跡出土遺物実測図 …… 94
第89図　第375号住居跡実測図 …… 95
第90図　第375号住居跡出土遺物実測図 …… 96
第91図　第376号住居跡実測図 …… 97
第92図　第377号住居跡実測図 …… 99
第93図　第377号住居跡出土遺物実測図 …… 100
第94図　第378号住居跡実測図 …… 101
第95図　第378号住居跡出土遺物実測図 …… 102
第96図　第379号住居跡実測図 …… 103
第97図　第380号住居跡実測図 …… 104
第98図　第380号住居跡出土遺物実測図 …… 105
第99図　第381号住居跡実測図 …… 106
第100図　第381号住居跡出土遺物実測図 …… 107
第101図　第382号住居跡実測図 …… 108
第102図　第382号住居跡出土遺物実測図 …… 108
第103図　第383号住居跡実測図 …… 109
第104図　第384号住居跡実測図 …… 110
第105図　第384号住居跡出土遺物実測図 …… 111
第106図　第385号住居跡実測図 …… 112
第107図　第385号住居跡出土遺物実測図(1) … 113
第108図　第385号住居跡出土遺物実測図(2) … 114
第109図　第386号住居跡実測図 …… 116
第110図　第386号住居跡出土遺物実測図 …… 116
第111図　第387号住居跡実測図 …… 117
第112図　第387号住居跡出土遺物実測図 …… 118
第113図　第388号住居跡実測図 …… 119
第114図　第389号住居跡実測図 …… 120
第115図　第389号住居跡出土遺物実測図 …… 121
第116図　第391号住居跡実測図 …… 123
第117図　第391号住居跡出土遺物実測図 …… 123
第118図　第392号住居跡実測図 …… 124

第119図　第392号住居跡出土遺物実測図 …… 125
第120図　第393号住居跡実測図 …… 125
第121図　第393号住居跡出土遺物実測図 …… 126
第122図　第397号住居跡実測図 …… 128
第123図　第397号住居跡出土遺物実測図 …… 128
第124図　第399号住居跡実測図 …… 130
第125図　第400号住居跡実測図 …… 131
第126図　第400号住居跡出土遺物実測図(1) … 132
第127図　第400号住居跡出土遺物実測図(2) … 133
第128図　第401号住居跡実測図 …… 134
第129図　第401号住居跡出土遺物実測図 …… 134
第130図　第402号住居跡実測図 …… 135
第131図　第403号住居跡実測図 …… 136
第132図　第403号住居跡出土遺物実測図 …… 137
第133図　第404号住居跡実測図 …… 138
第134図　第405号住居跡実測図 …… 139
第135図　第405号住居跡出土遺物実測図 …… 139
第136図　第407号住居跡実測図 …… 140
第137図　第407号住居跡出土遺物実測図 …… 140
第138図　第408・413号住居跡実測図 …… 141
第139図　第408号住居跡出土遺物実測図 …… 142
第140図　第409号住居跡実測図 …… 143
第141図　第409号住居跡出土遺物実測図 …… 143
第142図　第410号住居跡実測図 …… 144
第143図　第411号住居跡実測図 …… 145
第144図　第411号住居跡出土遺物実測図 …… 146
第145図　第414・415・416号住居跡実測図 … 147
第146図　第414号住居跡出土遺物実測図 …… 147
第147図　第415号住居跡出土遺物実測図 …… 148
第148図　第417号住居跡実測図 …… 149
第149図　第418号住居跡実測図 …… 150
第150図　第418号住居跡出土遺物実測図 …… 151
第151図　第420号住居跡実測図 …… 152
第152図　第420号住居跡出土遺物実測図 …… 153
第153図　第1898号土坑・出土遺物実測図(1) … 156
第154図　第1898号土坑出土遺物実測図(2) …… 157
第155図　第1901号土坑・出土遺物実測図 …… 158
第156図　第1908号土坑・出土遺物実測図 …… 159
第157図　第1915号土坑・出土遺物実測図(1) … 161
第158図　第1915号土坑出土遺物実測図(2) …… 162
第159図　第1917A・B号土坑，第1917A号土坑出土遺物実測図 …… 163
第160図　第1920号土坑・出土遺物実測図 …… 164
第161図　第1927号土坑・出土遺物実測図 …… 165
第162図　第1932号土坑・出土遺物実測図(1) … 166
第163図　第1932号土坑出土遺物実測図(2) …… 167
第164図　第1934号土坑・出土遺物実測図 …… 169
第165図　第1937号土坑・出土遺物実測図 …… 170
第166図　第1941号土坑・出土遺物実測図 …… 171
第167図　第1944号土坑・出土遺物実測図 …… 173
第168図　第1948号土坑・出土遺物実測図 …… 174
第169図　第1950号土坑・出土遺物実測図 …… 176
第170図　第1951号土坑・出土遺物実測図 …… 177
第171図　第1952号土坑・出土遺物実測図 …… 178
第172図　第1954号土坑・出土遺物実測図 …… 180
第173図　第1957号土坑・出土遺物実測図 …… 182
第174図　第1961号土坑・出土遺物実測図 …… 183
第175図　第1969A・B号土坑，第1969A号土坑出土遺物実測図 …… 184
第176図　第1970号土坑・出土遺物実測図 …… 185
第177図　第1976号土坑・出土遺物実測図 …… 186
第178図　第1978号土坑・出土遺物実測図 …… 187
第179図　第1982号土坑・出土遺物実測図(1) … 189
第180図　第1982号土坑出土遺物実測図(2) …… 190
第181図　第1982号土坑出土遺物実測図(3) …… 191
第182図　第1982号土坑出土遺物実測図(4) …… 192
第183図　第1982号土坑出土遺物実測図(5) …… 193
第184図　第1989号土坑・出土遺物実測図 …… 196
第185図　第1999号土坑・出土遺物実測図 …… 198
第186図　第2001号土坑・出土遺物実測図 …… 199
第187図　第2003号土坑・出土遺物実測図 …… 200
第188図　第2000A・B・2005号土坑，第2005号土坑出土遺物実測図 …… 201
第189図　第2007号土坑・出土遺物実測図 …… 202
第190図　第2015号土坑・出土遺物実測図(1) … 204
第191図　第2015号土坑出土遺物実測図(2) …… 205

第192図　第2016号土坑・出土遺物実測図(1) … 207
第193図　第2016号土坑出土遺物実測図(2) …… 208
第194図　第2024・2025号土坑，
第2024号土坑出土遺物実測図 …… 209
第195図　第2025号土坑出土遺物実測図 …… 210
第196図　第2026号土坑・出土遺物実測図 …… 212
第197図　第2027号土坑・出土遺物実測図 …… 213
第198図　第2035号土坑・出土遺物実測図 …… 214
第199図　第2042号土坑・出土遺物実測図 …… 215
第200図　第2043号土坑・出土遺物実測図 …… 216
第201図　第2044号土坑・出土遺物実測図 …… 217
第202図　第2045号土坑・出土遺物実測図 …… 218
第203図　第2047号土坑・出土遺物実測図 …… 219
第204図　第2048号土坑・出土遺物実測図 …… 221
第205図　第2049号土坑・出土遺物実測図 …… 222
第206図　第2050号土坑・出土遺物実測図 …… 223
第207図　第2052号土坑・出土遺物実測図 …… 224
第208図　第2054号土坑・出土遺物実測図(1) … 225
第209図　第2054号土坑出土遺物実測図(2) …… 226
第210図　第2059号土坑・出土遺物実測図 …… 227
第211図　第2060号土坑・出土遺物実測図(1) … 228
第212図　第2060号土坑出土遺物実測図(2) …… 229
第213図　第2064号土坑・出土遺物実測図 …… 230
第214図　第2068Ａ・Ｂ号土坑，第2068Ａ号
土坑出土遺物実測図 …… 232
第215図　第2070号土坑・出土遺物実測図 …… 233
第216図　第2071号土坑・出土遺物実測図 …… 234
第217図　第2072号土坑・出土遺物実測図 …… 235
第218図　第2073号土坑・出土遺物実測図 …… 236
第219図　第2057・2075号土坑，
第2075号土坑出土遺物実測図 …… 238
第220図　第2076号土坑・出土遺物実測図 …… 239
第221図　第2078号土坑・出土遺物実測図(1) … 241
第222図　第2078号土坑出土遺物実測図(2) …… 242
第223図　第2079号土坑・出土遺物実測図 …… 243
第224図　第2085号土坑・出土遺物実測図 …… 244
第225図　第2090号土坑・出土遺物実測図 …… 245
第226図　第2093号土坑・出土遺物実測図 …… 246
第227図　第2095号土坑・出土遺物実測図 …… 248
第228図　第2104号土坑・出土遺物実測図 …… 249
第229図　第2108号土坑・出土遺物実測図 …… 249
第230図　第2110・2121号土坑，
第2110号土坑出土遺物実測図 …… 250
第231図　第2111Ａ・Ｂ号土坑，第2111Ａ号
土坑出土遺物実測図 …… 251
第232図　第2118号土坑・出土遺物実測図 …… 252
第233図　第2119号土坑・出土遺物実測図 …… 253
第234図　第2124号土坑・出土遺物実測図 …… 253
第235図　第2126号土坑・出土遺物実測図 …… 254
第236図　第2128号土坑・出土遺物実測図 …… 255
第237図　第2129号土坑・出土遺物実測図 …… 257
第238図　第2130号土坑・出土遺物実測図 …… 258
第239図　第2143号土坑・出土遺物実測図 …… 260
第240図　第2147号土坑・出土遺物実測図 …… 262
第241図　第2153号土坑・出土遺物実測図 …… 263
第242図　第2155号土坑・出土遺物実測図 …… 265
第243図　第2160号土坑・出土遺物実測図 …… 266
第244図　第2169号土坑・出土遺物実測図 …… 267
第245図　第2173号土坑・出土遺物実測図 …… 268
第246図　第2178号土坑・出土遺物実測図 …… 269
第247図　第2179号土坑・出土遺物実測図 …… 270
第248図　第2180号土坑・出土遺物実測図 …… 272
第249図　第2196号土坑・出土遺物実測図 …… 272
第250図　第2202号土坑・出土遺物実測図 …… 274
第251図　第2211号土坑・出土遺物実測図 …… 275
第252図　第2215号土坑・出土遺物実測図 …… 277
第253図　第2227号土坑・出土遺物実測図 …… 278
第254図　第2228号土坑・出土遺物実測図 …… 279
第255図　第2231号土坑・出土遺物実測図 …… 281
第256図　第2232号土坑・出土遺物実測図 …… 282
第257図　第2233号土坑・出土遺物実測図 …… 284
第258図　第2241・2242・2243・2335号土坑，
第2243号土坑出土遺物実測図 …… 285
第259図　第2245号土坑・出土遺物実測図 …… 287
第260図　第2251号土坑・出土遺物実測図 …… 288
第261図　第2254号土坑・出土遺物実測図 …… 289

第262図　第2256号土坑・出土遺物実測図 …… 290
第263図　第2260号土坑・出土遺物実測図 …… 292
第264図　第2265号土坑・出土遺物実測図 …… 293
第265図　第2266号土坑・出土遺物実測図(1) … 295
第266図　第2266号土坑出土遺物実測図(2) …… 296
第267図　第2274号土坑・出土遺物実測図 …… 297
第268図　第2276号土坑・出土遺物実測図 …… 299
第269図　第2278A・B・C号土坑,
第2278A号土坑出土遺物実測図 …… 300
第270図　第2280号土坑・出土遺物実測図 …… 301
第271図　第2288号土坑・出土遺物実測図 …… 302
第272図　第2300号土坑・出土遺物実測図 …… 303
第273図　第2304・2305号土坑，第2304号
土坑出土遺物実測図(1) …… 305
第274図　第2304号土坑出土遺物実測図(2) …… 306
第275図　第2306号土坑・出土遺物実測図 …… 307
第276図　第2311号土坑・出土遺物実測図 …… 308
第277図　第2313号土坑・出土遺物実測図 …… 309
第278図　第2316号土坑・出土遺物実測図 …… 310
第279図　第2319・2329・2330・2331号土坑,
第2319号土坑出土遺物実測図 …… 312
第280図　第2320号土坑・出土遺物実測図 …… 313
第281図　第2321号土坑・出土遺物実測図 …… 314
第282図　第2324A号土坑・出土遺物実測図 … 315
第283図　第2307・2308・2327号土坑,
第2327号土坑出土遺物実測図 …… 316
第284図　第2330号土坑出土遺物実測図 …… 317
第285図　第2331号土坑出土遺物実測図 …… 318
第286図　第2333・2334・2336号土坑,
第2334号土坑出土遺物実測図(1) …… 319
第287図　第2334号土坑出土遺物実測図(2) …… 320
第288図　第2337号土坑・出土遺物実測図 …… 321
第289図　第2338号土坑・出土遺物実測図 …… 323
第290図　第2348号土坑・出土遺物実測図(1) … 324
第291図　第2348号土坑出土遺物実測図(2) …… 325
第292図　第2340・2351号土坑,
第2351号土坑出土遺物実測図 …… 326
第293図　第2352号土坑・出土遺物実測図 …… 327
第294図　縄文土坑実測図(1) …… 329
第295図　縄文土坑実測図(2) …… 330
第296図　縄文土坑実測図(3) …… 331
第297図　縄文土坑実測図(4) …… 332
第298図　縄文土坑実測図(5) …… 333
第299図　縄文土坑実測図(6) …… 334
第300図　縄文土坑実測図(7) …… 335
第301図　縄文土坑実測図(8) …… 336
第302図　縄文土坑実測図(9) …… 337
第303図　縄文土坑実測図(10) …… 338
第304図　縄文土坑実測図(11) …… 339
第305図　縄文土坑実測図(12) …… 340
第306図　縄文土坑実測図(13) …… 341
第307図　縄文土坑実測図(14) …… 342
第308図　縄文土坑実測図(15) …… 343
第309図　縄文土坑実測図(16) …… 344
第310図　縄文土坑実測図(17) …… 345
第311図　縄文土坑実測図(18) …… 346
第312図　縄文土坑実測図(19) …… 347
第313図　縄文土坑実測図(20) …… 348
第314図　縄文土坑実測図(21) …… 349
第315図　縄文土坑実測図(22) …… 350
第316図　第1号土器埋設遺構・出土遺物
実測図 …… 360
第317図　第1983号土坑・出土遺物実測図 …… 361
第318図　第1号掘立柱建物跡実測図 …… 363
第319図　第2号掘立柱建物跡実測図 …… 364
第320図　第3号掘立柱建物跡・出土遺物
実測図 …… 365
第321図　第1～3号方形竪穴状遺構実測図 … 367
第322図　中世土坑実測図(1) …… 370
第323図　中世土坑実測図(2) …… 371
第324図　中世土坑実測図(3) …… 372
第325図　第24号地下式壙実測図 …… 373
第326図　第27号井戸実測図 …… 375
第327図　第21～23号井戸実測図 …… 376
第328図　第24～26・28号井戸実測図 …… 377
第329図　第107・111号溝出土遺物実測図 …… 379

第330図　第87・88・90～92・94・95・97～105号溝実測図 …… 380
第331図　第107・111・112・114・115・118・119号溝実測図 …… 381
第332図　遺構外出土遺物実測図(1) …… 387
第333図　遺構外出土遺物実測図(2) …… 388
第334図　遺構外出土遺物実測図(3) …… 389
第335図　遺構外出土遺物実測図(4) …… 390
第336図　遺構外出土遺物実測図(5) …… 391
第337図　遺構外出土遺物実測図(6) …… 392
第338図　遺構外出土遺物実測図(7) …… 393
第339図　遺構外出土遺物実測図(8) …… 394
第340図　遺構外出土遺物実測図(9) …… 395

表　目　次

表1　前田村遺跡周辺遺跡一覧表 …… 6
表2　前田村遺跡G区縄文時代住居跡一覧表 …… 153
表3　前田村遺跡G区縄文時代土坑一覧表 …… 351
表4　前田村遺跡G区掘立柱建物跡一覧表 …… 366
表5　前田村遺跡G区中世方形竪穴状遺構一覧表 …… 368
表6　前田村遺跡G区中世土坑一覧表 …… 369
表7　前田村遺跡G区中世井戸一覧表 …… 375
表8　前田村遺跡G区中・近世溝一覧表 …… 379

第1章　調　査　経　緯

第1節　調査に至る経過

伊奈・谷和原丘陵部における土地の区画利用は，常磐新線による伊奈町，谷和原村の玄関口として都市性の高い街を計画的に整備するために，駅を中心とした商業・業務機能や住宅地及び誘致施設などを中心として計画された。

この事業に先立ち，茨城県常磐新線整備推進課は，茨城県教育委員会（以下，「県教育委員会」とする。）に，伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内における埋蔵文化財の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対し県教育委員会は，伊奈町教育委員会，谷和原村教育委員会と埋蔵文化財所在の有無及びその取り扱いについて協議した。その結果，伊奈町には高野台遺跡が，谷和原村には西ノ脇遺跡，前田村遺跡が所在することを確認し，県教育委員会は常磐新線整備推進課に開発地域内に埋蔵文化財の包蔵地が所在することを回答した。平成3年11月，常磐新線整備推進課は，県教育委員会と伊奈・谷和原丘陵部地内における埋蔵文化財包蔵地の範囲の確認及びその取り扱いについて協議を重ねた結果，記録保存の措置を講ずることとし，県教育委員会は平成3年度末に事務手続きが常磐新線整備推進課から移った土浦土木事務所に対し，調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

平成4年度からは，伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業の取り扱いについては，土浦土木事務所から今回の開発のために組織された茨城県県南都市建設事務所に移行された。

茨城県教育財団は，茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け，平成4年4月1日から前田村遺跡の発掘調査を開始した。平成4年度にはA・B区，平成5年度にはC・D・E区，平成6年度にはD区の残りとF区の発掘調査を実施した。

第2節　調　査　経　過

前田村遺跡G・H・I区の発掘調査は，平成7年4月1日から平成8年3月31日までの1年間にわたって実施した。以下，調査経過について，その概要を記述する。

4月　3日から調査のための諸準備を行った。7日に県南都市建設事務所区画整理課と今後の調査についての打ち合わせを行った。12日から補助員を投入し，平成6年度に遺構確認調査を終了してあるG区の遺構調査を開始した。

5月　前月に引き続きG区の遺構調査をした。18日から30日までI区の山林伐開を業者に委託して実施した。23日からH区とI区にグリットを設定し，試掘を開始した。試掘により，多数の竪穴住居跡とその他の遺構を確認した。また，I区南東部の傾斜地には遺物包含層を確認した。

6月　前月に引き続き，G区の遺構調査を進めた。降雨により現場作業を中止する日が多く，調査の進行が滞る。雨天の日は，遺物洗浄を実施した。7日から11日までH区とI区の表土除去をするための仮設道路を設置した。

7月　前月に引き続き，G区の遺構調査を進めた。3日から14日までH区に防塵ネット設置を業者に委託して実施した。17日からI区の重機による表土除去を開始し，24日から補助員の半数を投入しI区の遺構確認

調査をG区の遺構調査と並行して実施した。下旬からは補助員休憩所と倉庫及び駐車場移設のための整地を開始した。

8月　前月に引き続き，重機による表土除去及び遺構確認調査を実施した。G区の遺構調査については上旬から中断し，補助員全員でH区とI区の遺構確認調査を行った。4日から補助員休憩所と倉庫を移設する準備を開始し，8日には移設を完了させた。1日から10日まで基準点の方眼杭打ちを茨城県建設技術公社に委託して実施した。

H区とI区の表土除去は11日まで行い，遺構確認調査を30日に終了する。その結果，H区南部からI区北部にかけて遺構が密集し，約40m四方の範囲で遺構が連続する地点が三か所あることを確認した。遺構は，竪穴住居跡68軒，土坑482基，溝18条を数えた。また，同日，ローリングタワーを用いての遺構確認状況写真撮影を実施した。31日には，G区の遺構調査を再開した。

9月　G区の遺構調査は12日に終了し，13日にローリングタワーからの全景写真撮影を実施した。H区の遺構調査を14日から開始した。H区とI区における縄文時代遺構の覆土には，獣骨とともに多量の魚骨類が含まれていることを確認した。調査では，その一部をサンプリングし，水洗選別を実施した。

10月　前月に引き続き，H区の遺構調査をした。遺構が広範囲にわたり重複している地点では，土層観察用のベルトを縦横に設定して調査を開始した。そして，遺構を確認するとベルトを再設定して調査を進めた。中旬からは，遺構の密度があるI区の遺構調査を開始し，H区の残りの調査はI区の調査終了後に実施することにした。

4日に縄文時代中期の埋葬人骨を確認する。水分を含み脆弱なため，バインダー17で保存処理をしながら覆土を少しづつ取り除き調査をした。調査の結果，全身骨が出土した。人骨の鑑定は，国立歴史民俗博物館に依頼した。

11月　前月に引き続き，I区の遺構調査を進めた。I区中央部に黒褐色土が堆積する周溝を確認した。周溝の中央部には主体部があり，主体部内から土師質土器が出土したことから，墳墓と判断した。

12月　前月に引き続き，I区の遺構調査を進めた。午後から強風のため現場作業を中止しなければならない日が続いた。その日は，遺物洗浄を実施した。

1月　I区の調査は12日で終了する。上旬からはH区の調査を再開し，13日からは補助員全員を投入してH区の残りの調査を実施した。

2月　前月に引き続き，H区の遺構調査を進めた。朝晩の冷え込みが厳しく，霜により調査の進捗が滞る。

3月　6日に委託者に対する報告会を行い，10日に現地説明会を開催して今年度の調査成果を公開した。13日に遺跡全景写真撮影と航空写真撮影を実施した。19日までに遺跡内の危険個所の安全対策を行い，22日に現地の調査を終了した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

前田村遺跡G・H・I区は，茨城県筑波郡谷和原村大字田宇台ノ内915ほかに所在している。

茨城県の地形は，北部の八溝山塊と南部の常総台地に大区分され，常総台地はさらに中央部に連なる筑波山塊を境に東部台地と南部台地と西部台地とに区分することができる。筑波山塊の南に広がる南部台地には，北東側に新治台地，中央部に筑波・稲敷台地，南西側に北相馬台地が展開している。南部台地の標高は，筑波山麓から南東方向へ40mから20m前後まで徐々に低下している。筑波山麓西側を南流してきた桜川は，新治台地と筑波・稲敷台地の間に入るとその流れを南から南東に変え，霞ヶ浦に注いでいる。茨城県西部を南流してきた小貝川は，筑波・稲敷台地西側付近で最大幅8kmに達する鬼怒川・小貝川低地を発達させ，北相馬台地に接しながら東流している。なお，鬼怒川は，江戸時代まで北相馬台地北端の小絹北側で東流して小貝川と合流していたため洪水の原因となっていた。江戸時代初期に治水事業が行われ，猿島・北相馬台地の一部を開削し小貝川と分流させたことにより，利根川に注ぎ込むようになった。

前田村遺跡が所在する谷和原村は，茨城県の南西部に位置し，東部は伊奈町，西部は水海道市，南部は守谷町，北部はつくば市に接している。当村の中央部には鬼怒川と小貝川によって形成された沖積低地があり，北東側に筑波・稲敷台地が広がり，南西側に北相馬台地が，南東側には結城台地が連なっている。筑波・稲敷台地は，標高は30～20mで，北から南へ傾斜している。小貝川低地沿いの台地西側縁辺部では，西へ開口する樹枝状の小支谷が発達している。台地南部では西谷田川と東谷田川の開析谷が南南東方向に発達し，台地は併走する谷によって短冊状に分断されている。これらの谷を流れる川は，牛久沼に流入している。北相馬台地は，標高20m前後の細長い台地である。この台地は，周辺の台地に比べ開析が進んでおり，谷の長さに対して谷幅が広いことが特徴である。谷和原村における多くの遺跡は，低地に面した両台地上の縁辺部に立地している。

筑波・稲敷台地の地層は，貝化石を産する見和層（成田層）を基盤層として，その上に砂まじりのロームから，クロスラミナの顕著な砂あるいは砂礫層である竜ケ崎砂礫層へ漸移する。そして，その上層は所によってさまざまに変化するが，総じてローム層下に火山灰質粘土層である常総粘土層がみられる。その上は褐色の関東ローム層におおわれており，ローム層中の下位に厚さ10～20cmの黄色軽石層が観察される。

前田村遺跡は小貝川低地沿いの筑波・稲敷台地縁辺部に位置し，遺跡の周辺は樹枝状の小支谷が発達している。前田村遺跡は，小支谷に挟まれた標高20～22mの舌状台地中央部に立地している。台地と低地の比高は10mである。

参考文献

・茨城県農地部農地計画課　『土地分類基本調査　土浦』 1983年12月
・茨城県農地部農地計画課　『土地分類基本調査　龍ヶ崎』 1987年12月

第2節　歴史的環境

前田村遺跡〈1〉周辺には，多くの遺跡が確認されている。『茨城県遺跡地図』[1]によれば，谷和原村には17遺跡が周知されており，今後の調査でさらに多くの遺跡が発見されることが考えられる。遺跡の分布をみると，小貝川低地では今のところ皆無に近く，筑波・稲敷台地と北相馬台地の縁辺部及び結城台地の先端部に集中している。

谷和原村周辺では近年開発が進み，それに伴う埋蔵文化財の発掘調査が増加している。今までに，洞坂畑遺跡[2]，東楯戸古墳[3]，大谷津B遺跡[4]，筒戸A・B遺跡[5]，大谷津A遺跡[6]，西ノ脇遺跡[7]，原遺跡・沼崎遺跡[8]，前原遺跡・大門遺跡・三本松遺跡[9]，高野台遺跡[10]等が調査され，報告書が刊行されている。ここでは，前田村遺跡と密接な関係が窺われる周辺の遺跡等を中心に，各時代ごとに概観していきたい。

旧石器時代の遺跡は確認例が少なく，前田村遺跡〈1〉と伊奈町の高野台遺跡〈2〉とで調査されたにすぎない。前田村遺跡からは平成4年度に調査したB区でメノウの剥片等が出土している[11]。高野台遺跡からは平成6年度の調査で旧石器の集中地点が2か所確認されている[12]。

縄文時代は，谷和原村周辺で遺跡数が多く，早期から晩期まで確認されている。早期の遺跡としては，西下宿遺跡[13]〈3〉がある。西下宿遺跡からは，主として早期中葉の沈線文系土器群と早期後葉の条痕文系土器群が出土している[14]。伊奈町の高野台遺跡からも早期の土器片が出土している。前期の遺跡は，前田村遺跡に隣接する関山式期の田村貝塚〈4〉，北相馬台地に立地する浅間山貝塚〈5〉と守谷町の郷州原遺跡[15]〈6〉が知られている。原遺跡〈7〉と高野台遺跡からも前期の遺構が確認され，平成8年度に調査した前田村遺跡K区でも浮島Ⅱ式期の住居跡が確認されている。中期になると遺跡数は増加し，前田村遺跡〈1〉をはじめ大谷津A遺跡〈8〉，大谷津B遺跡〈9〉，筒戸A遺跡〈10〉，筒戸B遺跡〈11〉，福岡新宿遺跡〈12〉がある。大谷津A遺跡は，阿玉台Ⅰb式期から加曽利EⅢ式期の集落跡である。大谷津B遺跡は，加曽利EⅢ・Ⅳ式期の集落跡である。また，大谷津B遺跡の南側に隣接する筒戸A・B遺跡もほぼ同時期の集落跡である。これらの4遺跡は，いずれも鬼怒川左岸にある北相馬台地上の平坦地に立地しており，隣接することから同一遺跡と考えられる。筑波・稲敷台地西部の縄文時代中期集落をみると，大規模でかつ長期に渡り存続する遺跡は当前田村遺跡以外になく，前田村遺跡が縄文時代中期の拠点的集落であることが考えられる。後・晩期の遺跡としては，北相馬台地に立地する谷和原村の洞坂畑遺跡〈13〉，筑波・稲敷台地に立地する苗代山A遺跡〈14〉と苗代山B遺跡〈15〉がある。洞坂畑遺跡では，B地区から竪穴住居跡1軒が調査され，遺物の主体は安行1～3d式期である[16]。その他，伊奈町西部の筑波・稲敷台地では，鹿島神社遺跡〈16〉，上街道遺跡〈17〉，真瀬新田谷津遺跡〈18〉，小張貝塚〈19〉，南太田貝塚〈20〉が確認されている。水海道市東部の結城台地先端部では，横曽根貝塚〈21〉，西坪貝塚〈22〉，中坪遺跡〈23〉，舘遺跡〈24〉が確認されている。守谷町北部の北相馬台地では，同地貝塚〈25〉が確認されている。

弥生時代の遺跡は，現在のところ谷和原村では確認されていない。伊奈町では高野台遺跡から中期の土器片が数点出土している。

古墳時代の遺跡は古墳及び古墳群が多く，台地縁辺で確認されている。小貝川左岸の筑波・稲敷台地では，福岡古墳群〈26〉，並木古墳〈27〉，東楯戸古墳〈28〉，宮後古墳〈29〉が確認されている。鬼怒川左岸の結城台地先端部では，飯沼古墳群〈31〉，権現塚古墳〈32〉，七ツ塚古墳〈33〉，蟹岡古墳〈34〉，志部古墳〈35〉が確認されている。小貝川右岸の北相馬台地では，原遺跡〈7〉と同地古墳群〈36〉が確認されている。東楯戸古墳は，円墳で1978年に調査されている。堀掛施設は，長軸8m，短軸2.35mの粘土郭である[17]。原遺跡は1995年に調査

され，墳長26.20mの前方後円墳１基が確認されている。埋葬施設は，雲母片岩を用いた箱式石棺である[18]。集落跡は，近年の調査で増加している。前期の遺跡は，水海道市の前原遺跡〈38〉があり，前田村遺跡Ｈ・Ｊ区からも竪穴住居跡が確認されている。中期の遺跡は，大谷津Ａ遺跡〈８〉と大門通遺跡〈39〉がある。大谷津Ａ遺跡では竪穴住居跡３軒が，大門通遺跡では竪穴住居跡６軒が調査されている。後期の遺跡は，守谷町の郷州原遺跡〈６〉，水海道市の三本松遺跡〈40〉，谷和原村の西ノ脇遺跡〈41〉がある。三本松遺跡では竪穴住居跡１軒が調査され，西ノ脇遺跡では竪穴住居跡５軒が調査されている。前田村遺跡Ｆ・Ｈ・Ｊ区からも竪穴住居跡が確認されており，近接して立地する西ノ脇遺跡との関連が窺われる。

奈良・平安時代の遺跡は少なく，谷和原村の大谷津Ａ遺跡と筒戸Ａ・Ｂ遺跡から数軒の竪穴住居跡が調査されている。前田村遺跡では，Ｆ・Ｉ・Ｊ区から平安時代の住居跡が確認されている。また，谷和原村福岡の大楽寺には，定朝様とされる平安時代末期の阿弥陀如来像及び脇侍像[19]が安置されており，仏教を受容していた勢力の存在が考えられる。

中世の遺跡は，集落跡と墓地と城館跡がある。集落跡と墓地の調査例は少なく，三本松遺跡〈40〉と西ノ脇遺跡〈41〉だけである。三本松遺跡では，方形竪穴状遺構５基，土坑墓43基，火葬土坑墓１基，井戸３基等が調査され，土坑墓と火葬土坑墓と井戸は傾斜した窪地にまとまって確認されている[20]。西ノ脇遺跡では，掘立柱建物跡２棟，土坑55基，地下式壙７基，井戸２基，溝14条が調査され，それらが溝によって区画されされている[21]。前田村遺跡においても，掘立柱建物跡や方形竪穴状遺構や地下式壙や土坑等が確認されている。特に，平成６年度に調査したＤ区と平成８年度に調査したＪ区の低地部では，区画された溝の内部に土坑と地下式壙が配置された墓域が形成されていた。前田村遺跡に隣接する田の集落では，田の古屋敷は前田村遺跡内にある八幡神社付近にあったという古くからの伝承があり，これらの遺構との関係が考えられる。城館跡としては，筑波・稲敷台地には小張（おばり）城跡〈42〉，板橋（いたばし）城跡〈43〉，三篠院（みさいいん）城跡〈44〉等があり，北相馬台地には相馬氏系の城跡といわれる守谷（もりや）城跡〈45〉，筒戸（つつど）城跡〈46〉等がある。

※　本文中の〈　〉内の番号は，表１・第２図中の該当番号と同じである。

註

（１）　茨城県教育委員会　『茨城県遺跡地図』　1990年３月

（２）　洞坂畑遺跡発掘調査会　『洞坂畑遺跡』　1979年９月

（３）　茨城県教育財団　『常磐自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ　東楢戸古墳』「茨城県教育財団文化財調査報告ＸＩ」　1981年３月

（４）　茨城県教育財団　『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書１　大谷津Ｂ遺跡』「茨城県教育財団文化財調査報告第18集」　1981年３月

（５）　茨城県教育財団　『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書２　筒戸Ａ・Ｂ遺跡』「茨城県教育財団文化財調査報告第24集」　1984年３月

（６）　茨城県教育財団　『水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書３　大谷津Ａ遺跡』「茨城県教育財団文化財調査報告第28集」　1985年３月

（７）　茨城県教育財団　『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書１　西ノ脇遺跡　前田村遺跡』「茨城県教育財団文化財調査報告第87集」　1994年３月

（８）　茨城県教育財団　『常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書１　原遺跡　沼崎遺跡』「茨城県教育財団文化財調査報告第112集」　1996年３月

(9) 茨城県教育財団 『一般国道354号(水海道バイパス)道路改良工事内埋蔵文化財調査報告書 前原遺跡 大門通遺跡 三本松遺跡』「茨城県教育財団文化財調査報告第114集」 1996年6月

(10) 茨城県教育財団 『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3 高野台遺跡 前田村遺跡D区・F区』「茨城県教育財団文化財調査報告第127集」 1997年9月

(11) 註7文献に同じ

(12) 註9文献に同じ

(13) 茨城県教育財団 『年報1』 1982年3月

(14) 斉藤弘道 「茨城の縄文時代草創期・早期の土器群について(一)」『年報3』 茨城県教育財団 1984年3月

(15) 守谷町教育委員会 『郷州原遺跡』 1981年

(16) 註2文献に同じ

(17) 註3文献に同じ

(18) 註8文献に同じ

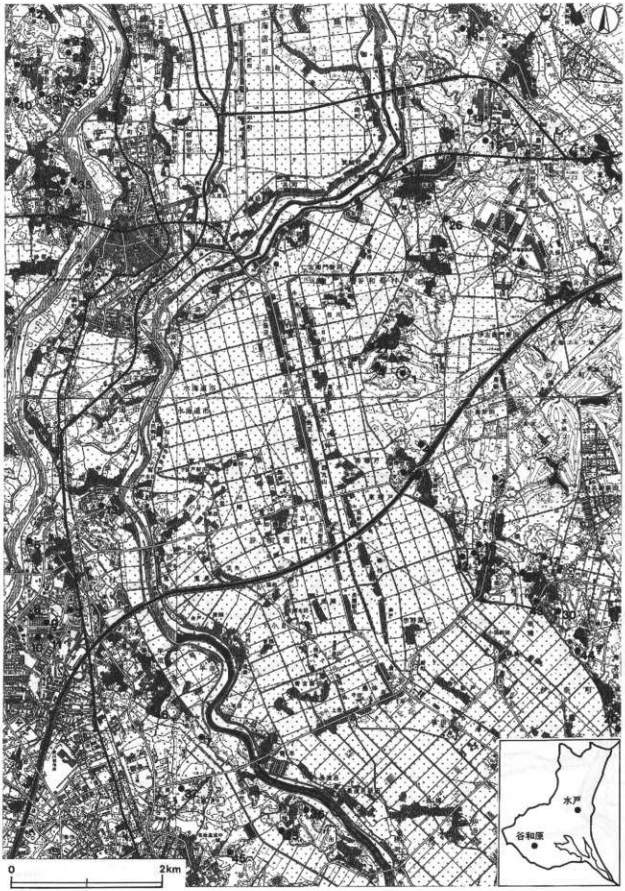
(19) 茨城県立歴史館 『茨城の仏教美術―鎌倉・室町時代の仏像と仏画―』 1996年10月

(20) 註9文献に同じ

(21) 註7文献と同じ

表1 前田村遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧	縄	弥	古	奈平	中世	番号	遺跡名	県遺跡番号	時代 旧	縄	弥	古	奈平	中世
①	前田村遺跡	—	○	○		○	○	○	24	館遺跡	6044		○				
2	高野台遺跡	—	○	○	○				25	同地貝塚	2576		○				
3	西下宿遺跡	5854		○					26	福岡古墳群	2137				○		
4	田村貝塚	2135		○					27	並木古墳	2136				○		
5	浅間山貝塚	2140		○					28	東楢戸古墳	4092				○		
6	郷州原遺跡	—		○		○			29	宮後古墳	2124				○		
7	原遺跡	—		○		○			30	大房地遺跡	2129				○		
8	大谷津A遺跡	5852		○			○		31	飯沼古墳群	6047				○		
9	大谷津B遺跡	5853		○					32	権現塚古墳	2356				○		
10	筒戸A遺跡	5855		○			○		33	七ツ塚古墳群	2358				○		
11	筒戸B遺跡	5856		○			○		34	豊岡古墳	2359				○		
12	福岡新宿遺跡	5850		○					35	志部古墳	6045				○		
13	洞板畑遺跡	2139		○					36	同地古墳群	2575				○		
14	苗代山A遺跡	4090		○					37	庚塚遺跡	2580				○		
15	苗代山B遺跡	4091		○					38	前原遺跡	—				○		
16	鹿島神社遺跡	2122		○					39	大門通遺跡	—				○		
17	上街道遺跡	2123		○					40	三本松遺跡	—				○		○
18	真瀬新田谷津遺跡	2916		○					41	西ノ脇遺跡	—				○		○
19	小張貝塚	2130		○					42	小張城跡	5848						○
20	南太田貝塚	2131		○					43	板橋城跡	5847						○
21	横曽根貝塚	2364		○					44	三條院城跡	4014						○
22	西坪貝塚	6050		○					45	守谷城跡	2578						○
23	中坪遺跡	6048		○			○		46	筒戸城跡	5851						○



第２図　前田村遺跡周辺遺跡位置図

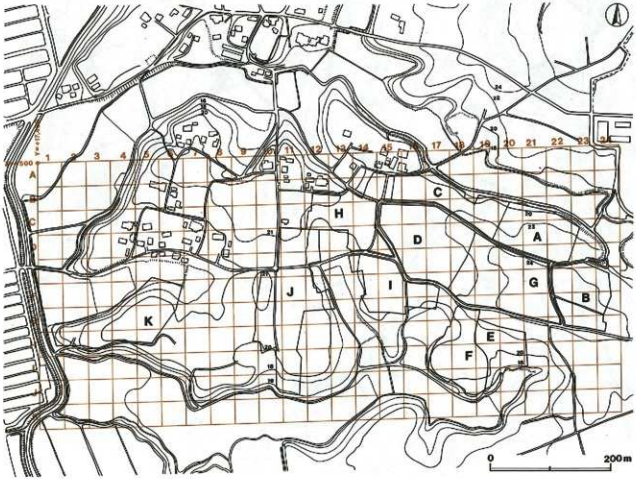
第3章　前田村遺跡

第1節　遺跡の概要

前田村遺跡は，茨城県筑波郡谷和原村大字田に所在し，小貝川左岸にある標高約20～22mの筑波・福敷台地上に立地している。当遺跡の総面積は約130,000㎡であり，現況は畑地と山林である。

当遺跡は，これまでの調査の過程で便宜上A～I区に分けている。これは，道路等の現況と調査年度の順に従って呼称してきたものである。平成4年度はA・B区，平成5年度はC・D・E区，平成6年度はD・F区を調査してきた。今回の調査区はG・H・I区で，G区が15,557㎡，H区が12,034㎡，I区が8,669㎡である。なお，D区については，平成5年度に6,608㎡を調査し，平成6年度に残りの8,339㎡を調査した。

今回の調査区からは，縄文時代，古墳時代，平安時代，中世の遺構を確認した。調査した遺構は，竪穴住居跡138軒，土坑墓1基，土坑954基，掘立柱建物跡3棟，方形竪穴状遺構13基，地下式壙8基，井戸12基，溝54条，遺物包含層2か所である。縄文時代の遺構は，竪穴住居跡121軒，土坑872基，遺物包含層2か所を確認した。G区では，中央広場と考えられる空白部を中心に遺構が分布している。H区とI区では，標高の高い尾根部に遺構が集中している。古墳時代の遺構は，H区西部に分布し，竪穴住居跡11軒を確認した。後期の竪穴住



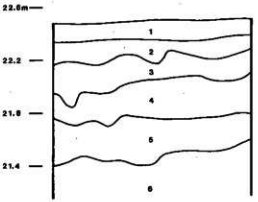
第3図　前田村遺跡調査区設定図

居跡は１軒だけで，残り10軒は前期の竪穴住居跡である。平安時代の遺構は，Ｉ区の標高の低い西部と南部に分布し，竪穴住居跡６軒を確認した。中世の遺構は，掘立柱建物跡３棟，方形竪穴状遺構13基，土坑26基，地下式壙８基，井戸12基，溝54条を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に530箱出土している。縄文時代の遺物は，縄文時代中期から晩期にかけての土器が遺物の大部分を占めており，それ以外に土偶，土版，耳飾り等が出土している。土坑の覆土には獣骨や魚骨等が包含されており，水洗選別を実施した。また，Ｈ区に縄文時代中期の埋葬人骨を確認し，全身骨が出土した。古墳時代前期の遺物は土師器が主体で，壺，高坏，ミニチュア土器等が出土している。古墳時代後期の遺物は土師器の甕や坏等が出土している。平安時代の遺物は，土師器，須恵器，和鏡（水草飛鳥鏡）等が出土している。中世の遺物は，土師質土器の小皿や常滑産の甕等が出土している。

第２節　基本層序

前田村遺跡Ｉ区のＥ14ｃｏ区付近にテストピットを設定し，基本土層の観察を行った。当遺跡のＨ・Ｉ区付近は，西側に小支谷が貫入し，尾根状の地形を呈している。そのため，平坦地は少なく，そのほとんどが傾斜地である。テストピットの土層を観察すると，表土下のローム層にはソフトローム層はなく，ソフトローム層を含む上部ローム層が流失していることがうかがわれる。遺構は第３層上面で確認している。以下，テストピットの観察から，層序を説明する。



第４図　基本土層図

第１層　暗褐色土の表土。厚さ６～16cmで，耕作土である。

第２層　黒褐色土。厚さ８～18cmで，比較的締まりのある腐植土層である。

第３層　褐色硬質ローム。厚さ10～22cmで，火山ガラス粒子を微量含む。姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）を含む層と考えられる。

第４層　暗褐色硬質ローム。厚さ22～32cmで，粘性が強い。武蔵野台地等における第Ⅱ黒色帯に相当するものと考えられる。

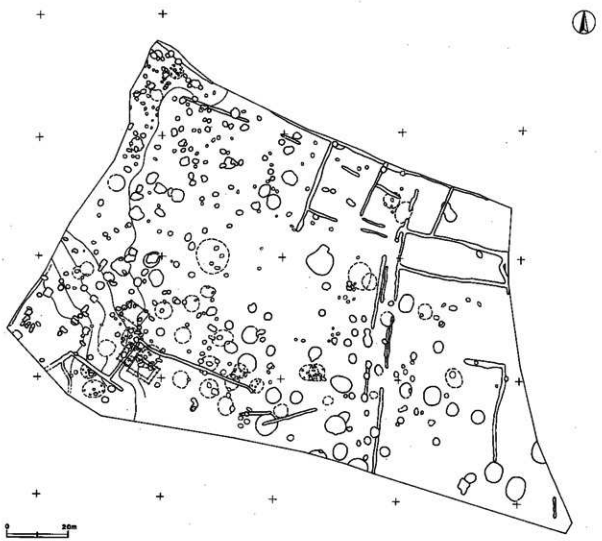
第５層　明褐色硬質ローム。厚さ10～36cmで，第４層より締まりがある。

第６層　明褐色硬質ローム。厚さは30cm以上あり，未掘のため本来の厚さは不明である。締まりは第５層より強い。

第３節　Ｇ区の遺構と遺物

Ｇ区は，当遺跡の東部に位置している。Ｇ区の東側にはＢ区，南側にはＥ・Ｆ区，西側にはＤ区，北側にはＡ区がある。Ｇ区域の地形はほぼ平坦であるが，南西側には谷津があり，Ｇ区の南西部は谷津に向かってわずかに傾斜している。

Ｇ区では，縄文時代の竪穴住居跡79軒，土坑364基，土器埋設遺構１基，平安時代の土坑１基，中世の掘立柱建物跡３棟，方形竪穴状遺構３基，土坑25基，地下式壙１基，井戸８基，溝34条を調査した。遺物は，遺物収納箱（60×40×20cm）で196箱が出土している。以下，時代別に遺構と遺物を記載する。



第５図　Ｇ区全体図

1　縄文時代の遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

G区では，縄文時代の竪穴住居跡79軒を調査した。第357・364号住居跡については，それぞれAとBとに分けた。第338・390・394～396・398号住居跡については，土坑に改称したり遺構ではないことが判明したことから欠番とした。

第336号住居跡（第６～８図）

位置　調査区の南東部，G21ｉ0区。

規模と平面形　長径7.86m，短径6.46mの楕円形である。

主軸方向　N－25°－E

壁　北壁だけが残存しておらず，壁高は最大で12cmである。

床　平坦で，中央部が踏み固められている。

ピット　19か所。P_1～P_8は長径48～60cm，短径42～54cmの楕円形で，深さは52～77cmである。P_1～P_8は，1.20～2.10mの間隔をもって楕円形状に配置されることから主柱穴であり，８本柱の住居跡と考えられる。P_9～P_{19}は長径34～48cm，短径30～44cmの楕円形で，深さ16～40cmである。P_9～P_{19}は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　中央部に付設されている。長径1.22m，短径1.02mの楕円形で，北側には底部を欠損させた深鉢を埋設させた土器埋設炉である。炉の深さは８cmほどあり，埋設土器は南側へ傾斜している。炉底面は，火熱により赤変硬化している。

覆土　１層である。炉上部は焼土粒子を多く含んでいる。

土層解説

1　褐　色　　ロームブロック中量，焼土粒子・炭化物微量

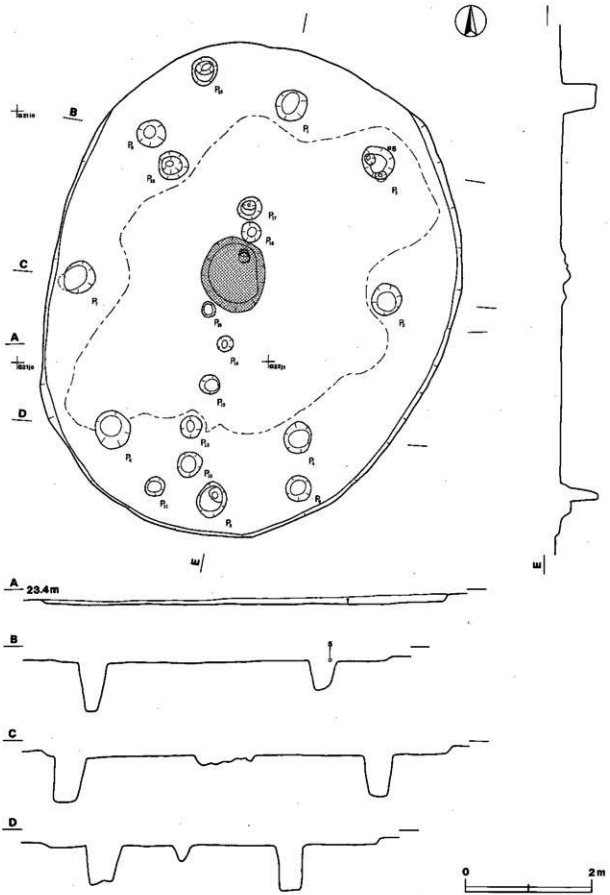
遺物　縄文土器片203点，打製石斧１点が出土している。１は底部が欠損する深鉢で，炉埋設土器である。２～４は深鉢の胴部片で，単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。５は打製石斧である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅡ式期）と考えられる。

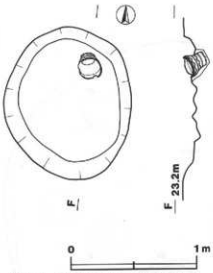
第336号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第８図 1	深鉢 縄文土器	A (19.0) B (14.0)	底部欠損。胴部は内弯して立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部はわずかに内弯する。撚糸文を地文とし，口巻部直下には円形刺突文を巡らし，胴部には２本一組の沈線により平行線文と波状文を施している。	長石・砂粒 明赤褐色 普通	Ｐ１　60%　ＰＬ11 炉埋設土器 加曽利ＥⅡ式

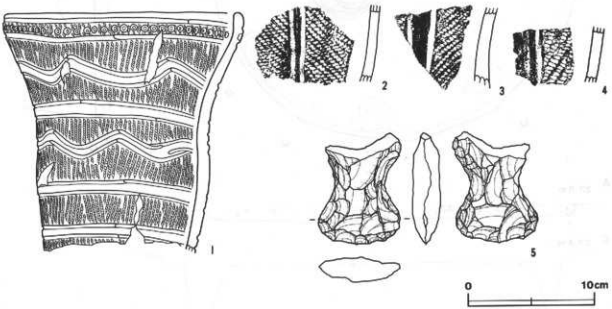
図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第８図　.5	打製石斧	8.9	6.7	2.2	127	ホルンフェルス	Ｑ１　覆土



第６図　第336号住居跡実測図



第７図　第336号住居跡炉実測図



第８図　第336号住居跡出土遺物実測図

第337号住居跡（第９～12図）

位置　調査区の南東部，G21h9区。

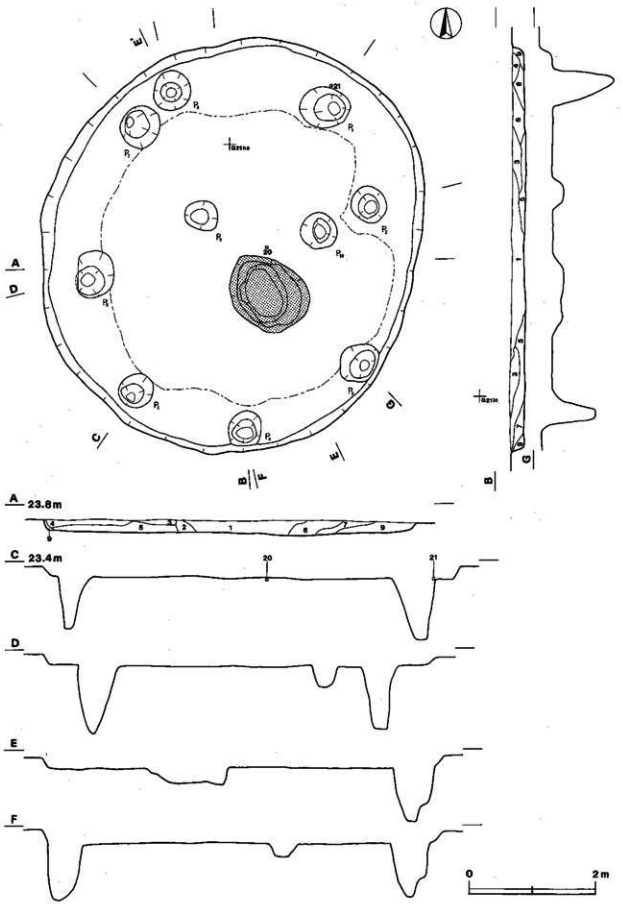
規模と平面形　長径6.63m，短径6.02mの楕円形である。

主軸方向　N－12°－E

壁　壁高は10～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦で，中央部が踏み固められている。

ピット　10か所。P_1～P_8は長径56～82cm，短径52～66cmの楕円形で，深さは70～110cmである。P_1～P_8は，楕円形状に配置されることから主柱穴であり，８本柱の住居跡と考えられる。P_9は，長径52cm，短径46cmの楕円形で，深さ24cmである。P_{10}は，長径58cm，短径56cmの楕円形で，深さ84cmである。P_9・P_{10}は，補助柱穴と考えられる。



第9図　第337号住居跡実測図

炉　中央部やや南西寄りに付設されている。長径1.36m，短径1.08mの楕円形で，深さ約21cmの地床炉である。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

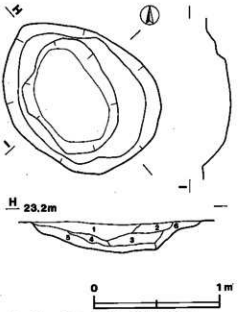
炉土層解説

1	褐	色	焼土小ブロック少量，焼土粒子中量，炭化物中量
2	褐	色	焼土小ブロック微量，焼土粒子少量，炭化物中量
3	褐	色	焼土小ブロック少量，焼土粒子少量，炭化物少量
4	褐	色	焼土小ブロック少量，焼土粒子中量，炭化物少量
5	にぶい赤褐	色	焼土小ブロック中量，焼土粒子中量，炭化物少量
6	褐	色	焼土小ブロック少量，焼土粒子少量，ローム粒子多量

覆土　9層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	暗　褐	色	ローム粒子中量，焼土粒子多量，焼土ブロック中量，炭化物少量
2	褐	色	ローム粒子多量，ロームブロック中量
3	褐	色	ローム粒子多量，ロームブロック少量
4	褐	色	ローム粒子少量
5	褐	色	ローム粒子多量，ロームブロック中量
6	暗　褐	色	ローム粒子中量，焼土粒子少量
7	明　褐	色	ローム粒子少量，ロームブロック中量
8	褐	色	ローム粒子中量，ロームブロック中量
9	明　褐	色	ロームブロック中量



第10図　第337号住居跡炉実測図

遺物　縄文土器片795点，土器片円盤2点，石棒片1点，石皿片1点が覆土から出土している。1～12は深鉢の口縁部片で，4・5・7は沈線により，それ以外は隆帯により文様を描出している。13～17は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。18は土器片錘，19は土器片円盤，20は石棒片，21は石皿片である。

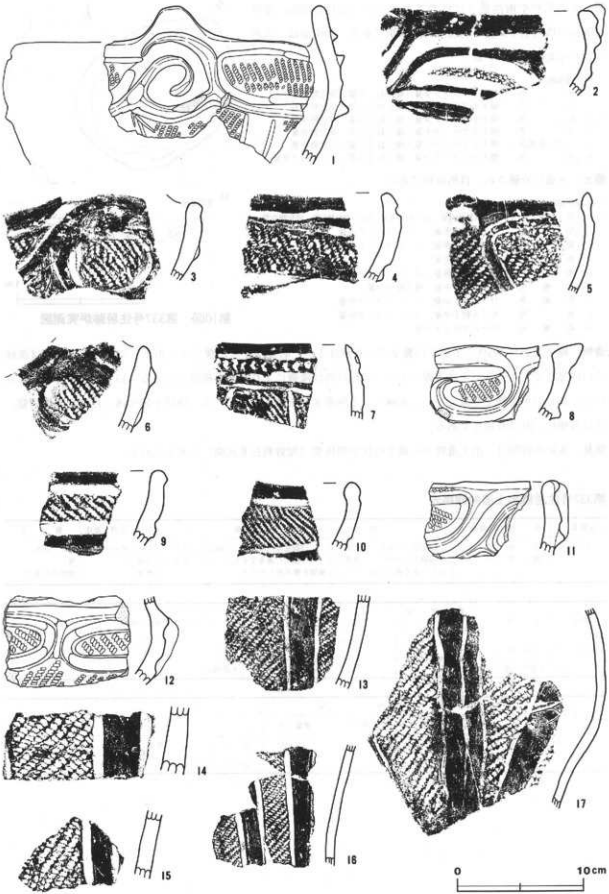
所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅡ式期）と考えられる。

第337号住居跡出土遺物観察表

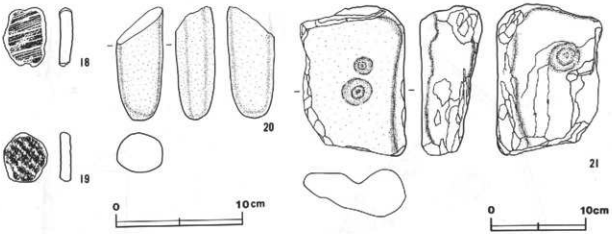
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第11図 1	深鉢 縄文土器	A (24.0) B (12.6)	口縁部片。口唇部に小突起を有し，口縁部は内弯する。口縁部は，RLの単節縄文を地文とし，隆帯により入り組んだ渦巻文を施している。胴部はRLの単節縄文を地文とし，沈線間を磨り消している。	石英・長石・雲母 暗褐色 普通	P16 20% 覆土 加曽利EⅡ式

図版番号	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第12図 18	土器片錘	4.7	3.5	1.05	21	100	条痕文。	DP1
19	土器片円盤	3.9	3.4	0.9	16	90	単節縄文。	DP2

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第12図 20	石棒	(9.0)	3.7	3.1	(146)	凝灰岩	Q2 覆土
21	石皿	(16.0)	(11.2)	6.6	(1,470)	雲母片岩	Q3 覆土 凹石兼用



第11図　第337号住居跡出土遺物実測図（1）



第12図　第337号住居跡出土遺物実測図（2）

第338号住居跡（第13・14図）

位置　調査区の南東部，G22b2区。

規模と平面形　本跡の東側半分は調査区域外になるため未調査である。長径7.52m，短径〔7.16〕mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－23°－W

壁　壁高は15～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　4か所。P_1～P_3は弧状に配置され，長径48～64cm，短径44～60cmの楕円形で，深さは59～94cmである。P_1～P_3は，規模と配置から主柱穴と考えられる。P_4は弧状配置されているP_1～P_3の内側に位置し，長径46cm，短径40cmの楕円形で，深さ50cmである。P_4は，位置から補助柱穴と考えられる。

炉　ほぼ中央部に3か所の炉が直線的に付設されている。北側から，炉A，炉B，炉Cとした。炉Aは径0.74m前後の円形と推定され，深さ約13cmの地床炉である。炉Bは径1.54m前後の円形と推定され，深さ10cmの地床炉である。炉Cは径86cm前後の円形と推定され，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

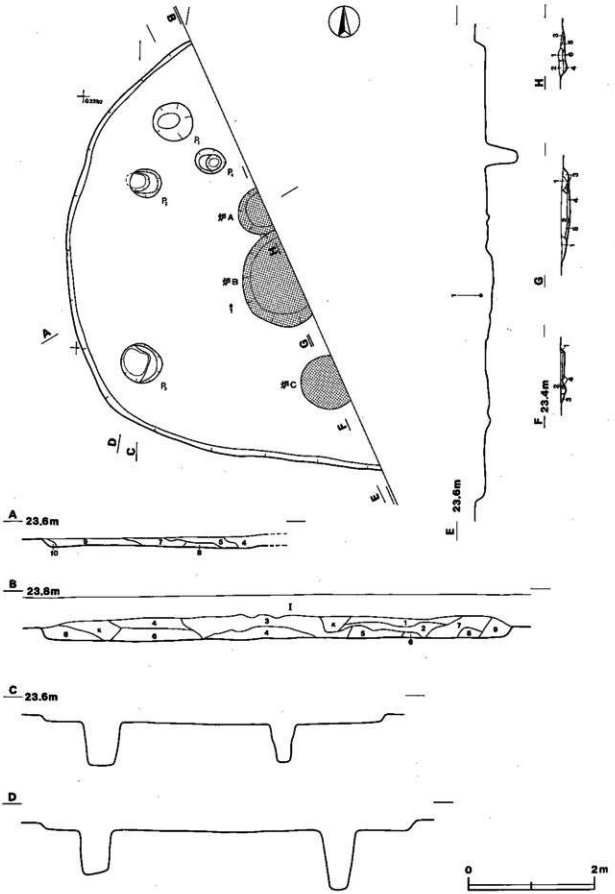
炉A土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量
2　暗赤褐色　焼土粒子少量
3　暗赤褐色　焼土粒子少量
4　暗赤褐色　焼土粒子少量
5　暗赤褐色　焼土粒子少量
6　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量

炉B土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
3　暗赤褐色　焼土粒子少量
4　赤褐色　焼土粒子多量
5　赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量

炉C土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子少量
2　赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
3　赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック多量
4　赤褐色　焼土小ブロック多量

覆土　9層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子中量，焼土ブロック中量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量



第13図　第338号住居跡実測図

3　暗褐色　ローム粒子少量，焼土粒子中量，焼土ブロック中量
4　暗褐色　焼土粒子中量，焼土ブロック多量
5　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量
6　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，焼土ブロック微量
7　明褐色　ローム粒子中量，ロームブロック中量
8　明褐色　ロームブロック中量
9　明褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量

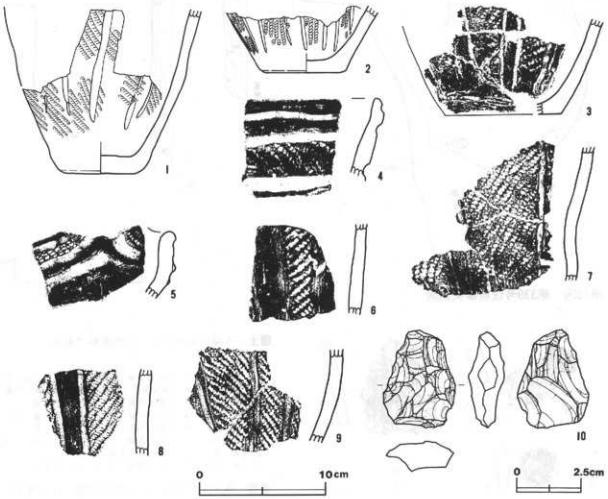
遺物　縄文土器片319点が出土している。1は深鉢の底部から胴部の破片で，逆位の状態で覆土下層から出土している。2・3は深鉢の底部片，4・5は深鉢の口縁部片，6～9は深鉢の胴部片，10は石核である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅠ～Ⅱ式期）と考えられる。

第338号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	深鉢 縄文土器	B (13.0) C 5.6	底部から胴部の破片。Lの無節縄文を地文とし，整形する沈線文を施している。	長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P2 20% PL11 覆土 加曽利EⅠ式
2	深鉢 縄文土器	B (4.8) C 7.0	底部片。RLの単節縄文を地文とし，整形する沈線文を施している。	石英・長石 褐色 普通	P3 5% PL11 覆土 加曽利EⅠ式

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第14図 10	石核	3.9	2.8	1.5	12	チャート	Q4 覆土



第14図　第338号住居跡出土遺物実測図

第339号住居跡（第15・16図）

位置　調査区の南東部，G21 i 6区。

重複関係　本跡は，第1898号土坑と重複している。本跡は縄文時代中期の土坑である第1898号土坑に掘り込まれていることから，本跡が古い。

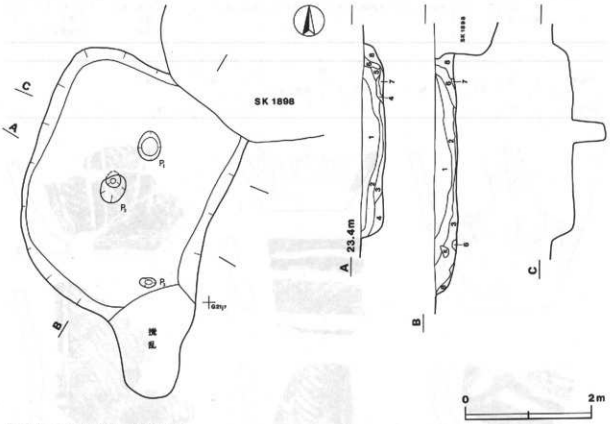
規模と平面形　長軸3.34m，短軸3.18mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－27°－E

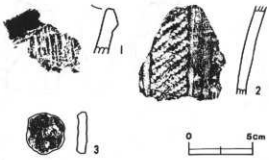
壁　壁高は12～34cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　3か所。P_1・P_2は長径46～48cm，短径36～38cmの楕円形で，深さは46～53cmである。P_1・P_2は，主軸上に配置されることから主柱穴と考えられる。P_3は長径26cm，短径16cmの楕円形で，深さ25cmである。P_3は補助柱穴と考えられる。



第15図　第339号住居跡実測図



第16図　第339号住居跡出土遺物実測図

覆土　8層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化物少量
2	暗褐色	ローム粒子多量，ロームブロック少量，焼土粒子中量
3	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量
4	褐　色	ローム粒子少量，ロームブロック少量
5	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量
6	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量
7	褐　色	ロームブロック多量
8	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック多量

遺物　縄文土器片47点，土器片円盤1点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片，2は深鉢

の胴部片，3は土器片円盤である。本跡の時期を明確にできる遺物は出土していない。

所見　本跡は炉を持たない住居跡である。時期は遺物が少量であるため明確でないが，本跡が第1898号土坑に掘り込まれていることと住居跡の形態から，縄文時代中期と考えられる。

第339号住居跡出土遺物観察表

図版番号		器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第16図	3	土器片円盤	3.3	3.1	0.8	10	100	無文。	DP3　覆土

第340号住居跡（第17・18図）

位置　調査区の南東部，G21d7区。

規模と平面形　長径4.46m，短径4.40mのほぼ円形である。

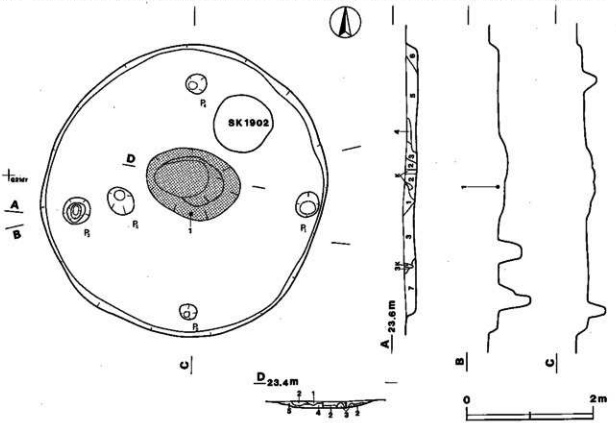
主軸方向　N－45°－E

壁　壁高は8～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　5か所。P_1～P_4は方形状に配置され，長径28～42cm，短径24～40cmの楕円形で，深さは19～53cmである。P_1～P_4は，規模と配置から主柱穴と考えられる。P_5は長径48cm，短径38cmの楕円形で，深さ40cmである。P_5は補助柱穴と考えられる。

炉　ほぼ中央部に付設されている。長径1.56m，短径1.08mの楕円形で，深さ約9cmの地床炉である。炉床面



第17図　第340号住居跡実測図

は，火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量
3　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
4　明赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック多量
5　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック微量

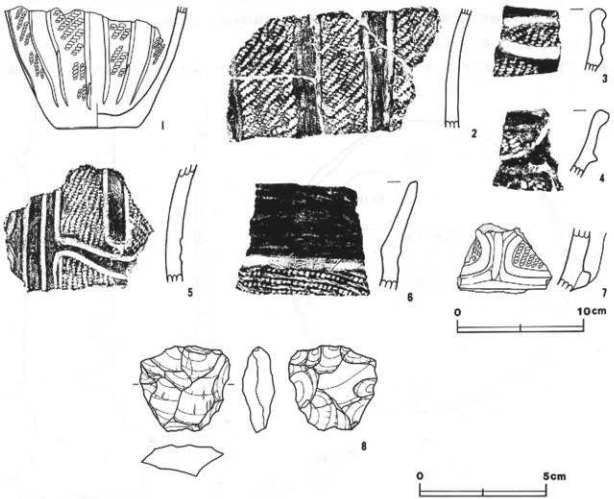
覆土　7層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子少量，炭化物少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子少量，炭化物少量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物少量
6　褐　色　ローム粒子多量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量

遺物　縄文土器片172点が出土している。1は深鉢の底部から胴部の破片で，床面から逆位の状態で出土している。3・4・6・7は深鉢の口縁部片で，3・6は沈線により，4・7は隆帯により文様を描出している。2・5は深鉢の胴部片で，沈線により文様を描出している。8は石核である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅡ式期）と考えられる。



第18図　第340号住居跡出土遺物実測図

第340号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	深鉢 縄文土器	B (9.5) C 6.8	底部から胴部の破片。RLの羽節縄文を施文とし，懸垂する沈線間を磨り消している。	石英・砂粒 褐色 普通	P4 20% P L11 覆土 内面炭化物付着 加曽利EⅡ式

図版番号	器種	計測値 長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
第18図 8	石核	3.4	3.5	1.3	12	チャート	Q5 覆土

第341号住居跡（第19～21図）

位置　調査区の南東部，G21c5区。

規模と平面形　長径4.22m，短径3.62mの楕円形である。

主軸方向　N－15°－W

壁　壁高は12～22cmで，外傾して立ち上がる。

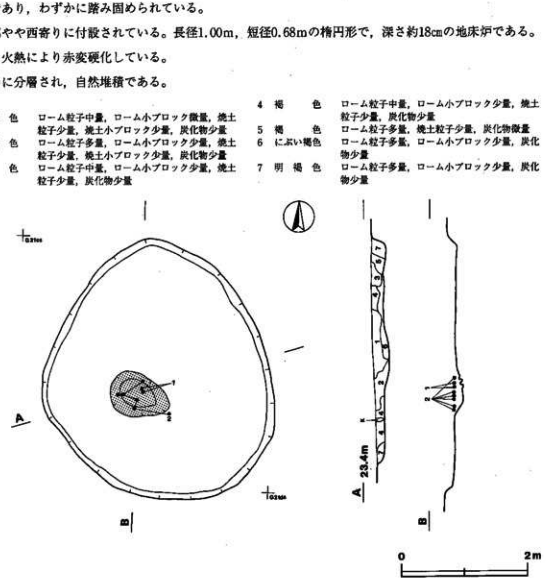
床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

炉　中央部やや西寄りに付設されている。長径1.00m，短径0.68mの楕円形で，深さ約18cmの地床炉である。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

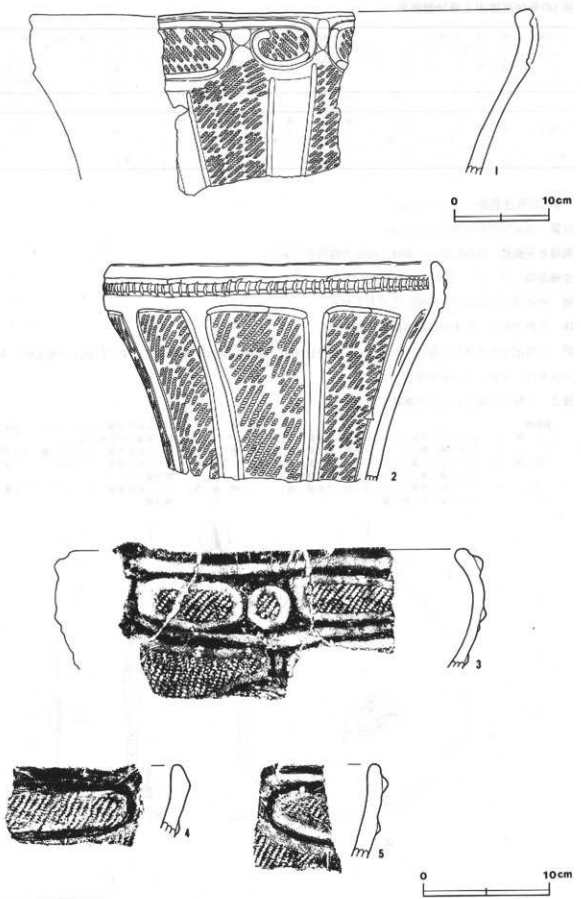
覆土　7層に分層され，自然堆積である。

土層解説

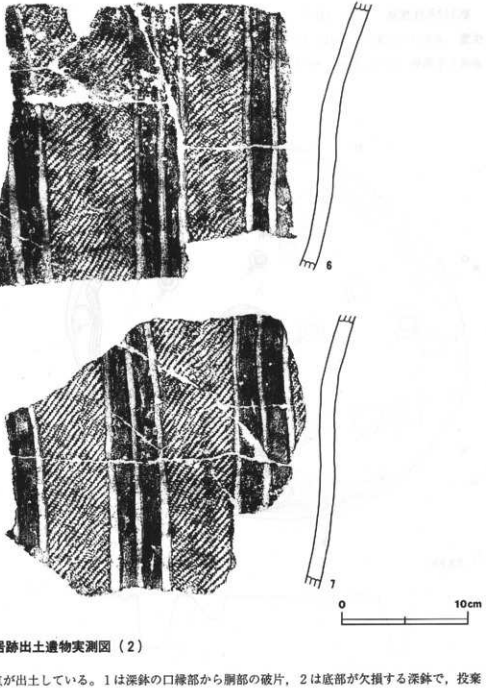
1 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子少量，焼土小ブロック少量，炭化物少量
2 暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子少量，焼土小ブロック少量，炭化物少量
3 褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子少量，炭化物少量
4 褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子少量，炭化物少量
5 褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物微量
6 にぶい褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物少量
7 明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物少量



第19図　第341号住居跡実測図



第20図　第341号住居跡出土遺物実測図（1）



第21図　第341号住居跡出土遺物実測図（2）

遺物　縄文土器片56点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片，2は底部が欠損する深鉢で，投棄されたような状態で炉床面から出土している。3～5は深鉢の口縁部片，6・7は深鉢の胴部片である。4と5，6と7は，同一個体である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。

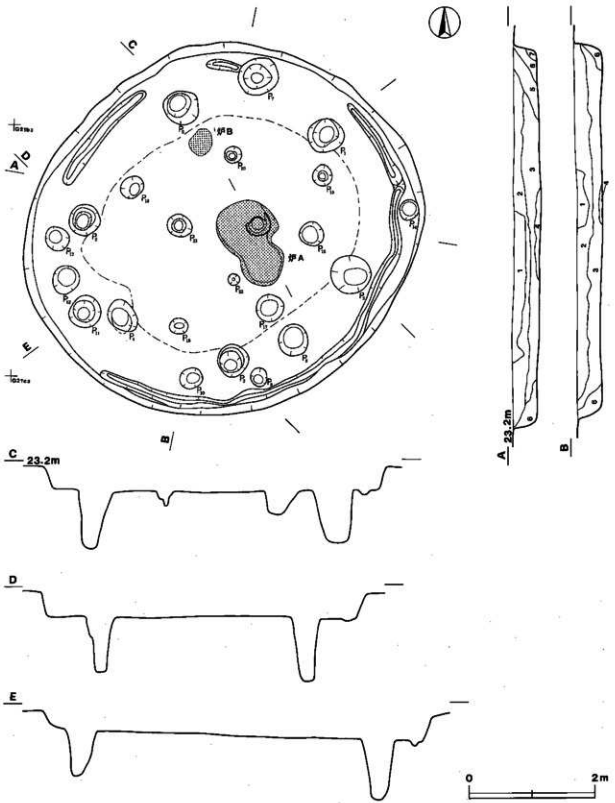
第341号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	深鉢 縄文土器	A〔52.3〕 B (19.5)	口縁部から胴部破片。口縁部はわずかに内彎する。地文はRLの単節縄文で，口縁部は横位に，胴部は縦位に施している。口縁部は隆帯により楕円区画文を施し，沈線による懸垂文間に磨り消している。	長石・砂粒 にぶい黄褐色 普通	P6　5%　PL11 炉床面 加曽利EⅢ式
2	深鉢 縄文土器	A 25.8 B (17.6)	胴下半部欠損。口縁部はわずかに内彎する。口縁部は沈線間に爪形文を巡らしている。胴部は，沈線により逆U字状文を施し，RLの単節縄文を充填している。	長石・礫粒 にぶい褐色 普通	P5　70%　PL11 炉床面 加曽利EⅢ式

第342号住居跡（第22～24図）

位置　調査区の南東部，G21b3区。

規模と平面形　長径6.20m，短径5.70mの楕円形である。



第22図　第342号住居跡実測図

主軸方向　N－26°－W。主軸方向と長軸方向とは異なる。

壁　壁高は34～44cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　北側と西側の一部以外は巡っている。幅12～20cmで，深さが最大で20cmである。

床　平坦であり，中央部が踏み固められている。

ピット　22か所。P_1～P_6は，長径54～64cm，短径40～56cmの楕円形で，深さ48～100cmである。P_1～P_6は，規模と配置から主柱穴と考えられる。P_7～P_{22}は，長径20～64cm，短径20～56cmの楕円形で，深さ10～58cmである。P_7～P_{22}の性格は不明である。

炉　2か所。中央部に付設されている炉を炉A，北側寄りにある炉を炉Bとした。炉Aは，長径1.42m，短径0.91mの瓢箪形で，北側に胴下半部を欠損させた深鉢を埋設した土器埋設炉である。炉床面は8cmほど掘りくぼめており，火熱により赤変硬化している。炉Bは，長径48cm，短径34cmの楕円形で，床面をそのまま炉床面にした地床炉である。炉床面は赤変硬化している。

第23図　第342号住居跡炉A実測図

炉A土層解説

1	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
2	褐暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
3	褐　色	焼土粒子多量，焼土小ブロック多量

覆土　7層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量，焼土粒子中量，炭化物中量
2	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化物中量
3	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子中量，炭化物中量
4	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子多量，炭化物多量
5	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子少量
6	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
7	明褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

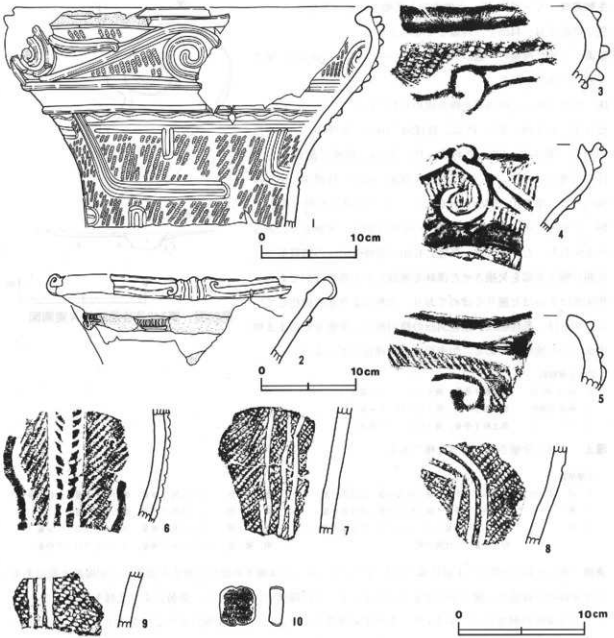
遺物　縄文土器片247点，土器片錘1点が出土している。1は胴下半部が欠損する深鉢で，炉埋設土器である。2は深鉢の口縁部で，覆土から出土している。3～5は深鉢の口縁部片で，隆帯により文様を描出している。6～9は深鉢の胴部片で，6はキザミを有する隆帯により，7～9は沈線により文様を描出している。10は土器片錘である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。

第342号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	深鉢 縄文土器	A (37.0) B (23.4)	胴下半部欠損。頸部は外反して立ち上がり，口縁部は内弯する。地文はＲＬの単節縄文で，頸部に無文帯を有する。口縁部は隆帯により渦巻文を施し，胴部は沈線で文様を描出している。	石英・長石 灰褐色 普通	Ｐ７ 40% ＰＬ11 炉埋設土器 加曽利ＥⅠ式
2	深鉢 縄文土器	A 25.8 B (17.6)	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部直下に隆帯を巡らし，隆帯には2条一組の断位の縦沈線と沈線による横Ｓ字状文を4単位施している。口縁部直下には，キザミを有する隆帯を巡らしている。	長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	Ｐ８ 15% ＰＬ11 覆土

図版番号		器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第24図	10	土器片錘	3.1	2.9	1.15	14	80	無文。	ＤＰ４ 覆土



第24図　第342号住居跡出土遺物実測図

第343号住居跡（第25～27図）

位置　調査区の南西部，F18a0区。

調査経過　本跡は第2087号土坑として調査を進めていたが，2軒の住居跡が重複していることが判明し，本跡と第344号住居跡とに改称した。

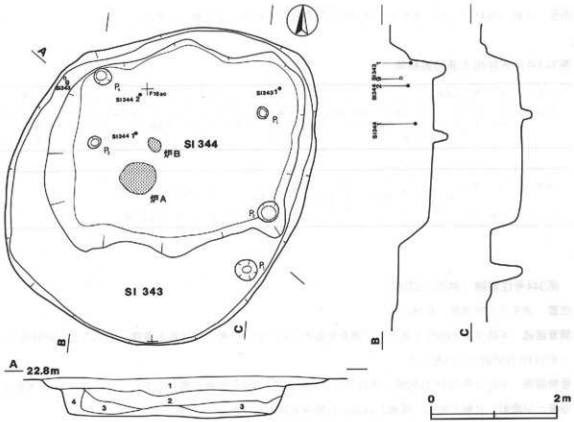
重複関係　本跡は第344号住居跡と重複する。本跡が第344号住居跡の覆土中に床面を構築していることから，本跡が新しい。

規模と平面形　長径5.46m，短径4.50mの楕円形である。

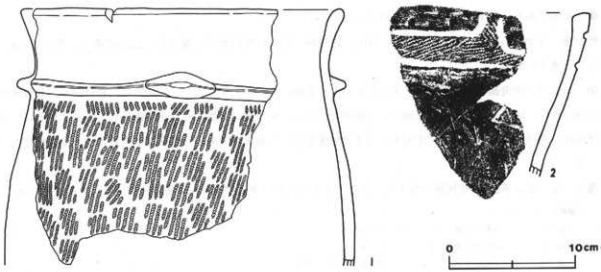
主軸方向　N－38°－E

壁　壁高は6～12cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であるが，踏み固まりは認められない。



第25図　第343・344号住居跡実測図



第26図　第343号住居跡出土遺物実測図

ピット　1か所。P_1は，長径36cm，短径34cmの楕円形で，深さ52cmである。P_1は柱穴と考えられる。

覆土　1層で，自然堆積である。

土層解説

1　暗褐色　　ローム粒子少量

遺物　縄文土器片119点，磨製石斧1点が覆土から出土している。第26図1・2は深鉢の口縁部から胴部の破片で，2は沈線による区画文内にLRの単節縄文を充填している。第27図9は磨製石斧である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期前葉（称名寺Ⅰ式期）と考えられる。

第343号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	深鉢 縄文土器	A〔25.0〕 B〔20.4〕	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎し，口縁部はわずかに外反する。口縁部に微隆帯を巡らし，刻付文を施している。胴部には，RLの単節縄文を施している。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P9　10%　PL11 覆土 称名寺Ⅰ式

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第27図9	磨製石斧	12.4	2.7	5.7	(340)	凝灰岩	Q6　覆土

第344号住居跡（第25・27図）

位置　調査区の南西部，F18a0区。

調査経過　本跡は第2087号土坑として調査を進めていたが，2軒の住居跡が重複していることが判明し，本跡と第343号住居跡とに改称した。

重複関係　本跡は第343号住居跡と重複する。本跡が第343号住居跡に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長軸3.94m，短軸3.44mの不整隅丸長方形である。

主軸方向　N－2°－E

壁　壁高は30～44cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　4か所。P_1～P_4は，長径20～34cm，短径18～32cmの楕円形で，深さ15～23cmである。P_1～P_4は，柱穴と考えられる。

炉　2か所。中央部やや南西寄りにある炉を炉A，北側にある炉を炉Bとした。炉Aは，長径54cm，短径50cmの楕円形で，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは，長径30cm，短径18cmの楕円形で，床面をそのまま炉床面にした地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。

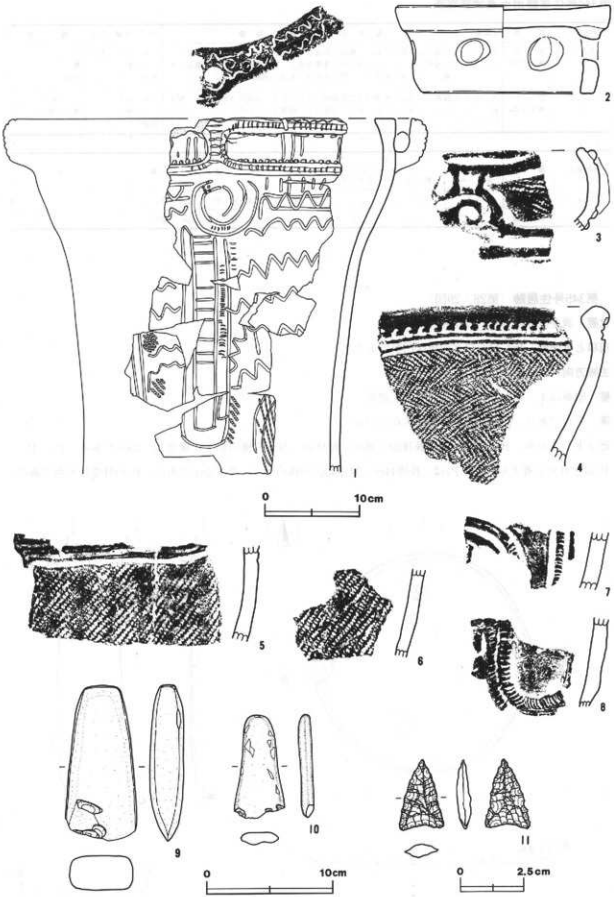
覆土　第1層は第343号住居跡の覆土で，第2～4層が本跡の覆土である。3層に分層され，自然堆積である。

土層解説

2　暗褐色　ローム粒子少量，ロームブロック少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック中量
4　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子微量

遺物　縄文土器片132点，磨製石斧1点，石鏃1点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片で，覆土から出土している。2は器台で，覆土下層から出土している。3は深鉢の口縁部片で，隆帯により文様を描出している。4は深鉢の口縁部片で，口唇部直下に半截竹管による刺突文を巡らし，RLとLRの単節縄文により羽状縄文を施している。5～8は深鉢の胴部片で，7・8はキザミを有する隆帯により文様を描出している。10は磨製石斧，11は石鏃である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。



第27図　第343・344号住居跡出土遺物実測図

第344号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第27図 1	深鉢 縄文土器	A (41.4) B (37.8)	口縁部から胴部の破片。胴部は外反して立ち上がり，口縁部は内彎する。口縁部には，キザミが施される隆帯が巡り，鎖状把手を有する。胴部は沈線により文様を描出し，一部に爪形文とLRの羊歯縄文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P11 10% 覆土 半崎式
2	器台 縄文土器	A 16.7 B 7.1 C 13.5	脚部一部欠損。脚部はほぼ直線的に立ち上がり，台部は平皿である。脚部には，6単位の円孔がある。台部はよく研磨されている。	石英・長石 にぶい黄色 普通	P10 80% P.L11 覆土下層

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第27図 10	磨製石斧	(8.2)	4.0	1.1	(50)	緑色凝灰岩	Q67 覆土
11	石鏃	2.8	1.8	0.6	2	黒曜石	Q66 覆土

第345号住居跡（第28・29図）

位置　調査区の南東部，G20e9区。

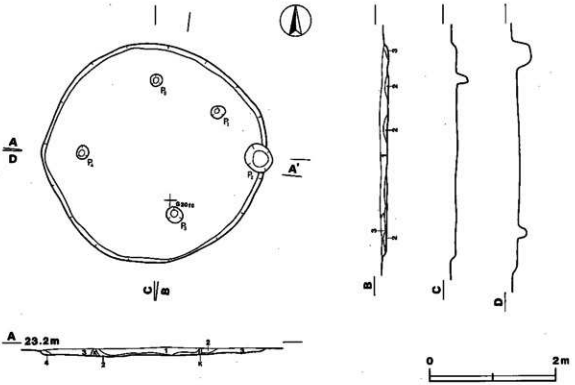
規模と平面形　径3.44mほどのほぼ円形である。

主軸方向　N－33°－W

壁　壁高は4～6cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

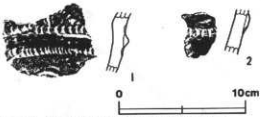
ピット　5か所。P_1・P_3～P_5は長径20～36cm，短径16～24cmの楕円形で，深さ12～25cmである。P_1・P_3～P_5は主柱穴と考えられる。P_2は，長径44cm，短径40cmの楕円形で，深さ22cmである。P_2の性格は不明である。



第28図　第345号住居跡実測図

覆土　4層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　　ローム粒子多量，ロームブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
2　褐　　色　　ローム粒子多量，ロームブロック中量
3　褐　　色　　ローム粒子多量，ロームブロック多量，焼土粒子微量，炭化物少量
4　にぶい褐色　　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子微量



第29図　第345号住居跡出土遺物実測図

遺物　縄文土器片21点が出土している。1・2は深鉢の胴部片で，隆帯により文様を描出し，隆帯に沿って爪形文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅱ式期）と考えられる。

第346号住居跡（第30・31図）

位置　調査区の南部，G20g7区。

規模と平面形　本跡の南側は調査区域外にあるため明確ではないが，径6.86mほどの円形と推定される。

主軸方向　N－34°－E

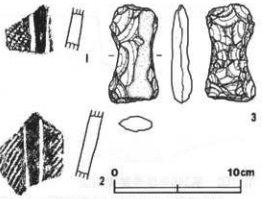
壁　壁高は3～6cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　5か所。P_1～P_3は炉を中心に円形状に配置され，長径44～52cm，短径40～48cmの楕円形で，深さ69～76cmである。P_1～P_3は，規模と配置から主柱穴と考えられる。P_4・P_5は，径27cmほどのほぼ円形で，深さ11～17cmである。P_4・P_5は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　2か所。中央部にある炉を炉A，北側にある炉を炉Bとした。炉Aは，長径1.28m，短径0.94mの楕円形で，深さ約16cmの地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは，長径0.84m，短径0.72mの楕円形で，深さ約6cmの地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉A土層解説
1　暗　褐　色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量，ローム粒子少量
2　暗　褐　色　　焼土粒子多量，焼土ブロック中量，ローム粒子少量
3　暗　褐　色　　焼土粒子多量，焼土ブロック中量
4　暗赤褐色　　焼土粒子多量，焼土ブロック中量
炉B土層解説
1　褐　　色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
2　暗赤褐色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック多量
3　暗赤褐色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
4　暗　褐　色　　焼土粒子中量，ローム粒子中量



第30図　第346号住居跡出土遺物実測図

覆土　2層に分層され，自然堆積である。

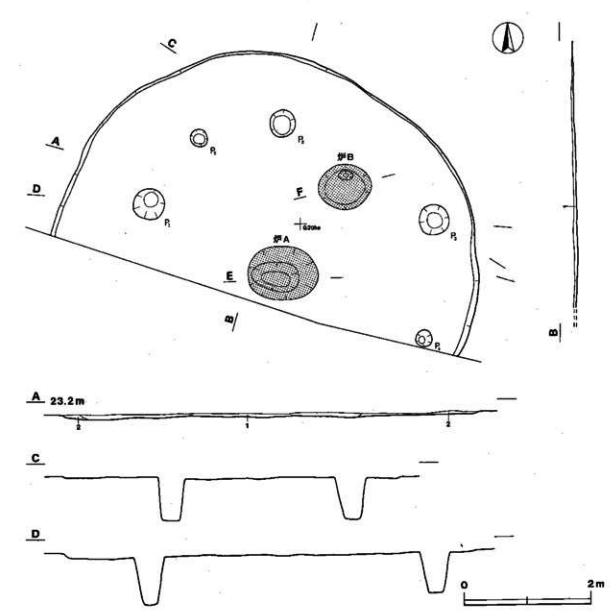
土層解説
1　褐　　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子中量
2　褐　　色　　ローム粒子多量

遺物　縄文土器片16点，打製石斧1点が覆土から出土している。1・2は深鉢の口縁部片で，Rしの半節縄文を地文とし，懸垂する沈線間を磨り消している。3は打製石斧である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅡ式期）と考えられる。

第346号住居跡出土遺物観察表

図版番号		器　種	計測値 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石　質	備　考
第30図	3	打製石斧	7.7	4.0	1.7	48	チャート	Q7　覆土



第31図　第346号住居跡実測図

第347号住居跡（第32～34図）

位置　調査区の南部，G20ds区。

重複関係　本跡は第367号住居跡と重複している。本跡が第367号住居跡を掘り込んでいるため，本跡が新しい。

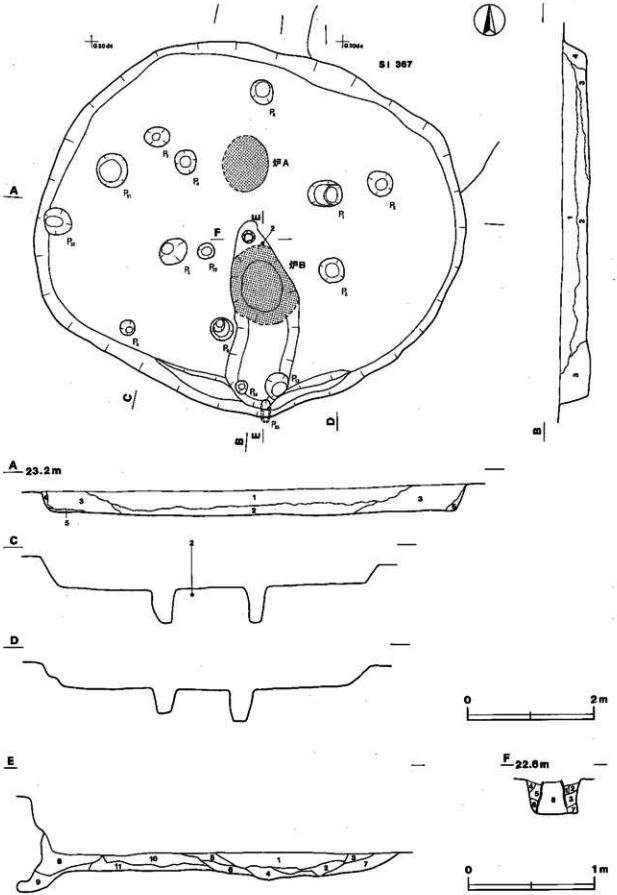
規模と平面形　長径6.70m，短径5.74mの楕円形である。

主軸方向　N－4°－W

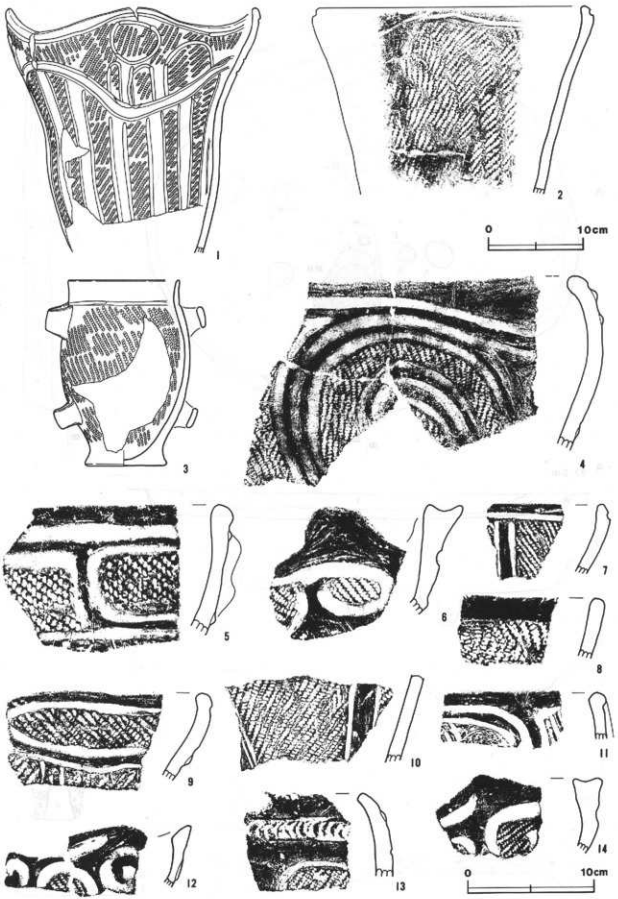
壁　壁高は36～44cmで，外傾して立ち上がる。炉の前庭部に接する南壁の両側は，段を有している。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

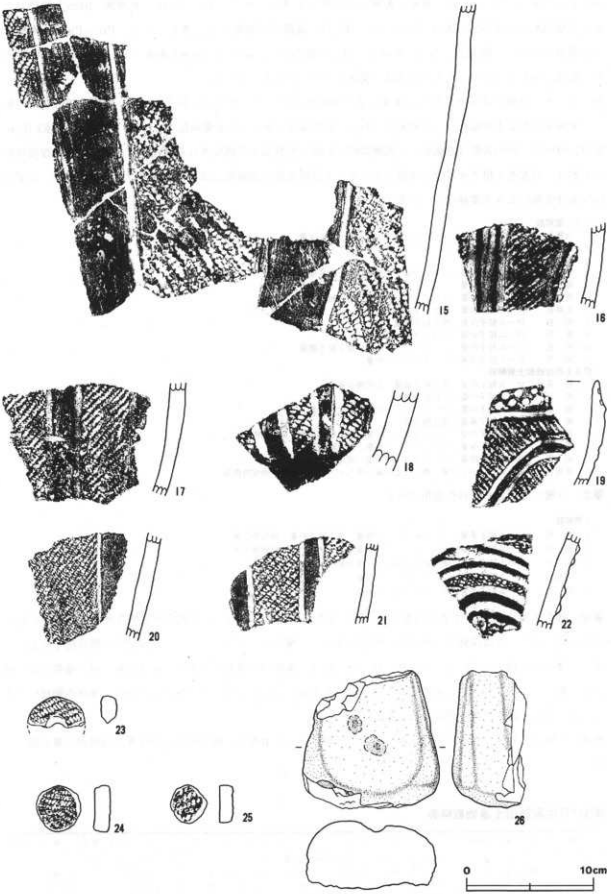
ピット　15か所。P_1～P_4は炉を中心に長方形状に配置され，長径40～54cm，短径34～40cmの楕円形で，深さ



第32図　第347号住居跡実測図



第33図　第347号住居跡出土遺物実測図（1）



第34図　第347号住居跡出土遺物実測図（2）

39～57cmである。P_1～P_4は，規模と配置から主柱穴と考えられる。P_5～P_{12}は，長径26～54cm，短径24～56cmの楕円形で，深さ22～96cmである。P_5～P_{12}は，規模から補助柱穴と考えられる。P_{13}～P_{15}は，南壁際の炉前庭部にあり，長径14～44cm，短径14～34cmの楕円形で，深さ11～18cmである。P_{13}～P_{15}は，南壁際の炉前庭部にあることから，出入り口施設に関係するピットと考えられる。

炉　2か所。北側にある炉を炉A，南側にある炉を炉Bとした。炉Aは，長径0.90m，短径0.72mの楕円形で，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは，長径3.02m，短径1.04mで，炉の各部は北側から土器埋設部・炉部・前庭部から構成される複式炉である。土器埋設部の埋設土器は，底部を欠損させ逆位に埋設している。土器埋設部と前庭部には，火熱を受けた痕跡はない。炉部の炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉B土層解説

1	灰褐色	ローム粒子少量，ロームブロック少量，焼土粒子少量
2	灰褐色	ローム粒子少量，ロームブロック少量
3	灰褐色	ローム粒子少量
4	灰褐色	ローム粒子少量，ロームブロック少量，焼土粒子中量，焼土ブロック少量
5	褐　色	ローム粒子少量
6	褐　色	ローム粒子少量，ロームブロック少量，焼土粒子微量
7	灰褐色	ローム粒子少量，焼土粒子少量
8	褐　色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
9	褐　色	ローム粒子少量，ロームブロック少量
10	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量
11	褐　色	ローム粒子少量，ロームブロック中量

炉B土器埋設部土層解説

1	褐　色	ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化物少量
2	褐　色	ローム粒子中量，炭化物少量
3	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック少量，炭化物少量
4	褐　色	ローム粒子多量，炭化物少量
5	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化物微量
6	褐　色	ローム粒子少量，ロームブロック少量，炭化物微量
7	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック中量，炭化物微量
8	暗褐色	ロームブロック中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック微量，炭化物微量

覆土　5層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，焼土粒子中量，炭化物中量
2	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子中量，炭化物中量
3	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物少量
4	明褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
5	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　縄文土器片839点，土器片円盤3点，凹石1点が出土している。1は底部を欠損させた深鉢で，炉Bの埋設土器である。2は深鉢の口縁部から胴部の破片で，覆土から出土している。3は横位の橋状把手を有する壺で，覆土から出土している。4～9，11～14，19は，深鉢の口縁部片である。4は2本一組の隆帯により渦巻文を施している。12・14は隆帯により楕円区画文を施している。10，15～18，20～22は，深鉢の胴部片である。23～25は土器片円盤，26は凹石である。

所見　本跡は，複式炉を有する住居跡である。時期は，出土遺物から縄文時代中期後業（加曽利EⅢ式期）と考えられる。

第347号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第33図 1	深　鉢 縄文土器	A 26.0 B (26.0)	底部欠損。4単位の波状口縁。胴部は内彎して立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部は外傾する。地文はRLの羽節縄文で，沈線で文様を描出している。波頂部の直下には楕円区画文を，頸部には波状文を施している。頸部から胴部には，上端が連結した懸垂文を施している。	石英・長石・砂粒 明赤褐色 普通	P12　70%　P.L12 炉B埋設土器 加曽利EⅢ式

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第33図 2	深　鉢 縄文土器	A (27.8) B (20.0)	口縁部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに内弯する。地文はＲＬの羽節縄文で，口巻部直下に沈線を巡らしている。	長石・砂粒 橙色 普通	P14　20%　PL12 覆土上層 加曽利E Ⅲ式
3	壺 縄文土器	A　8.6 B　14.7 C　6.2	胴部一部欠損。胴部は内弯して立ち上がり，口縁部はほぼ直立する。口縁部直下と胴部下部に２単位の鋸状把手が付く。地文はＲＬの羽節縄文で，口縁部に沈線を巡らしている。	長石・砂粒 黒褐色 普通	P13　70%　PL12 覆土 内・外面赤彩

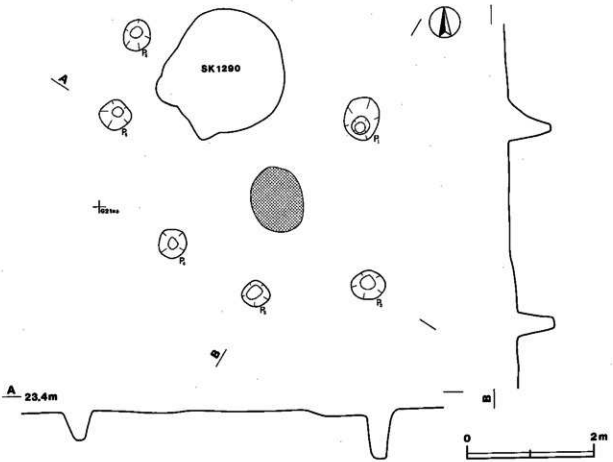
図版番号	器　種	計測値(cm)			重量	現存率	形状及び文様の特徴	備　考
		長さ	幅	厚さ	(g)	(%)		
第34図　23	土器片円盤	(2.5)	4.5	1.3	(14)	50	中心に穿孔。ＲＬの羽節縄文。	ＤＰ５
24	土器片円盤	3.7	3.5	1.2	19	100	ＬＲの羽節縄文。	ＤＰ６
25	土器片円盤	2.9	2.8	1.0	(11)	80	ＬＲＬの複節縄文。	ＤＰ７

図版番号	器　種	計測値				石　質	備　考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第34図　26	凹　石	(11.0)	10.9	5.7	(863)	安 山 岩	Ｑ８　覆土

第348号住居跡（第35・36図）

位置　調査区の南東部，Ｇ21ａ5区。

確認状況　遺構確認面において炉とピットを確認する。



第35図　第348号住居跡実測図

重複関係　本跡は第1920号土坑と重複するが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　炉とピットの配列から，長径6.60m，短径5.10mの楕円形と推定される。

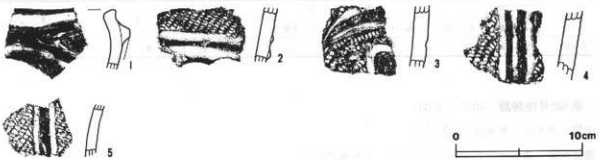
主軸方向　〔N－20°－W〕

ピット　6か所。P_1～P_6は，炉を中心に0.80～2.04mの間隔で楕円形状に配列され，長径46～70㎝，短径42～52㎝の楕円形で，深さ46～68㎝である。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。

炉　中央部やや南寄りに付設されている。長径1.06m，短径0.82mの楕円形で，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

遺物　縄文土器片83点が出土している。1は深鉢の口縁部片，2～5は深鉢の胴部片である。

所見　本跡の時期は，遺構の形態と出土遺物から縄文時代中期と考えられる。



第36図　第348号住居跡出土遺物実測図

第349号住居跡（第37・38図）

位置　調査区の北東部，F21 e 3区。

確認状況　遺構確認面において炉とピットを確認する。

重複関係　本跡は第1927号土坑と重複するが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　炉とピットの配列から，長径5.20m，短径4.80mの楕円形と推定される。

主軸方向　〔N－8°－W〕

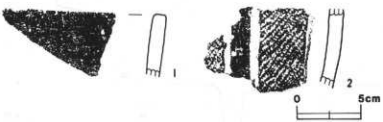
床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　5か所。P_1～P_5は，炉を中心に0.60～2.16mの間隔で楕円形状に配列し，長径46～72㎝，短径40～66㎝の楕円形で，深さ62～70㎝である。P_1～P_5は，規模と配列から主柱穴と考えられる。

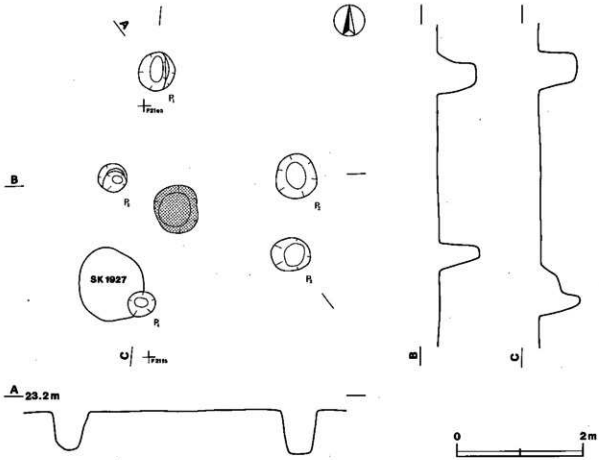
炉　中央部やや南寄りに付設されている。長径76㎝，短径69㎝の楕円形で，床面をわずかに掘りくぼめた地床炉である。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

遺物　縄文土器片15点が出土している。1は深鉢の口縁部片，2は深鉢の胴部片である。

所見　本跡の時期は，遺構の形態と出土遺物から縄文時代中期と考えられる。



第37図　第349号住居跡出土遺物実測図



第38図　第349号住居跡実測図

第350号住居跡（第39・40図）

位置　調査区の南東部，G20e9区。

重複関係　本跡は第91号溝と重複する。本跡は第91号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長径3.74m，短径3.38mの楕円形である。

主軸方向　N－30°－E

壁　壁高は20～36cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　5か所。P_1は中央部に位置し，長径52cm，短径48cmの楕円形で，深さ41cmである。P_1は，位置と規模から主柱穴と考えられる。P_2～P_5は，長径23～36cm，短径20～30cmの楕円形で，深さ18～60cmである。P_2～P_5は，規模から補助柱穴と考えられる。

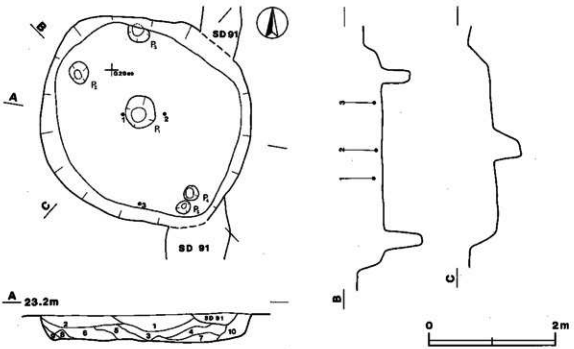
覆土　10層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，焼土粒子少量，炭化物少量
2	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量，炭化物中量
3	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
4	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
5	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物少量
6	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物少量
7	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，炭化物少量
8	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物少量
9	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，炭化物微量
10	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子少量，炭化物少量

遺物　縄文土器片157点が出土している。1は扇状把手を有する深鉢の口縁部片で，2は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，3は深鉢の底部片で，覆土から出土している。4～6は深鉢の口縁部片，7～12は深鉢の胴部片で，断面三角形の隆帯により文様を描出し，空白部に角押文あるいは結節沈線文を施している。13は土器片円盤である。

所見　本跡の時期は，出土遺物と住居跡の形態から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅰb式期）と考えられる。

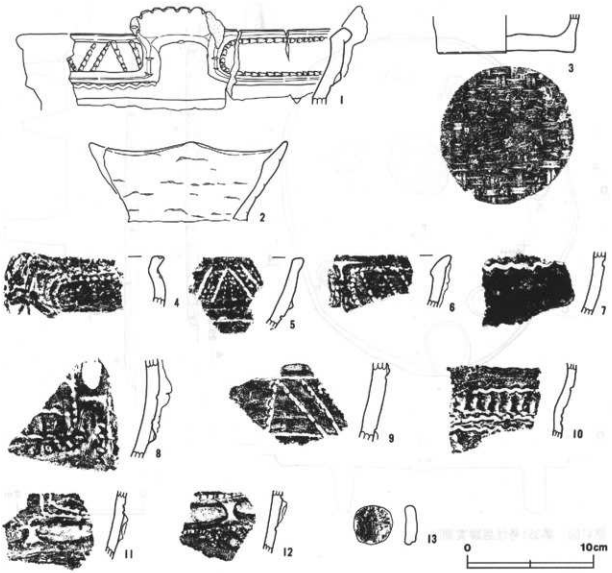


第39図　第350号住居跡実測図

第350号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第40図 1	深鉢 縄文土器	A (25.6) B (8.0)	扇状把手を有する口縁部片。頂部がくびれ，口縁部はほぼ直立する。隆帯に沿って1列の角押文を施している。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P17 10% PL12 覆土 阿玉台Ⅰb式
2	深鉢 縄文土器	A (15.7) B (6.4)	4単位の波状口縁を呈する口縁部片。頂部がくびれ，口縁部は外傾する。無文で，輪積痕が残る。	長石・雲母・砂粒 灰褐色 普通	P18 20% PL12 覆土 阿玉台Ⅰb式
3	深鉢 縄文土器	B (3.0) C 11.0	底部片。底面に網代痕を有する。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P15 10% PL12 覆土 阿玉台Ⅰb式

図版番号	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量 (g)	現存率 (%)	形状及び文様の特徴	備考
第40図 13	土器片円盤	3.1	3.0	1.0	11	100	無文。	DP21



第40図　第350号住居跡出土遺物実測図

第351号住居跡（第41・42図）

位置　調査区の南部，G20f6区。

規模と平面形　長径5.40m，短径4.60mの楕円形である。

主軸方向　N－28°－E

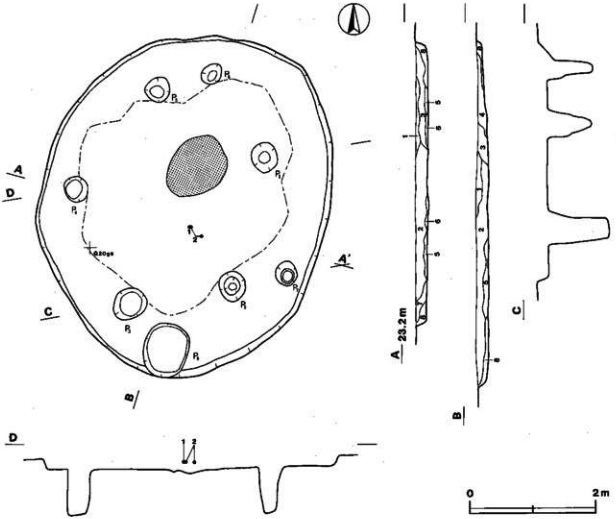
壁　壁高は8～16cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，中央部が踏み固められている。

ピット　8か所。P_1～P_5は炉の周囲に五角形状に巡り，長径40～56cm，短径38～46cmの楕円形で，深さ66～95cmである。P_1～P_5は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_6・P_7は，長径36～40cm，短径30～36cmの楕円形で，深さ69～72cmである。P_6・P_7は，規模から補助柱穴と考えられる。P_8は，長径86cm，短径72cmの楕円形で，深さ10cmである。P_8が本跡に伴うピットであるかどうかは不明である。

炉　中央部やや北寄りに付設されている。長径1.02m，短径0.84mの楕円形で，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

覆土　8層に分層され，自然堆積である。



第41図　第351号住居跡実測図

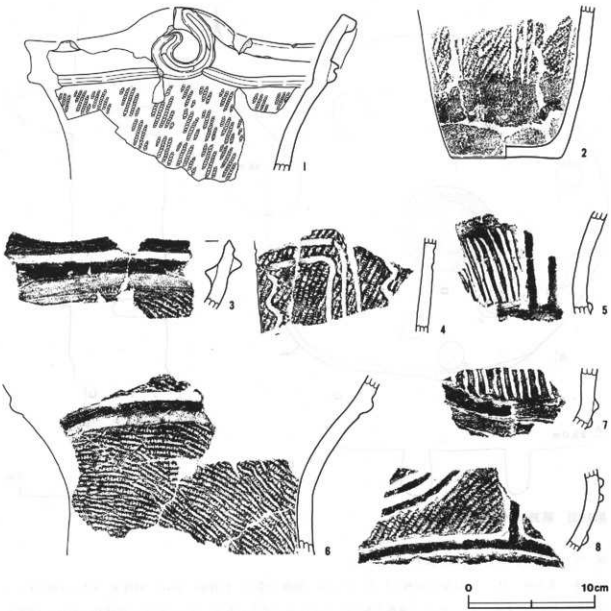
土層解説
1　灰褐色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
2　灰褐色　ローム粒子中量，炭化物微量
3　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子微量
4　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化物微量
5　灰褐色　ローム粒子少量，炭化物微量
6　灰褐色　ローム粒子多量
7　褐　色　ローム粒子中量
8　褐　色　ローム粒子多量

遺物　縄文土器片186点が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，2は深鉢の底部から胴部の破片で，覆土下層から出土している。3は深鉢の口縁部片，4・6は深鉢の胴部片，5・7・8は深鉢の口縁部付近の破片である。5・7・8は2本一組の隆帯により文様を描出している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅠ式期）と考えられる。

第351号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第42図 1	深　鉢 縄文土器	A (24.8) B (12.4)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部直下には沈線を有する隆帯により渦巻文を施し，口縁部と胴部との境には隆帯を巡らしている。胴部はRLの羽節縄文を施している。	長石・雲母・砂粒に赤い赤褐色 普通	P19　20%　PL12 覆土下層 加曽利EⅠ式



第42図　第351号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第42図 2	深　鉢 縄文土器	B (12.4) C　9.0	底部から胴部の破片。ほぼ直線的に立ち上がる。RLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。	長石・雲母・砂粒 に赤い褐色 普通	P20　20%　PL12 埋土下層 加曽利EⅠ式

第352号住居跡（第43・44図）

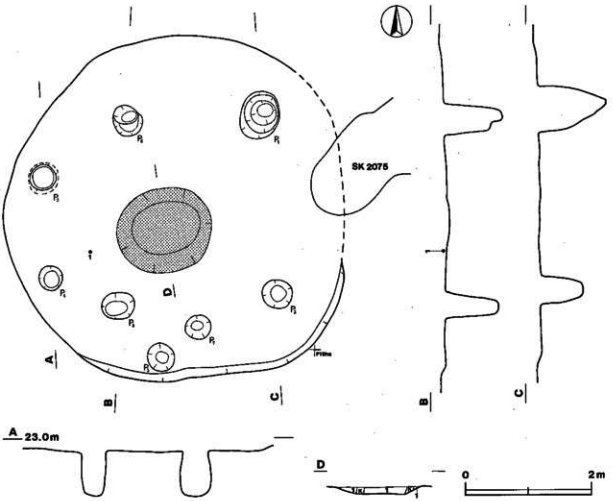
位置　調査区の南部，F19g8区。

重複関係　本跡は第2075号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　径5.60m程のほぼ円形である。

主軸方向　N－83°－E

壁　南壁の一部だけが残存している。壁高は最大で8㎝で，外傾して立ち上がる。



第43図　第352号住居跡実測図

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　8か所。P_1～P_6は炉の周囲に1.20～2.30mの間隔で巡り，長径40～76cm，短径38～62cmの楕円形で，深さ57～107cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_7・P_8は，長径42～54cm，短径38～40cmの楕円形で，深さ64～84cmである。P_7・P_8は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　中央部に付設されている。長径1.50m，短径1.34mの楕円形と推定され，深さ約10cmの地床炉である。覆土は1層で，炉床面は火熱により赤変硬化している。

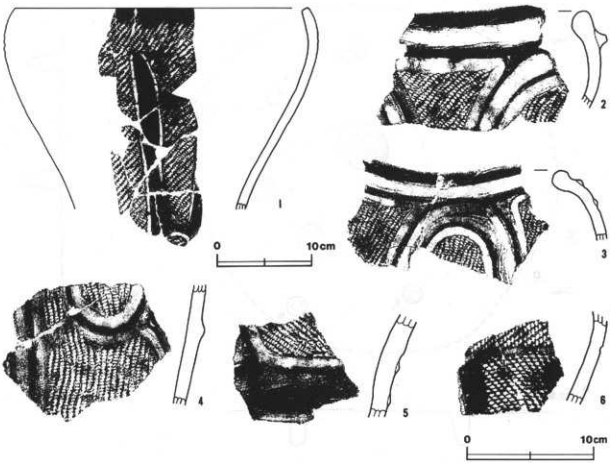
炉土層解説

1　暗褐色　焼土粒子少量，焼土ブロック微量，ローム粒子少量

覆土　床面上にわずかに残存しているのみである。

遺物　縄文土器片135点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片で，覆土から出土している。2・3は深鉢の口縁部片，4は深鉢の胴部片で，2本一組の隆帯により文様を描出している。5・6は深鉢の胴部片である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第44図　第352号住居跡出土遺物実測図

第352号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第44図 1	深　鉢 縄文土器	A〔30.8〕 B（21.5）	口縁部から胴部の破片。口縁部は内彎する。沈線による区画文内にRLの単節縄文を充填している。	長石・砂粒 褐色 普通	P21　5%　PL13 埋土 加曽利E式

第353号住居跡（第45図）

位置　調査区の南西部，F19g2区。

確認状況　遺構確認面において炉とピットを確認したことから，住居跡と判断する。規模と平面形については，不明である。

主軸方向　〔N－1°－E〕

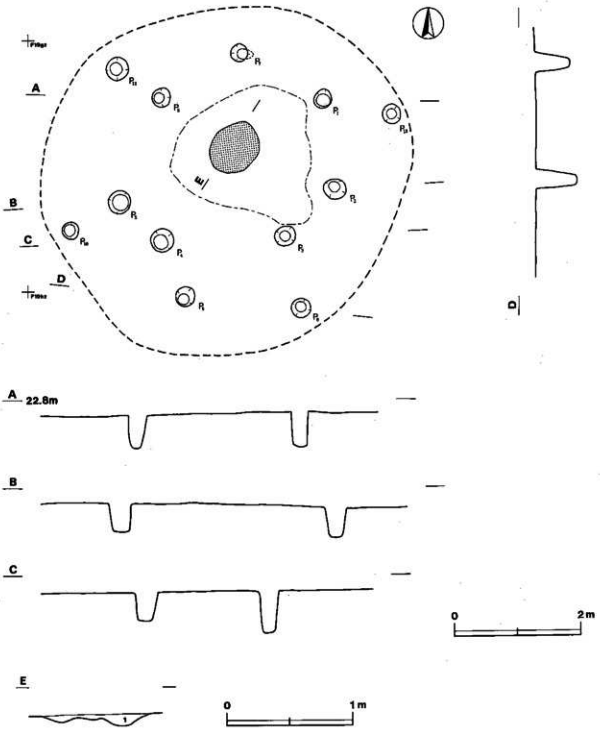
床　炉の周囲にだけ残存しており，踏み固められている。

ピット　12か所。P_1～P_7は炉の周囲に0.60～1.60mの間隔で巡り，長径32～38cm，短径28～32cmの楕円形で，深さ46～68cmである。P_8～P_{12}はP_1～P_7の外側を巡り，長径30～38cm，短径26～36cmの楕円形で，深さ43～59cmである。P_1～P_{12}は，炉を中心に二重に巡る柱穴と考えられる。

炉　中央部に付設されている。長径86cm，短径74cmの楕円形で，深さ約10cmの地床炉である。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　赤褐色　　焼土粒子・焼土ブロック中量

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代と考えられる。



第45図　第353号住居跡実測図

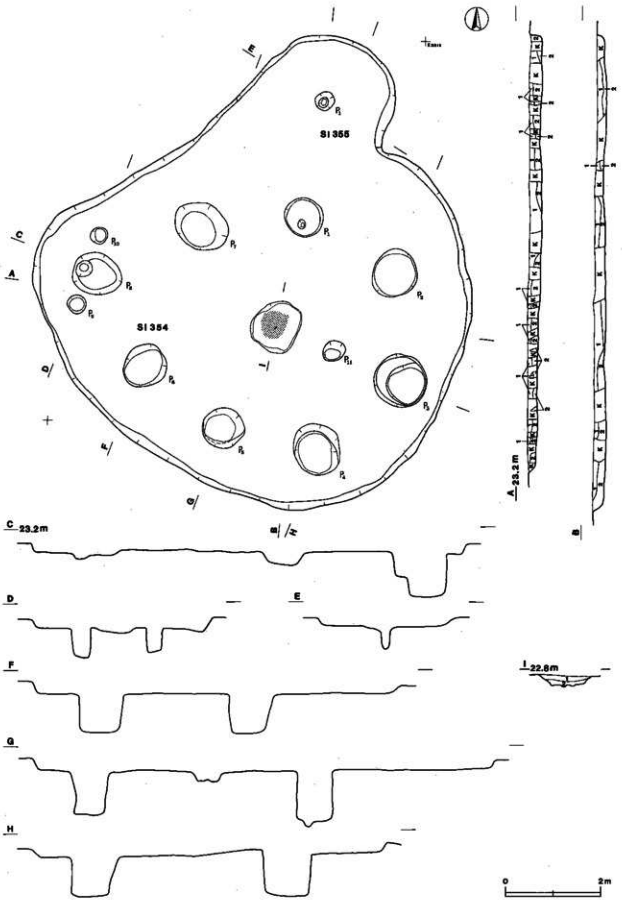
第354号住居跡（第46～48図）

位置　調査区の北部，F20a4区。

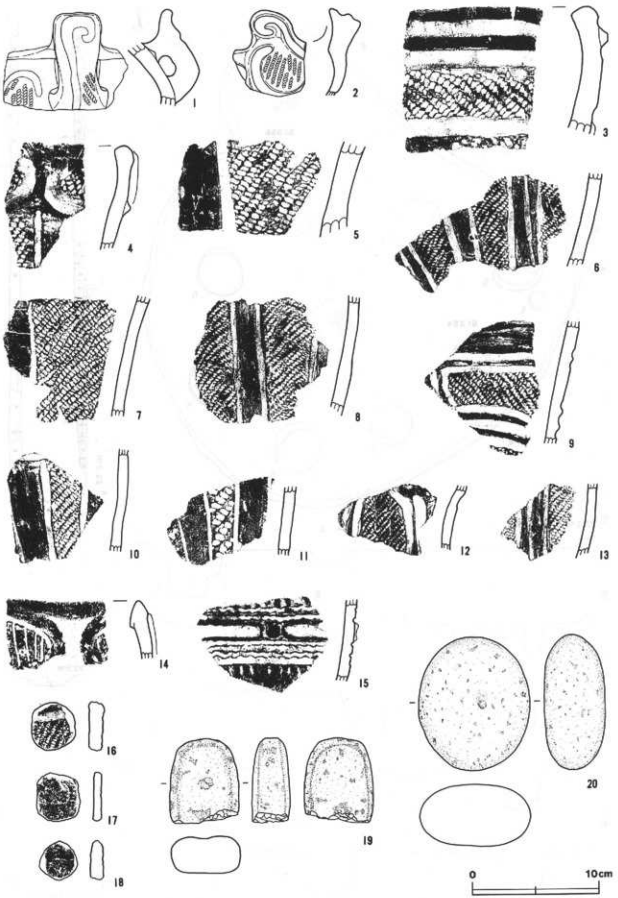
重複関係　本跡は第355号住居跡と重複する。本跡と第355号住居跡との新旧関係は攪乱のため明確でないが，住居跡の形態から本跡が新しいと考えられる。

規模と平面形　長径9.20m，短径7.70mの楕円形であり，西壁がやや突出している。

主軸方向　N－110°－E



第46図　第354・355号住居跡実測図



第47図　第354号住居跡出土遺物実測図（1）

壁　壁高は13～24cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，炉の周囲が踏み固められている。

出入り口　壁がやや突出する西壁に位置し，P_8～P_{10}が存在する。P_8は中央部に位置し，長径106cm，短径86cmの楕円形で，深さ10cmである。P_8内の西側には長径38cm，短径32cmの小ピットがある。P_9・P_{10}はP_8の両側に位置する。P_9は，径40cmほどのほぼ円形で，深さ64cmである。P_{10}は，長径36cm，短径32cmの楕円形で，深さ52cmである。P_8～P_{10}は，その位置から出入り口に関係するピットと考えられる。

ピット　11か所。P_1～P_7は炉を中心に1.06～2.20mの間隔で巡り，長径0.84～1.22m，短径0.78～1.10mの楕円形で，深さ0.83～1.27mである。P_1～P_7は，位置と規模から主柱穴と考えられる。P_8～P_{10}は，その位置から出入り口に関係するピットと考えられる。P_{11}は，長径36～48cm，短径34～40cmの楕円形で，深さ52～110cmである。P_{11}は，規模から補助柱穴と考えられる。

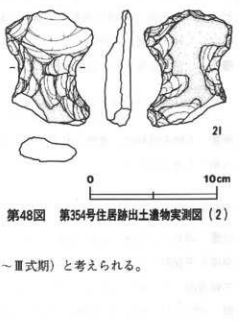
炉　中央部に付設されている。長径1.12m，短径0.96mの楕円形で，深さ約26cmの地床炉である。炉の覆土は2層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　極暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子少量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量

覆土　2層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子中量，炭化物中量
2　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量，焼土粒子少量，炭化物少量

遺物　縄文土器片1462点，土器片円盤3点，磨石2点，打製石斧1点が覆土から出土している。1は橋状把手を有する広口壺の口縁部片，2は突起を有する深鉢の口縁部片である。3・4は深鉢の口縁部片，5～13は深鉢の胴部片である。14は深鉢の口縁部片，15は深鉢の胴部片で，混入したものである。16～18は土器片円盤，19・20は磨石，21は打製石斧である。



第48図　第354号住居跡出土遺物実測図（2）

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅡ～Ⅲ式期）と考えられる。

第354号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	広口壺 縄文土器	B（7.6）	把手部片。橋状を呈する。RLの単節縄文を地文とし，沈線で文様を描出している。	長石・砂粒 橙色 普通	P22　5％ 覆土 加曽利EⅢ式
2	深鉢 縄文土器	B（6.9）	口縁部片。沈線による蕨手文を施している突起を有する。RLの単節縄文を地文としている。	長石・砂粒 明褐色 普通	P23　5％ 覆土 加曽利EⅢ式

図版番号	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第47図 16	土器片円盤	3.9	3.5	1.3	(19)	80	RLの単節縄文。	DP8　覆土
17	土器片円盤	3.9	3.4	0.7	(12)	90	無文。	DP9　覆土
18	土器片円盤	3.1	3.0	1.1	(10)	80	無文。	DP10　覆土

図版番号		器種	計測値				石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第47図	19	磨石	6.8	5.5	3.0	(168)	安山岩	Q13 覆土
	20	磨石	10.7	8.9	4.8	700	安山岩	Q12 覆土
	21	打製石斧	9.2	6.9	2.3	(120)	安山岩	Q11 覆土

第355号住居跡（第46図）

位置　調査区の北部，E20j4区。

重複関係　本跡は第354号住居跡と重複する。本跡と第354号住居跡との関係は撹乱のため明確ではないが，住居跡の形態から本跡が古いことが考えられる。

規模と平面形　径2.90mの円形と推定される。

主軸方向　N－38°－E

壁　壁高は12～15cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　1か所。P_1は中央部に位置し，長径62cm，短径38cmの楕円形で，深さ51cmである。P_1は，位置と規模から主柱穴と考えられる。

覆土　2層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　　ローム粒子少量，炭化物少量
2　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，炭化物少量

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期前葉（阿玉台式期）と考えられる。

第356号住居跡（第49・50図）

位置　調査区の北部，E19f0区。

規模と平面形　径5.20mほどのほぼ円形である。

主軸方向　N－46°－E

壁　壁高は14～20cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，中央部が踏み固められている。

出入り口　南東壁際にスロープ状の高まりがあり，踏み固められていることから，出入り口部と考えられる。

ピット　8か所。P_1～P_5は炉の周囲に五角形状に巡り，長径32～60cm，短径29～40cmの楕円形で，深さ55～102cmである。P_1～P_5は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_6は，長径40cm，短径36cmの楕円形で，深さ21cmである。P_6は，規模から補助柱穴と考えられる。P_7・P_8はスロープ状の出入り口奥部の両側に位置する。P_7は，長径36cm，短径34cmの楕円形で，深さ45cmである。P_8は，長径30cm，短径28cmの楕円形で，深さ21cmである。P_7・P_8は，出入り口に関係するピットと考えられる。

炉　中央部やや北西寄りに付設されている。長径64cm，短径48cmの楕円形で，深さ6cmの地床炉である。炉内の覆土は1層で，炉床面は，火熱により赤変硬化している。

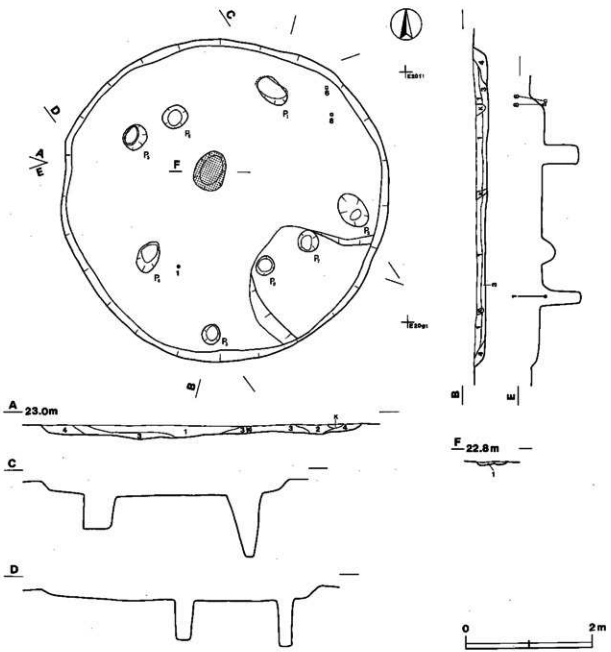
炉土層解説
1　暗赤褐色　　焼土粒子微量，炭化物微量

覆土　4層に分層され，自然堆積である。

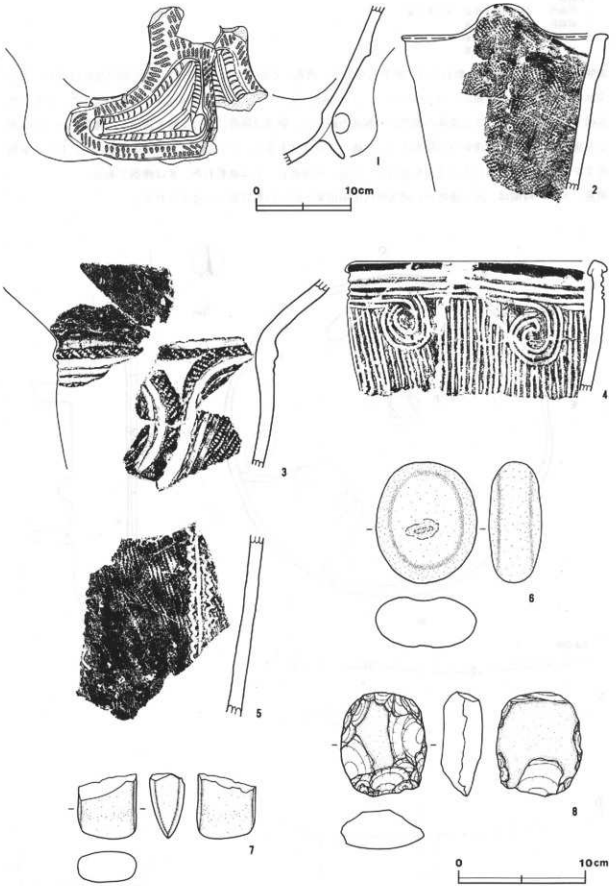
土層解説
1　黒褐色　ローム粒子少量，炭化物少量
2　暗褐色　ローム粒子少量
3　暗褐色　ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片175点，磨石１点，磨製石斧１点，礫器１点が出土している。１は大形の波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，床面から出土している。２は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片で，ＲＬの単節縄文を施している。３は深鉢の頸部から胴部の破片で，胴部は隆帯により文様を描出し，隆帯に沿って沈線文を施している。４は深鉢の口縁部片で，沈線により文様を描出している。５は深鉢の胴部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。６は磨石，７は磨製石斧，８は礫器である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅳ式期）と考えられる。



第49図　第356号住居跡実測図



第50図　第356号住居跡出土遺物実測図

第356号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	深鉢 縄文土器	B〔16.7〕	大形の波状口縁を呈する口縁部片。RLの単節縄文を施文とし，隆帯に沿って爪形文を施している。区画文内には沈線文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P24 5% 覆土 阿玉台Ⅳ式

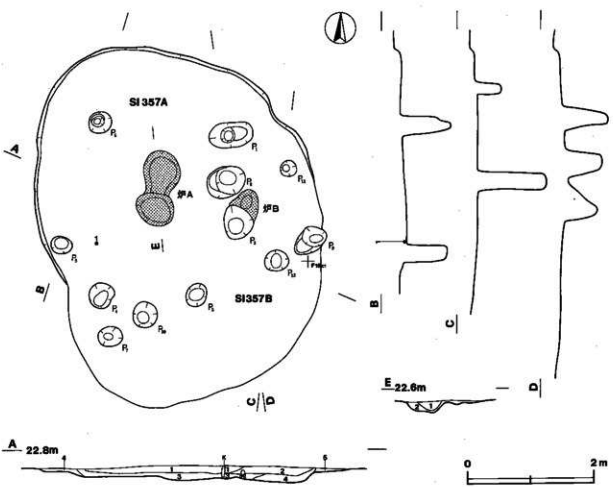
図版番号		器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第50図	6	磨石	9.6	8.1	4.1	464	安山岩	Q16 覆土 凹石兼用
	7	磨製石斧	(5.2)	4.7	2.8	(93)	ホルンフェルス	Q15 覆土
	8	敲石	8.3	6.3	3.4	233	砂岩	Q14 覆土

第357A号住居跡（第51・52図）

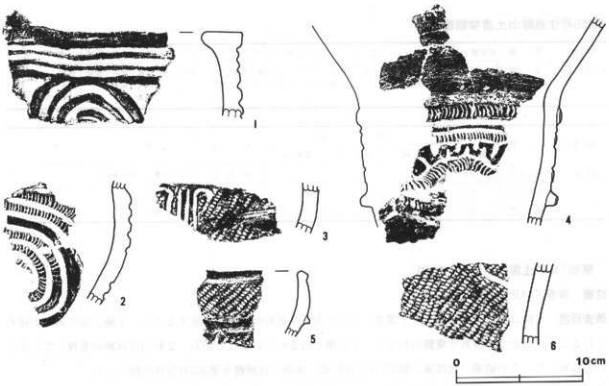
位置　調査区の北西部，F18bo区。

調査経過　本跡は1軒の住居跡として調査していたが，平面形が双円形を呈すること，土層に切りあいが認められること，炉が2か所あり東側の炉がピットに掘り込まれていることから，2軒の住居跡が重複しているものと判断した。その結果，北西側を第357A号住居跡，東側の住居跡を第357B号住居跡とした。

重複関係　本跡は第357B号住居跡と重複する。本跡は第357B号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。



第51図　第357A・B号住居跡実測図



第52図　第357A号住居跡出土遺物実測図

規模と平面形　長径4.10m，短径3.80mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－4°－E

壁　壁高は5～21cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　6か所（P_1～P_6）。P_1～P_6は0.66m～1.70mの間隔で六角形状に巡り，長径34～70cm，短径28～46cmの楕円形で，深さ54～96cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。

炉　炉Aが本跡の炉で，中央部やや北寄りに付設されている。長径120cm，短径58cmの双楕円形で，深さ約17cmの地床炉である。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子少量，炭化物少量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化物少量

覆土　4層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗　褐　色　ローム粒子微量，焼土粒子微量
2　暗　褐　色　ローム粒子少量，ロームブロック少量
3　暗　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量
4　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック多量，焼土粒子少量

遺物　縄文土器片173点が出土している。1は深鉢の口縁部片で，床面から出土している。2は深鉢の胴部片で，沈線間に爪形文を施している。3は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。4は深鉢の頸部から胴部の破片で，爪形文を有する隆帯により文様を描出している。5は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。6は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により波状の懸垂文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。

第357B号住居跡（第51図）

位置　調査区の北西部，F18b0区。

重複関係　本跡は第357A号住居跡と重複する。本跡は第357A号住居跡に掘り込まれおり，本跡が古い。

主軸方向　N－4°－E

規模と平面形　長径5.04m，短径3.70mの楕円形と推定される。

壁　北壁の一部が残存しているのみである。壁高は最大で8cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　6か所（P_7～P_{12}）。P_7～P_9はL字状に位置し，長径40～64cm，短径30～50cmの楕円形で，深さ41～73cmである。P_7～P_9は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_{10}～P_{12}は，長径26～42cm，短径24～38cmの楕円形で，深さ41～109cmである。P_{10}～P_{12}は規模と配列から補助柱穴と考えられるが，第357A号住居跡のピットとなる可能性もある。

炉　炉Bが本跡の炉で，中央部やや北東寄りに付設されている。第357A号住居跡のP_2に掘り込まれており，北半分だけが残存している。南北32cm，東西46cmで，深さ約10cmの地床炉である。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

覆土　第5層が本跡の覆土で，自然堆積である。

土層解説

5	褐　色	ローム粒子中量，焼土粒子中量	

所見　本跡の時期は，本跡に伴う遺物が出土していないため明確でないが，遺構の形態と第357A号住居跡に掘り込まれていることから縄文時代中期と考えられる。

第358号住居跡（第53～55図）

位置　調査区の北部，E19e9区。

規模と平面形　長径4.40m，短径3.48mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－26°－E

壁　壁高は8～16cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

炉　中央部やや北東寄りに付設されている。長径87cm，短径56cmの楕円形で，深さ約3cmの地床炉である。覆土は1層で，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1	暗赤褐色	焼土粒子中量，焼土ブロック中量，炭化物少量

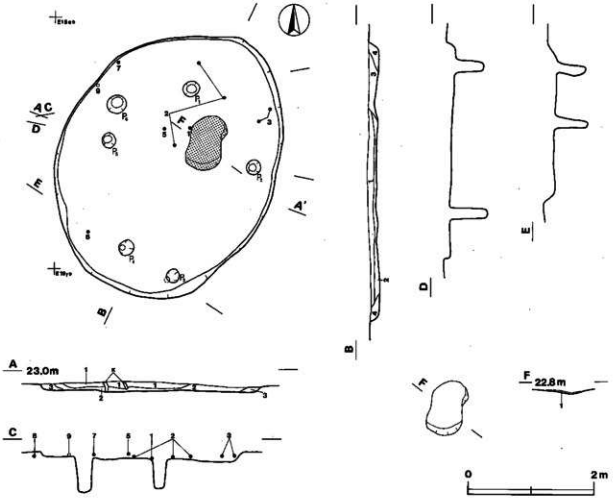
ピット　6か所。P_1～P_6は炉の周囲を巡り，長径24～30cm，短径20～28cmの楕円形で，深さ47～59cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。

覆土　4層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	極暗褐色	ローム粒子微量，焼土粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子微量，ロームブロック微量
3	暗褐色	ローム粒子微量，ロームブロック少量
4	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック少量

遺物　縄文土器片104点，磨石2点が出土している。1は底部が欠損する深鉢で，投棄されたような状態で炉床面から出土している。2は深鉢の口縁部から胴部の破片で，覆土下層から出土している。3～6は深鉢の口



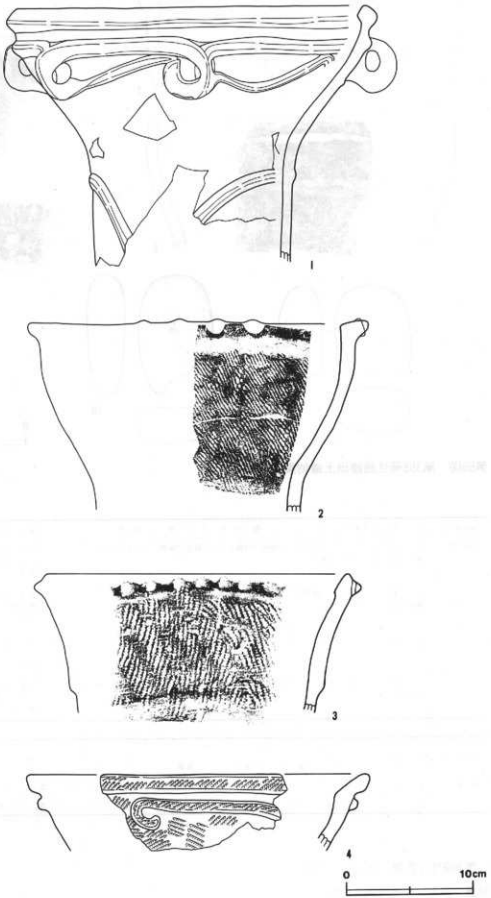
第53図　第358号住居跡実測図

縁部片で，3・5は覆土下層から,4・6は覆土から出土している。7・8は深鉢の底部片で，覆土下層から出土している。9・10は磨石である。

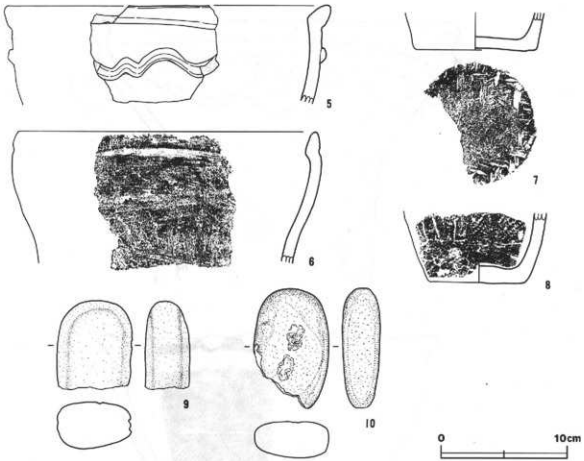
所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。

第358号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	深鉢 縄文土器	A 27.8 B (20.5)	胴下半部欠損。胴部はほぼ直線的に立ち上がり，頸部がくびれ，口縁部はわずかに内彎する。口縁部に5単位の連結した鶴嘴状把手を施している。無文。	長石・雲母・砂粒 赤褐色 普通	P25 70% PL13 炉床面 中峠式
2	深鉢 縄文土器	A (26.8) B (15.3)	口縁部から胴部の破片。口縁部は内彎する。口唇部外面は突出し，指頭による押圧文を施している。口縁部にはしの無節縄文を縦位に施している。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P26 30% PL13 覆土下層 阿玉台Ⅳ式
3	深鉢 縄文土器	A (22.8) B (11.0)	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部外面に指頭による押圧文が施される隆帯を巡らしている。RLの単節縄文を施している。	長石・雲母・砂粒 暗赤褐色 普通	P27 10% PL13 覆土下層 阿玉台Ⅳ式
4	深鉢 縄文土器	A (27.0) B (11.0)	口縁部片。口縁部は外傾する。口縁部にはしの無節縄文を施文とし，後帯により横S字状文を施している。	長石・雲母・砂粒 にぶい橙色 普通	P28 5% PL13 覆土 中峠式



第54図　第358号住居跡出土遺物実測図（1）



第55図　第358号住居跡出土遺物実測図（2）

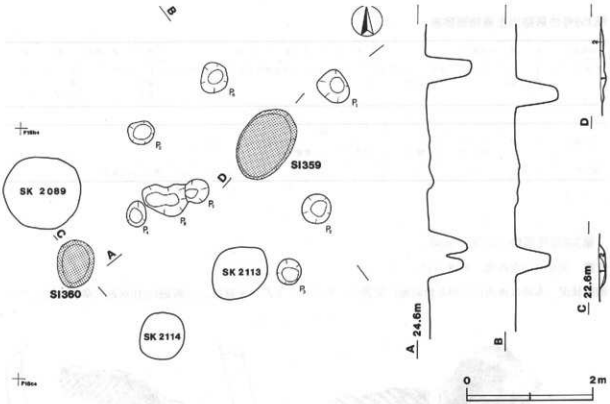
図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第55図 5	深　鉢 縄文土器	A〔25.4〕 B（7.6）	口縁部片。口縁部は隆帯により波状文を巡らしている。無文。	石英・長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P30 5% PL13 覆土下層 中峠式併行
6	深　鉢 縄文土器	A〔23.8〕 B〔10.5〕	口縁部片。口縁部は内湾する。無文。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P29 5% PL13 覆土
7	深　鉢 縄文土器	B（3.0） C　9.8	底部片。無文。底面に網代痕がある。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P32 5% PL13 覆土下層
8	深　鉢 縄文土器	B（7.6） C　7.6	底部片。RLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P31 15% PL13 覆土下層 加曽利EⅡ式

図版番号	器　種	計測値				石　質	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第55図　9	磨　石	(7.1)	6.0	3.6	(244)	安山岩	Q17　覆土
10	磨　石	(9.5)	5.9	3.0	(224)	安山岩	Q15　覆土　凹石兼用

第359号住居跡（第56・57図）

位置　調査区の南西部，F18b5区。

確認状況　南西に下がる傾斜地に位置し，壁や覆土は残存していないが，炉と炉を中心に巡るピットを確認し



第56図　第359・360号住居跡実測図

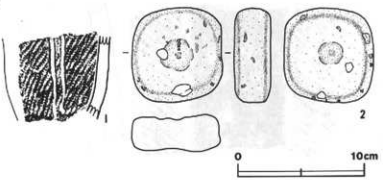
たことから住居跡と判断した。規模や平面形は不明である。

主軸方向　［N－19°－E］

炉　長径120cm，短径82cmの楕円形で，深さ約8cmの地床炉である。炉の覆土は2層に分層される。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土ブロック中量
2　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土ブロック中量

ピット　8か所。P_1～P_8は炉の周囲を巡り，長径40～52cm，短径30～44cmの楕円形で，深さ50～74cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_7は，長径40cm，短径38cmの楕円形で，深さ65cmである。P_8は，長径74cm，短径50cm，深さ54cmである。P_7とP_8は本跡の補助柱穴と考えられるが，隣接する第360号住居跡のピットである可能性もある。



第57図　第359号住居跡出土遺物実測図

遺物　縄文土器片18点，磨石1点が出土している。1は深鉢の胴部片で，ピットの覆土から出土している。2は磨石である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅠ式期）と考えられる。

第359号住居跡出土遺物観察表

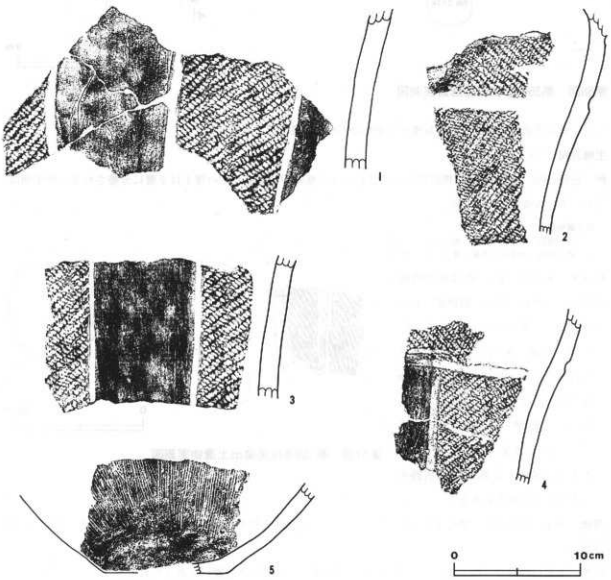
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	深鉢 縄文土器	B (7.6)	胴部片，ほぼ垂直に立ち上がる。Rしの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。	長石・砂粒 褐色 普通	P33 15% 覆土 加曽利E I式

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第57図 2	磨石	7.5	7.1	3.0	260	安山岩	Q19 覆土 凹石兼用

第360号住居跡（第56・58図）

位置　調査区の南西部，F18b4区。

確認状況　本跡は南西に下がる傾斜地に位置し，炉とピットだけを確認した第359号住居跡に隣接する。ピッ



第58図　第360号住居跡出土遺物実測図

トや覆土は残存していないものの，炉を確認したことや第359号住居跡のP_7とP_8が本跡のピットになる可能性があることから住居跡と判断した。規模や平面形は不明である。

炉　長径74cm，短径58cmの楕円形で，炉床面の東壁際から南壁際にかけて土器片を埋設した土器片囲い炉である。深さは11cmで，炉内の覆土は2層に分層される。炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　　焼土粒子中量，焼土ブロック中量
2　暗赤褐色　　焼土粒子中量，焼土ブロック中量

遺物　縄文土器片35点が出土している。1・3は深鉢の胴部片，2・4は深鉢の頸部から胴部の破片，5は深鉢の底部から胴部の破片で，土器片囲い炉に埋設していたものである。1と3，2と4は，同一個体である。1・3はRLの単節縄文を地文とし，沈線による幅広の懸垂文間を磨り消している。2・4は頸部に沈線を巡らし，RLの単節縄文を施している。5は条線文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。

第361号住居跡（第59・60図）

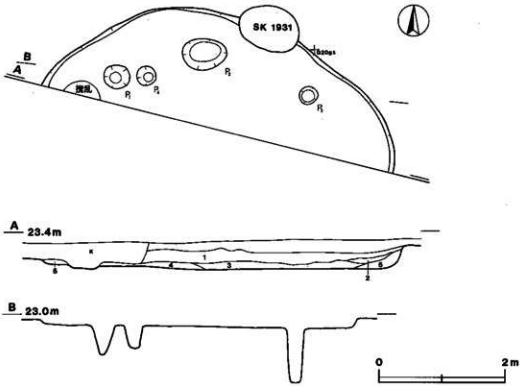
位置　調査区の南部，G20g4区。

確認状況　本跡の南側部は調査区域外となり，本跡の北側部だけを確認する。

重複関係　本跡は第1931号土坑に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　径3.80mの円形と推定される。

壁　壁高は8～16cmで，外傾して立ち上がる。



第59図　第361号住居跡実測図

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　4か所。P_1～P_3は壁から40～50cmほど離れて弧状に巡り，長径30～70cm，短径28～50cmの楕円形で，深さ48～85cmである。P_1～P_3は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_4は，径30cmほどの円形で，深さ37cmである。P_4は，規模から補助柱穴と考えられる。

覆土　5層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
2	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量，焼土粒子少量，炭化物少量
3	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック微量，焼土粒子少量，炭化物少量
4	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量，炭化物少量
5	にぶい褐色	ローム粒子多量，ロームブロック中量，炭化物子少量

遺物　縄文土器片41点，磨製石斧1点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で，条線文を施している。2は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線間を磨り消している。3は磨製石斧である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利E I式期）と考えられる。

第361号住居跡出土遺物観察表

図版番号		器　種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	備　考
第60図	3	磨製石斧	4.9	2.9	1.1	(23)	頁　岩	Q20 覆土

第60図　第361号住居跡出土遺物実測図

第362号住居跡（第61・62図）

位置　調査区の南部，G20b2区。

規模と平面形　長径4.08m，短径3.68mの楕円形である。

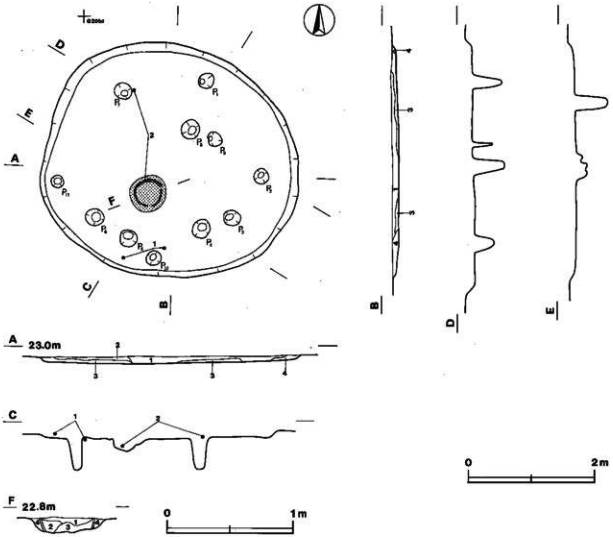
主軸方向　N－71°－E

壁　壁高は6～11cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　11か所。P_1～P_7は壁から28～54cm内側を巡り，長径24～30cm，短径24～26cmの楕円形で，深さ29～52cmである。P_1～P_7は，位置と規模から主柱穴と考えられる。P_8～P_{11}は，長径20～31cm，短径18～24cmの楕円形で，深さ16～53cmである。P_8～P_{11}は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　中央部やや南西寄りにに付設されている。長径60cm，短径54cmの楕円形で，深鉢の頸部を埋設した土器埋設炉である。炉の深さは12cmほどあり，炉の覆土は4層に分層される。炉床面は火熱により赤変硬化している。



第61図　第362号住居跡実測図

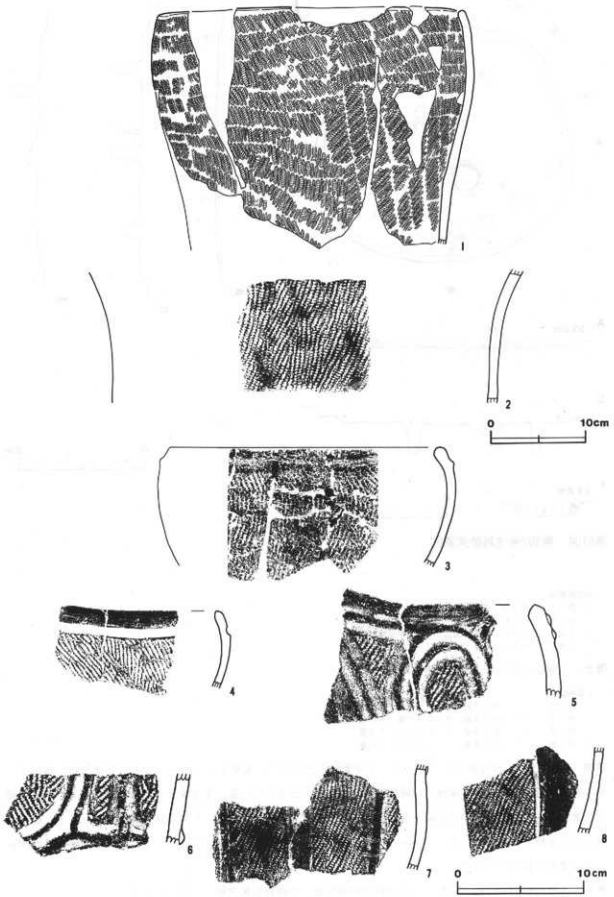
炉土層解説
1　褐　色　焼土粒子多量，炭化物少量
2　褐　色　焼土粒子中量
3　赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量
4　赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック多量

覆土　4層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物少量
2　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化物中量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　縄文土器片127点が出土している。1は深鉢の上半部で，床面から出土している。2は深鉢の頸部で，炉の埋設土器である。3は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。4は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，口唇部直下に沈線を巡らしている。5は深鉢の口縁部片，6は深鉢の胴部片で，2本一組の隆帯により文様を描出している。7・8は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，7は微隆帯，8は沈線により文様を描出している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅣ式期）と考えられる。



第62図　第362号住居跡出土遺物実測図

第362号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	深鉢 縄文土器	A (33.4) B (24.6)	胴下半部欠損。胴部は外頻して立ち上がり，口縁部は内彎する。RLの単節縄文を施している。	石英・長石・雲母 灰褐色 普通	P34 50% PL13 床面 加曽利EIV式
2	深鉢 縄文土器	B (14.1)	頸部片。外反して立ち上がる。RLの単節縄文を施している。	石英・長石・砂粒 橙色 普通	P35 20% PL13 炉縁設土器 加曽利EIV式
3	深鉢 縄文土器	A (21.4) B (9.5)	口縁部片。口唇部直下に微隆帯を巡らし，口縁部に梅鉢の無文帯を構成している。RLの単節縄文を施している。	砂粒 灰褐色 普通	P36 20% 覆土 加曽利EIV式

第363号住居跡（第63～67図）

位置　調査区の南部，G19d9区。

重複関係　本跡は第92・93号溝と重複する。本跡は第92・93号溝に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　長径7.82m，短径6.82mの楕円形である。

主軸方向　N－35°－E

壁　壁高は18～34cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，中央部が踏み固められている。

ピット　19か所。P_1～P_6は壁から64～84cm内側でほぼ円形に巡り，長径74～80cm，短径60～78cmの楕円形で，深さ58～75cmである。P_1～P_6は，位置と規模から主柱穴と考えられる。P_7～P_{18}は，長径26～64cm，短径22～58cmの円形もしくは楕円形で，深さ38～68cmである。P_7～P_{18}は，規模から補助柱穴と考えられる。P_{19}は埋設土器の掘り方で，長径36cm，短径32cmの楕円形で，深さ20cmである。

炉　ほぼ中央部に付設されている。長径1.30m，短径0.90mの楕円形で，胴部下半を欠損させた深鉢を埋設させた土器埋設炉である。炉の深さは9cmで，覆土は3層に分層される。炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

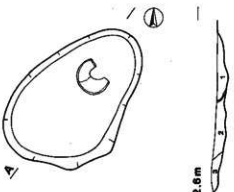
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，炭化物中量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック多量
3　赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック多量

覆土　8層に分層され，自然堆積である。

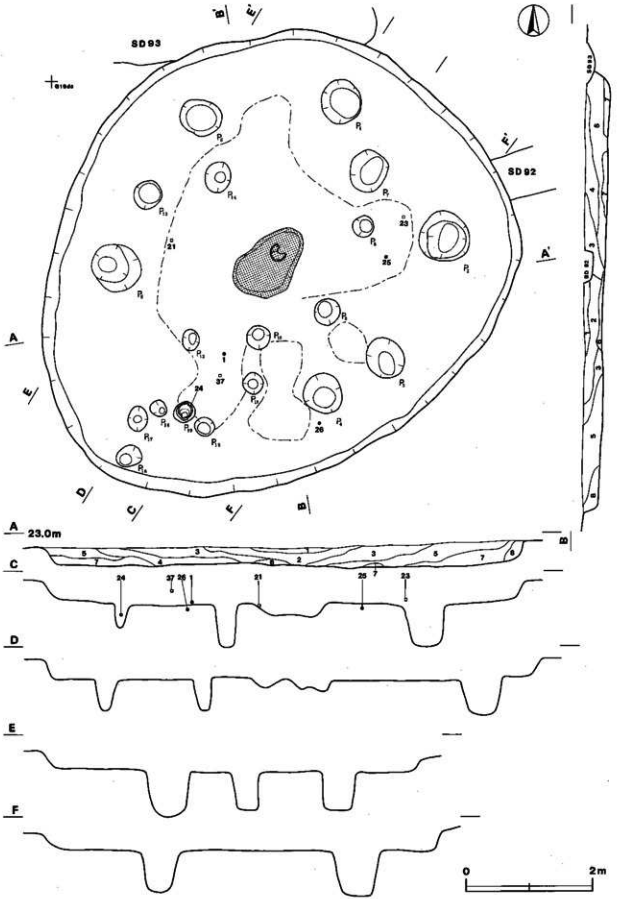
土層解説

1　黒　色　ローム粒子少量，焼土粒子少量，炭化物少量
2　極暗褐色　ローム粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化物中量
3　極暗褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子中量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化物少量
7　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量
8　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量

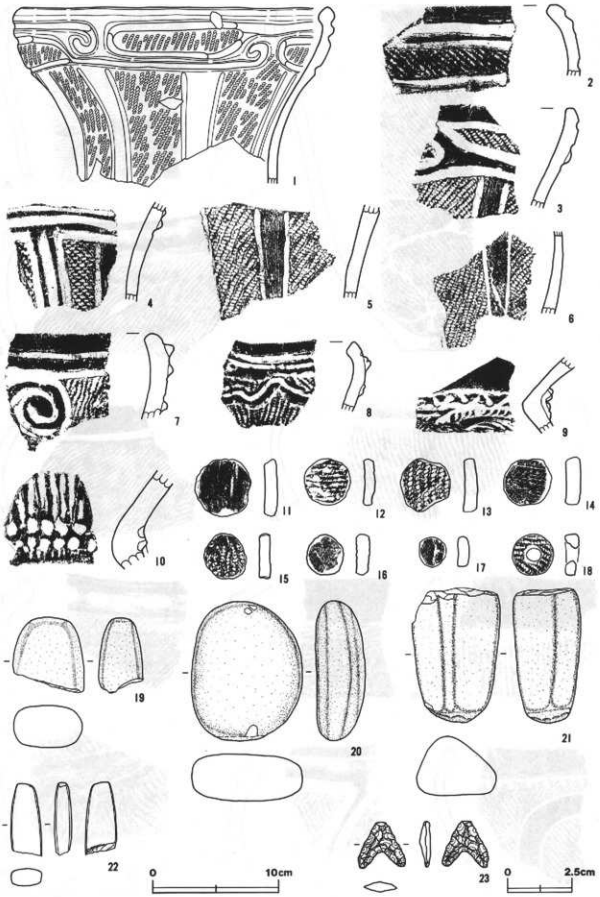
遺物　縄文土器片2003点，磨製石斧4点，石皿片2点，磨石1点，敲石1点，石鏃1点，石棒片6点，剥片4点が出土している。P_{19}の埋設土器の東側には，埋設土器と同時期の遺物が東西2.50m，南北2.30mの範囲に集中して出土している。24～37の遺物は，その集中地点から出土した遺物である。1は深鉢の上半部で，炉埋設土器である。2・3は深鉢の口縁部片で，2はRの無節縄



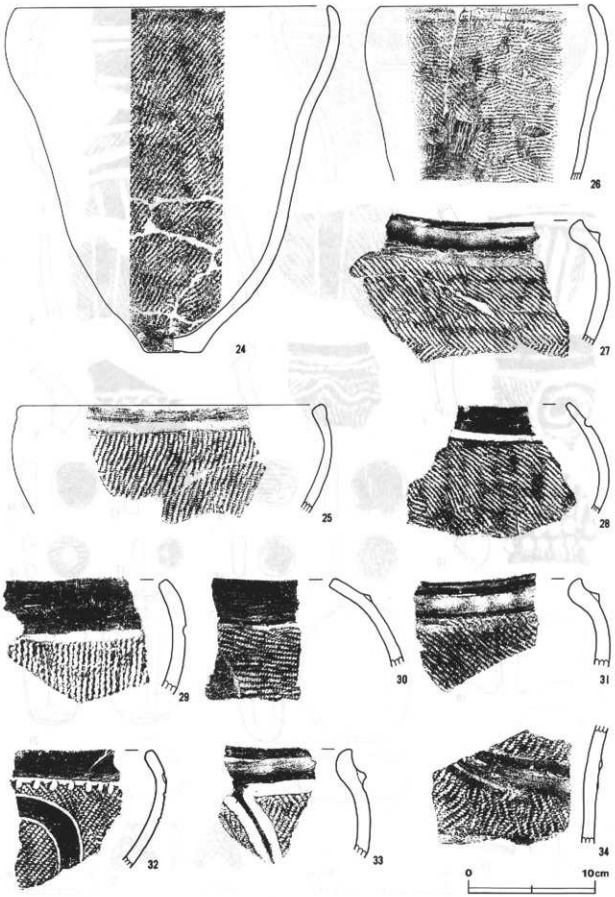
第63図　第363号住居跡炉実測図



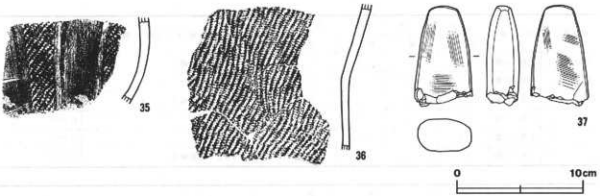
第64図　第363号住居跡実測図



第65図　第363号住居跡出土遺物実測図（1）



第66図　第363号住居跡出土遺物実測図（2）



第67図　第363号住居跡出土遺物実測図（3）

文を，3はＲＬの単節縄文を地文としている。4は深鉢の頸部から胴部の破片で，頸部に隆帯を巡らし，胴部には2本一組の隆帯を垂下させている。5・6は深鉢の胴部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線間を磨り消している。7・8は深鉢の口縁部片，9は深鉢の頸部片で，混入したものである。10は深鉢の頸部片で，円形刺突文を巡らしている。11～18は土器片円盤，19・22は磨製石斧，20は磨石，21は敲石，23は石鏃である。24は完形の深鉢で，P_{19}に正位の状態で埋設されていた埋設土器である。26～33は深鉢の口縁部片で，27・30・31は微隆帯を，25・29は沈線を，32は刺突文を，口唇部直下に巡らしている。34～36は深鉢の胴部片で，37は磨製石斧である。

所見　本跡は1軒の住居跡として調査したが，炉の埋設土器とP_{19}の埋設土器とでは時期差があることと，P_{19}の埋設土器の東側には埋設土器と同時期の遺物が集中して出土していることから，その範囲に別の遺構が存在していた可能性がある。本跡の時期は，炉の埋設土器等の出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅡ式期）と考えられる。また，P_{19}の埋設土器とその東側にある遺物集中地点が形成された時期は，縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅣ式期）と考えられる。

第363号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	深鉢 縄文土器	A (24.3) B (13.3)	胴下半部欠損。胴部は外反して立ち上がり，口縁部は内弯する。口縁部には沈線と隆帯により楕円区画文と蕨手状文とを結合させた文様を施している。胴部はＲＬの単節縄文を地文とし，垂下する沈線間を磨り消している。	長石・砂粒 明赤褐色 普通	P38　60%　PL14 伊那設土器 加曽利ＥⅡ式
第66図 24	深鉢 縄文土器	A　24.7 B　27.6 C　4.6	口縁部一部欠損。胴部は内弯して立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部は内弯する。ＲＬの単節縄文を施している。	長石・雲母・砂粒 赤褐色 普通	P37　95%　PL14 埋設土器 加曽利ＥⅣ式
25	深鉢 縄文土器	A (16.6) B (8.6)	口縁部片。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに内弯する。ＲＬの単節縄文を施している。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P39　15%　PL14 覆土 加曽利ＥⅣ式
26	深鉢 縄文土器	A (16.6) B (13.8)	口縁部片。口縁部はわずかに内弯する。口縁部直下に沈線を巡らし，Ｌの無節縄文を施している。	長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P40　15%　PL14 覆土 加曽利ＥⅣ式

図版番号	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第65図　11	土器片円盤	4.6	4.5	1.05	(26)	90	無文。	ＤＰ11
12	土器片円盤	3.65	3.65	0.9	(14)	90	ＬＲの単節縄文。	ＤＰ12

図版番号		器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第65図	13	土器片円盤	4.2	4.0	1.2	(22)	80	RLの単節縄文。	DP13
	14	土器片円盤	3.7	3.8	1.3	(21)	90	無文。	DP14
	15	土器片円盤	3.6	3.4	0.9	(14)	90	RLの単節縄文。	DP15
	16	土器片円盤	3.2	2.9	1.1	(11)	90	無文。	DP16
	17	土器片円盤	2.4	2.2	0.9	(6)	90	無文。	DP17
	18	土器片円盤	3.3	3.3	1.1	(10)	90	RLの単節縄文。	DP57

図版番号		器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第65図	19	磨製石斧	(5.9)	5.6	3.5	(164)	安山岩	Q25 覆土
	20	磨石	11.1	8.8	4.1	615	砂岩	Q23 覆土
	21	敲石	(10.7)	7.0	5.5	(601)	緑色凝灰岩	Q26 覆土
	22	磨製石斧	(5.7)	2.4	1.35	(35)	蛇文岩	Q22 覆土
	23	石鏃	1.8	1.8	0.4	1	チャート	Q24 覆土
第67図	37	磨製石斧	8.0	4.7	2.5	(161)	緑泥変岩	Q21 覆土

第364A号住居跡（第68・69図）

位置　調査区の南部，F20j3区。

確認状況　覆土や壁は残存しておらず，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。規模や平面形は不明である。

重複関係　方形に巡るピットが2か所あり，それぞれに付随する炉があることから，2軒の住居跡が重複しているものと判断して，西側を第364A号住居跡，東側を第364B号住居跡とした。新旧関係は不明である。

主軸方向　N－81°－E

ピット　5か所。P_1～P_4は方形に巡り，長径40～70cm，短径38～56cmの楕円形で，深さ53～103cmである。P_1～P_4は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_5は，長径30cm，短径28cmの楕円形で，深さ13cmである。P_5は，規模から補助柱穴と考えられる。

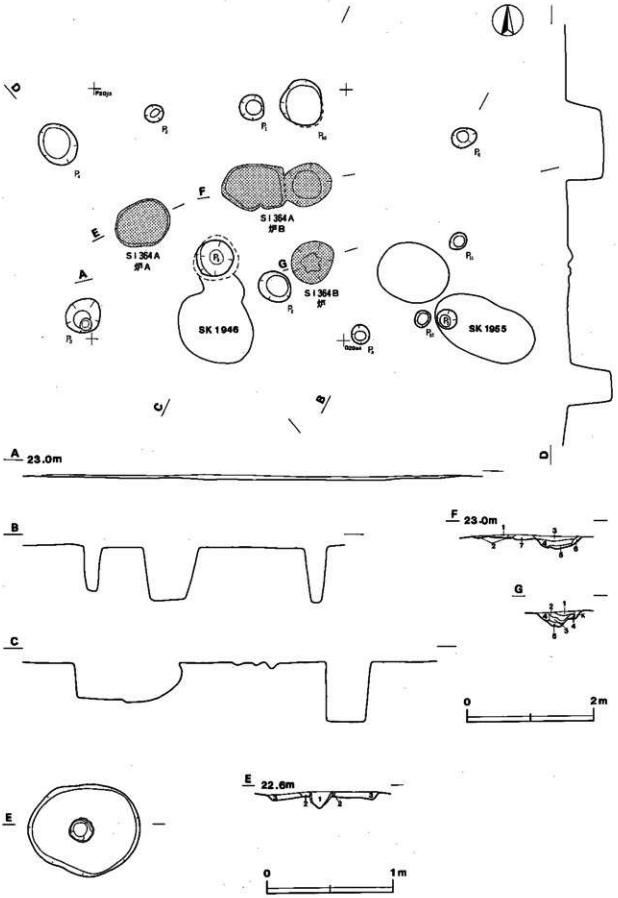
炉　2か所。炉Aは方形にめぐるP_1～P_4の中央部やや西側に位置し，長径1.78m，短径1.46mの楕円形で，中央部に深鉢の口縁部を埋設する土器埋設炉である。炉内の覆土は3層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは方形にめぐるP_1～P_4の東側に位置し，長径1.74m，短径0.70mの及楕円形で，西側が深さ約6cm，東側が深さ約20cmの地床炉である。炉内の覆土は7層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉A土層解説

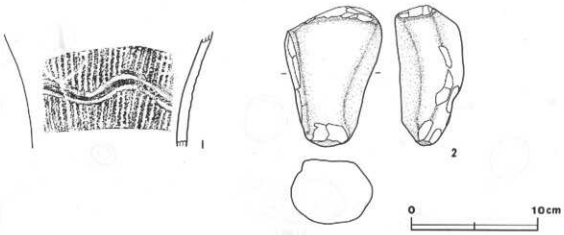
1　赤褐色　焼土粒子中量，焼土ブロック中量
2　明赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック多量
3　橙色　焼土粒子多量，焼土ブロック多量

炉B土層解説

1　灰褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量
2　灰褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量
3　灰褐色　焼土粒子微量，焼土ブロック微量
4　灰褐色　焼土粒子少量，ローム粒子少量
5　灰褐色　焼土粒子多量
6　褐色　焼土粒子少量，ローム粒子多量
7　褐色　焼土粒子少量，ローム粒子多量



第68図　第364A・B号住居跡実測図



第69図　第364A・B号住居跡出土遺物実測図

遺物　縄文土器片56点，敲石1点が出土している。1は深鉢の胴部片で，炉Aに埋設されていた炉埋設土器である。2は敲石である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅡ式期）と考えられる。

第364A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第69図 1	深　鉢 縄文土器	B　(9.1)	胴部片。外反して立ち上がる。撚糸文を地文とし，沈線により波状文を巡らしている。	砂粒 明褐色 普通	P41　30%　PL14 炉埋設土器 加曽利EⅡ式

図版番号	器　種	計測値				石　質	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第69図　2	敲　石	(11.2)	7.8	5.5	(524)	砂　岩	Q27　覆土

第364B号住居跡（第68図）

位置　調査区の南部，F20j4区。

確認状況　覆土や壁は残存しておらず，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。規模や平面形は不明である。

重複関係　本跡は，第364A号住居跡と第1955号土坑と重複する。本跡のP_7が第1955号土坑を掘り込んでいるため，本跡が新しい。本跡と第364A号住居跡との新旧関係は不明である。

主軸方向　N－63°－E

ピット　7か所で，P_6～P_{12}が本跡のピットである。P_6～P_{10}は五角形に巡り，長径40～70cm，短径38～56cmの楕円形で，深さ53～103cmである。P_6～P_{10}は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_{11}・P_{12}は，長径38cm，短径20cmの楕円形で，深さ19～27cmである。P_{11}・P_{12}は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　五角形に巡るP_6～P_{10}の中央部やや南西寄りに位置し，長径72cm，短径62cm，深さ40cmの地床炉である。炉内の覆土は5層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子微量，ローム粒子中量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子少量
4　灰　褐　色　焼土粒子多量，ローム中量
5　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，ロームブロック多量

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため明確でないが，縄文時代中期と考えられる。

第365号住居跡（第70・71図）

位置　調査区の南東部，F20j9区。

規模と平面形　長径3.40m，短径2.96mの楕円形である。

主軸方向　N－20°－W

壁　壁高は30～44cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，踏み固められている。

ピット　5か所。P_1は中央部に位置し，長径50cm，短径40cmの楕円形で，深さ15cmである。P_2～P_5は，長径34～60cm，短径30～50cmの楕円形で，深さ23～50cmである。P_1～P_5は，規模から柱穴と考えられる。

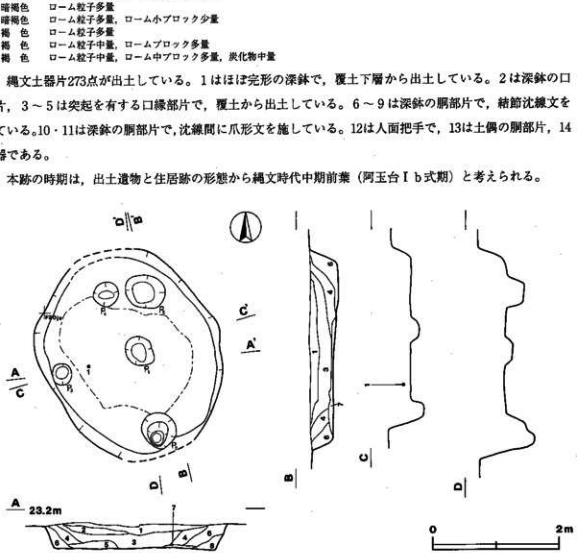
覆土　8層に分層され，自然堆積である。

土層解説

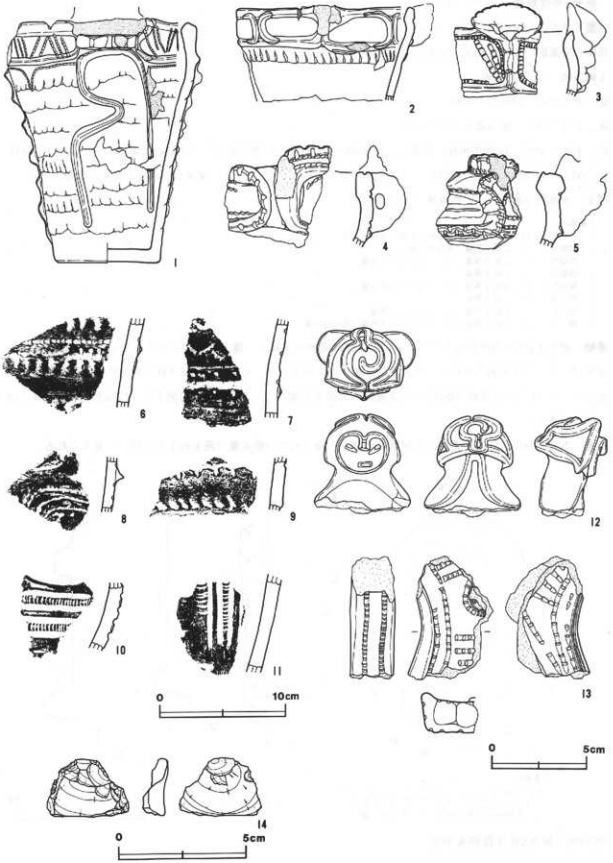
1	黒褐色	ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化物中量
2	黒褐色	ローム粒子多量，炭化物少量
3	黒褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
4	暗褐色	ローム粒子多量
5	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
6	褐　色	ローム粒子多量
7	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック多量
8	褐　色	ローム粒子中量，ローム中ブロック多量，炭化物中量

遺物　縄文土器片273点が出土している。1はほぼ完形の深鉢で，覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部片，3～5は突起を有する口縁部片で，覆土から出土している。6～9は深鉢の胴部片で，結節沈線文を施している。10・11は深鉢の胴部片で，沈線間に爪形文を施している。12は人面把手で，13は土偶の胴部片，14は削器である。

所見　本跡の時期は，出土遺物と住居跡の形態から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅰb式期）と考えられる。



第70図　第365号住居跡実測図



第71図　第365号住居跡出土遺物実測図

第365号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	深鉢 縄文土器	A (14.2) B (19.4) C 8.2	把手及び口縁部一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部には隆帯による区画文内を結節沈線文で鋸歯状に施している。胴部は輪積痕を横状に残している。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P42 80% PL14 覆土下層 阿玉台Ⅰb式
2	深鉢 縄文土器	A (14.4) B (19.4)	口縁部片。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部は隆帯により口縁部文様帯を別成し，さらに楕円形の区画を施している。胴部は輪積痕を横状に残している。	長石・雲母・砂粒 黒褐色 普通	P43 20% PL14 覆土 阿玉台Ⅰb式
3	深鉢 縄文土器	B (7.5)	口縁部片。縦状突起を土台にして扇状把手を施している。口縁部は隆帯により口縁部文様帯を形成し，隆帯に沿って結節沈線文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P44 5% 覆土 阿玉台Ⅰb式
4	深鉢 縄文土器	B (8.0)	口縁部片。キザミを有する隆帯により横状把手を施している。口縁部は隆帯により楕円形の区画を施し，区画内には隆帯に沿って結節沈線文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P45 5% 覆土 阿玉台Ⅰb式
5	深鉢 縄文土器	B (6.9)	口縁部片。キザミを有する隆帯により渦巻状把手を施し，把手から口縁部を区画する隆帯が垂下している。区画内には隆帯に沿って結節沈線文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P46 5% 覆土 阿玉台Ⅰb式
12	深鉢 縄文土器	B (5.3)	人面把手部片。顔部はほぼ楕形で，隆帯により下端が鍵穴状に突出する渦巻文を施している。顔面は偏平で，輪郭に沿って隆帯区画し，鼻と連結している。目と鼻は刺突により描出している。	長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	D P18 5% 覆土 勝板式

図版番号	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第71図 13	土偶	(6.5)	(4.5)	2.4	(60)	15	胴部片。版状を呈する。乳房は円形の貼付文で描出し，結節沈線文で文様を描出している。	D P 19 覆土

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第71図 14	剥器	2.6	3.1	0.9	4	黒曜石	Q36 覆土

第366号住居跡（第72・73図）

位置　調査区の南東部，G21ａ1区。

重複関係　本跡は第1926号土坑と重複する。本跡は第1926号土坑に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長径5.38m，短径4.62mの楕円形である。

主軸方向　N－41°－W

壁　壁高は8～12cmで，外傾して立ち上がる。

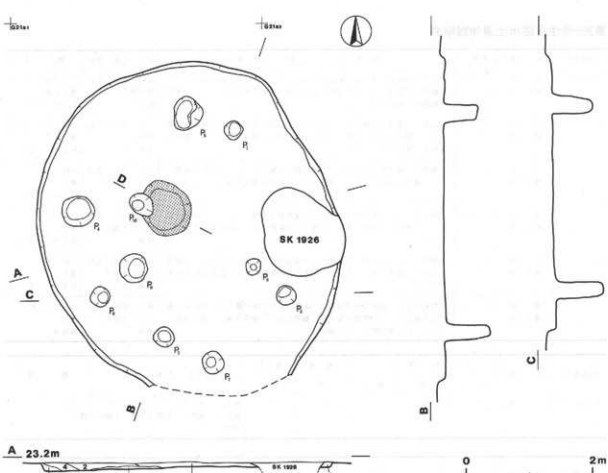
床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　9か所。P_1～P_6は壁から40～62cm内側でほぼ楕円形状に巡り，長径30～54cm，短径29～46cmの楕円形で，深さ57～79cmである。P_1～P_6は，位置と規模から主柱穴と考えられる。P_7～P_9は，長径30～46cm，短径24～44cmの楕円形で，深さ57～73cmである。P_7～P_9は，規模から補助柱穴と考えられる。P_{10}は炉を掘り込んでおり，本跡には伴わないピットである。

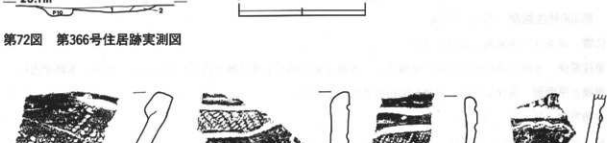
炉　中央部北西寄りに付設されている。長径90cm，短径76cmの楕円形で，深さ5cmの地床炉である。炉の覆土は2層に分層され，炉床面は赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
2　暗褐色　焼土粒子少量，ローム粒子中量

覆土　5層に分層され，自然堆積である。



第72図　第366号住居跡実測図



第73図　第366号住居跡出土遺物実測図

土層解説

1	褐	色	ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物少量	4	にぶい褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
2	褐	色	ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量	5	にぶい褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物微量
3	褐	色	ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量			

遺物　縄文土器片74点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で，口唇部内面を肥厚させている。2・3は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。4は深鉢の口縁部片で，混入したものである。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少量であるため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。

第367号住居跡（第74・75図）

位置　調査区の南部，G20d6区。

重複関係　本跡は第347号住居跡に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長径4.00m，短径3.70mの楕円形と推定される。

長径方向　N－27°－E

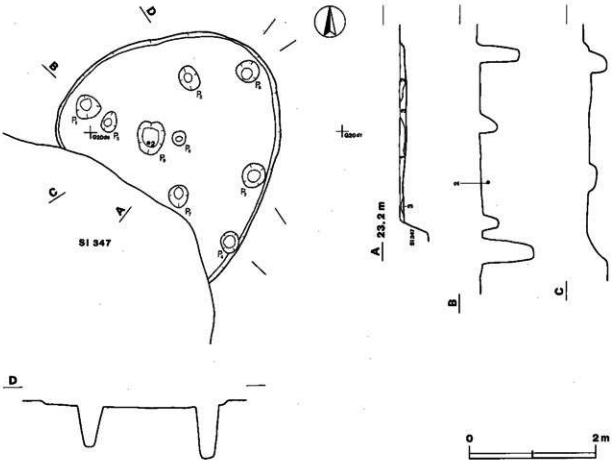
壁　壁高は2～6cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

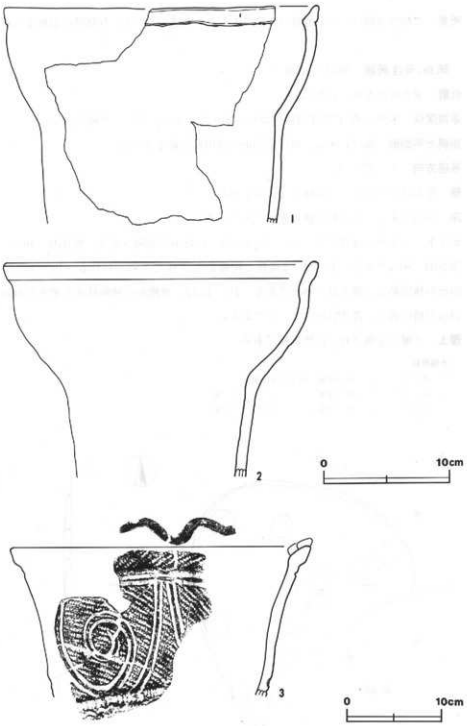
ピット　9か所を確認する。P_1～P_4は0.74～1.48mの間隔で巡り，長径34～40cm，短径28～34cmの楕円形で，深さ63～86cmである。P_1～P_4は規模と配置から主柱穴と考えられる。P_5～P_8は，長径22～38cm，短径20～34cmの楕円形で，深さ21～29cmである。P_5～P_8は，規模から補助柱穴と考えられる。P_9は，長径52cm，短径44cmの楕円形で，深さ11cmのピットである。

覆土　3層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子中量，焼土粒子微量
2　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック少量
3　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック少量



第74図　第367号住居跡実測図



第75図　第367号住居跡出土遺物実測図

遺物　縄文土器片44点が出土している。1・3は深鉢の口縁部から胴部の破片で，覆土から出土している。2は深鉢の上半部で，P_9の底面から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅳ式期）と考えられる。

第367号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第75図 1	深　鉢 縄文土器	A (24.8) B (7.3)	口縁部から胴部の破片。胴部はほぼ直線的に立ち上がり，口縁部は内彎する。無文。	長石・雲母・砂粒 褐色 普通	P47　15%　PL14 覆土 阿玉台Ⅳ式
2	深　体 縄文土器	A (24.5) B (17.1)	底部欠損。胴部はほぼ直線的に立ち上がり，口縁部は内彎する。無文。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P49　60%　PL15 P_4 底面 阿玉台Ⅳ式
3	深　鉢 縄文土器	A (31.4) B (16.5)	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部には細歯状貝殻刺突帯を施している。胴部との境に爪形文を巡らして口縁部文様帯を形成している。口縁部はＬＲの単節縄文を地文とし，半截竹管により文様を描出している。	石英・長石・雲母 暗赤褐色 普通	P48　10%　PL14 覆土 阿玉台Ⅳ式

第368号住居跡（第76・77図）

位置　調査区の南部，G20ａ6区。

規模と平面形　長径6.80m，短径5.56mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－67°－E

壁　壁高は3～6㎝で，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　7か所。P_2・P_4～P_7は壁際を巡り，長径34～48㎝，短径28～46㎝の楕円形で，深さ63～94㎝である。P_2・P_4～P_7は規模と配置から主柱穴と考えられる。P_1は，長径32㎝，短径30㎝の楕円形で，深さ56㎝である。P_2は，長径32㎝，短径29㎝の楕円形で，深さ23㎝である。P_1・P_3は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　中央部やや西寄りに付設される。長径94㎝，短径82㎝の楕円形で，深さ8㎝の地床炉である。炉の覆土は2層に分層される。炉床面は，火熱により赤変硬化している。

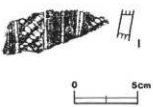
炉土層解説
1　灰褐色　焼土粒子少量，ローム粒子少量
2　灰褐色　焼土粒子中量，ローム粒子少量，炭化物少量

覆土　1層で，自然堆積である。

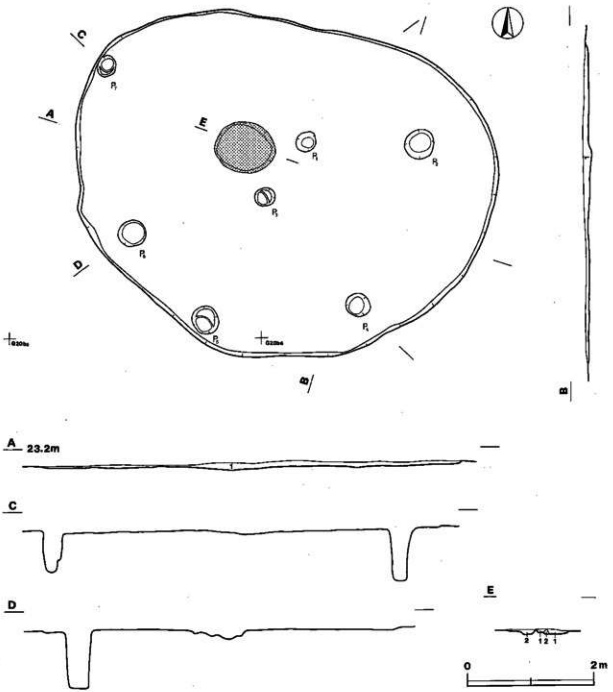
土層解説
1　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック少量

遺物　縄文土器片8点が覆土から出土している。1は深鉢の胴部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少量であるため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。



第76図　第368号住居跡出土遺物実測図



第77図　第368号住居跡実測図

第369号住居跡（第78・79図）

位置　調査区の南部，G19b0区。

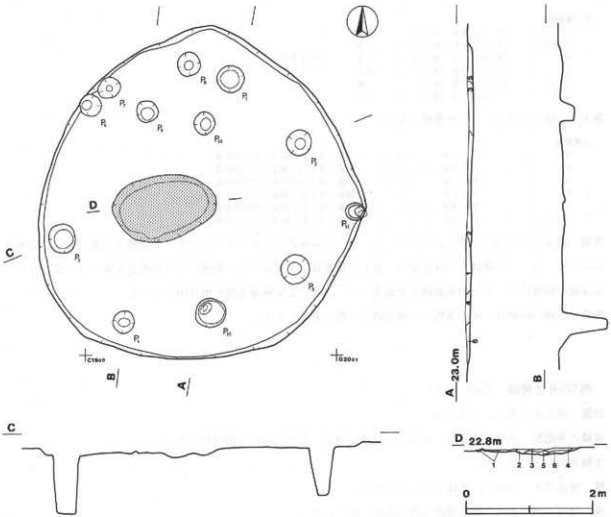
規模と平面形　長径5.30m，短径5.20mの不整円形である。

主軸方向　N－86°－E

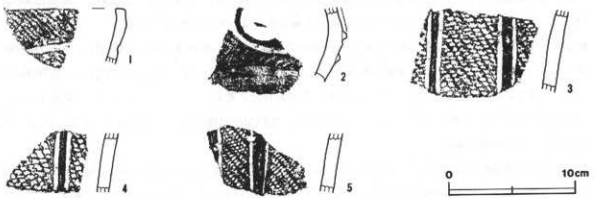
壁　壁高は4～10cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　12か所。P_1～P_8は壁際を巡り，長径34～48cm，短径32～44cmの楕円形で，深さ73～95cmである。



第78図　第369号住居跡実測図



第79図　第369号住居跡出土遺物実測図

P_1～P_6は規模と配置から主柱穴と考えられる。P_7～P_{12}は，長径30～48cm，短径28～44cmの楕円形で，深さ26～78cmである。P_7～P_{12}は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　中央部やや西寄りに付設されている。長径1.66m，短径1.00mの楕円形で，深さ10cmの地床炉である。炉内の覆土は6層に分層される。

炉土層解説
1　赤　褐　色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック多量
2　明赤褐色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
3　褐　　色　　焼土粒子中量，焼土小ブロック中量，ローム粒子多量
4　褐　　色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック多量
5　赤　褐　色　　焼土粒子中量，焼土小ブロック中量
6　褐　　色　　焼土粒子少量，焼土小ブロック中量

覆土　6層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　褐　　色　　ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
2　褐　　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
3　褐　　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
4　褐　　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量
5　褐　　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
6　にぶい褐色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量

遺物　縄文土器片68点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線を巡らしている。2は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，隆帯により渦巻文を施している。3～5は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期と考えられる。

第370号住居跡（第80・81図）

位置　調査区の南部，F20h3区。

規模と平面形　南壁に張り出しを有し，長径4.38m，短径3.94mの楕円形である。

主軸方向　N－2°－E

壁　壁高は8～10cmで，外傾して立ち上がる。

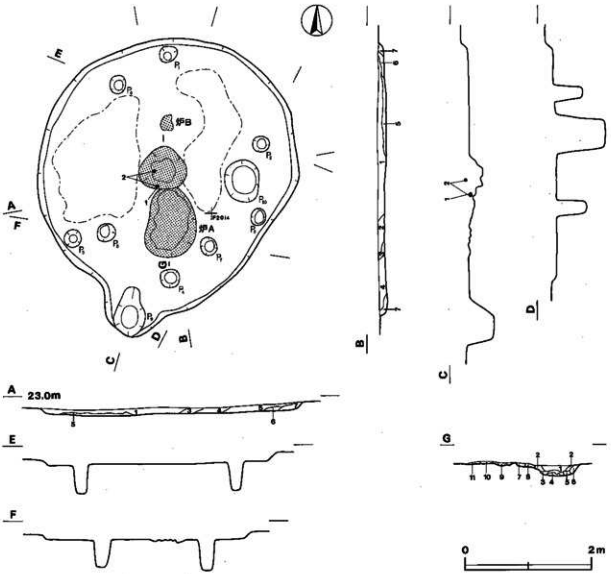
床　ほぼ平坦であり，炉の周囲が踏み固められている。

出入り口　南壁に位置し，幅102cm，長さ50cmの張り出し状を呈する。土坑が重複しているものとも考えられたが，覆土が近似することから本跡に伴う施設で出入り口と判断した。底面には，長径80cm，短径52cmの長楕円形で，深さ36cmのP_9がある。出入り口の位置と主軸方向とはわずかに異なっている。

ピット　10か所。P_1～P_8は壁に沿って0.62～2.30mの間隔で巡り，長径28～30cm，短径24～28cmの楕円形で，深さ40～51cmである。P_1～P_6は規模と配置から主柱穴と考えられる。P_7・P_8は，長径30cm，短径26cmの楕円形で，深さ45～48cmである。P_7・P_8は，規模から補助柱穴と考えられる。P_9は出入り口に位置することから，出入り口ピットと考えられる。P_{10}は，長径70cm，短径54cmの楕円形で，深さ82cmである。P_{10}は，本跡に伴うかどうか不明である。

炉　2か所が直線的に付設され，南側を炉A，北側を炉Bとした。炉Aは，長径1.74m，短径0.76mの双楕円形で，北側の深さが17cmの地床炉である。平面形が双楕円形を呈することから2か所の炉が重複していることが考えられたが，土層断面の観察では重複関係は認められず複式炉と判断した。炉内の覆土は11層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは，長径24cm，短径20cmの不整楕円形で，深さ6cmの地床炉である。炉内の覆土は3層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉A土層解説
1　暗赤褐色　　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
2　暗赤褐色　　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム粒子少量
3　赤　褐　色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
4　赤　褐　色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
5　明赤褐色　　焼土小ブロック中量
6　暗赤褐色　　焼土粒子中量，ローム粒子少量，ローム小ブロック中量



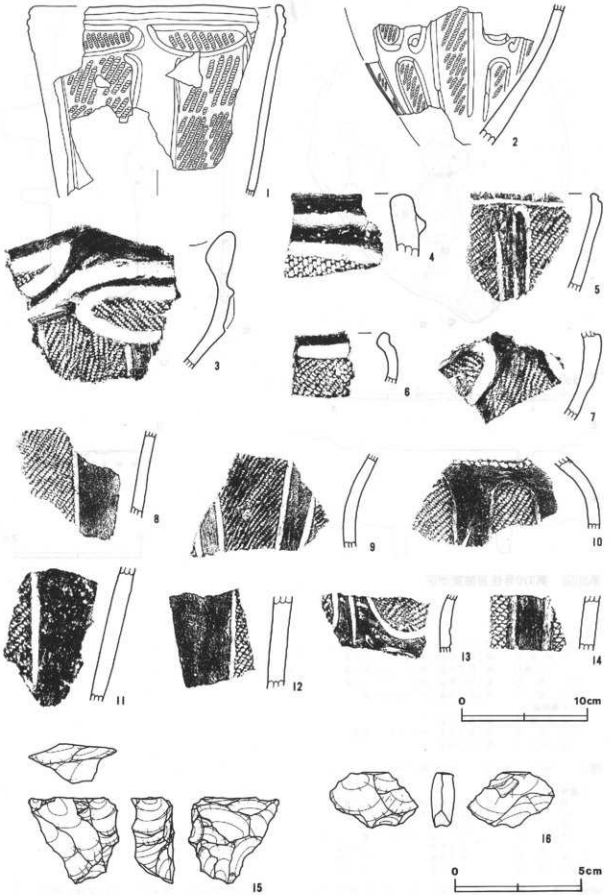
第80図　第370号住居跡実測図

7　明　赤　褐　色　　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
8　明　赤　褐　色　　焼土粒子中量，焼土小ブロック中量
9　にぶい赤褐色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
10　赤　　褐　　色　　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
11　赤　　褐　　色　　焼土粒子多量，ローム粒子中量
炉B土層解説
1　暗　赤　褐　色　　焼土粒子中量
2　赤　　褐　　色　　焼土粒子多量，焼土ブロック多量
3　暗　赤　褐　色　　焼土粒子中量

覆土　7層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　褐　　色　　焼土粒子少量，焼土小ブロック少量
2　褐　　色　　焼土粒子少量，焼土小ブロック少量
3　褐　　色　　ローム粒子中量
4　褐　　色　　ローム粒子中量，焼土粒子中量
5　明　褐　色　　ローム粒子多量，ロームブロック中量
6　明　褐　色　　ローム粒子多量，ロームブロック少量
7　明　褐　色　　ローム粒子多量，ロームブロック少量

遺物　縄文土器片131点，石核1点，剥片1点が出土している。1は深鉢の口縁部片，2は深鉢の胴部片で，炉Aの炉床面から出土している。3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，4は深鉢の口縁部片で，単節縄文を



第81図　第370号住居跡出土遺物実測図

地文とし，隆帯により文様を描出している。5～7は深鉢の口縁部片で，単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。10・13は深鉢の頸部から胴部の破片で，頸部に刺突文を巡らし，胴部は沈線による逆U字状文内にＲＬの単節縄文を充塡している。8・9・11・12・14は深鉢の胴部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線による幅広の懸垂文間を磨り消している。15は石核で，16は剝片である。

所見　本跡は，南壁側に張り出し状の出入り口があり，複式炉を有する住居跡である。本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）と考えられる。

第370号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第81図 1	深鉢 縄文土器	A〔19.6〕 B〔15.2〕	口縁部片。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに内弯する。口縁部直下に沈線を巡らし，楕円区画文を施している。胴部は沈線間を磨り消している。区画内にはＲＬの単節縄文を充塡している。	長石・砂粒 灰褐色 普通	P50 15% PL15 炉底面 加曽利ＥⅢ式
2	深鉢 縄文土器	B〔11.0〕	胴部片。胴部はわずかに内弯して立ち上がる。沈線により懸垂文とＵ字状文を交互に施し，その間に瘤手状文を施している。区画文内にはＲＬの単節縄文を充塡している。	長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P51 30% PL15 炉底面 加曽利EⅢ式

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第81図 15	石核	3.8	3.2	1.9	14	チャート	Q28 覆土
16	剝片	2.2	3.5	1.1	6	チャート	Q29 覆土

第371号住居跡（第82・83図）

位置　調査区の北東部，F21d1区。

規模と平面形　長径5.82m，短径4.50mの楕円形である。

主軸方向　N－20°－E

壁　壁高は6～16cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　11か所。P_1～P_4は1.30～2.33mの間隔で四角形状に巡り，長径44～70cm，短径40～64cmの楕円形で，深さ52～79cmである。P_1～P_4は規模と配置から4本柱の主柱穴と考えられる。P_5～P_{11}は，長径25～60cm，短径24～46cmの楕円形で，深さ59～86cmである。P_5～P_{11}は，規模から補助柱穴と考えられる。

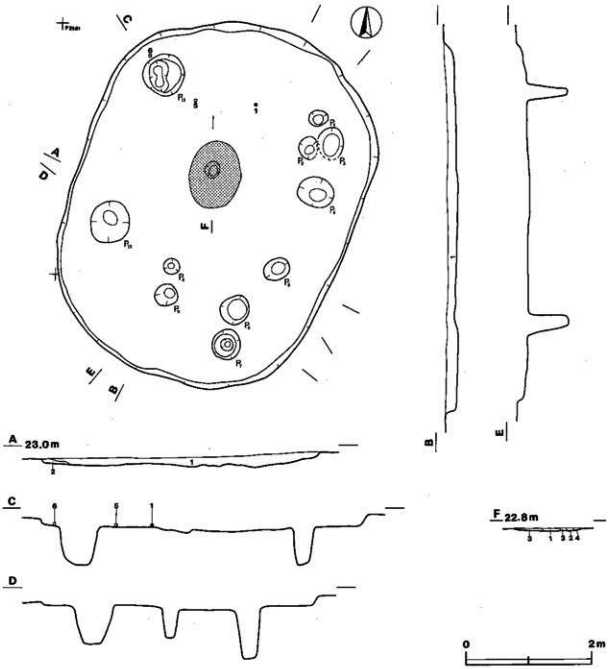
炉　中央部やや北寄りに付設されている。長径1.04m，短径0.82mの楕円形で，深さ4cmの地床炉である。炉内の覆土は4層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子微量
2　暗赤褐色　焼土粒子微量，ローム粒子少量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量
4　灰褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量

覆土　2層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量

遺物　縄文土器片19点が出土している。1は突起を有する深鉢の口縁部片で，床面から出土している。2は深鉢の口縁部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，2本一組の隆帯により文様を描出している。3・4は深鉢の胴部片で，3は無文，4はＲＬの単節縄文を地文とし，いずれも懸垂する沈線文を施している。5は磨製石



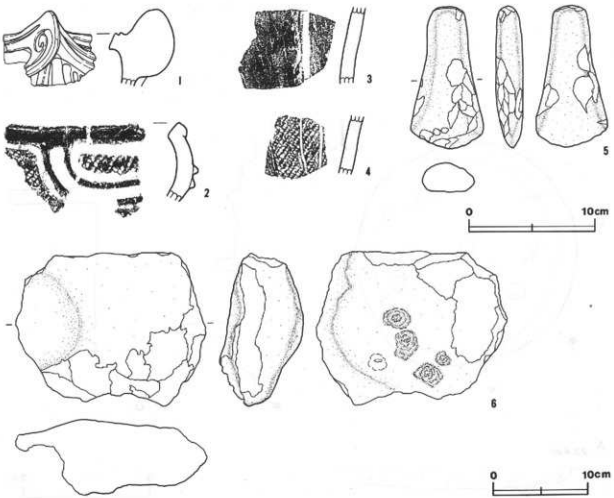
第82図　第371号住居跡実測図

斧，6は石皿である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。

第371号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第83図 1	深　鉢 縄文土器	B（6.0）	口縁部片。沈線による渦巻文が施される突起を有している。	長石・雲母・砂粒 灰褐色 普通	P52　5% 床面 加曽利EⅠ式



第83図　第371号住居跡出土遺物実測図

図版番号		器　種	計　測　値				石　質	備　考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
第83図	5	磨製石斧	11.3	5.8	2.3	171	緑色凝灰岩	Q30　覆土
	6	石　皿	(16.8)	(20.0)	8.8	(2,280)	安　山　岩	Q31　覆土

第372号住居跡（第84図）

位置　調査区の南東部，F21h4区。

規模と平面形　長径3.70m，短径3.50mのほぼ円形である。

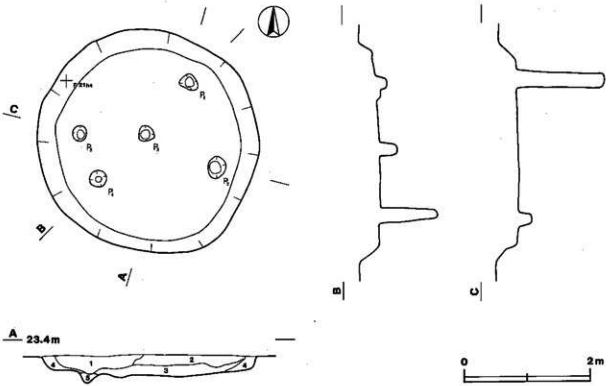
主軸方向　N－29°－W

壁　壁高は20～32cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　5か所を確認する。P_3は中央部に位置し，径24cmの不整円形で，深さ30cmである。P_3は規模と配置から主柱穴と考えられる。P_1・P_2・P_4・P_5は，長径24～34cm，短径22～28cmの楕円形で，深さ20～135cmである。P_1・P_2・P_4・P_5は，規模から補助柱穴と考えられる。

覆土　4層に分層され，自然堆積である。第5層はP_2の覆土である。



第84図　第372号住居跡実測図

土層解説
1　黒褐色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量
2　灰褐色　　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
3　暗　色　　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
4　褐　色　　ローム粒子少量，ロームブロック中量

遺物　遺物は出土していない。

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。

第373号住居跡（第85・86図）

位置　調査区の南部，G19c6区。

確認状況　壁は残存しておらず，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

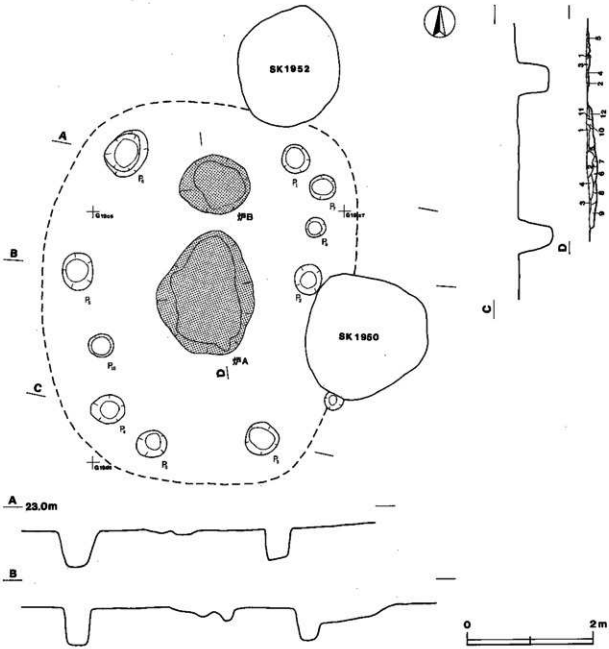
重複関係　本跡は第1950・1952号土坑と重複している。本跡と第1950号土坑との関係は不明であるが，本跡と第1952号土坑との関係は出土遺物から本跡が古い。

規模と平面形　壁が残存していないため明確でないが，長径6.00m，短径4.50mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－7°－E

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　10か所。P_1～P_6は長六角形状に巡り，長径46～74cm，短径44～60cmの楕円形で，深さ47～60cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_7～P_{10}は，長径34～48cm，短径30～42cmの楕円形で，



第85図　第373号住居跡実測図

深さ44～120cmである。P_7～P_{10}は，規模から補助柱穴と考えられる。

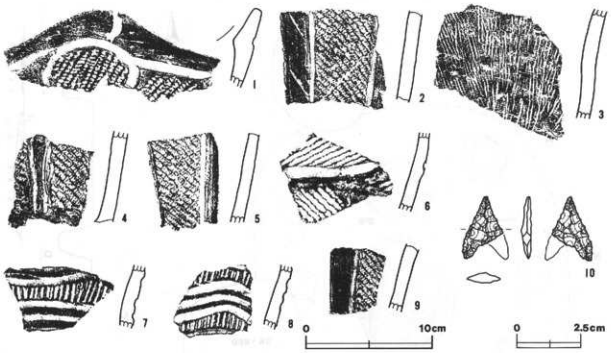
炉　2か所。炉Aは中央部に位置し，長径2.00m，短径1.52mの不整楕円形で，深さ15cmの地床炉である。炉内の覆土は12層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは中央部北寄りに位置し，長径1.10m，短径0.94mの楕円形で，深さ6cmの地床炉である。炉内の覆土は5層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉A土層解説

1	暗褐色	焼土粒子中量，炭化物微量，ローム粒子微量
2	暗褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
3	暗褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
4	暗褐色	焼土粒子少量，ローム粒子微量
5	褐灰色	焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，ローム粒子少量
6	暗褐色	焼土粒子少量，ローム粒子少量
7	暗褐色	焼土粒子少量，焼土ブロック微量，ローム粒子少量
8	暗褐色	焼土粒子中量，焼土ブロック多量，ローム粒子少量
9	褐灰色	焼土粒子多量，焼土ブロック多量，ローム粒子少量
10	褐灰色	焼土粒子中量，焼土ブロック少量
11	褐灰色	焼土粒子微量
12	褐灰色	焼土粒子微量，ローム粒子微量

炉B土層解説

1	褐灰色	焼土粒子微量
2	褐灰色	焼土粒子中量
3	褐灰色	焼土粒子多量，焼土ブロック多量
4	褐灰色	焼土粒子少量，焼土ブロック中量
5	暗褐色	焼土粒子微量



第86図　第373号住居跡出土遺物実測図

覆土　床面上の一部にわずかに残存している。

遺物　縄文土器片82点が覆土から出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。6は深鉢の頸部片で，ＬＲの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。2・4・5・9は深鉢の胴部片で，ＬＲの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。7・8は深鉢の胴部片で，撚糸文を地文とし，沈線による波状文を巡らしている。3は深鉢の胴部片で，条線文を施している。10は石鏃である。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少量であるため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。

第373号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
第86図 10	石鏃	2.6	1.6	0.5	(1)	チャート	Q32 覆土

第374号住居跡（第87・88図）

位置　調査区の南部，G19a6区。

重複関係　本跡は第94号溝と重複する。本跡は第94号溝に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形　壁が残存していないため明確でないが，長径5.00m，短径4.40mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－23°－E

床　平坦であり，中央部が踏み固められている。

ピット　10か所。P_1～P_6は炉を中心に楕円形状に巡り，長径30～36cm，短径26～34cmの楕円形で，深さ43～85cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_7～P_{10}は，長径25～34cm，短径22～26cmの楕円形で，深さ17～84cmである。P_7～P_{10}は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　中央部に位置し，北側が第94号溝に掘り込まれている。長径約100cm，短径80cmの楕円形と推定され，深さ13cmの地床炉である。炉の覆土は4層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子少量
2　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック少量，ローム粒子多量
3　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子中量，炭化物少量
4　にぶい赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子中量

覆土　床面中央部に最大で厚さ9cmの覆土が残存して堆積しており，3層に分層される。自然堆積である。

土層解説

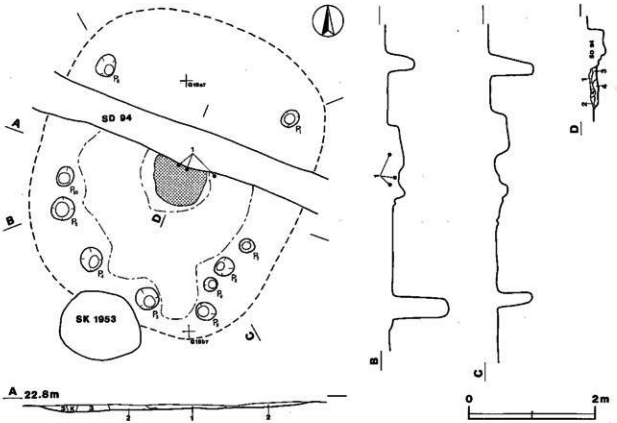
1　褐　色　ローム粒子少量，焼土粒子少量，焼土小ブロック少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量
3　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　縄文土器片146点が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，炉床面から出土している。2・3は深鉢の口縁部片で，2は隆帯，3は沈線により文様を描出している。4～7は深鉢の胴部片で，単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。8は深鉢の胴部片で，撚糸文を地文とし，沈線による波状文を巡らしている。9は深鉢の胴部片で，条線文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅡ式期）と考えられる。

第374号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第88図 1	深　鉢 縄文土器	A (19.6) B (11.1)	小波状口縁を呈する口縁部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに内弯する。口唇部直下に爪形文を巡らしている。胴部は撚糸文を地文とし，沈線により波状文と平行線文を施している。	砂粒 灰黄褐色 普通	P53　20%　PL15 炉床面 加曽利EⅡ式



第87図　第374号住居跡実測図

第88図　第374号住居跡出土遺物実測図

第375号住居跡（第89・90図）

位置　調査区の南部，F19 i 8区。

重複関係　本跡は第380号住居跡と重複している。本跡と第380号住居跡との関係は，出土遺物から本跡が古い。

規模と平面形　長径6.60m，短径6.30mの楕円形である。

主軸方向　N－40°－E

壁　南壁は残存していない。壁高は最大で11cmで，外傾して立ち上がる。

床　平坦であり，わずかに踏み固められている。

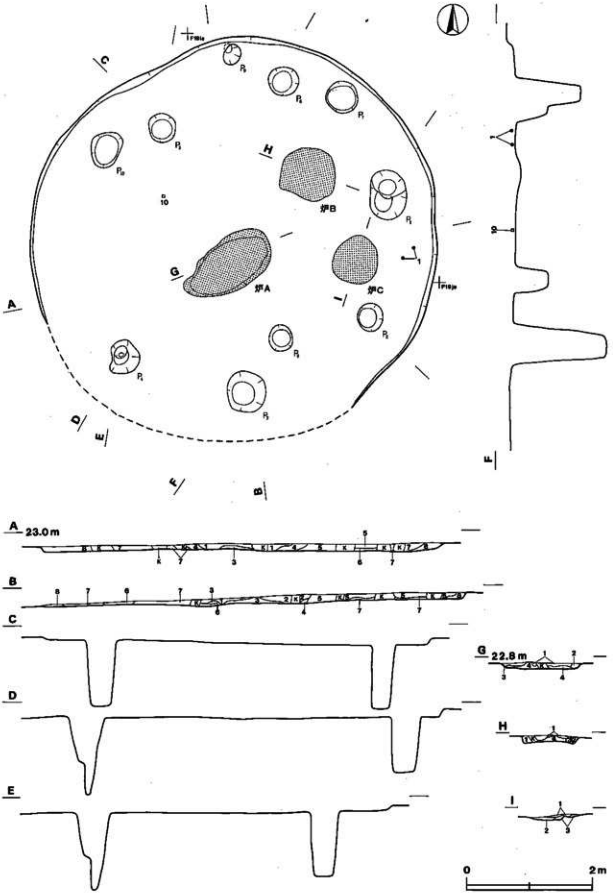
ピット　10か所。P_1～P_7は楕円形状に巡り，長径45～76cm，短径42～62cmの楕円形で，深さ60～141cmである。P_1～P_7は規模と配置から主柱穴と考えられる。P_8～P_{10}は，長径34～60cm，短径26～48cmの楕円形で，深さ20～55cmである。P_8～P_{10}は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　3か所。南側を炉A，北側を炉B，東側を炉Cとした。炉Aは，長径1.52m，短径0.80mの長楕円形で，深さ8cmの地床炉である。炉の覆土は4層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは，長径92cm，短径81cmの不整楕円形で，深さ10cmの地床炉である。炉の覆土は4層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Cは，長径78cm，短径70cmの楕円形で，深さ9cmの地床炉である。炉の覆土は3層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉A・Bをとおる主軸方向と本跡の長軸方向が一致することから，炉A・Bは本跡の中心となる炉と考えられる。炉Cについては，炉A・Bと併存するものか新旧関係があるものかは不明である。

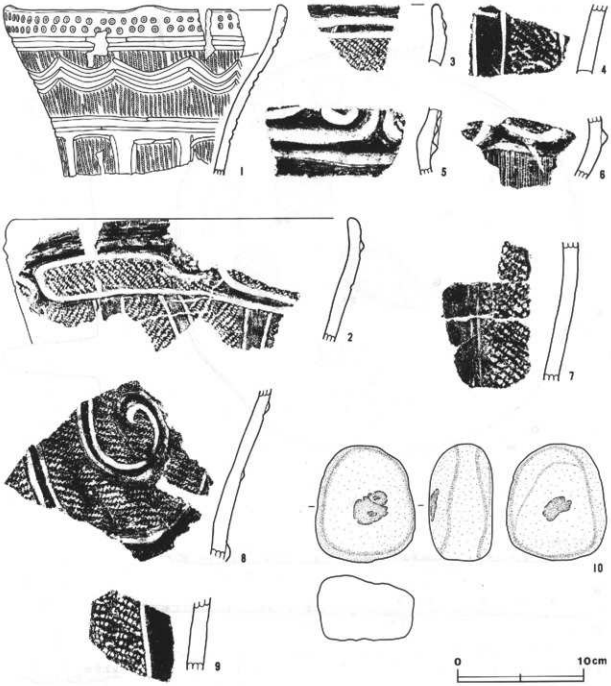
炉A土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子中量
2　褐　　色　焼土粒子少量，ローム粒子多量
3　褐　　色　焼土粒子微量，焼土小ブロック微量，ローム粒子多量
4　明赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量

炉B土層解説
1　褐　　色　焼土粒子中量，焼土小ブロック微量，ローム粒子多量
2　褐　　色　焼土小ブロック微量，ローム粒子多量
3　赤　褐　色　焼土粒子少量，ローム粒子多量
4　赤　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子少量

炉C土層解説
1　にぶい褐色　焼土粒子中量，ローム粒子中量
2　赤　褐　色　焼土粒子中量，ローム粒子多量
3　赤　褐　色　焼土粒子中量，焼土小ブロック中量



第89図　第375号住居跡実測図



第90図　第375号住居跡出土遺物実測図

覆土　8層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック中量	5	明褐色	ローム粒子多量，焼土粒子中量，焼土小ブロック中量
2	褐色	ローム粒子多量，焼土粒子中量	6	暗褐色	ローム粒子中量，炭化物微量
3	明赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック中量	7	褐色	ローム粒子多量，ロームブロック中量
4	褐色	ローム粒子多量，焼土粒子中量	8	褐色	ローム粒子多量，ロームブロック中量

遺物　縄文土器片358点，石斧1点，磨石1点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片で，東壁際の覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部から胴部の破片で，口縁部はＲＬの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。胴部はＲＬの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。3は深鉢の口縁部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，口唇部直下に微隆帯と沈線を巡らしている。5・6は深鉢

の口縁部付近の破片で，隆帯により文様を描出している。4・7・9は深鉢の胴部片で，LRの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。8は深鉢の胴部片で，LRの単節縄文を地文とし，微隆帯により渦巻文を施している。10は磨石である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。

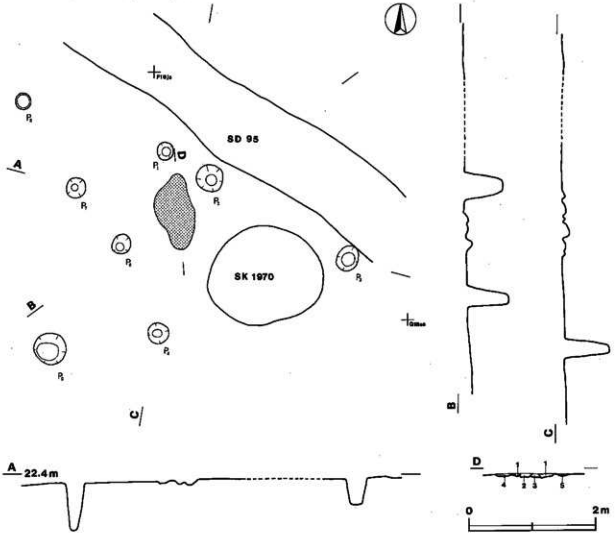
第375号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	深鉢 縄文土器	A 22.0 B (12.9)	4単位の小波状口縁を呈する口縁部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はわずかに内彎する。口縁部直下に円形刺突文を2段に施らしている。熱点文を地文とし，口縁部に沈線により連続文を，胴部に逆U字状文を施している。	長石・砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P54 40% PL15 覆土下層 加曽利EⅢ式

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第90図 10	磨石	9.3	8.0	5.0	565	安山岩	Q34 覆土下層 凹石兼用

第376号住居跡（第91図）

位置　調査区の南西部，F18j5区。



第91図　第376号住居跡実測図

確認状況　壁や覆土は残存しておらず，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。規模や平面形は不明である。

重複関係　本跡は，第1970号土坑と第95号溝と重複している。本跡に覆土が残存していないため重複関係は明確でないが，第95号溝より本跡が古いと考えられる。

主軸方向　〔N－3°－E〕

ピット　8か所。P_1～P_8は，長径22～50cm，短径34～48cmの楕円形で，深さ25～74cmである。P_1～P_8は，柱穴と考えられる。

炉　長径1.20m，短径0.60mの長楕円形で，深さ5cmの地床炉である。炉の覆土は5層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1	暗赤褐色	焼土粒子中量，焼土小ブロック中量，ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2	赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック多量，ローム粒子少量，炭化物微量
3	にぶい赤褐色	焼土粒子多量，焼土ブロック多量，ローム粒子少量，炭化物微量
4	にぶい褐色	焼土粒子少量，ローム粒子中量，炭化物微量
5	褐色	焼土粒子微量，ローム粒子中量，炭化物微量

遺物　縄文土器片10点が出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少量であるため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。

第377号住居跡（第92・93図）

位置　調査区の南部，G19b5区。

確認状況　覆土や壁は残存しておらず，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。規模や平面形は不明である。

重複関係　本跡は第1954・1960号土坑と重複するが，本跡との新旧関係は不明である。

主軸方向　〔N－7°－E〕

ピット　8か所。P_1～P_6はほぼ円形状に巡り，長径36～56cm，短径48～52cmの楕円形で，深さ66～78cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_7は，長径30cm，短径26cmの楕円形で，深さ25cmである。P_8は，長径26cm，短径18cmの楕円形で，深さ21cmである。P_7とP_8は，規模から補助柱穴と考えられる。

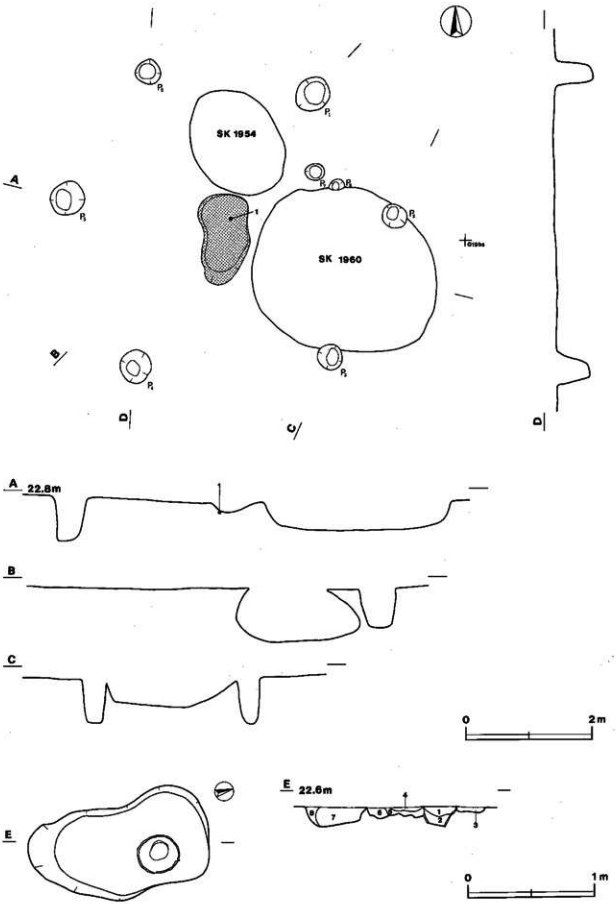
炉　長径1.46m，短径0.78mの長楕円形で，やや北側に深鉢の口縁部を逆設させた土器埋設炉である。炉の覆土は8層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

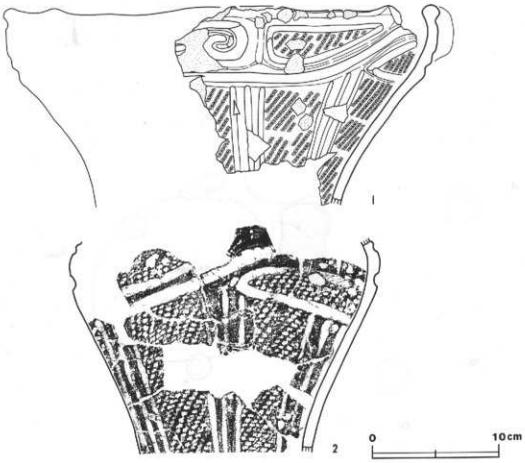
1	褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック多量
2	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
3	明赤褐色	焼土粒子多量，焼土ブロック多量
4	褐色	焼土粒子中量，ローム粒子多量
5	褐色	焼土ブロック多量
6	褐色	焼土粒子多量，ローム粒子多量
7	褐色	焼土粒子少量，ローム粒子多量
8	明褐色	ローム粒子多量，ロームブロック多量

遺物　縄文土器片29点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片で，炉の埋設土器である。2は深鉢の口縁部から胴部の破片で，ＲＬＲの複節縄文を地文とし，口縁部は隆帯により文様を描出している。胴部は3本一組の沈線文を懸垂させている。

所見　本跡の時期は，1の炉の埋設土器から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）と考えられる。



第92図　第377号住居跡実測図



第93図　第377号住居跡出土遺物実測図

第377号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第93図 1	深　鉢 縄文土器	A (33.0) B (12.9)	口縁部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。 口縁部は隆帯により満巻文と楕円区画文を施し，胴部は3本沈線間を磨り消している。地文はRLRの複節縄文である。	長石・砂粒 明赤褐色 普通	P55　30%　PL15 炉縁設土器 加曽利EⅡ式

第378号住居跡（第94・95図）

位置　調査区の南部，G19c3区。

確認状況　本跡の西側は撹乱されており，残存していない。

規模と平面形　長径4.10m，短径3.50mの不整楕円形と推定される。

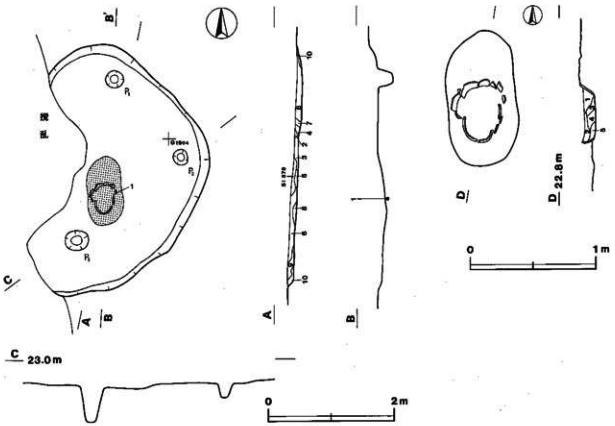
主軸方向　N－4°－E

壁　壁高は4～8cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　3か所。P_1～P_3は，長径24～38cm，短径22～32cmの楕円形で，深さ26～57cmである。P_1～P_3は規模から主柱穴と考えられる。

炉　中央部やや南寄りに付設されている。長径1.08m，短径0.54mの楕円形で，同一個体である深鉢の破片を楕円形状に埋設させた土器片囲い炉である。土器片囲い炉は，南側には口縁部片を，北側には胴部片を使用している。炉内の覆土は5層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。



第94図　第378号住居跡実測図

炉土層解説

1　灰 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子中量
2　灰 褐 色　焼土粒子中量，ローム粒子少量
3　灰 褐 色　焼土粒子中量，焼土ブロック少量，ローム粒子少量
4　灰 褐 色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
5　灰 褐 色　焼土粒子中量

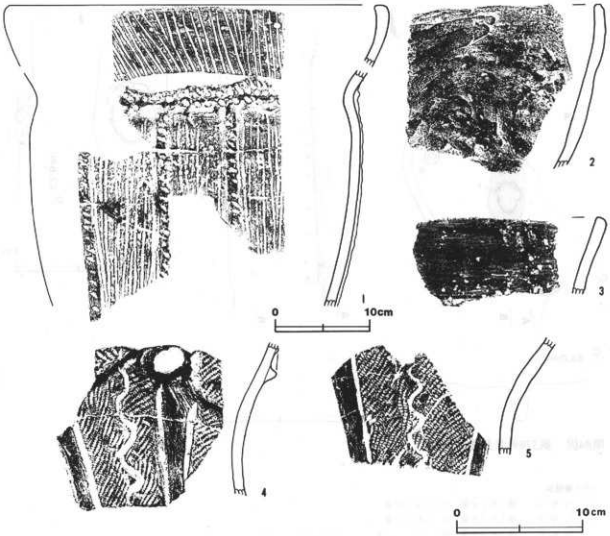
覆土　10層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1　褐　　色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量
2　褐　　色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
3　褐　　色　焼土粒子多量
4　褐　　色　焼土粒子少量，ローム粒子中量
5　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック多量，炭化物中量
6　褐　　色　焼土粒子中量，ローム粒子中量，ロームブロック中量
7　褐　　色　ローム粒子中量
8　褐　　色　ローム粒子中量，ロームブロック中量
9　褐　　色　ローム粒子中量，ロームブロック多量
10　明 褐 色　ロームブロック多量

遺物　縄文土器片181点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片で，土器片囲い炉の埋設土器である。2は深鉢の口縁部片で，無文である。3は深鉢の口縁部片で，口縁部と胴部の境に沈線を巡らし，口縁部は無文としている。4は深鉢の口縁部付近から胴部の破片，5は深鉢の胴部片で，同一個体である。口縁部は隆帯により文様を描出し，胴部は沈線による懸垂文間を磨り消している。地文はＲＬの単節縄文である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅡ式・曽利Ⅲ式期）と考えられる。



第95図　第378号住居跡出土遺物実測図

第378号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・硬成	備　考
第95図 1	深　鉢 縄文土器	A〔40.0〕 B〔32.0〕	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎して立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部内彎する。条縄文を地文とし，頸部に刺突が施される隆帯を巡らし，胴部にキザミを有する隆帯を垂下させている。	長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P56　10%　PL15 炉埋設土器 曽利Ⅱ式

第379号住居跡（第96図）

位置　調査区の南西部，G18b5区。

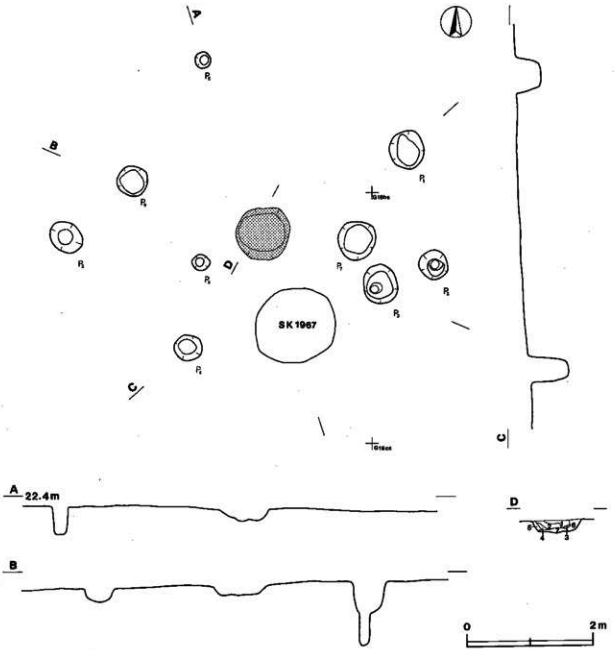
確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は第1967号土坑と重複するが，本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため不明である。

ピット　9か所。P_1～P_6は炉の周囲を巡り，長径26～62cm，短径24～52cmの楕円形で，深さ41～126cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_7～P_9は，長径28～62cm，短径26～58cmの楕円形で，深さ23～52cmである。P_7～P_9は，規模から補助柱穴と考えられる。

炉　長径90cm，短径84cmの楕円形で，深さ15cmの地床炉である。炉の覆土は7層に分層され，炉床面は火熱に



第96図　第379号住居跡実測図

より赤変硬化している。

炉土層解説

1　にぶい褐色　焼土粒子微量，焼土小ブロック少量，ローム粒子中量
2　褐　　色　焼土粒子少量，焼土小ブロック少量，ローム粒子多量
3　褐　　色　焼土粒子中量，焼土小ブロック多量，ローム粒子多量
4　褐　　色　焼土粒子少量，ローム粒子中量，炭化物微量
5　褐　　色　焼土粒子微量，ローム粒子少量，炭化物微量
6　褐　　色　焼土粒子微量，ローム粒子中量，炭化物微量
7　にぶい褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化物少量，ローム粒子中量

所見　本跡の時期は，遺物が出土していないため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代と考えられる。

第380号住居跡（第97・98図）

位置　調査区の南部，F19 j 7区。

確認状況　壁や覆土は残存しておらず，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

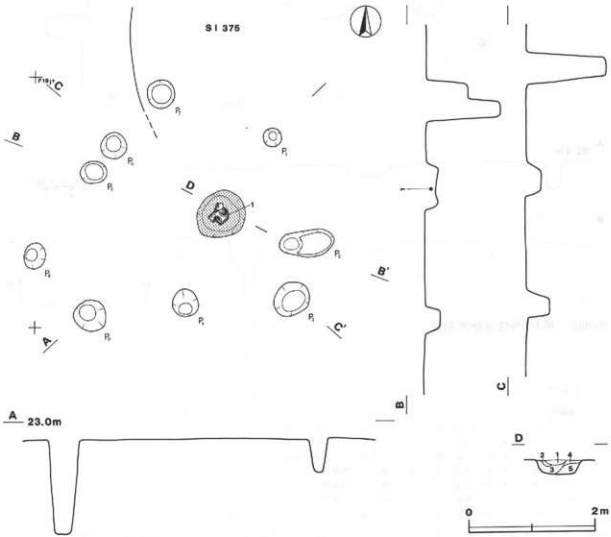
規模と平面形　壁や覆土が残存していないため規模は不明であるが，ピットの配列から南西側に張り出し部を有する柄鏡形の住居跡の可能性がある。

重複関係　本跡は第375号住居跡と重複する。本跡との関係は，出土遺物から本跡が新しいと考えられる。

主軸方向　［N－53°－E］

ピット　9か所。P_1～P_7は炉の周囲に楕円形状に巡り，長径30～86cm，短径28～50cmの楕円形で，深さ20～118cmである。P_1～P_7は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_8とP_9は炉を巡るP_1～P_7の南西側に並列して位置している。P_8は，長径42cm，短径34cmの楕円形で，深さ55cmである。P_9は，長径52cm，短径48cmの楕円形で，深さ150cmである。P_8とP_9は，位置から張り出し部の柱穴と考えられる。

炉　長径82cm，短径74cmの楕円形で，深さ24cmの地床炉である。炉の覆土は5層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

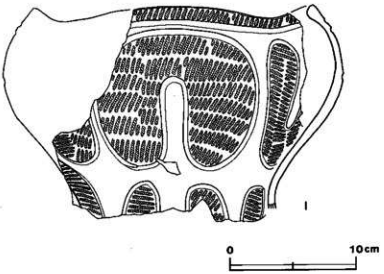


第97図　第380号住居跡実測図

炉土層解説
1 褐 色 焼土粒子中量，ローム粒子中量
2 褐 色 焼土粒子中量，ローム粒子中量，ロームブロック少量
3 褐 色 焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，ローム粒子中量
4 褐 色 ローム粒子中量
5 褐 色 焼土粒子中量，焼土小ブロック中量，ローム粒子多量

遺物 縄文土器片23点が出土している。1は4単位の小波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片で，炉床面から出土している。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅣ式期）と考えられる。



第98図 第380号住居跡出土遺物実測図

第380号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第98図 1	深 鉢 縄文土器	A (29.2) B (21.5)	4単位の波状口縁を呈する口縁部から胴部の破片。頸部はくびれ，口縁部は内彎する。口唇部直下に沈線を巡らし，口唇部は沈線によりW字条文とJ字条文を施している。胴部は沈線により逆U字条文を施している。区画文内はLRの単節縄文を施している。	長石・雲母・砂粒に赤い微色 良好	P57 20% PL15 炉覆土 加曽利EⅢ式

第381号住居跡（第99・100図）

位置 調査区の南西部，G19a2区。

確認状況 壁や覆土は残存しておらず，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係 本跡は第2214号土坑と重複する。本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形 壁や覆土が残存していないため規模や平面形は不明である。

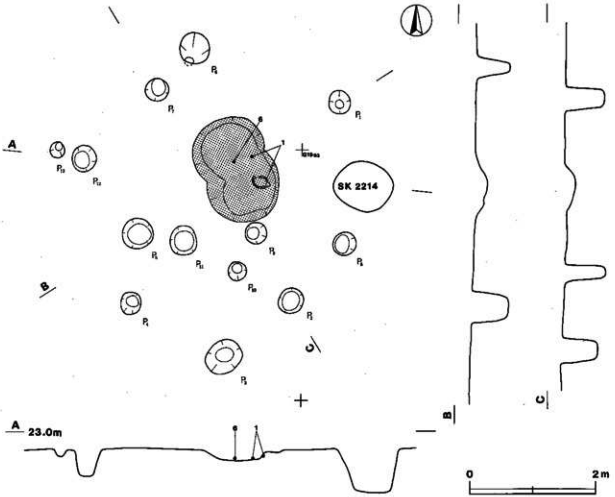
主軸方向 〔N－18°－E〕

ピット 13か所。P_1～P_6は炉の周囲を長方形状に巡り，長径36～58cm，短径30～50cmの楕円形で，深さ57～69cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_7～P_{13}は，長径24～48cm，短径24～42cmの楕円形で，深さ23～70cmである。P_7～P_{13}は補助柱穴と考えられる。

炉 長径1.70m，短径1.16mの双楕円形で，底部を欠損させた深鉢を設置した土器埋設炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。

遺物 縄文土器片75点が出土している。1は底部が欠損する深鉢で，炉埋設土器である。2は深鉢の口縁部から胴部の破片で，確認面から出土している。3は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。4・5は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。6は深鉢の底部片で，炉床面から出土している。

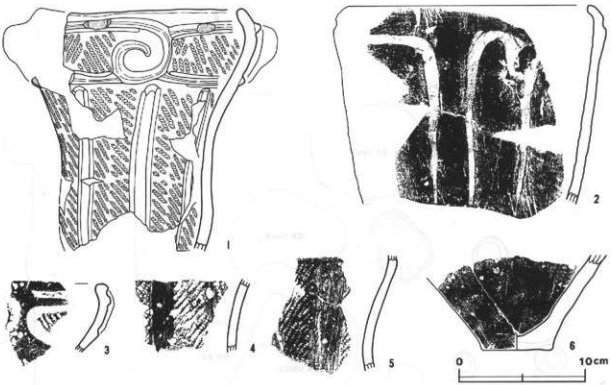
所見 本跡の時期は，1の炉の埋設土器から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第99図　第381号住居跡実測図

第381号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第100図 1	深　鉢 縄文土器	A (16.0) B (19.5)	底部及び口縁部一部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部でわずかにくびれ，口縁部は内彎している。口縁部は隆帯により渦巻文と区画文を連結させて施している。胴部には逆U字状の懸垂文を施している。施文はLRの羊歯縄文である。	長石・砂粒 にぶい橙色 普通	P58　70%　PL16 炉埋設土器 加曽利EⅡ式
2	深　鉢 縄文土器	A (19.1) B (15.7)	口縁部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに内彎する。沈線により逆U字状文を施している。	長石・砂粒 橙色 普通	P59　10%　PL16 確認面 加曽利EⅡ式
6	深　鉢 縄文土器	C　5.5	底部片。無文。	長石・砂粒 赤褐色 普通	P60　10%　PL16 炉床面



第100図　第381号住居跡出土遺物実測図

第382号住居跡（第101・102図）

位置　調査区の南西部，F18g8区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は，第1988～1991，2002号土坑と重複する。本跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため規模や平面形は不明である。

主軸方向　〔N－28°－E〕

ピット　5か所。P_1～P_4は炉の周囲を長方形状に巡り，長径48～60cm，短径40～56cmの楕円形で，深さ24～63cmである。P_1～P_4は規模と配列から主柱穴であり，第1988・2002号土坑が重複しているため，あと2か所の柱穴は確認できなかったが6本柱と考えられる。P_5は，長径42cm，短径34cmの楕円形で，深さ23cmである。P_5は補助柱穴と考えられる。

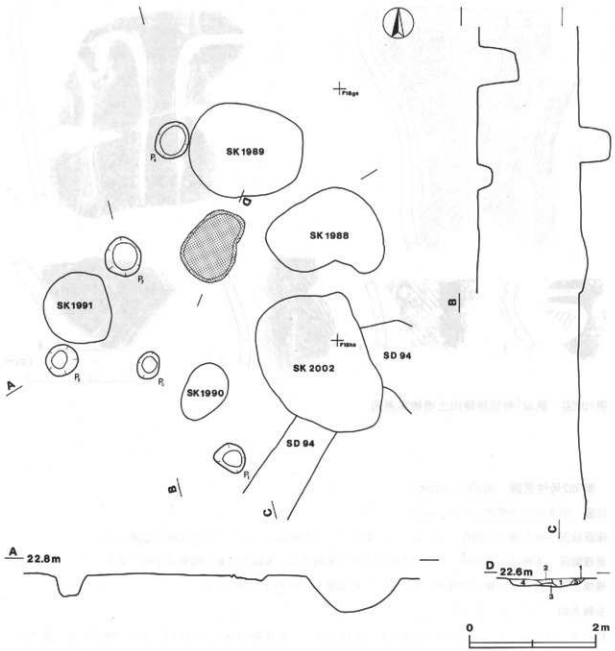
炉　長径1.16m，短径0.86mの楕円形で，深さ14cmの地床炉である。炉内の覆土は5層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

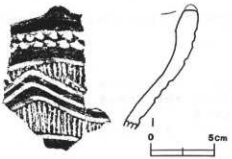
1	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土小ブロック少量，炭化物少量	
2	暗赤褐色	焼土粒子少量，焼土小ブロック微量，炭化物少量	
3	にぶい赤褐色	焼土粒子少量，炭化物少量	
4	にぶい赤褐色	焼土粒子少量，焼土小ブロック微量，炭化物少量	
5	赤褐色	焼土ブロック多量	

遺物　縄文土器片2点が出土している。1は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，撚糸文を地文とし，沈線による波状文を巡らしている。口唇部直下には刺突文を巡らしている。

所見　本跡の時期は，出土遺物が微量であるため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。



第101図　第382号住居跡実測図



第102図　第382号住居跡出土遺物実測図

第383号住居跡（第103図）

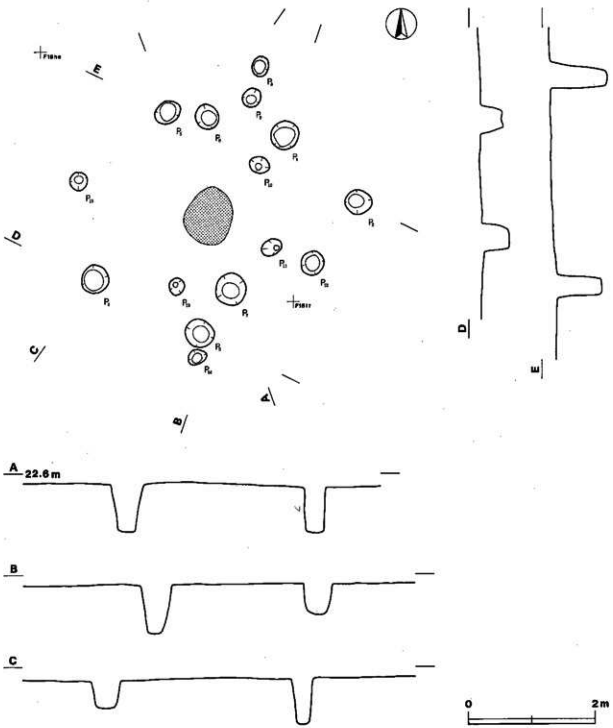
位置　調査区の南西部，F18h6区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため規模や平面形は不明である。

主軸方向　〔N－31°－E〕

ピット　15か所。P_1～P_5は炉の周囲を巡り，長径42～46cm，短径34～44cmの楕円形で，深さ35～90cmである。



第103図　第383号住居跡実測図

P_1～P_5は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_6～P_{15}は，長径20～52cm，短径24～46cmの楕円形で，深さ16～75cmである。P_6～P_{15}は補助柱穴と考えられる。

炉　長径87cm，短径74cmの楕円形で，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。

遺物　縄文土器片５点が出土している。

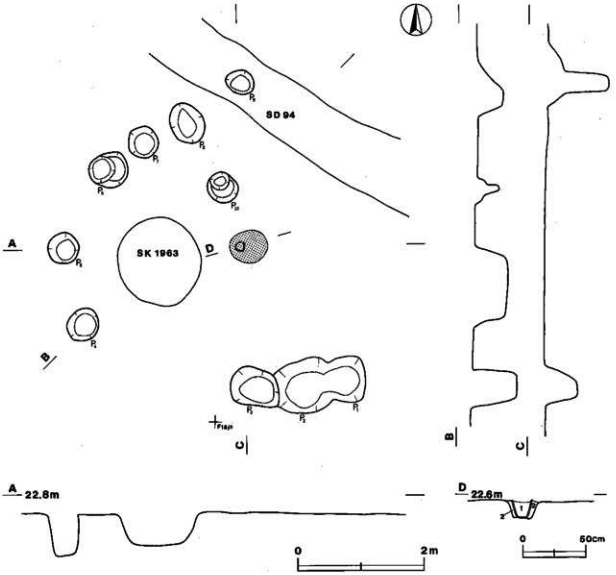
所見　本跡の時期は，出土遺物が微量であるため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。

第384号住居跡（第104・105図）

位置　調査区の南西部，F18i0区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は，第1963号土坑と第94号溝と重複する。本跡と第1963号土坑との新旧関係は不明であるが，第94号溝との関係は本跡が古いことが考えられる。



第104図　第384号住居跡実測図

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため不明である。

主軸方向　〔N－74°－E〕

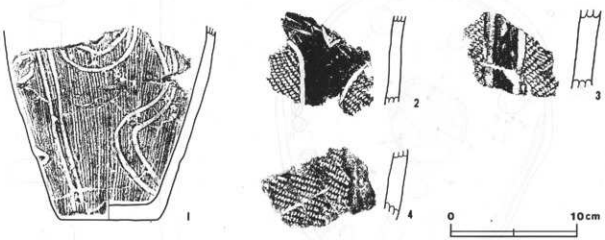
ピット　10か所。炉の東側にはピットは確認できなかった。P_1～P_9は炉の西側を弧状に巡り，長径46～90cm，短径48～86cmの楕円形で，深さ45～98cmである。P_1～P_9は規模と配列から主柱穴と考えられ，東側のピットは確認できなかったが楕円形状に巡っていたことが推定される。P_{10}は，長径48cm，短径44cmの楕円形で，深さ41cmである。P_{10}は補助柱穴と考えられる。

炉　長径60cm，短径50cmの楕円形で，深鉢の胴下半部を設置した土器埋設炉である。炉内の覆土は2層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子微量，ローム粒子微量
2　褐　色　ローム粒子多量，焼土粒子少量

遺物　縄文土器片4点が出土している。1は深鉢の胴下半部で，炉埋設土器である。2は深鉢の胴部片で，沈線により文様を描出し，区画文内をＬＲの単節縄文を充填している。3は深鉢の胴部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。4は深鉢の胴部片で，ＬＲの単節縄文を施している。

所見　本跡の時期は，炉埋設土器から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。



第105図　第384号住居跡出土遺物実測図

第384号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第105図 1	深　鉢 縄文土器	B (15.0) C　7.8	胴下半部片。胴部は直線的に立ち上がる。条線文を地文とし，沈線により文様を描出している。	長石・砂粒 明褐色 普通	P61　50%　PL16 炉埋設土器 加曽利ＥⅠ式

第385号住居跡（第106～108図）

位置　調査区の北東部，Ｆ20e9区。

重複関係　本跡は第100号溝と重複する。本跡は第100号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長径4.84m，短径4.22mの楕円形である。

主軸方向　N－32°－W

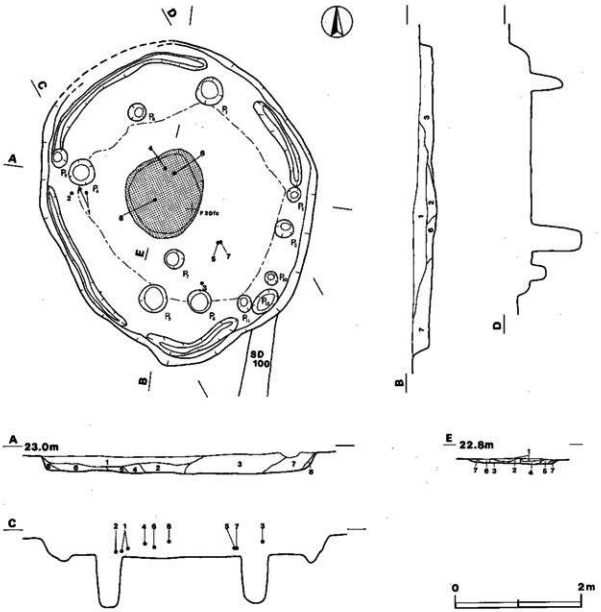
壁　壁高は20～30cmで，外傾して立ち上がる。

壁溝　南東壁を除き，断続的に巡っている。上幅14～24cm，下幅4～10cm，深さ8～14cmで，断面形はU字状である。

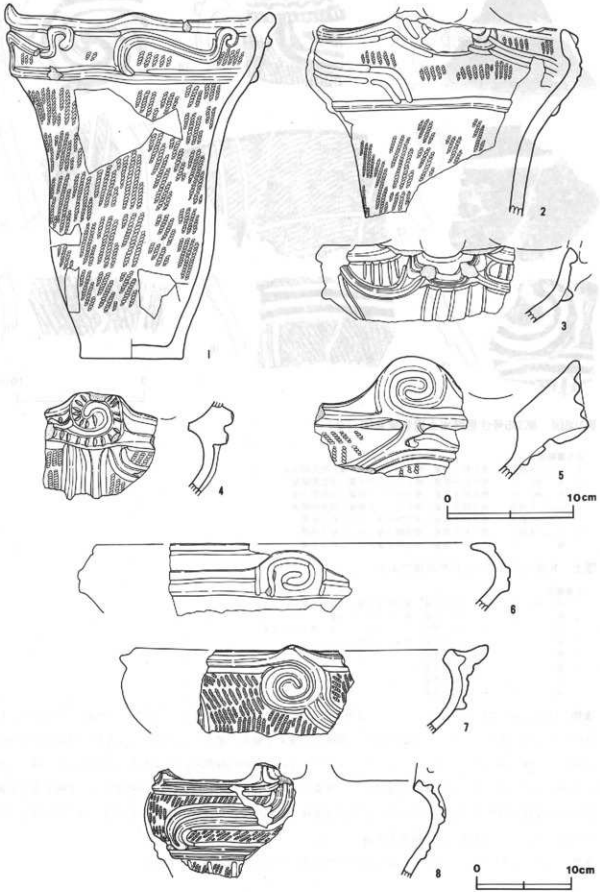
床　ほぼ平坦であり，中央部が踏み固められている。

ピット　12か所。P_1～P_4は，長径30～46cm，短径29～42cmの楕円形で，深さ52～82cmである。P_1～P_4は規模と配列から主柱穴で，4本柱の住居跡と考えられる。P_5～P_9は，長径24～38cm，短径22～34cmの楕円形で，深さ15～34cmである。P_5～P_9は，補助柱穴と考えられる。P_{10}とP_{11}は南壁際に対で存在する。P_{10}は，長径22cm，短径20cmの楕円形で，深さ36cmである。P_{11}は，長径28cm，短径22cmで，深さ38cmである。P_{12}は，長径48cm，短径28cmで，深さ20cmである。P_{10}～P_{12}は，出入り口に関係するピットと考えられる。

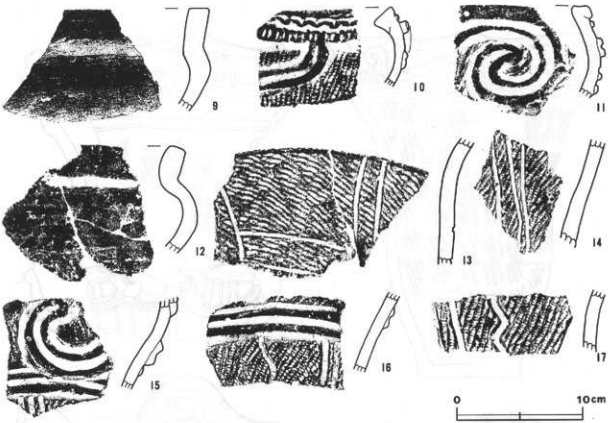
炉　中央部に付設されている。長径1.44m，短径1.20mの楕円形で，深さ14cmの地床炉である。炉内の覆土は7層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。



第106図　第385号住居跡実測図



第107図　第385号住居跡出土遺物実測図（1）



第108図　第385号住居跡出土遺物実測図（2）

炉土層解説

1	にぶい赤褐色		焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化物少量
2	赤	褐 色	焼土粒子多量，焼土ブロック少量，炭化物微量
3	赤	褐 色	焼土粒子多量，焼土ブロック中量，炭化物少量
4	にぶい赤褐色		焼土粒子中量，焼土ブロック微量，炭化物微量
5	にぶい赤褐色		焼土粒子微量，炭化物少量，ローム粒子中量
6	にぶい赤褐色		焼土粒子微量，炭化物少量，ローム粒子多量
7	褐	色	焼土粒子微量，炭化物少量，ローム粒子中量

覆土　8層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	暗	褐 色	ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物少量
2	褐	色	ローム粒子中量，焼土小ブロック中量
3	褐	色	ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子少量
4	褐	色	ローム粒子中量，焼土粒子多量
5	褐	色	ローム粒子中量
6	褐	色	ローム粒子多量
7	褐	色	ローム粒子多量，ロームブロック中量
8	褐	色	ローム粒子多量，ロームブロック微量

遺物　縄文土器片220点が出土している。遺物の大部分は覆土上層から出土しており，住居跡の埋没途中に投棄されたものと考えられる。1はほぼ完形の深鉢で，覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部から胴部の破片で，覆土下層から出土している。3～5，7・8は深鉢の口縁部片，6は浅鉢の口縁部片で，覆土上層から出土している。9・12は鉢の口縁部片で，無文である。10・11・15は深鉢の口縁部片で，沈線を有する隆帯により文様を描出している。13・14・16・17は深鉢の胴部片で，13はLの無節縄文，14・16・17はRLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅠ式期）と考えられる。

第385号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	深鉢 縄文土器	A 20.7 B 27.5 C 8.0	胴部一部欠損。胴部は内弯して立ち上がり，口縁部は外傾する。口縁部には隆帯を巡らし，口縁部文様帯を形成している。文様帯内には先端が鋭手状となるクランク文を施している。地文はLRの羽節縄文である。	長石・砂粒 明赤褐色 普通	P62 80% PL16 覆土下層 加曽利EⅠ式
2	深鉢 縄文土器	A (17.0) B (15.0)	口縁部から胴部の破片。把手部欠損。口縁部は内弯する。口縁部には隆帯を巡らし，口縁部文様帯を形成している。文様帯内には沈線によりクランク文を施している。地文はRLの単節縄文である。	長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P63 30% PL16 覆土下層 加曽利EⅠ式
3	深鉢 縄文土器	A (19.8) B (6.0)	口縁部片。把手部欠損。口縁部は内弯する。口縁部には隆帯により区画文を施し，区画内は縦位の沈線文を充填している。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P68 10% PL17 覆土上層 加曽利EⅠ式
4	鉢 縄文土器	B (8.4)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内弯する。波頂部直下にキザミを有する隆帯により渦巻文を施している。口縁部は隆帯により文様を描出している。	長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P69 5% 覆土上層 加曽利EⅠ式
5	深鉢 縄文土器	B (9.6)	口縁部片。波状口縁を呈し，口縁部は内弯する。波頂部直下に隆帯により渦巻文を施している。口縁部はLRの羽節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P67 5% PL17 覆土上層 加曽利EⅠ式
6	浅鉢 縄文土器	A (41.0) B (7.2)	口縁部片。口縁部は内弯する。沈線により渦巻文を施している。	長石・雲母 にぶい褐色 普通	P66 5% PL16 覆土上層 加曽利EⅠ式
7	深鉢 縄文土器	A (33.0) B (12.0)	口縁部片。口縁部は内弯する。RLの単節縄文を地文とし，隆帯により渦巻文を施している。	長石・雲母・砂粒 赤褐色 普通	P65 5% 覆土上層 加曽利EⅠ式
8	深鉢 縄文土器	A (26.4) B (12.0)	口縁部片。把手部欠損。口縁部は内弯する。口縁部には隆帯を巡らし，口縁部文様帯を形成している。文様帯内には沈線を有する隆帯によりクランク文を施している。地文はRLの単節縄文である。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P64 10% PL16 覆土上層 加曽利EⅠ式

第386号住居跡（第109・110図）

位置　調査区の北部，E19f2区。

重複関係　本跡は第2236号土坑と重複する。本跡は第2236号土坑を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形　長径4.80m，短径4.22mの楕円形と考えられる。

主軸方向　N－50°－W

壁　壁高は20～26cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　3か所。P_1は中央部に位置し，径30cmのほぼ円形で，深さ62cmである。P_1は規模と位置から主柱穴で，本跡は1本柱の住居跡と考えられる。P_2は，長径26cm，短径24cmの楕円形で，深さ51cmである。P_3は，長径34cm，短径30cmの楕円形で，深さ67cmである。P_2・P_3は，補助柱穴と考えられる。

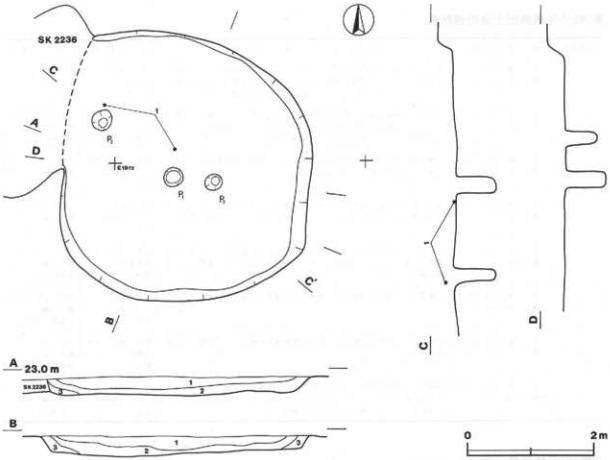
覆土　3層に分層され，自然堆積である。

土層解説

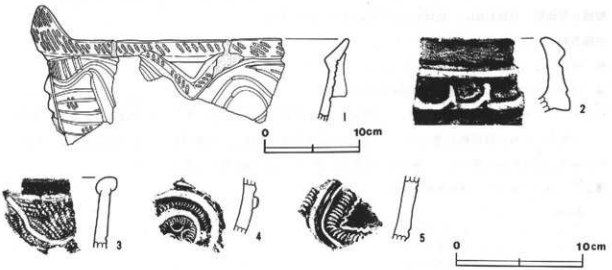
1　暗褐色　ローム粒子少量，炭化物微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，炭化物少量
3　褐　色　ローム粒子多量，炭化物微量

遺物　縄文土器片88点が出土している。1は扇状の把手を有する深鉢の口縁部片で，覆土下層から出土している。2は浅鉢の口縁部片で，沈線による弧状文を巡らしている。3は口唇部が肥厚する深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。4・5は深鉢の口縁部片で，爪形文を有する隆帯により文様を描出している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅳ式期）と考えられる。



第109図　第386号住居跡実測図



第110図　第386号住居跡出土遺物実測図

第386号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第110図 1	深鉢 縄文土器	A〔32.4〕 B〔14.8〕	断状把手を有する口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部直下にはV字状の隆帯を施している。口縁部にはRLの単節縄文を施し，沈線により文様を構出している。	長石・雲母・砂粒にぶい赤褐色 普通	P70 10% PL17 覆土下層 阿玉台II式

第387号住居跡（第111・112図）

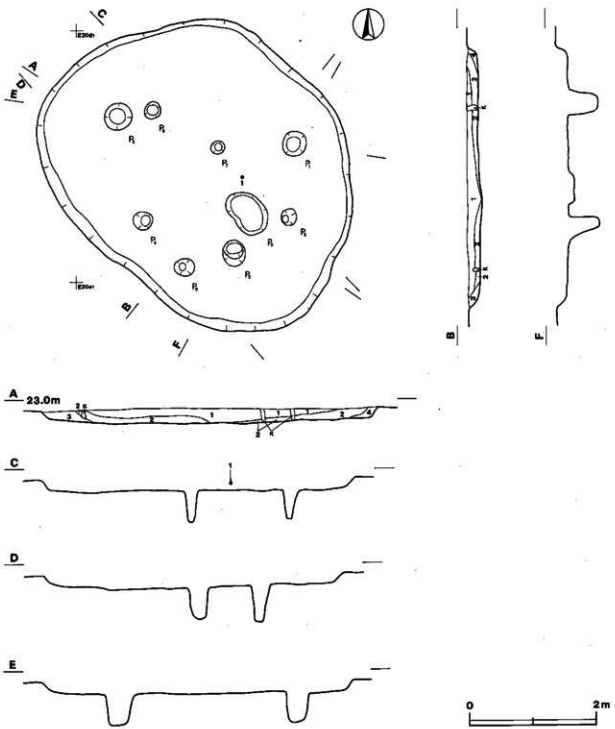
位置　調査区の北部，E20d1区。

規模と平面形　長径5.30m，短径4.26mの長楕円形である。

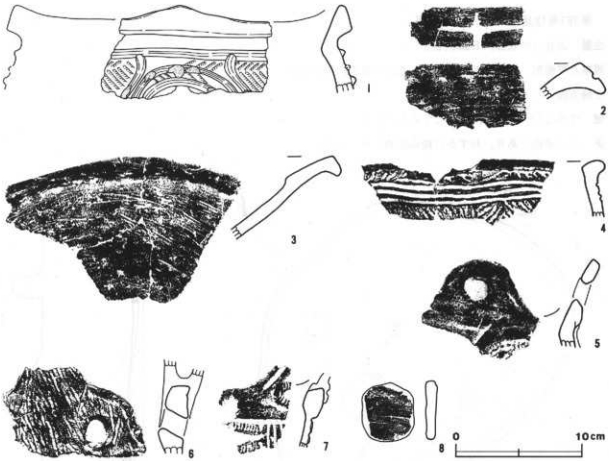
主軸方向　N－34°－W

壁　壁高は12～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。



第111図　第387号住居跡実測図



第112図　第387号住居跡出土遺物実測図

ピット　9か所。P_1～P_5は床面中央部付近を楕円形状に巡り，長径28～45cm，短径24～40cmの楕円形で，深さ48～50cmである。P_1～P_5は規模と配列から主柱穴で，本跡は6か所目のピットが確認できなかったものの6本柱の住居跡と考えられる。P_6～P_8は，長径22～34cm，短径20～24cmの楕円形で，深さ51～60cmである。P_6～P_8は，補助柱穴と考えられる。P_9は，長径74cm，短径50cmの楕円形で，深さ9cmである。P_9の性格は不明である。

覆土　4層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，炭化物微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，炭化物微量
3　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量
4　褐　色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片174点，土器片円盤1点が出土している。1は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，覆土上層から出土している。2・3は浅鉢の口縁部片である。4は深鉢の口縁部片で，Rの無節縄文を地文とし，肥厚する口唇部直下に沈線を巡らしている。5～7は深鉢の把手部及び口縁部の破片である。5は隆帯により文様を描出し，隆帯に沿って半截竹管による結節平行沈線文を施している。6はRの無節縄文を地文としている。7は爪形文を有する隆帯により文様を描出している。8は土器片円盤である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。

第387号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 1	深鉢 縄文土器	A (25.8) B (7.0)	小波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外反する。しの無節縄文を地文とし，撚糸により文様を描出している。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P71 5% 覆土上層 中期式

図版番号	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第112図 8	土器片円盤	4.7	4.1	1.0	24	100	無文。	DP20 覆土

第388号住居跡（第113図）

位置　調査区の北西部，E18d0区。

規模と平面形　長径3.58m，短径2.80mの楕円形である。

主軸方向　N－26°－E

壁　壁高は14～28cmで，外傾して立ち上がる。

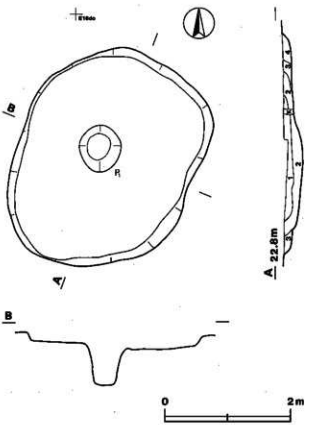
床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　1か所。P_1は中央部に位置し，長径74cm，短径66cmの楕円形で，深さ69cmである。P_1は，位置と規模から主柱穴と考えられる。

覆土　4層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量
3　暗褐色　ローム粒子少量
4　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック中量

所見　本跡の時期は，本跡に伴う出土遺物がないため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。



第113図　第388号住居跡実測図

第389号住居跡（第114・115図）

位置　調査区の北西部，E18a9区。

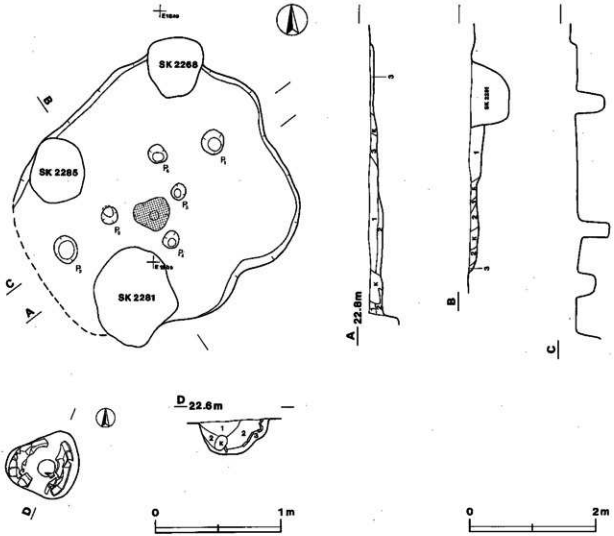
重複関係　本跡は第2268・2281・2285号土坑と重複する。本跡は第2281号土坑に掘り込まれていることから，本跡が古い。第2268・2285土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長軸4.40m，短軸3.90mの隅丸長方形である。

主軸方向　N－54°－E

壁　壁高は6～9cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。



第114図　第389号住居跡実測図

ピット　6か所。P_1・P_2は主軸線上に位置し，P_1が長径38cm，短径35cmの楕円形で，深さ45cm，P_2が長径44cm，短径38cmの楕円形で，深さ33cmである。P_1・P_2は配列から主柱穴と考えられる。P_3～P_6は，長径26～32cm，短径22～28cmの楕円形で，深さ27～55cmである。P_3～P_6は，補助柱穴と考えられる。

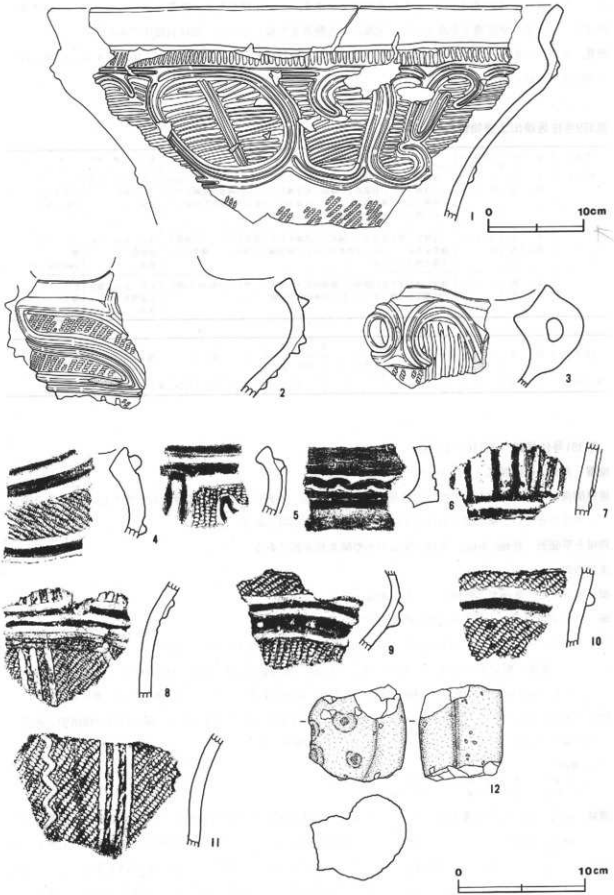
炉　中央部に付設されている。長径56cm，短径54cmの楕円形で，深鉢の口縁部を設置した土器埋設炉である。炉の深さは26cmで，炉内の覆土は3層に分層される。炉床面は攪乱によって残存していないが，火熱によりわずかに赤変硬化している。

炉土層解説
1　黒褐色　ローム粒子微量，焼土粒子微量
2　暗褐色　焼土粒子少量，炭化物微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック微量

覆土　3層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量
2　暗褐色　ローム粒子少量
3　褐　色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片569点，石皿片1点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片で，炉埋設土器である。2・3は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。4・5・10は深鉢の口縁部付近の片で，4・10は隆帯，5は沈線を有する隆帯により文様を描出している。6は浅鉢の口縁部片で，沈線による波状文を巡らして



第115図　第389号住居跡出土遺物実測図

いる。7～9は深鉢の頸部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線を有する隆帯を巡らしている。11は深鉢の胴部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。12は石皿片である。

所見　本跡の時期は，覆土の遺物は縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）であるが，炉埋設土器から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。

第389号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第115図 1	深鉢 縄文土器	A〔53.0〕 B（23.0）	口縁部から胴部の破片。口縁部は内彎して立ち上がり，口唇部直下で屈折して外傾する。口唇部直下に縦位の短沈線を巡らし，口縁部は沈線を有する隆帯により文様を描出している。区画文内には縦位の沈線文を充填している。胴部にはＲＬの単節縄文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P72 30% PL17 伊規設土器 中峠式併行
2	深鉢 縄文土器	A〔21.2〕 B（11.0）	口縁部片。把手部欠損。口縁部には沈線を有する隆帯を巡らし，口縁部文様帯を形成している。文様帯内にＲＬの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。	長石・雲母・砂粒 暗褐色 普通	P73 5% PL17 覆土 加曽利EⅠ式
3	深鉢 縄文土器	B（ 7.8）	波状口縁を呈する口縁部片。胴部状把手を有する。把手の区画内には縦位の沈線文を充填している。ＬＲの単節縄文を施している。	石英・長石・雲母 灰黄褐色 普通	P74 5% 覆土 加曽利EⅠ式

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
第115図 11	石皿	(7.7)	(7.8)	6.7	(311)	安山岩	Q38 覆土 凹石兼用

第391号住居跡（第116・117図）

位置　調査区の南西部，Ｆ18ａ7区。

重複関係　本跡は第2102・2103・2111号土坑と重複する。本跡のP_2は第2102号土坑を掘り込んでいることから，本跡が新しい。第2103・2111号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長軸6.40m，短軸5.56mの不整隅丸長方形である。

主軸方向　N－56°－W

壁　壁高は2～8cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　7か所。P_1～P_4は長方形状に巡り，長径40～78cm，短径36～70cmの楕円形で，深さ56～69cmである。P_1～P_4は規模と配列から主柱穴と考えられる。P_5は，長径42cm，短径38cmの楕円形で，深さ53cmである。P_6・P_7は，長径34cm，短径30cmの楕円形で，深さ50～57cmである。P_5～P_7は，補助柱穴と考えられる。

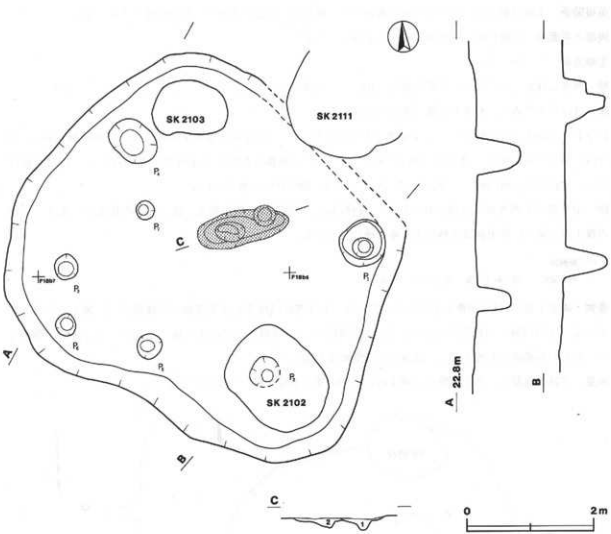
炉　中央部やや北寄りに付設されている。長径1.46m，短径0.54mの長楕円形で，深さ12cmの地床炉である。炉内の覆土は2層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　暗赤褐色　焼土粒子少量，炭化物少量
2　赤褐色　焼土粒子少量，ローム粒子少量

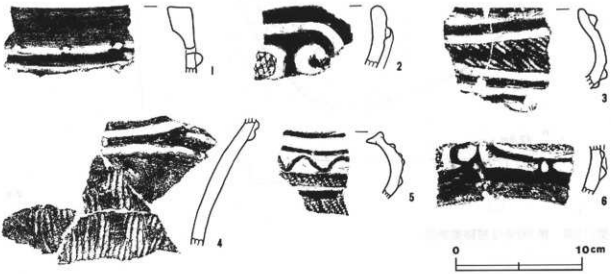
遺物　縄文土器71点が覆土から出土している。1は有孔鍔付土器の口縁部片で，口縁部直下に隆帯を巡らし，口縁部は無文帯としている。隆帯の直上には貫通孔を巡らしている。2は深鉢の口縁部片で，ＬＲＬの複節縄文を地文とし，隆帯により渦巻文を施している。3は深鉢の口縁部片で，Ｒの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。4は深鉢の頸部から胴部の破片で，頸部に沈線を有する隆帯を巡らし，胴部には無節縄文を施している。5は深鉢の口縁部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，隆帯により波状文を施してい

る。6は深鉢の頸部から口縁部の破片で，頸部に隆帯を巡らし，口縁部は隆帯により文様を描出している。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少量であるため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。



第116図　第391号住居跡実測図



第117図　第391号住居跡出土遺物実測図

第392号住居跡（第118・119図）

位置　調査区の南西部，F19c4区。

重複関係　本跡は第2119・2122号土坑と重複する。第2119・2122号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　長軸4.40m，短軸3.80mの不整方形である。

主軸方向　N－58°－W

壁　西壁は残存していない。壁高は最大で10cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　4か所で，北側のピットは確認できなかった。P_1～P_3は炉の南側を弧状に巡り，長径28～56cm，短径24～54cmの楕円形で，深さ40～89cmである。P_1～P_3は規模と配列から主柱穴と考えられる。P_4は，長径28cm，短径24cmの楕円形で，深さ29cmである。P_4は，補助柱穴と考えられる。

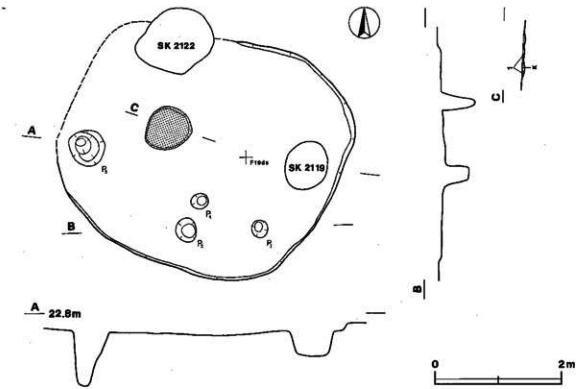
炉　中央部やや西寄りに付設されている。長径74cm，短径70cmの楕円形で，深さ4cmの地床炉である。炉内の覆土は1層で，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土ブロック中量

遺物　縄文土器片114点が覆土から出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。2は浅鉢の口縁部片で，口唇部に交互刺突による連続コの字状文を施している。3は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。



第118図　第392号住居跡実測図

第119図　第392号住居跡出土遺物実測図

第392号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第119図 1	深　鉢 縄文土器	A〔12.4〕 B（ 7.8）	波状口縁を呈する口縁部片。把手部欠損。口縁部には隆帯により区画文を施し，区画内には沈線による渦巻文と交互刺突による連続コの字状文を施している。	石英・長石・雲母 暗赤褐色 普通	P75　10%　PL17 覆土 中峰式

第393号住居跡（第120・121図）

位置　調査区の北西部，E18g8区。

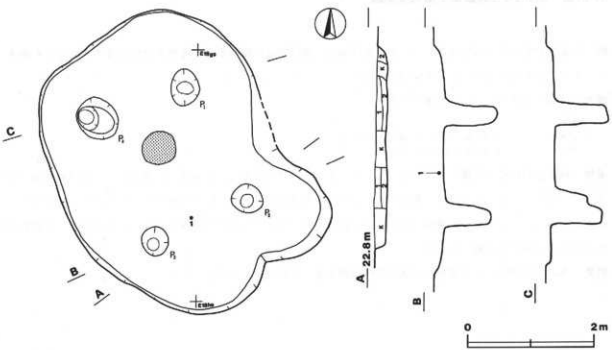
規模と平面形　長径4.80m，短径3.54mの不整楕円形である。東壁に半円形の張り出し部があり，土坑が重複しているものか，出入り口なのかは確認できなかった。

主軸方向　N－28°－W

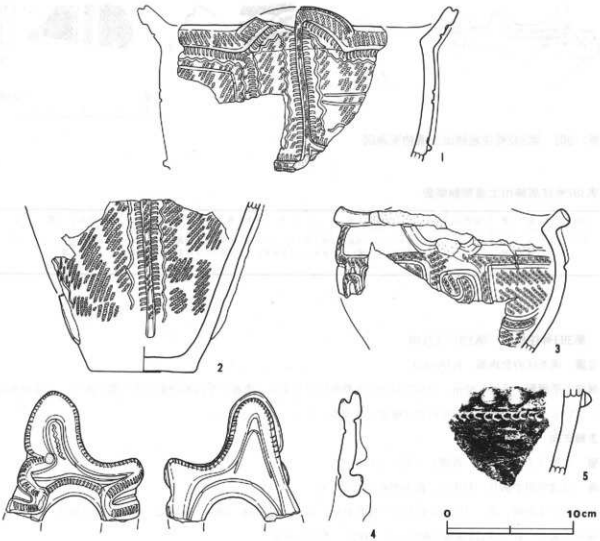
壁　壁高は7～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　4か所。P_1～P_4は炉を中心に長方形状に巡り，長径48～70cm，短径42～60cmの楕円形で，深さ74～86cmである。P_1～P_4は規模と配列から主柱穴と考えられる。



第120図　第393号住居跡実測図



第121図　第393号住居跡出土遺物実測図

炉　中央部やや北寄りに付設されている。長径54cm，短径50cmの楕円形で，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。

覆土　2層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　　ローム粒子少量，焼土粒子少量，炭化物少量
2　褐　色　　ローム粒子中量，焼土粒子少量

遺物　縄文土器片11点が覆土から出土している。1は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，2は深鉢の胴下半部片で，接合はしないものの同一個体である。3は把手部が欠損する深鉢の口縁部片，4は深鉢の把手部片で，覆土から出土している。5は深鉢の胴部片で，指頭による押圧文を有する隆帯を巡らし，その直下に半截竹管状工具による刺突文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。

第393号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図 1	深鉢 縄文土器	A (23.6) B (12.5)	小波状口縁を呈する口縁部片。口縁部はほぼ直立する。RLの単節縄文を地文とし，口唇部直下に隆帯を巡らし，波頂部より隆帯を垂下させている。隆帯に沿って爪形文と沈線文による鋸歯状文を施している。	長石・砂粒 沃黄褐色 普通	P239 10% PL18 覆土 阿玉台Ⅳ式
2	深鉢 縄文土器	B (12.5) C 8.3	胴下半部片。胴部は外傾して立ち上がる。RLの単節縄文を地文とし，隆帯を垂下させている。隆帯に沿って爪形文と沈線文による鋸歯状文を施している。	長石・砂粒 にぶい橙色 普通	P76 30% PL17 覆土 1と同一個体 阿玉台Ⅳ式
3	深鉢 縄文土器	A (17.7) B (11.3)	口縁部から胴部の破片。把手部欠損。口縁部は内彎して立ち上がり，口唇部直下で外反する。RLRの複節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。	長石・砂粒 にぶい黄褐色 普通	P238 30% PL18 覆土 中峰式併行
4	深鉢 縄文土器	B (10.4)	把手部片。爪形文を有する隆帯により文様を描出している。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P240 5% 覆土 中峰式併行

第397号住居跡（第122・123図）

位置　調査区の北西部，E18d7区。

規模と平面形　長径5.74m，短径5.50mの楕円形であると推定される。

主軸方向　N－38°－W

壁　西壁は残存していない。壁高は7cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　6か所。P_1～P_6は炉を中心に巡り，長径34～50cm，短径30～46cmの楕円形で，深さ38～68cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。

炉　2か所。北側の炉を炉A，南側の炉を炉Bとした。炉Aは，長径1.10m，短径0.74mの楕円形で，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉Bは，長径64cm，短径46cmの楕円形で，深鉢の上半部を設置させた土器埋設炉である。深さ12cmで，炉内の覆土は2層に分層される。炉床面は火熱により赤変硬化している。

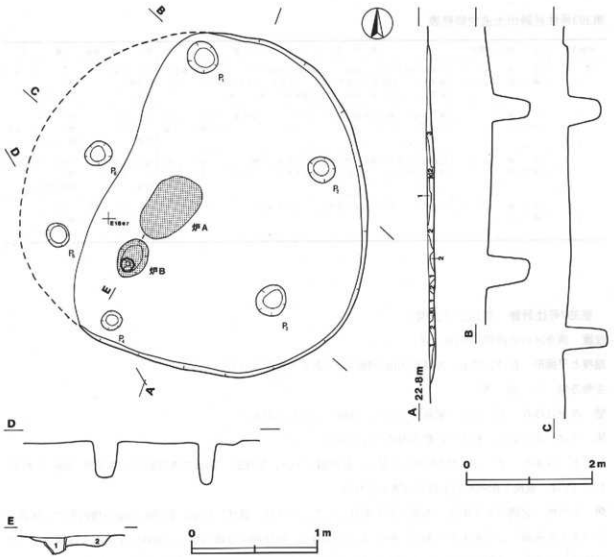
炉B土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　暗褐色　焼土粒子少量，ローム粒子少量

覆土　3層に分層され，自然堆積である。

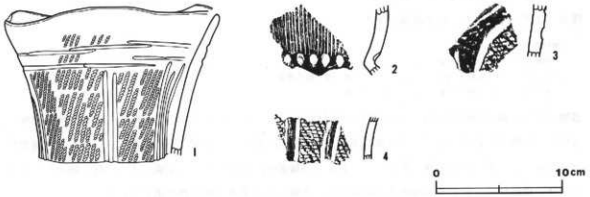
土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量
2　褐　色　ローム粒子少量，ロームブロック少量，焼土粒子少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック中量

遺物　縄文土器片103点，敲石1点，磨石1点が出土している。1は3単位の小波状口縁を呈する深鉢の上半部片で，炉埋設土器である。2は深鉢の頸部から口縁部の破片で，頸部に円形刺突文を巡らし，口縁部には糸線文を施している。3は深鉢の胴部片で，LRLの複節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。4は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。

所見　本跡の時期は，1の炉埋設土器から縄文時代中期後葉（加曽利EⅡ式期）と考えられる。



第122図　第397号住居跡実測図



第123図　第397号住居跡出土遺物実測図

第397号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第123図 1	深鉢 縄文土器	A (17.0) B (12.5)	3単位の波状口縁を呈する上半部片。口縁部には2条の沈線を巡らし，胴部には沈線による懸垂文を施している。地文は R L の単節縄文である。	長石・砂粒 黒褐色 普通	P77 50% PL17 炉址設土器 加曽利ＥＥ式

第399号住居跡（第124図）

位置　調査区の北西部，E19 j 5区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認することにより住居跡と判断する。

規模と平面形　長径約12m，短径約11mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－17°－E

ピット　18か所。P_1～P_{14}は炉を中心に巡り，長径38～98cm，短径36～78cmの楕円形で，深さ45～101cmである。P_1～P_{14}は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_{15}～P_{18}は，長径64～96cm，短径56cm～80cmの楕円形で，深さ30～65cmである。P_{15}～P_{18}は，補助柱穴と考えられる。ピットの覆土は，締まりのある褐色土である。

炉　長径1.54m，短径1.48mのほぼ円形で，深さ10cmの地床炉である。炉内は単一の焼土層で，炉床面は火熱により赤変硬化している。

所見　本跡は，大形の住居跡である。本跡の時期は出土遺物がないため不明であるが，住居跡の形態と覆土が縄文時代中期のものと類似することから，縄文時代中期と考えられる。

第400号住居跡（第125～127図）

位置　調査区の北東部，E21 g 4区。

重複関係　本跡は，第104号溝と重複する。本跡は第104号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長軸5.86m，短軸3.56mの隅丸長方形である。北東コーナー部付近に半円形の張り出し部があり，土坑が重複しているものか，出入り口なのかは確認できなかった。

主軸方向　N－32°－W

壁　壁高は14～18cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，中央部が踏み固められている。

ピット　4か所。P_1～P_4は炉を中心に長方形状に巡り，長径40～58cm，短径40～48cmの楕円形で，深さ60～103cmである。P_1～P_4は規模と配列から主柱穴と考えられる。

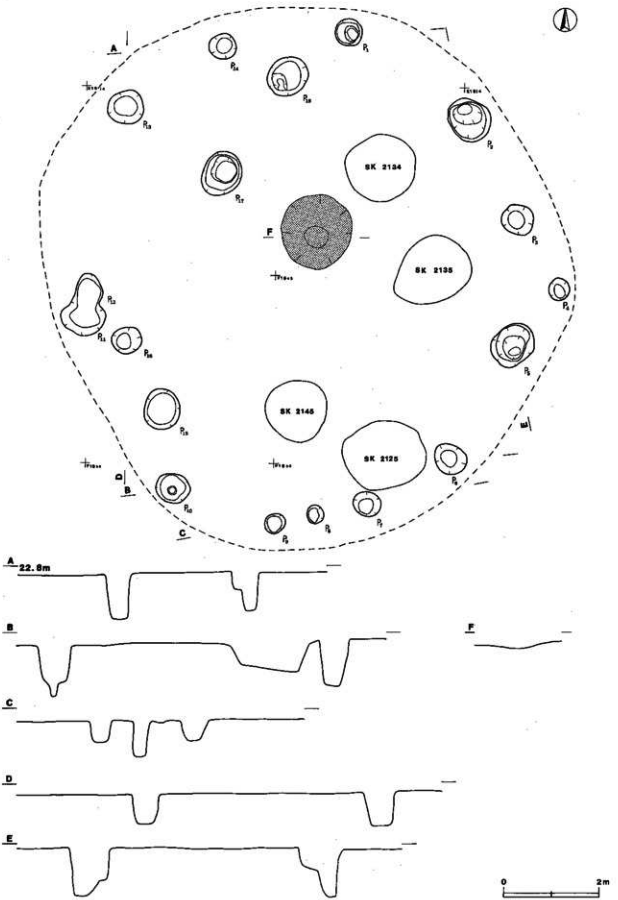
炉　中央部に付設されている。長径40cm，短径30cmの不整楕円形で，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。

覆土　3層に分層され，自然堆積である。

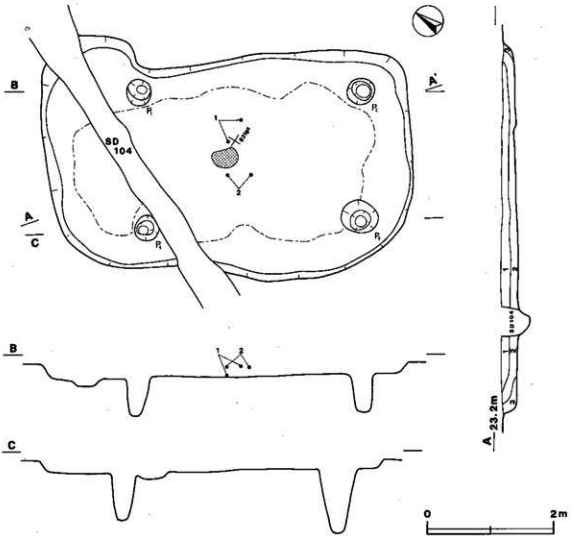
土層解説

1　黒褐色　ローム粒子少量，炭化物少量
2　黒褐色　ローム粒子少量，炭化物少量
3　暗褐色　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片250点が出土している。1は浅鉢の口縁部及び底部の破片で，覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部から胴部の破片で，覆土上層から出土している。3は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。4・15は深鉢の口縁部片で，同一個体である。隆帯により文様を描出し，隆帯に沿って半截竹管による



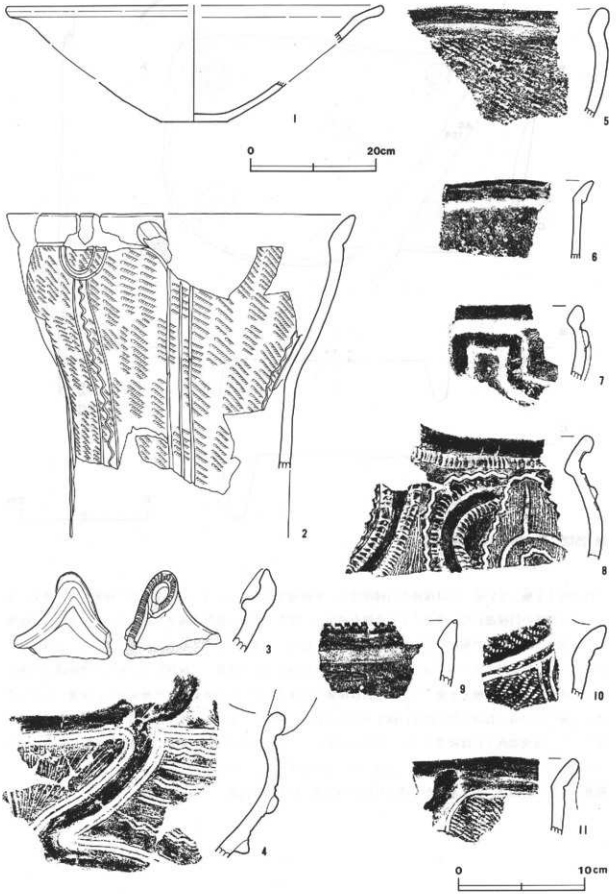
第124図　第399号住居跡実測図



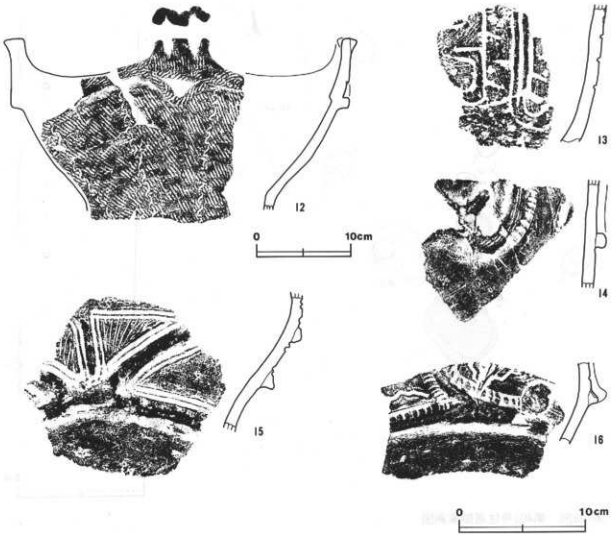
第125図　第400号住居跡実測図

平行沈線文を施している。5は深鉢の口縁部片で，無節縄文を施している。6は深鉢の口縁部片で，無文である。7は深鉢の口縁部片で，隆帯により文様を描出し，隆帯に沿って結節沈線文を施している。8・16は深鉢の口縁部片，14は深鉢の胴部片で，隆帯により文様を描出し，隆帯に沿って爪形文を施している。9は深鉢の口縁部片で，口唇部にキザミを施している。10は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，隆帯に沿って沈線文を施している。11は深鉢の口縁部片で，Ｌの無節縄文を地文とし，隆帯によりＶ字状文を施している。12は大形の波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部の破片で，結節させたＬの無節縄文を地文とし，波頂部直下には隆帯によりＶ字状文を施している。波頂部には鋸歯状の装飾帯を有している。13は深鉢の胴部片で，条線文を地文とし，沈線により文様を描出している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅳ式期）と考えられる。



第126図　第400号住居跡出土遺物実測図（1）



第127図　第400号住居跡出土遺物実測図（2）

第400号住居跡出土遺物観察表

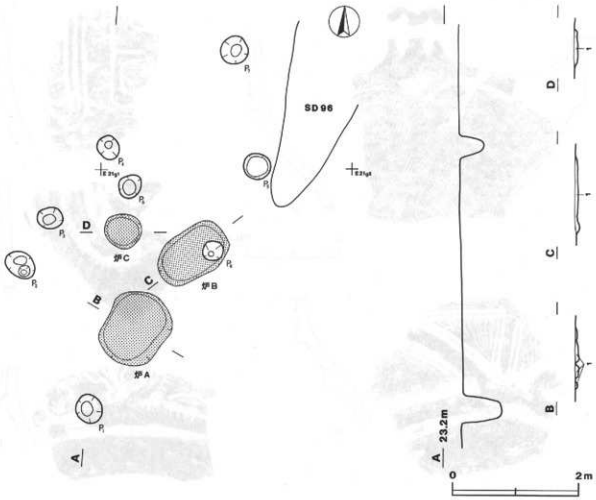
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	浅鉢 縄文土器	A〔58.6〕 B (18.5) C 10.4	口縁部片及び底部片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部はさらに外傾する。無文。	石英・長石・雲母 褐色 普通	P79 30% 覆土下層 阿玉台Ⅳ式
2	深鉢 縄文土器	A〔27.2〕 B (25.8)	口縁部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部は内彎する。の無節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。口縁部に隆帯によるV字状文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P78 30% PL17 覆土上層 阿玉台Ⅳ式
3	浅鉢 縄文土器	B (6.7)	口縁部片。波状口縁を呈し，口縁部は外傾する。波頂部の内面にキザミを有する隆帯による瘤手文を施している。	長石・雲母・砂粒 にぶい褐色 普通	P81 5% 覆土 勝坂式

第401号住居跡（第128・129図）

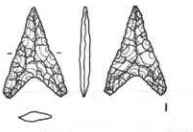
位置　調査区の北東部，E21g1区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は，第96号溝と重複する。第96号溝との関係は本跡が古いことが考えられる。



第128図　第401号住居跡実測図



第129図　第401号住居跡
出土遺物実測図

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため規模や平面形は不明である。

主軸方向　〔N－40°－E〕

ピット　8か所。炉の東側にはピットは確認できなかった。P_1～P_5は炉の西側を弧状に巡り，長径38～52cm，短径32～40cmの楕円形で，深さ18～63cmである。P_1～P_5は規模と配列から主柱穴と考えられ，東側のピットは確認できなかったが楕円形状に巡っていたことが推定される。P_6は，長径40cm，短径36cmの楕円形で，深さ24cmである。P_6は補助柱穴と考えられる。P_7は，径約44cmのほぼ円形で，深さ31cmである。P_8は炉Bを掘り込んでおり，径約32cmのほぼ円形で，深さ30cmである。P_7・P_8は，本跡に伴わないピットの可能性がある。

炉　3か所。南側の炉を炉A，北側の炉を炉B，西側の炉を炉Cとする。炉Aは，長径116cm，短径102cmの楕円形で，深さ7cmの地床炉である。炉内の覆土は1層で，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは，長径120cm，短径76cmの長楕円形で，深さ6cmの地床炉である。炉内の覆土は1層で，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Cは，長径58cm，短径54cmの長楕円形で，深さ5cmの地床炉である。炉内の覆土は1層で，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉A土層解説
1　明赤褐色　焼土粒子中量，ローム粒子微量
炉B土層解説
1　赤　褐　色　焼土粒子少量，焼土小ブロック少量，ローム粒子微量
炉C土層解説
1　にぶい赤褐色　焼土粒子少量，焼土ブロック少量，ローム粒子微量

遺物　縄文土器片8点，石鏃1点が出土している。1は石鏃である。

所見　本跡の時期は，出土遺物が微量であるため明確でないが，住居跡の形態から縄文時代と考えられる。

第401号住居跡出土遺物観察表

図版番号		器種	計測値				石質	備考
			長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
第129図	1	石鏃	3.6	2.5	0.4	2	チャート	Q39　覆土

第402号住居跡（第130図）

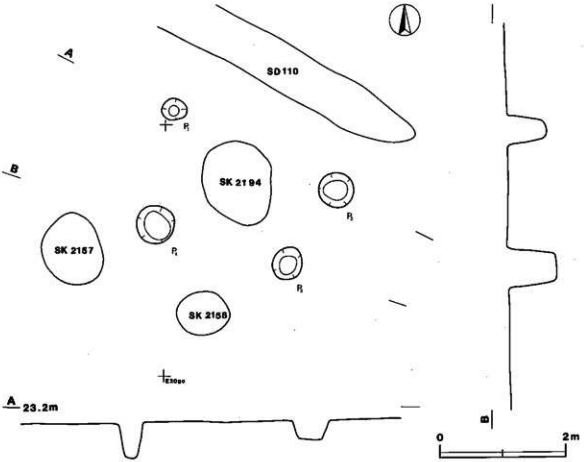
位置　調査区の北東部，E20f0区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，長方形状に巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は，第2157・2158・2194号土坑，第110号溝と重複する。第110号溝との関係は本跡が古いことが考えられる。第2157・2158・2194号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため不明である。

ピット　4か所。P_1～P_4は長方形状に巡り，長径40～60cm，短径30～60cmの楕円形で，深さ31～77cmである。



第130図　第402号住居跡実測図

ピット内の覆土は，締まりのある暗褐色を呈している。P_1～P_4は規模と配列から主柱穴で，4本柱の住居跡と考えられる。

所見　本跡の時期は，出土遺物がないため明確でないが，住居跡の形態とピットの覆土が縄文時代中期のものと類似していることから縄文時代中期と考えられる。

第403号住居跡（第131・132図）

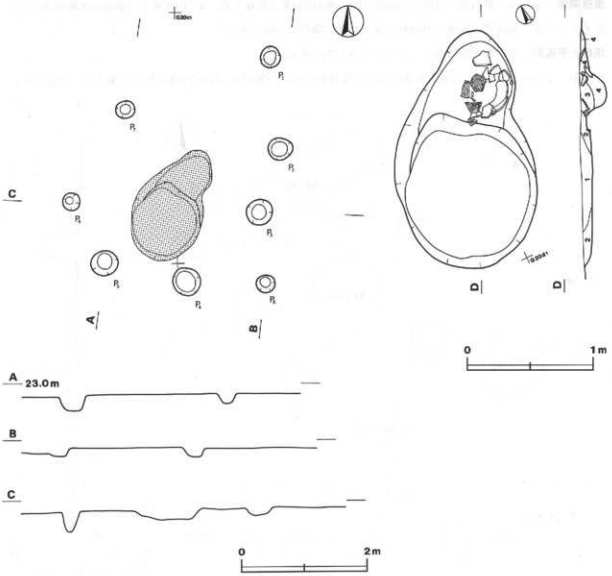
位置　調査区の南部，G20c1区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため，規模や平面形は不明である。

主軸方向　N－27°－E

ピット　8か所。P_1～P_7は炉を中心に楕円形状に巡り，長径30～48cm，短径36～42cmの楕円形で，深さ8～33cmある。P_1～P_7は，配列から主柱穴と考えられる。P_8は，長径30cm，短径28cmの楕円形で，深さ15cmである。P_8は，補助柱穴と考えられる。



第131図　第403号住居跡実測図

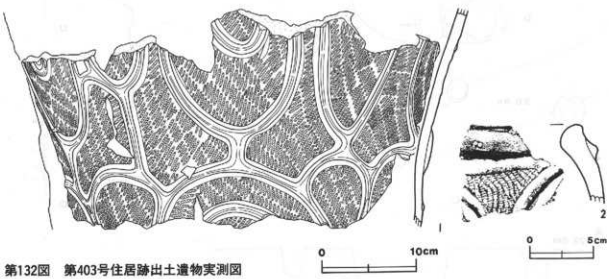
炉　長径1.88m，短径1.18mの双楕円形で，北側に深鉢の頸部を設置した土器片囲い炉である。炉床面に段があるため，2か所の炉が重複している可能性があるが，炉床面が続くため重複ではないと考えた。炉内の覆土は4層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　焼土粒子微量
2　灰　褐　色　炭化物少量
3　暗 赤 褐 色　焼土粒子少量
4　暗 赤 褐 色　焼土粒子中量

遺物　縄文土器片11点が出土している。1は深鉢の頸部片で，土器片囲い炉の埋設土器である。2は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，微隆帯により文様を描出している。

所見　本跡の時期は，1の土器片囲い炉の埋設土器から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第132図　第403号住居跡出土遺物実測図

第403号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第132図 1	深鉢 縄文土器	B（22.6）	頸部片。頸部は外反する。RLの単節縄文を地文とし，微隆帯により文様を描出している。	長石・砂粒 橙色 普通	P82 20% PL17 炉埋設土器 加曽利EⅢ式

第404号住居跡（第133図）

位置　調査区の南部，F19i4区。

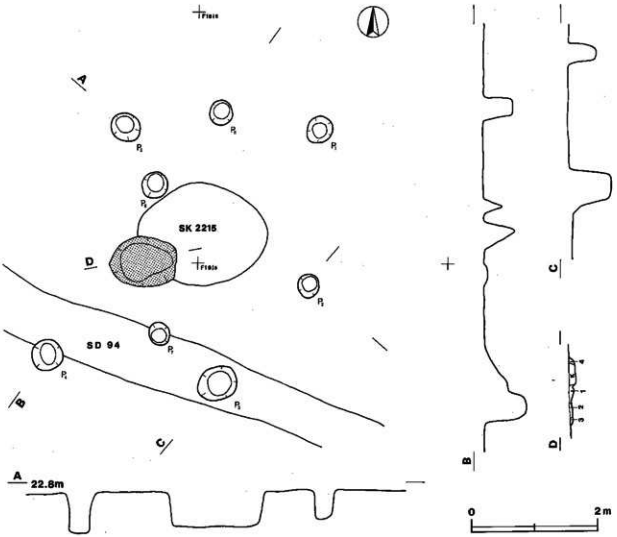
確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は，第2215号土坑と第94号溝と重複する。本跡の炉が第2215号土坑上面を炉床面にしていることから本跡が新しい。第94号溝が本跡のピットを掘り込んでいることから，本跡が古い。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため，不明である。

主軸方向　N－82°－W

ピット　8か所。P_1～P_8は炉を中心に楕円形状に巡り，長径38～64cm，短径36～42cmの楕円形で，深さ33～65cmである。P_1～P_6は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_7は，長径38cm，短径34cmの楕円形で，深さ12cmである。P_8は，長径44cm，短径40cmの楕円形で，深さ58cmである。P_7・P_8は補助柱穴と考えられる。ピットの覆土は，いずれも締まりのある褐色土である。



第133図　第404号住居跡実測図

炉　長径104cm，短径78cmの楕円形で，深さ10cmの地床炉である。炉内の覆土は4層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　赤 褐 色　焼土粒子多量，焼土ブロック中量
2　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土ブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子少量，ロームブロック少量
4　暗 褐 色　ローム粒子少量，ロームブロック微量

所見　本跡の時期は，出土遺物がないため明確でないが，ピットの覆土が縄文時代のものと類似していることから，縄文時代と考えられる。

第405号住居跡（第134・135図）

位置　調査区の南部，G19a9区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため不明である。

主軸方向　N－47°－E

ピット　4か所。P_1～P_4は炉を中心に巡り，長径36～46cm，短径31～36cmの楕円形で，深さ20～60cmである。P_1～P_4は，規模と配列から主柱穴と考えられる。

炉　2か所。南西側の炉を炉A，北東側の炉を炉Bとした。炉Aは，長径68cm，短径54cmの楕円形で，深さ約18cmの地床炉である。炉内の覆土は4層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは，長径26cm，短径24cmの楕円形で，深さ約6cmの地床炉である。炉内の覆土は1層で，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉A土層解説

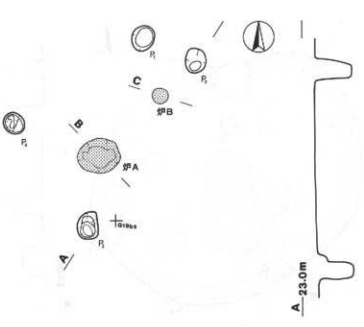
1	暗褐色	焼土粒子少量，ローム粒子微量，炭化物少量
2	暗褐色	焼土粒子少量，ローム粒子少量，炭化物少量
3	暗褐色	焼土粒子少量，焼土ブロック微量，ローム粒子微量
4	暗赤褐色	焼土粒子多量，焼土ブロック少量

炉B土層解説

1	にぶい赤褐色	焼土粒子中量，ローム粒子微量

遺物　縄文土器片16点が出土している。1は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，微隆帯により文様を描出している。2は深鉢の胴部片で，沈線により逆U字状文を施し，Lの無節縄文を充■している。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少量であるため明確でないが，出土遺物と住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。



第134図　第405号住居跡実測図

第135図　第405号住居跡出土遺物実測図

第407号住居跡（第136・137図）

位置　調査区の南部，F19h6区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

規模と平面形　壁溝から，長径4.46m，短径3.62mの楕円形と推定される。

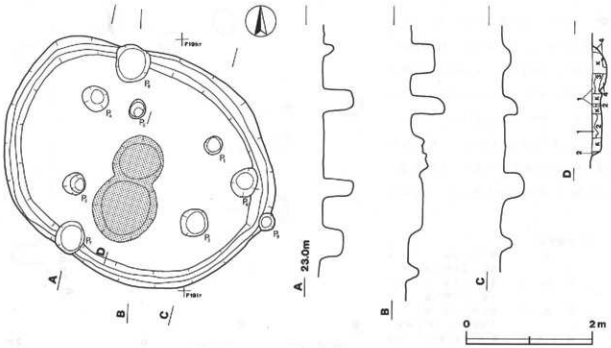
主軸方向　N－19°－E

ピット　8か所。P_1～P_4は炉を中心に巡り，長径30～44cm，短径28～42cmの楕円形で，深さ21～47cmである。P_1～P_4は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_5～P_8は，長径26～60cm，短径24～54cmの楕円形で，深さ15～53cmである。P_5～P_8は，補助柱穴と考えられる。P_9は，本跡に伴わないピットである。

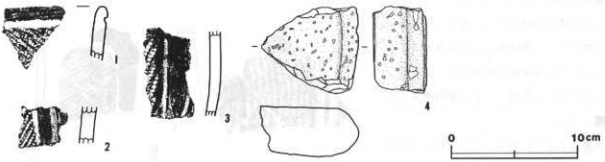
炉　長径174cm，短径98cmの双楕円形で，炉の各部は北側の炉部と南側の前庭部で構成される複式炉である。炉の深さは約12cmで，覆土は4層に分層される。炉部の炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1	褐色	焼土粒子少量，焼土ブロック微量，ローム粒子微量
2	暗褐色	ローム粒子少量，ロームブロック微量
3	暗赤褐色	焼土粒子少量，ローム粒子少量
4	暗赤褐色	焼土粒子中量，焼土ブロック少量，ローム粒子少量



第136図　第407号住居跡実測図



第137図　第407号住居跡出土遺物実測図

遺物　縄文土器片48点，石皿片１点が出土している。１は深鉢の口縁部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。２・３は深鉢の胴部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。４は石皿片である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅡ式期）と考えられる。

第407号住居跡出土遺物観察表

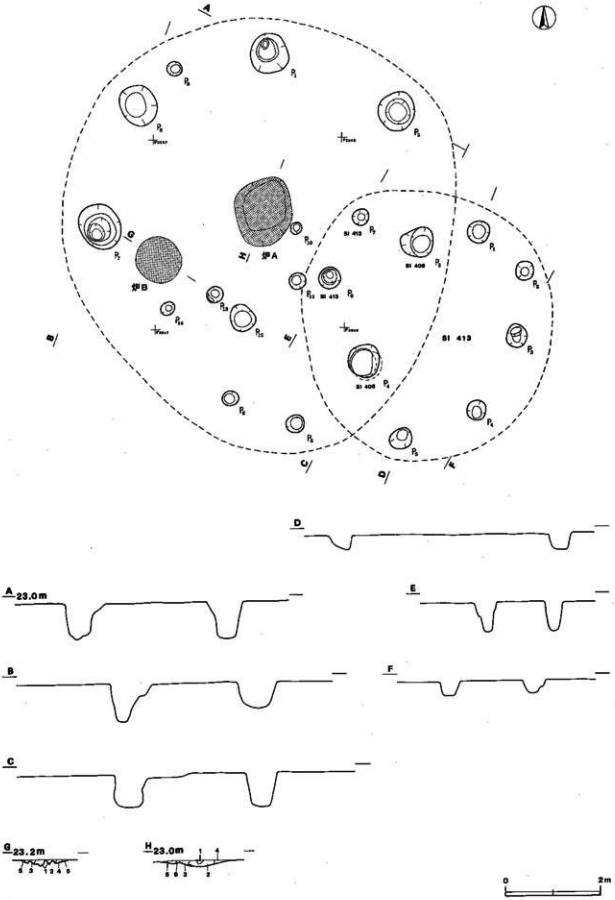
図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
第137図　4	石皿	(7.0)	(7.7)	4.2	(254)	安山岩	Q40　覆土

第408号住居跡（第138・139図）

位置　調査区の北部，Ｆ20b7区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は，第413号住居跡と重複する。新旧関係は不明である。



第138図　第408・413号住居跡実測図

規模と平面形　ピットの配列から，長径9.20m，短径8.04mの楕円形と推定される。

主軸方向　N－64°－E

ピット　14か所。P_1～P_8は炉を中心に楕円形状に巡り，長径36～102cm，短径32～82cmの楕円形で，深さ54～82cmである。P_1～P_8は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_9～P_{14}は，長径26～58cm，短径24～52cmの楕円形で，深さ18～57cmである。P_9～P_{14}は，補助柱穴と考えられる。

炉　2か所。東側の炉を炉A，西側の炉を炉Bとした。炉Aは，長径152cm，短径126cmの楕円形で，深さ12cmの地床炉である。覆土は6層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。炉Bは，長径98cm，短径92cmの楕円形で，深さ12cmの地床炉である。覆土は5層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

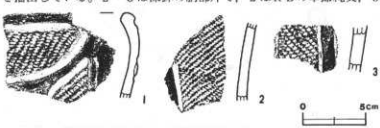
炉A土層解説

1　暗赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック少量
2　暗赤褐色　焼土粒子少量，焼土小ブロック少量
3　暗赤褐色　焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
4　暗赤褐色　焼土粒子少量，焼土ブロック中量
5　褐　　色　ローム粒子中量，ロームブロック中量
6　極暗赤褐色　焼土粒子微量，ローム粒子微量

炉B土層解説

1　褐　　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック中量
2　暗 褐 色　焼土粒子少量，ローム粒子少量，ローム小ブロック少量
3　褐　　色　焼土粒子微量，ローム粒子中量
4　褐　　色　焼土粒子少量，ローム粒子中量
5　褐　　色　焼土粒子微量，ローム粒子多量

遺物　縄文土器片18点が出土している。1は深鉢の口縁部片で，LRの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。2・3は深鉢の胴部片で，2はRLの単節縄文，3はLRの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。



第139図　第408号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡の時期は，出土遺物が少量であるため明確でないが，出土遺物と住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。

第409号住居跡（第140・141図）

位置　調査区の南部，F19$_{\text{グ}}$5区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，楕円形状に巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

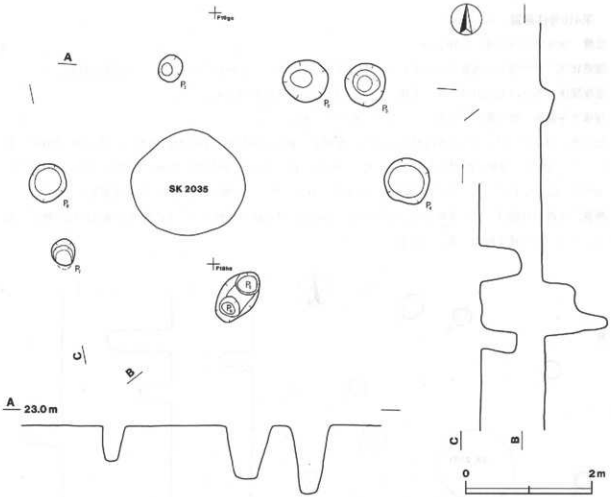
重複関係　本跡は第2035号土坑と重複している。新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため，規模や平面形は不明である。

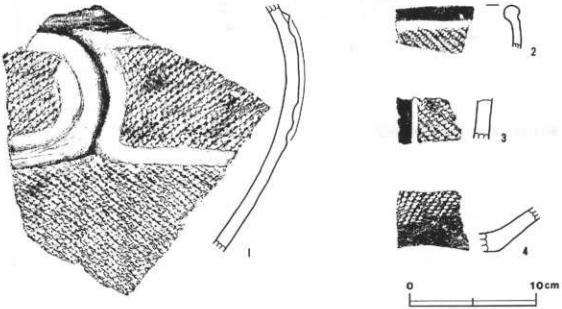
ピット　8か所。P_1～P_8は楕円形状に巡り，長径42～72cm，短径38～64cmの楕円形で，深さ17～108cmである。P_1～P_8は，規模と配列から主柱穴と考えられる。

遺物　縄文土器片25点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片で，LRLの複節縄文を地文とし，微隆帯により文様を構成している。1はP_2の覆土から出土している。2は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。3は深鉢の胴部片で，LRの単節縄文を地文とし，懸垂する沈線間を磨り消している。4は浅鉢の底部から胴部の破片で，胴部はRLの単節縄文を施している。

所見　本跡の時期は，1の出土遺物がP_2の覆土から出土しているから縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第140図　第409号住居跡実測図



第141図　第409号住居跡出土遺物実測図

第410号住居跡（第142図）

位置　調査区の南西部，F19g1区。

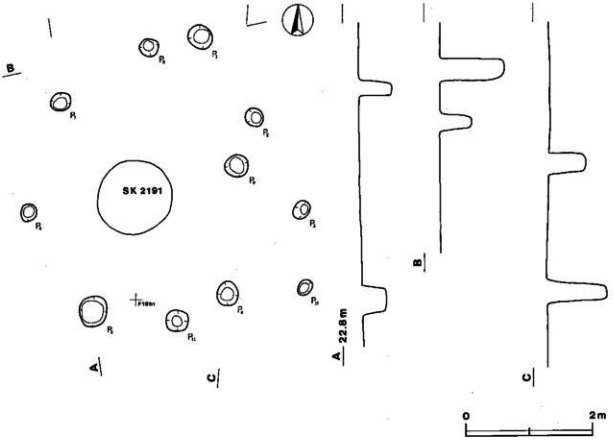
確認状況　壁や覆土は残存していないが，楕円形状に巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は第2191号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため不明である。

ピット　11か所。P_1～P_7は楕円形状に巡り，長径30～48cm，短径24～44cmの楕円形で，深さ30～104cmである。P_1～P_7は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_8～P_{11}は，長径26～35cm，短径20～36cmの楕円形で，深さ17～62cmである。P_8～P_{11}は，補助柱穴と考えられる。ピットの覆土は，締まりのある褐色土である。

所見　本跡の時期は，出土遺物がないため不明であるが，住居跡の形態とピットの覆土が縄文時代の覆土と類似することから縄文時代と考えられる。



第142図　第410号住居跡実測図

第411号住居跡（第143・144図）

位置　調査区の南西部，F19e3区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は第2208号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため不明である。

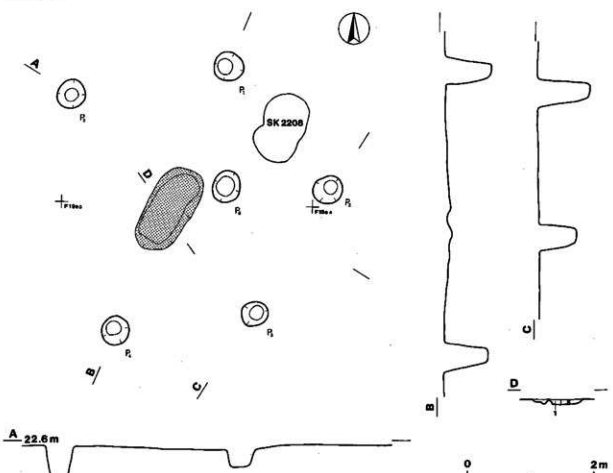
主軸方向　N－30°－E

ピット　6か所。P_1～P_5は炉を中心に巡り，長径42～48cm，短径38～46cmの楕円形で，深さ63～87cmである。P_1～P_5は，規模と配列から主柱穴と考えられる。P_6は，長径52cm，短径44cmの楕円形で，深さ30cmである。P_6は，補助柱穴と考えられる。

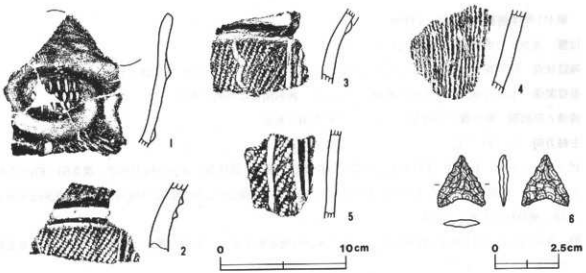
炉　長径142cm，短径70cmの長楕円形で，深さ8cmの地床炉である。炉内の覆土は1層で，炉床面は赤変硬化している。

炉土層解説
1　赤褐色　　焼土粒子微量，焼土ブロック微量，ローム粒子微量

遺物　縄文土器片55点，石鏃1点が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，波頂部直下に隆帯により渦巻文を施している。2は深鉢の頸部片で，隆帯を巡らしている。3は深鉢の頸部から胴部片で，頸部に隆帯による幅狭の区画文を施し，胴部には沈線による懸垂文を施している。4は深鉢の胴部片で，撚糸文を施している。5は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。6は石鏃である。



第143図　第411号住居跡実測図



第144図　第411号住居跡出土遺物実測図

所見　本跡の時期は，出土遺物が少量であるため明確でないが，出土遺物と住居跡の形態から縄文時代中期と考えられる。

第411号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
第144図　6	石鏃	2.0	0.35	1.9	1	チャート	Q41　覆土

第413号住居跡（第138図）

位置　調査区の北部，F20b8区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，楕円形状に巡るピットを確認したことから住居跡と判断した。

重複関係　本跡は第408号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　ピットの配列から，径5.64mのほぼ円形と推定される。

ピット　7か所。P_1～P_7は楕円形状に巡り，長径36～46cm，短径34～44cmの楕円形で，深さ29～63cmである。P_1～P_7は，規模と配列から主柱穴と考えられる。

所見　本跡の時期は，出土遺物がないため不明であるが，住居跡の形態から縄文時代と考えられる。

第414号住居跡（第145・146図）

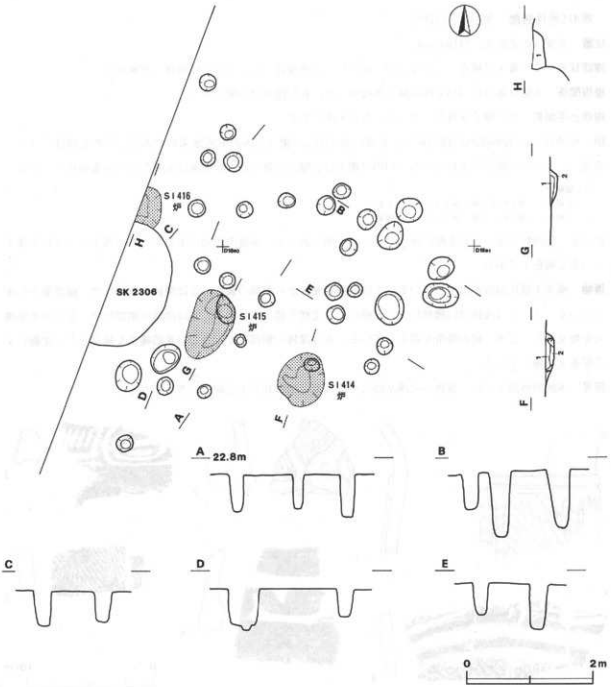
位置　調査区の北西部，D18e0区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断する。

重複関係　本跡は第415号住居跡と重複するが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため不明である。

炉　長径84cm，短径72cmの楕円形で，深さ14cmの地床炉である。炉内の覆土は3層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。



第145図　第414・415・416号住居跡実測図

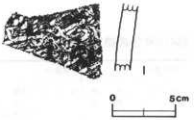
炉土層解説

1	暗赤褐色	焼土粒子中量，焼土ブロック中量，ローム粒子微量
2	暗赤褐色	焼土粒子中量，焼土ブロック中量，ローム粒子微量，ロームブロック微量
3	暗赤褐色	焼土粒子少量，ローム粒子少量

ピット　規則性がないため本跡に伴うピットは不明であるが，本跡の周辺にあるピットの覆土はいずれも締まりのある褐色土である。

遺物　縄文土器片２点が出土している。１は深鉢の胴部片で，Ｌの無節縄文とＲＬの単節縄文をほどこしている。

所見　本跡の時期は，出土遺物が微量であるため明確でないが，ピットの覆土が縄文時代のものと類似することから縄文時代と考えられる。



第146図　第414号住居跡
出土遺物実測図

第415号住居跡（第145・147図）

位置　調査区の北西部，D18e9区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断する。

重複関係　本跡は第414・416号住居跡と重複するが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため不明である。

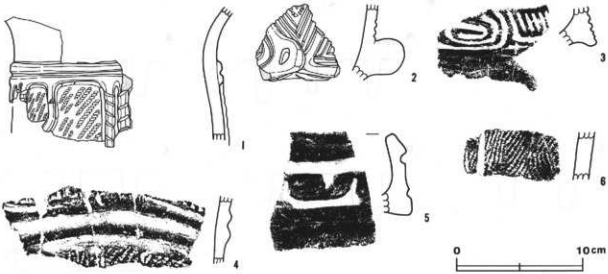
炉　長径110cm，短径66cmの楕円形で，北側に深さ26cmの掘り込みのある地床炉である。炉の北側はピットと重複し，ピットに掘り込まれている。炉内の覆土は2層に分層され，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説
1　赤褐色　　焼土粒子少量，焼土小ブロック少量
2　赤褐色　　焼土粒子少量，焼土小ブロック微量

ピット　規則性がないため本跡に伴うピットは不明であるが，本跡の周辺にあるピットの覆土はいずれも締まりのある褐色土である。

遺物　縄文土器片54点が出土している。1は深鉢の頸部から胴部の破片，2は深鉢の胴部片で，確認面から出土している。3・5は浅鉢の口縁部片で，沈線により文様を描出している。4は深鉢の頸部片で，RLの単節縄文を地文とし，2本一組の隆帯を巡らしている。6は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅠ式期）と考えられる。



第147図　第415号住居跡出土遺物実測図

第415号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第147図 1	深　鉢 縄文土器	B（10.9）	頸部から胴部の破片。胴部はわずかに内彎し，口縁部は外反する。頸部に沈線を有する隆帯を巡らし，胴部に隆帯を懸垂させている。地文はRLの単節縄文である。	長石・砂粒 褐色 普通	P83　10% 縄紋期 加曽利EⅠ式
2	深　鉢 縄文土器	B（6.2）	胴部片。隆帯により文様を描出し，隆帯の交点には環状の突起を有している。区画文内には半截竹管による平行沈線文により文様を描出している。	長石・砂粒 橙色 普通	P84　5% 縄紋期 阿玉台Ⅳ式

第416号住居跡（第145図）

位置　調査区の北西部，D18d9区。

確認状況　本跡の西部は調査区域外であり，未調査である。壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断する。

重複関係　本跡は第2306号土坑と第415号住居跡と重複する。本跡の炉が第2306号土坑に掘り込まれていることから，本跡が古い。第415号住居跡との新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土は残存していないため不明である。

炉　深さ18cmの地床炉である。西側は調査区域外で第2306号土坑に掘り込まれており，規模や平面形は不明である。炉内の覆土は1層で，炉床面は火熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1　にぶい赤褐色　　焼土粒子中量，焼土ブロック少量

ピット　規則性がないため本跡に伴うピットは不明であるが，本跡の周辺のピットの覆土は締まりのある褐色土である。

所見　本跡の時期は出土遺物がないため不明であるが，縄文時代中期の第2306号土坑に掘り込まれていることから縄文時代中期以前の時期と考えられる。

第417号住居跡（第148図）

位置　調査区の南西部，F18i8区。

重複関係　本跡は第94号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。

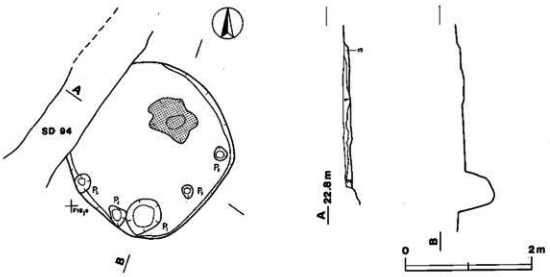
規模と平面形　長径2.80m，短径2.68mの楕円形である。

主軸方向　N－47°－E

壁　南壁と北壁の一部が残存していない。壁高は8cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。炉西側の床面には，焼土が堆積している。

ピット　5か所で，北側にはピットが確認できなかった。P_1は長径64cm，短径52cmの楕円形で，深さ52cmで



第148図　第417号住居跡実測図

ある。P_1は規模から主柱穴と考えられる。P_2～P_5は南壁際を巡り，長径20～34cm，短径16～24cmの楕円形で，深さ13～21cmである。P_2～P_5は，規模と配列から補助柱穴と考えられる。

炉　長径80cm，短径62cmの不整楕円形で，深さ4cmの地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。

覆土　3層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，ロームブロック微量，焼土粒子少量
2　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック中量
3　褐　色　ローム粒子少量，ロームブロック少量

所見　本跡の時期は出土遺物がないため不明であるが，住居跡の形態と覆土が縄文時代のものと類似することから縄文時代と考えられる。

第418号住居跡（第149・150図）

位置　調査区の北西部，D18g0区。

規模と平面形　一辺が4mほどの隅丸方形と推定される。

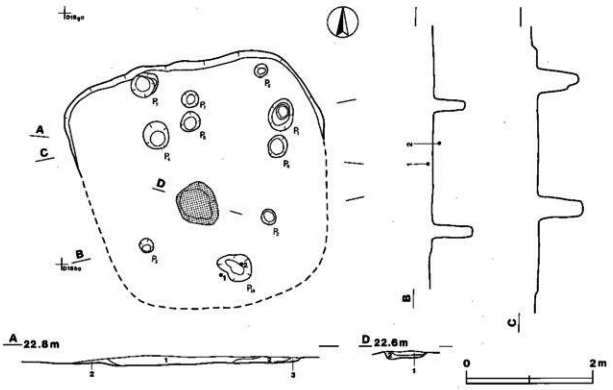
主軸方向　N－13°－W

壁　南壁が残存していない。壁高は8cmで，外傾して立ち上がる。

床　ほぼ平坦であり，わずかに踏み固められている。

ピット　10か所。P_1～P_4は炉を中心に巡り，長径24～50cm，短径20～40cmの楕円形で，深さ50～70cmである。P_1～P_4は規模と配列から主柱穴と考えられる。P_5～P_{10}は，長径22～58cm，短径18～44cmの楕円形で，深さ17～58cmである。P_5～P_{10}は，補助柱穴と考えられる。

炉　長径72cm，短径62cmの楕円形で，深さ10cmの地床炉である。炉内の覆土は2層に分層され，炉床面は火熱



第149図　第418号住居跡実測図

により赤変硬化している。

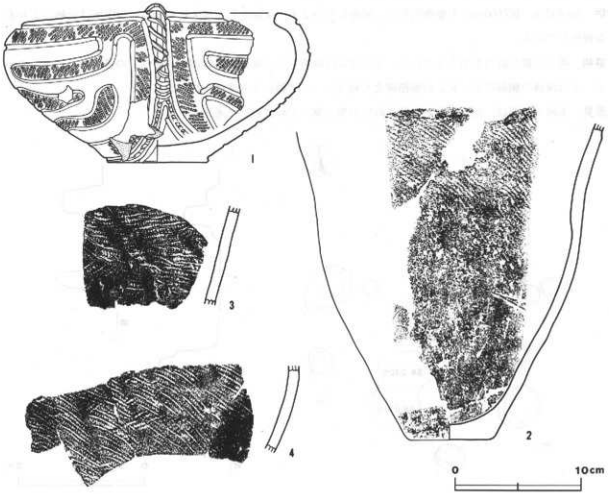
炉土層解説
1　暗赤褐色　　焼土粒子中量，焼土ブロック中量
2　暗赤褐色　　焼土粒子多量，焼土ブロック多量

覆土　3層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗 褐 色　　ローム粒子少量，ロームブロック少量　　3　褐　色　　ローム粒子多量
2　褐　色　　ローム粒子中量

遺物　縄文土器片126点が出土している。1は浅鉢で，床面から出土している。2は深鉢の下半部で，P_{10}の覆土から出土している。3・4は深鉢の胴部片で，異節縄文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代後期前葉（称名寺Ⅰ式期）と考えられる。



第150図　第418号住居跡出土遺物実測図

第418号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第150図 1	鉢 縄文土器	A〔20.0〕 B 12.7 C 8.0	口縁部一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内彎する。口唇部よりキザミを有する隆帯を垂下させている。沈線により文様を描出して，区画文内に L R の単節縄文を充填している。	石英・長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P85 60% PL18 床面 称名寺Ⅰ式
2	深鉢 縄文土器	B〔24.7〕 C 7.0	底部から胴部片。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はわずかにくびれる。L の無節縄文を施している。	石英・長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P86 60% PL18 P10 覆土 称名寺Ⅰ式

第420号住居跡（第151・152図）

位置　調査区の北西部，D19e2区。

確認状況　壁や覆土は残存していないが，炉とピットを確認したことから住居跡と判断する。

重複関係　本跡は第2309・2310・2342号土坑とと重複する。本跡の炉は第2342号土坑に掘り込まれていることから，本跡が古い。第2309・2310号土坑との新旧関係は不明である。

規模と平面形　壁や覆土が残存していないため不明である。

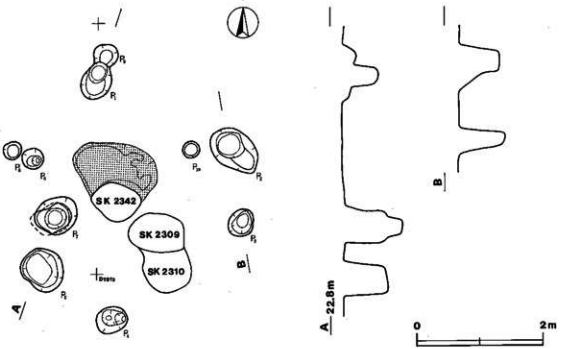
主軸方向　〔N－39°－W〕

ピット　10か所。P_1～P_6は炉を中心に巡り，長径36～86cm，短径34～52cmの楕円形で，深さ44～74cmである。P_1～P_6は，規模や配列から主柱穴と考えられる。P_7～P_{10}は，長径28～68cm，短径25～58cmの楕円形で，深さ21～94cmである。P_7～P_{10}は，補助柱穴と考えられる。

炉　長径67cm，短径60cmの不整楕円形で，床面をそのまま炉床面とした地床炉である。炉床面は火熱により赤変硬化している。

遺物　縄文土器片47点が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部で，ピットの覆土から出土している。2は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。



第151図　第420号住居跡実測図

第420号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第152図 1	深鉢 縄文土器	A (16.2) B (5.4)	口縁部片。双頭の小波状口縁を呈し，口縁部は外傾する。波頂部を起点にキザミを有する隆帯を口唇部直下に垂らしている。胴部には交互刺突による連続コの字状文を垂らしている。	石英・長石・砂粒 暗赤褐色 普通	P87　5% 覆土 中峠式

第152図　第420号住居跡出土遺物実測図

表2　前田村遺跡Ｇ区縄文時代住居跡一覧表

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長径×短径)	壁高(cm)	床面	内部施設					炉	覆土	出土遺物	時期	備考［重複関係］
							壁溝	主柱穴	ピット	出入口	貯蔵穴					
336	G21ｉ2	N－25°－E	楕円形	7.86×6.46	12	平坦	－	8	11	－	－	1	－	須恵	加曽利E Ⅲ	
337	G21ｉ6	N－12°－E	楕円形	6.63×6.02	10～20	平坦	－	8	2	－	－	1	自然	須恵、石斧、石棒	加曽利E Ⅲ	
338	G22ｈ2	N－23°－W	楕円形	7.52×(7.16)	15～20	平坦	－	3	1	－	－	3	自然	須恵、石鏃	加曽利E Ⅲ～Ⅳ	南部調査区外
339	G21ｉ6	N－37°－E	隅丸長方形	3.34×1.18	12～34	平坦	－	2	1	－	－	－	自然	須恵	中期	SK1898と方 SK1882と重複
340	G21ｉ7	N－45°－E	円形	4.60×4.40	8～20	平坦	－	4	1	－	－	1	自然	須恵	加曽利E Ⅲ	
341	G21ｉ8	N－15°－W	楕円形	4.22×3.62	12～22	平坦	－	－	－	－	－	1	自然	須恵	加曽利E Ⅲ	
342	G21ｈ3	N－26°－W	楕円形	6.20×5.70	34～44	平坦	一部	6	18	－	－	2	自然	須恵、土器片錘	加曽利E Ⅰ	
343	F18ｅ3	N－36°－E	楕円形	5.46×4.39	6～12	平坦	－	－	1	－	－	－	自然	須恵	称名寺Ⅰ	SI 344と方
344	F18ｅ3	N－2°－E	不整隅丸長方形	3.94×3.44	30～44	平坦	－	－	4	－	－	2	自然	須恵、磨石、石鏃	中期	SI 343と方
345	G20ｈ9	N－35°－E	円形	3.44×3.44	4～6	平坦	－	4	1	－	－	－	自然	須恵	阿玉台Ⅱ	
346	G20ｇ7	N－34°－E	円形	6.85×6.66	3～6	平坦	－	3	2	－	－	2	自然	須恵、打製石斧	加曽利E Ⅲ	南部調査区外
347	G20ｅ3	N－4°－W	楕円形	6.70×5.74	36～44	平坦	－	4	11	1	－	2	自然	須恵、土器片円盤、石皿	加曽利E Ⅲ	SI 367と方
348	G21ａ5	[N－20°－W]	－	[6.55×5.10]	－	－	－	6	－	－	－	1	－	須恵	中期	SK1950と重複
349	F21ａ3	[N－8°－W]	－	[5.35×4.80]	－	－	－	5	－	－	－	1	－	須恵	中期	SK1927と重複
350	G20ｅ9	N－35°－W	楕円形	3.74×3.38	20～36	平坦	－	1	4	－	－	－	自然	須恵、土器片円盤	阿玉台Ⅱb	SD 61と方
351	G20ｉ6	N－28°－E	楕円形	5.40×4.60	8～26	平坦	－	5	5	－	－	1	自然	須恵	加曽利E Ⅰ	
352	F19ｇ6	N－83°－E	円形	5.60×5.60	8	平坦	－	6	2	－	－	1	－	須恵	加曽利E Ⅲ	SK2075と重複
353	F19ｇ3	[N－1°－E]	－	－	－	－	－	－	12	－	－	1	－	－	－	
354	F20ａ4	N－123°－E	楕円形	9.30×7.70	13～24	平坦	－	7	4	1	－	1	自然	須恵、土製円盤、磨石	加曽利E Ⅲ～Ⅳ	SI 355と方 断
355	F20ａ4	N－38°－E	円形	[2.90×2.90]	12～15	平坦	－	1	－	－	－	－	自然	－	阿玉台	SI 354と方 方
356	E19ｉ2	N－46°－E	円形	5.20×5.20	14～20	平坦	－	5	3	1	－	1	自然	須恵、磨石、磨製石斧	阿玉台Ⅳ	
357A	F18ｅ2	N－4°－E	楕円形	[4.10×3.80]	5～21	平坦	－	6	－	－	－	1	自然	須恵	中期	—
357B	F18ｅ2	N－34°－E	楕円形	[3.06×2.70]	8	平坦	－	3	3	－	－	1	自然	－	中期	
358	E19ｅ2	N－38°－E	楕円形	4.40×3.48	－	平坦	－	6	－	－	－	1	自然	須恵、磨石	中期	
359	F18ｅ5	[N－19°－E]	－	－	－	－	－	6	2	－	－	1	－	須恵、磨石	加曽利E Ⅰ	
360	F18ｅ4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	須恵	加曽利E Ⅲ	
361	G20ｇ4	－	［円形］	[5.80×5.80]	8～16	平坦	－	3	1	－	－	－	自然	須恵、磨製石斧	加曽利E Ⅰ	SK1931と重複
362	G20ｅ2	N－71°－E	楕円形	4.08×3.68	6～11	平坦	－	7	4	－	－	1	自然	須恵	加曽利E Ⅲ	
363	G19ｅ9	N－35°－E	楕円形	7.82×6.82	18～34	平坦	－	6	13	－	－	1	自然	須恵、磨製石斧、石皿	加曽利E Ⅲ	
364A	F20ｊ3	[N－81°－E]	－	－	－	－	－	4	1	－	－	2	－	須恵、紡石	加曽利E Ⅲ	SI 364Bと重複
364B	F20ｊ4	[N－65°－E]	－	－	－	－	－	5	2	－	－	1	－	－	中期	SI 364Aと重複

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長径×短径)	壁高(cm)	床面	内部施設 壁溝	主柱穴	ピット	出入口	貯蔵穴	炉	覆土	出土遺物	時期	備考(重複関係)
365	F22j9	N-26°-W	楕円形	3.40×2.96	30~44	平坦	-	-	5	-	-	-	自然	須恵、土鈴	阿玉台Ⅰb	
366	G22a1	N-41°-W	楕円形	5.38×4.62	8~12	平坦	-	6	3	-	-	1	自然	須恵	中期	SK1326と重複
367	G23d6	N-22°-E	楕円形	(4.00×3.70)	2~6	平坦	-	4	5	-	-	-	自然	須恵	阿玉台Ⅳ	SI347と中古
368	G23c6	N-62°-W	楕円形	6.80×5.56	3~6	平坦	-	5	2	-	-	1	自然	須恵	中期	
369	G19a0	N-86°-E	不整円形	5.30×5.20	4~10	平坦	-	6	6	-	-	1	自然	須恵	中期	
370	F20a3	N-2°-W	楕円形	4.38×3.94	8~10	平坦	-	6	4	1	-	3	自然	須恵、石鏃	加曽利E Ⅲ	隅丸SP
371	F21d1	N-28°-E	楕円形	5.82×4.50	6~16	平坦	-	4	7	-	-	1	自然	須恵	加曽利E Ⅰ	
372	F21b4	N-25°-W	円形	3.70×3.50	20~32	平坦	-	1	4	-	-	-	自然	-	中期	
373	G19c6	N-7°-E	(楕円形)	(5.00×4.30)	-	平坦	-	6	4	-	-	2	-	須恵、石鏃	中期	
374	G19a6	N-22°-E	(楕円形)	(5.00×4.40)	-	平坦	-	6	4	-	-	1	自然	須恵	加曽利E Ⅱ	
375	F19j8	N-40°-E	楕円形	6.60×6.30	11	平坦	-	7	3	-	-	3	自然	須恵、磨石	加曽利E Ⅲ	SI1202と中古
376	F18j5	(N-3°-W)	-	-	-	-	-	-	8	-	-	1	-	-	中期	SK1970・SD562と重複
377	G19a5	(N-7°-E)	-	-	-	-	-	6	2	-	-	1	-	須恵	加曽利E Ⅱ	SK1954・1960と重複
378	G19c3	N-4°-E	不整楕円形	4.10×(3.30)	4~8	平坦	-	3	-	-	-	1	自然	須恵	加曽利E Ⅱ	
379	G18a5	-	-	-	-	-	-	6	3	-	-	1	-	-	-	SK1997と重複
380	F19j7	(N-53°-E)	-	-	-	-	-	7	2	-	-	1	-	須恵	加曽利E Ⅲ	SI1205と中新
381	G19a2	(N-16°-E)	-	-	-	-	-	6	7	-	-	1	-	須恵	加曽利E Ⅲ	
382	F18g8	(N-26°-E)	-	-	-	-	-	4	1	-	-	1	-	須恵	中期	
383	F18a6	(N-31°-E)	-	-	-	-	-	5	10	-	-	1	-	-	中期	
384	F18i0	(N-74°-E)	-	-	-	-	-	9	1	-	-	1	-	須恵	加曽利E Ⅰ	SK1963・SD964と重複
385	F20v9	N-32°-W	楕円形	4.84×4.22	20~30	平坦	全周	4	8	1	-	1	自然	須恵、鹿角	加曽利E Ⅰ	SD902と重複
386	E19i2	N-50°-W	楕円形	4.80×4.22	20~26	平坦	-	1	2	-	-	-	自然	須恵	阿玉台Ⅳ	SK2236と重複
387	E20d1	N-34°-W	長楕円形	5.30×4.26	12~18	平坦	-	5	4	-	-	-	自然	須恵、土器片円盤	中、外	
388	E18a0	N-26°-E	楕円形	3.28×2.80	14~28	平坦	-	1	-	-	-	-	自然	須恵	中期	
389	E18a9	N-54°-E	隅丸長方形	4.40×3.90	6~9	平坦	-	2	4	-	-	1	自然	須恵、石鏃	加曽利E Ⅰ	SK2208・2281・2285と重複
390	F19a7	N-56°-W	不整隅丸長方形	6.40×5.56	2~8	平坦	-	4	3	-	-	1	-	須恵	中期	SK2032・2103・2111と重複
391	F19c4	N-58°-W	不整方形	4.40×3.80	10	平坦	-	3	1	-	-	1	-	須恵	中峠	SK2119・2122と重複
392	E18g6	N-26°-W	不整楕円形	4.80×3.54	7~28	平坦	-	4	-	-	-	1	自然	須恵	中峠	
393	E18d7	N-36°-E	楕円形	(5.76)×5.30	7	平坦	-	6	-	-	-	1	自然	須恵、磨石、鹿石	加曽利E Ⅱ	
394	E19j5	(N-17°-E)	(楕円形)	(12.00×11.00)	-	-	-	14	4	-	-	1	自然	-	中期	
400	E21a4	N-32°-W	隅丸長方形	5.96×3.56	14~18	平坦	-	4	-	-	-	1	自然	須恵、鹿角	阿玉台Ⅳ	SD1014と中古
401	E21a1	(N-40°-E)	-	-	-	-	-	5	3	-	-	-	-	石鏃	-	SD962と中古
402	E30i0	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	自然	-	中期	SK1997・2159・2164と重複、SD1004と中古
403	G20c1	N-27°-E	-	-	-	-	-	7	1	-	-	1	-	須恵	加曽利E Ⅱ	
404	F19i4	N-82°-W	-	-	-	-	-	6	2	-	-	1	-	-	-	SK2115と中新・SD964と中古
405	G19a0	N-47°-E	-	-	-	-	-	4	-	-	-	2	-	須恵	中期	
407	F19v6	N-19°-E	楕円形	(4.46×3.62)	-	平坦	-	4	4	-	-	-	-	須恵、石鏃	加曽利E Ⅱ	
408	F20a7	N-64°-E	(円形)	(9.20×8.04)	-	-	-	8	6	-	-	2	-	須恵	中期	SI1413と重複
409	F19g5	-	-	-	-	-	-	8	-	-	-	-	-	須恵	加曽利E Ⅲ	SK2026と重複
410	F19g1	-	-	-	-	-	-	7	4	-	-	-	-	-	-	SK2191と重複
411	F19v3	N-30°-E	-	-	-	-	-	5	1	-	-	1	-	須恵	中期	SK2206と重複
413	F20a8	-	(円形)	(3.64×3.60)	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	SI408と重複
414	F18e0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	須恵	-	SI415・416と重複
415	D18e0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	須恵	加曽利E Ⅰ	SI414・416と重複
416	D18e9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	SI414・415・SK2062と重複
417	F18i3	N-47°-E	楕円形	2.80×2.68	8	平坦	-	1	4	-	-	1	自然	-	-	SD964と中古

住居跡番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)(長径×短径)	壁高(cm)	床面	内部施設					炉	覆土	出土遺物	時期	備考(重複関係)
							壁溝	主柱穴	ピット	張入口	貯蔵穴					
438	D18g9	N-13°-W	(楕円方形)	(4.20×4.00)	8	平坦	−	4	6	−	−	1	自然	深鉢, 浅鉢	後期中葉	
439	D18e2	N-38°-W	−	−	−	−	−	6	4	−	−	1	−	深鉢	中葉	S K2320・2330・2342と重複

(2) 土坑

G区では，縄文時代の土坑364基を調査した。土坑は，遺物の出土状態や遺構の残存状態が良好なものは解説を加え，それ以外のものは一覧表で記載した。第1922・1969・2068・2111・2312・2324号土坑については，AとBとに分けた。第2278号土坑についてはA・B・Cに分けた。一覧表に記載のないものについては，調査の結果土坑ではないことが判明し欠番としたものである。

第1898号土坑（第153・154図）

位置　調査区の南東部，G21j5区。

重複関係　本跡は第339号住居跡を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形　長径3.46m，短径3.12mの楕円形で，深さ1.16mである。

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

ピット　2か所。P_1は中央部に位置し，長径44cm，短径42cmのほぼ円形で，深さ60cmである。P_2は壁際に位置し，長径1.20m，短径1.18mのほぼ円形で，深さ1.16mである。

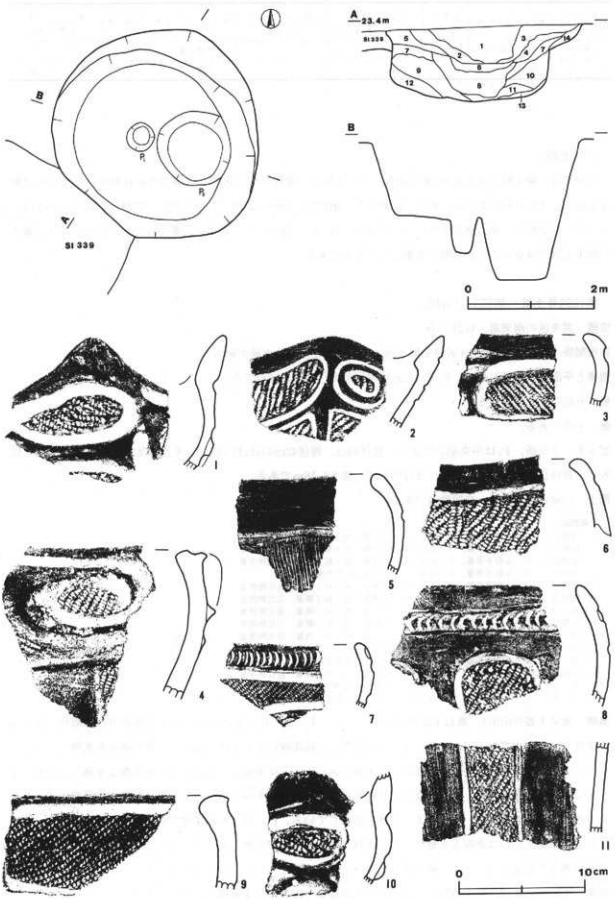
覆土　14層に分層され，自然堆積である。

土層解説

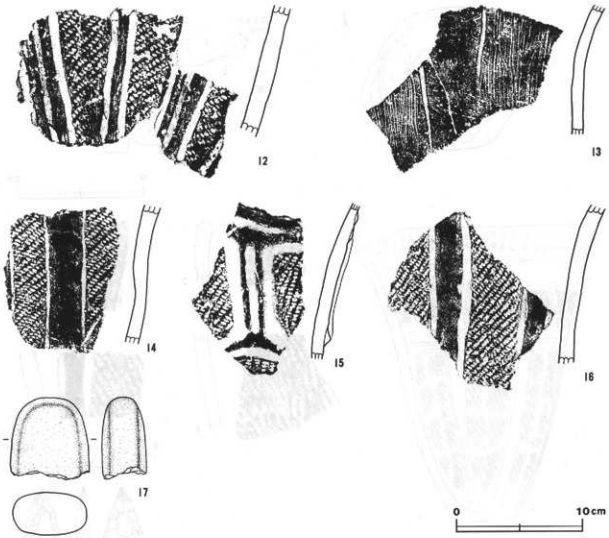
1	黒褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
2	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
3	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
4	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
5	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
6	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック多量，焼土粒子微量，炭化物微量
7	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
8	暗褐色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
9	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
10	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
11	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
12	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
13	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量，炭化物微量
14	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量

遺物　縄文土器片619点，磨石1点が出土している。1・2・10は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，3・4は深鉢の口縁部片である。1・3・4・10は隆帯，2は沈線により文様を描出し，単節縄文を充填している。5・6は深鉢の口縁部片で，口唇部直下の沈線を巡らし，5は条線文，6はRLの単節縄文を施している。7・8は深鉢の口縁部片で，口唇部直下に半載竹管による刺突文を巡らしている。9は深鉢の口縁部片で，LRLの複節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。11～14・16は深鉢の胴部片で，11・12・14・16はRLの単節縄文，13は条線文を地文とし，沈線により懸垂文間を磨り消している。15は深鉢の頸部片で，RLの単節縄文を地文とし，2本一組の隆帯により文様を描出している。17は磨石である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第153図　第1898号土坑・出土遺物実測図（1）



第154図　第1898号土坑出土遺物実測図（2）

第1898号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）		
第154図　17	磨石	6.5	6.3	3.5	(220)	安山岩	Q42　覆土

第1901号土坑（第155図）

位置　調査区の南東部，G21 e 4区。

規模と平面形　長径3.46m，短径3.12mの楕円形で，深さは62cmである。

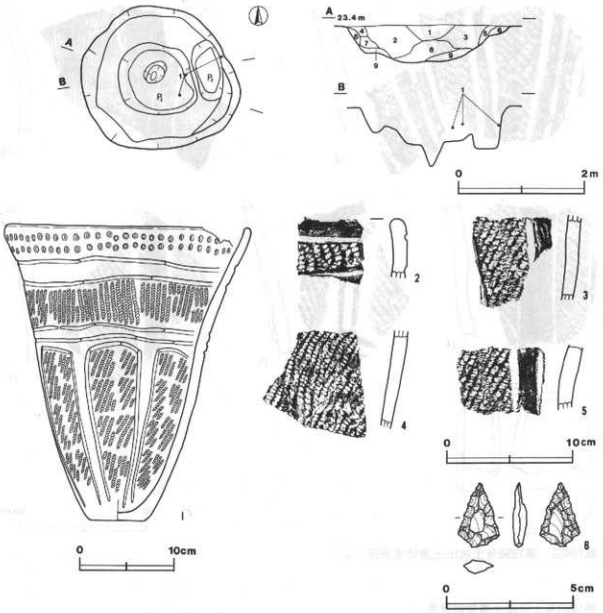
主軸方向　N－63°－W

壁　外傾して立ち上がる。

底　二段となり，中央部が深い。

ピット　2か所。P_1は中央部に位置し，長径40cm，短径30cmの楕円形で，深さ41cmである。P_2は壁際に位置し，長径96cm，短径44cmの楕円形で，深さ24cmである。

覆土　9層に分層され，自然堆積である。



第155図　第1901号土坑・出土遺物実測図

土層解説

1	褐灰色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
2	褐灰色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3	灰褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物少量
4	褐　色	ローム粒子少量
5	褐　色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
6	褐　色	ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
7	灰褐色	ローム粒子中量
8	灰褐色	ローム粒子多量，ロームブロック少量，炭化物微量
9	灰褐色	ローム粒子少量，ロームブロック少量

遺物　縄文土器片90点，石鏃1点が出土している。1は深鉢で，覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。3～5は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により懸垂文間を磨り消している。6は石鏃である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。

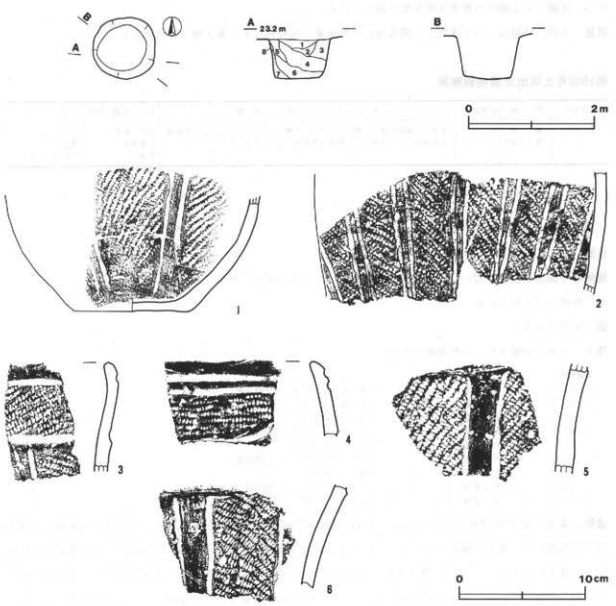
第1901号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第155図 1	深　鉢 縄文土器	A 25.6 B 31.0 C 5.6	口縁部一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部は外傾する。口縁部は沈線により口縁部文様帯を形成し，文様帯内に円形刺突文を2段に巡らしている。胴部には沈線間に RL の単節縄文を充填している。胴部には沈線による逆U字状文内に RL の単節縄文を充填している。	石英・長石・砂粒 褐色 普通	P89 95%　PL18 覆土下層 加曽利E II式

図版番号	器　種	計測値				石　質	備　考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第158図　6	石　鏃	2.6	1.6	0.5	(1)	チャート	Q43　覆土

第1908号土坑（第156図）

位置　調査区の南東部，G21 a 9区。



第156図　第1908号土坑・出土遺物実測図

規模と平面形　径1.02mの円形で，深さは62cmである。

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

覆土　8層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子中量，炭化物微量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
6　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
7　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
8　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量

遺物　縄文土器片78点が出土している。1は深鉢の底部から胴部の破片で，覆土から出土している。3・4は深鉢の口縁部片で，沈線で区画文を施し，区画内にはＬＲの単節縄文を施している。2・5・6は深鉢の胴部片で，沈線による幅広の懸垂文間を磨り消している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期）と考えられる。

第1908号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第158図 1	深　鉢 縄文土器	B（ 9.2） C　9.0	底部から胴部の破片。胴部はわずかに内彎して立ち上がる。ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。	長石・砂粒 灰黄褐色 普通	P90　20% 覆土 加曽利EⅢ式

第1915号土坑（第157・158図）

位置　調査区の南部，G20ｅ8区。

規模と平面形　長径2.92m，短径2.66mの楕円形で，深さは62cmである。

壁　外傾して立ち上がる。

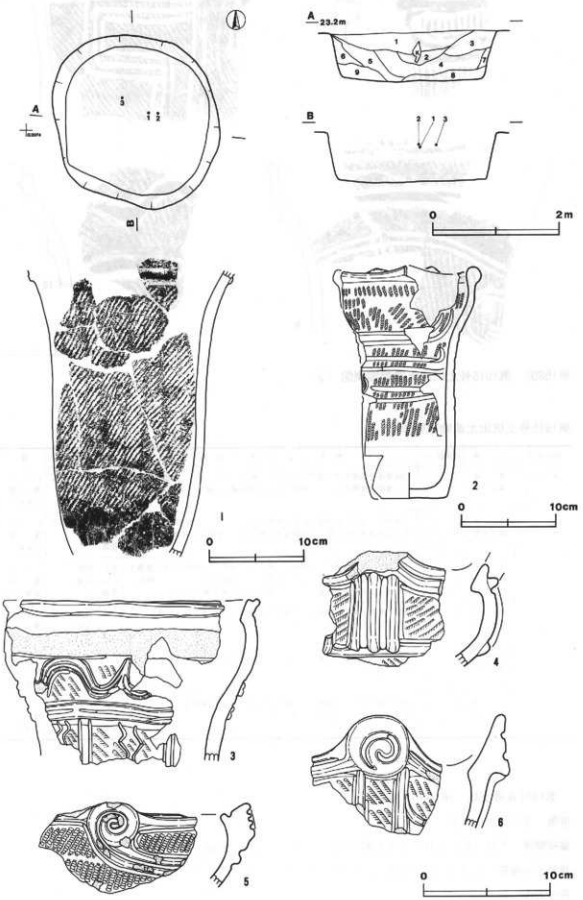
底　平坦である。

覆土　9層に分層され，自然堆積である。

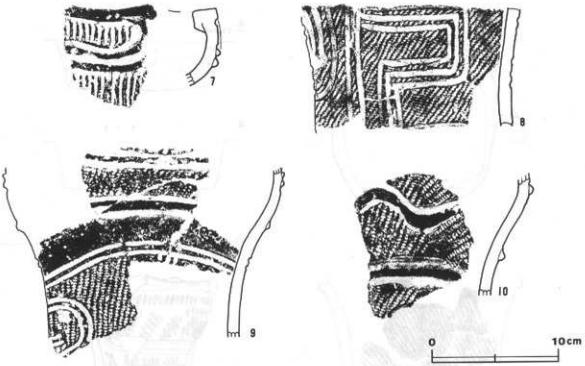
土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物中量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量
6　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
7　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
8　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
9　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量

遺物　縄文土器片291点が出土している。1は口縁部及び底部が欠損する深鉢，2はほぼ完形の深鉢，3は深鉢の口縁部片で，覆土上層から出土している。4・6は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，5は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。7は深鉢の口縁部片で，沈線を有する隆帯により文様を描出し，空白部に縦位の沈線を充塡している。8は深鉢の胴部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。9・10は深鉢の頸部から胴部の破片で，9は頸部に無文帯を有し，10は隆帯による波状文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。



第157図　第1915号土坑・出土遺物実測図（1）



第158図　第1915号土坑出土遺物実測図（2）

第1915号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第157図 1	深　鉢 縄文土器	B〔29.7〕	口縁部及び底部欠損。胴部はわずかに内彎して立ち上がり，頸部は外反する。頸部に隆帯を巡らし，胴部にRLの単節縄文を施している。	石英・長石・砂粒 黒褐色 普通	P91　70% 覆土上層 加曽利EⅠ式
2	深　鉢 縄文土器	A〔14.6〕 B　24.6 C　8.0	口縁部から底部一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部は内彎する。5単位の波状口縁。RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。	石英・長石・雲母 灰褐色 普通	P92　60%　PL19 覆土上層 加曽利EⅠ式
3	深　鉢 縄文土器	A〔20.0〕 B〔12.8〕	口縁部から胴部の破片。口縁部は内彎する。頸部には沈線を有する隆帯を巡らし，口縁部には沈線を有する隆帯により文様を描出している。胴部には沈線により懸垂文を施している。地文はLの無節縄文である。	長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P93　15%　PL19 覆土上層 加曽利EⅠ式
4	深　鉢 縄文土器	B（9.1）	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内彎する。Lの無節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。	石英・長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P94　5% 覆土 加曽利EⅠ式
5	深　鉢 縄文土器	B（7.2）	口縁部片。口縁部は内彎する。RLの単節縄文を地文とし，隆帯により渦巻文を施している。	長石・雲母・砂粒 赤褐色 普通	P95　5% 覆土 加曽利EⅠ式
6	深　鉢 縄文土器	B（9.4）	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内彎する。Lの無節縄文を地文とし，波頂部に隆帯により渦巻文を施している。	石英・長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P96　5% 覆土 加曽利EⅠ式

第1917A号土坑（第159図）

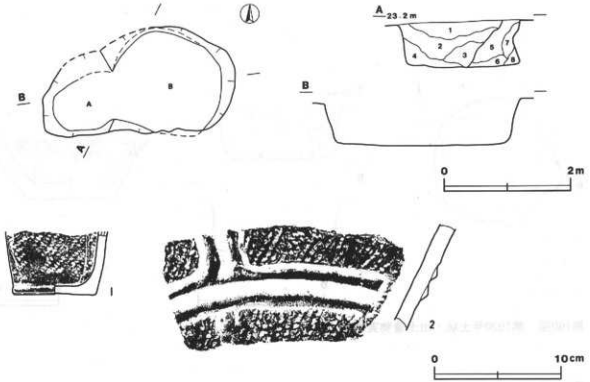
位置　調査区の南東部，G21c1区。

重複関係　本跡は第1917B号土坑を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形　長径1.60m，短径1.24mの楕円形と推定され，深さは72cmである。

長径方向　N－77°－E

壁　外傾して立ち上がる。



第159図　第1917A・B号土坑，第1917A号土坑出土遺物実測図

底　平坦である。

覆土　4層に分層され，自然堆積である。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子少量，炭化物微量
2　暗褐色　ローム粒子少量，ロームブロック少量，焼土粒子少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量
4　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック中量

遺物　縄文土器片27点が出土している。1は深鉢の底部から胴部の破片で，覆土から出土している。2は深鉢の頭部片で，RLの単節縄文を地文とし，2本一組の隆帯により文様を描出している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅠ式期）と考えられる。

第1917A号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第159図 1	深　鉢 縄文土器	B（9.4） C　6.5	底部から胴部の破片。胴部はほぼ直線的に立ち上がる。RLの単節縄文を地文とし，沈線により懸垂文を施している。	長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P97　10%　PL19 覆土 加曽利EⅠ式

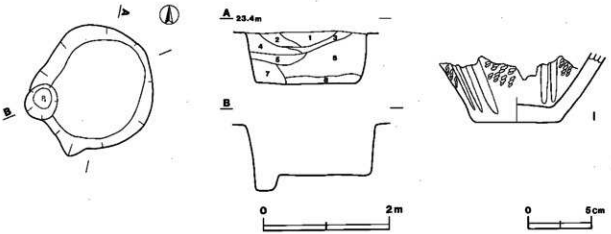
第1920号土坑（第160図）

位置　調査区の南部，F21 j5区。

重複関係　本跡は第348号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　径1.94mの不整円形で，深さは84cmである。

壁　外傾して立ち上がる。



第160図　第1920号土坑・出土遺物実測図

底　平坦である。

ピット　1か所。P_1は，西壁際に位置し，長径56cm，短径52cmの楕円形で，深さ30cmである。P_1が本跡に伴うピットであるかどうかは不明である。

覆土　8層に分層され，自然堆積である。

土層解説

1	暗褐色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量
2	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量
3	褐　色	ローム粒子多量
4	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子少量
5	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック少量
6	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量
7	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック中量
8	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック多量

遺物　縄文土器片23点が出土している。1は深鉢の底部から胴部の破片で，覆土から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。

第1920号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第160図 1	深　鉢 縄文土器	B（5.3） C　6.6	底部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がる。RLの単節縄文を地文とし，沈線により懸垂文を施している。	長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P98　10%　PL19 覆土 加曽利EⅠ式

第1927号土坑（第161図）

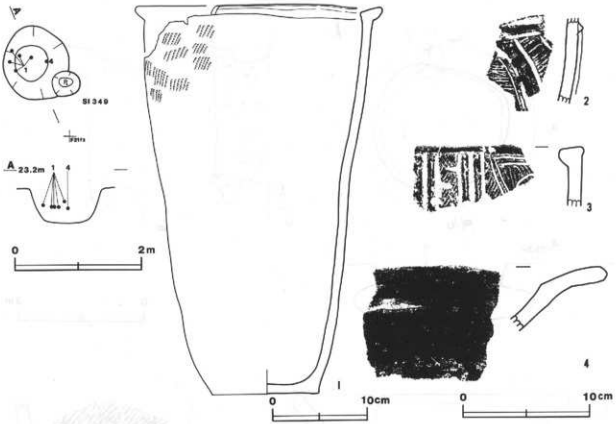
位置　調査区の北東部，F21e2区。

重複関係　本跡は第349号住居跡P_4と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径1.18m，短径1.02mの楕円形で，深さは54cmである。

長径方向　N－1°－W

壁　外傾して立ち上がる。



第161図　第1927号土坑・出土遺物実測図

底　平坦である。

遺物　縄文土器片51点が覆土から出土している。1はほぼ完形の深鉢で，一部に無節縄文を施している。2は深鉢の胴部片で，隆帯により文様を描出している。3は口唇部内面が肥厚する深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，半載竹管による平行沈線文と沈線により文様を描出している。4は浅鉢の口縁部片である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。

第1927号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第161図 1	深　鉢 縄文土器	A〔26.0〕 B　41.5 C　11.0	口縁部一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり，口唇部は外傾して突出する。一部にしの無節縄文を施している。	石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P99　85%　PL19 覆土 中峠式

第1932号土坑（第162・163図）

位置　調査区の南部，G20b9区。

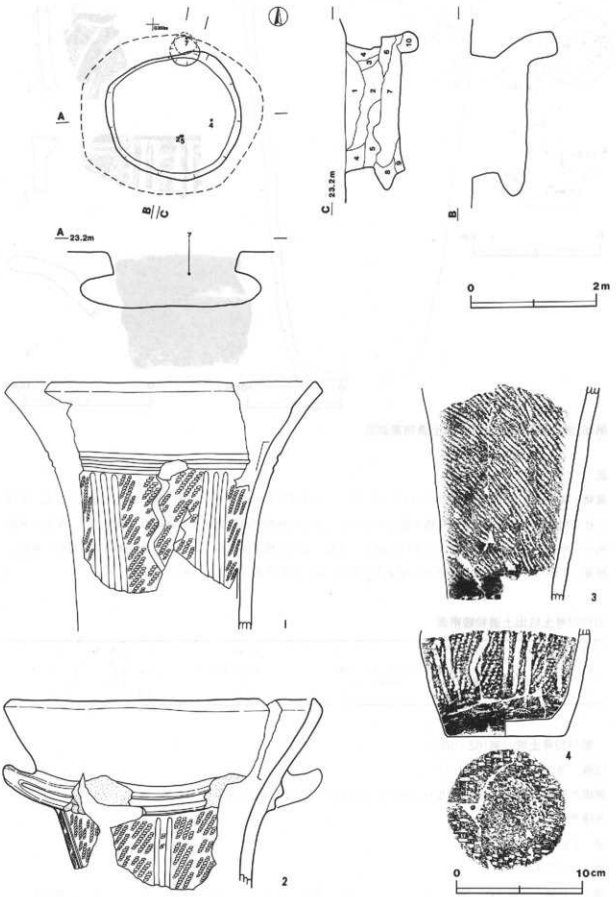
規模と平面形　長径2.20m，短径2.06mの楕円形で，深さは84cmである。

長径方向　N－70°－W

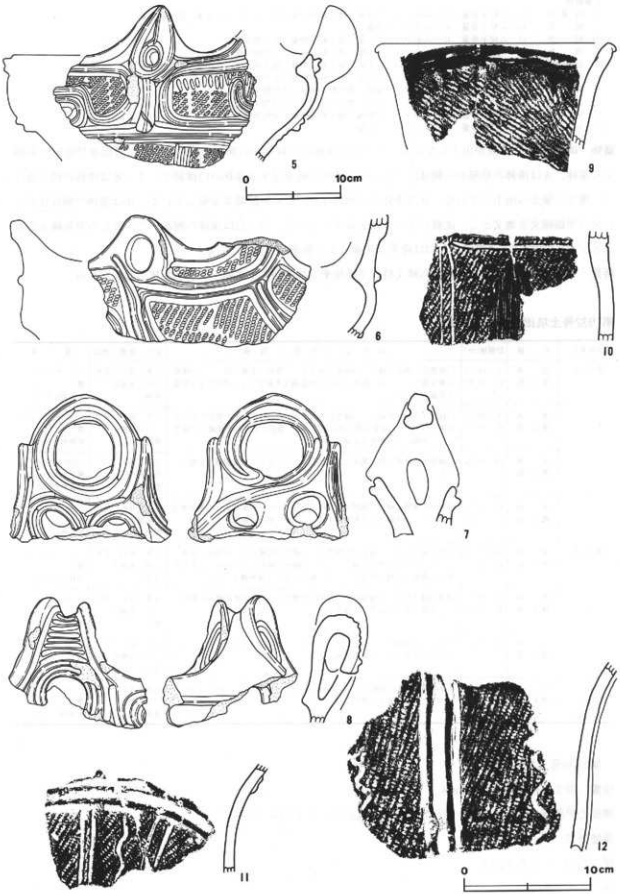
壁　袋状を呈する。

底　平坦である。

覆土　10層に分層され，第2～5層からは，多量の遺物が投棄されたような状態で出土しており，焼土粒子を含む。遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。



第162図　第1932号土坑・出土遺物実測図（1）



第163図　第1932号土坑出土遺物実測図（2）

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量，焼土小ブロック少量，炭化物少量
2　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物中量
4　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量，炭化物中量
5　暗赤褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子中量，焼土小ブロック中量，炭化物中量
6　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物中量
7　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック微量，焼土粒子微量，炭化物少量
8　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
9　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量
10　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量

遺物　縄文土器片229点が出土している。1・2は深鉢の口縁部から胴部の破片，3は口縁部及び底部が欠損する深鉢，4は深鉢の底部から胴部片，5・6は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，7・8は深鉢の把手部片で，覆土上層から出土している。9は深鉢の口縁部片で，Lの無節縄文を施している。10は深鉢の胴部片で，LRの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。11・12は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，11は沈線による懸垂文，12は隆帯と沈線により懸垂文を施している。

所見　本跡は，形状と出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅠ式期）の袋状土坑と考えられる。

第1932号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第162図 1	深鉢 縄文土器	A [24.0] B (19.8)	口縁部から胴部の破片。口縁部は外反する。頸部に沈線を巡らし，口縁部は無文帯としている。胴部はRLの単節縄文を地文とし，沈線により懸垂文を施している。	石英・長石・雲母 によい赤褐色 普通	P100 40% PL19 覆土 加曽利EⅠ式
2	深鉢 縄文土器	A [24.0] B (15.3)	口縁部から胴部の破片。口縁部は外反する。頸部に6単位の突起を有する隆帯を巡らし，口縁部は無文帯としている。胴部はRLの単節縄文を地文とし，沈線により懸垂文を施している。	石英・長石・雲母 によい赤褐色 普通	P101 35% PL19 覆土 加曽利EⅠ式
3	深鉢 縄文土器	B (16.8)	口縁部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がる。Lの無節縄文を施している。	石英・長石 赤褐色 普通	P107 50% PL20 覆土 加曽利EⅠ式
4	深鉢 縄文土器	B (8.5) C　9.4	底部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部はRLの単節縄文を地文とし，沈線により懸垂文を施している。底面に網代痕。	石英・長石・雲母 明赤褐色 普通	P106 20% PL20 覆土 加曽利EⅠ式
第163図 5	深鉢 縄文土器	A [31.0] B (15.3)	波状口縁を呈する口縁部から胴部片。口縁部は内彎する。波頂部に貫通していない孔のある突起を有している。口縁部は隆帯により区画し，沈線を有する隆帯で文様を描出している。地文はRLの単節縄文である。	石英・長石・雲母 によい赤褐色 普通	P102 10% 覆土 加曽利EⅠ式
6	深鉢 縄文土器	A [29.6] B (9.4)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内彎する。RLの単節縄文を地文とし，沈線を有する隆帯で文様を描出している。	石英・長石・雲母 によい赤褐色 普通	P103 10% 覆土 加曽利EⅠ式
7	深鉢 縄文土器	B (6.7)	把手部片。頭部底下に円孔を有し，その下部に眼鏡状の孔を有している。孔に沿って沈線を有する隆帯を施している。	石英・長石・砂粒 によい赤褐色 普通	P104 5% 覆土 加曽利EⅠ式
8	深鉢 縄文土器	B (10.4)	把手部片。頂部は双頭となり，鏡状を呈する。外面中央部に円孔があり，孔に沿って沈線を有する隆帯を施している。	石英・長石・雲母 によい赤褐色 普通	P105 5% 覆土 加曽利EⅠ式

第1934号土坑（第164図）

位置　調査区の南部，G20b6区。

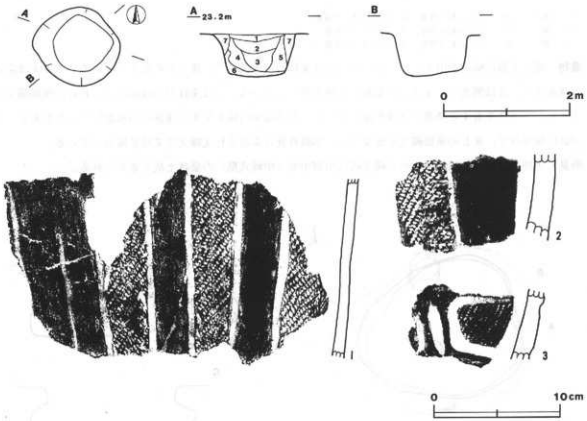
規模と平面形　長径1.40m，短径1.24mの楕円形で，深さは66cmである。

長径方向　N－86°－W

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

覆土　7層に分層され，自然堆積と考えられる。



第164図　第1934号土坑・出土遺物実測図

土層解説
1　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
2　暗　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
3　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
4　褐　　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
5　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
6　にぶい褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，炭化物微量
7　明　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量，炭化物微量

遺物　縄文土器片377点が出土している。1・2は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線による幅広の沈線文間を磨り消している。3は深鉢の頸部片で，RLの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。

第1937号土坑（第165図）

位置　調査区の南部，G20b5区。

規模と平面形　長径2.60m，短径2.24mの楕円形で，深さは98cmである。

長径方向　N－77°－W

壁　袋状を呈する。

底　平坦である。

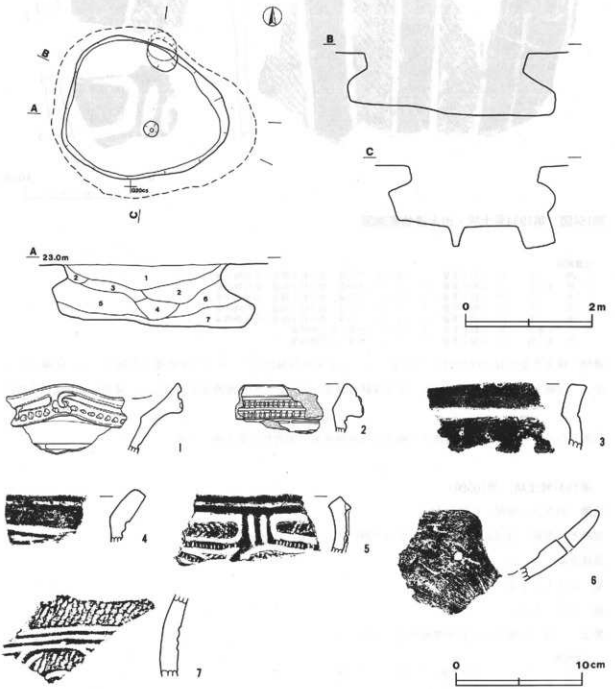
覆土　7層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　褐　灰　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
2　灰　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
3　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
4　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック中量

5　褐　　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
6　褐　　色　ローム粒子少量，ロームブロック少量
7　褐　　色　ローム粒子多量，ロームブロック多量

遺物　縄文土器片86点が出土している。1・2は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。3・4は深鉢の口縁部片で，3は無文で，4は口唇部直下を無文帯としている。5は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，キザミを有する隆帯で文様を施している。6は波状口縁を呈する浅鉢の口縁部片で，孔がある。7は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，半截竹管による平行沈線文で文様を描出している。

所見　本跡は，形状と出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）の袋状土坑と考えられる。



第165図　第1937号土坑・出土遺物実測図

第1937号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第165図 1	深鉢 縄文土器	B（6.0）	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。肥厚した口縁部に沈線を巡らし，波頂部で鹿手状となる。沈線の下部には刺突文を巡らしている。	石英・長石・砂粒 赤褐色 普通	P109 5% 覆土 中峠式併行 SK1941の2と同一
2	深鉢 縄文土器	B（4.0）	口縁部片。口縁部は断面が三角形を呈し，肥厚する。口縁部には沈線間にキザミが施されている。	石英・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P110 5% 覆土 中峠式併行

第1941号土坑（第166図）

位置　調査区の南部，G19c8区。

重複関係　本跡は第93号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長径2.16m，短径1.50mの楕円形で，深さは70cmである。

長径方向　N－56°－W

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

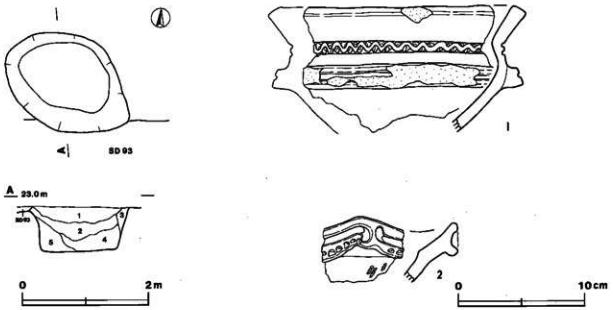
覆土　5層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物中量
2　褐　色　ローム粒子少量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
3　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量

遺物　縄文土器片17点が出土している。1は鉢の口縁部から胴部片，2は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。



第166図　第1941号土坑・出土遺物実測図

第1941号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第166図 1	鉢 縄文土器	A〔18.6〕 B（6.7）	口縁部から胴部の破片。胴部は内彎して立ち上がり，口縁部は外傾する。胴部には沈線を有する隆帯を巡らしている。胴部には沈線間を交互刺突することにより連続コの字状文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P114　25% 覆土　赤彩 中峠式併行
2	深　鉢 縄文土器	B（5.6）	口縁部片。波状口縁を呈し，口縁部は外傾する。肥厚した口縁部に沈線を巡らし，波頂部で瘤手状となる。沈線の下部には刺突文を巡らしている。	石英・長石・砂粒 赤褐色 普通	P115　5% 覆土 中峠式併行

第1944号土坑（第167図）

位置　調査区の南部，G19d8区。

規模と平面形　径1.80mのほぼ円形で，深さは82cmである。

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

覆土　7層に分層され，遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　　ローム粒子多量，炭化物中量
2　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
3　明褐色　　ローム粒子多量，ロームブロック多量
4　褐　色　　ローム粒子多量，ロームブロック少量
5　暗　色　　ローム粒子少量
6　暗褐色　　ローム粒子少量
7　褐　色　　ローム粒子多量，ロームブロック中量

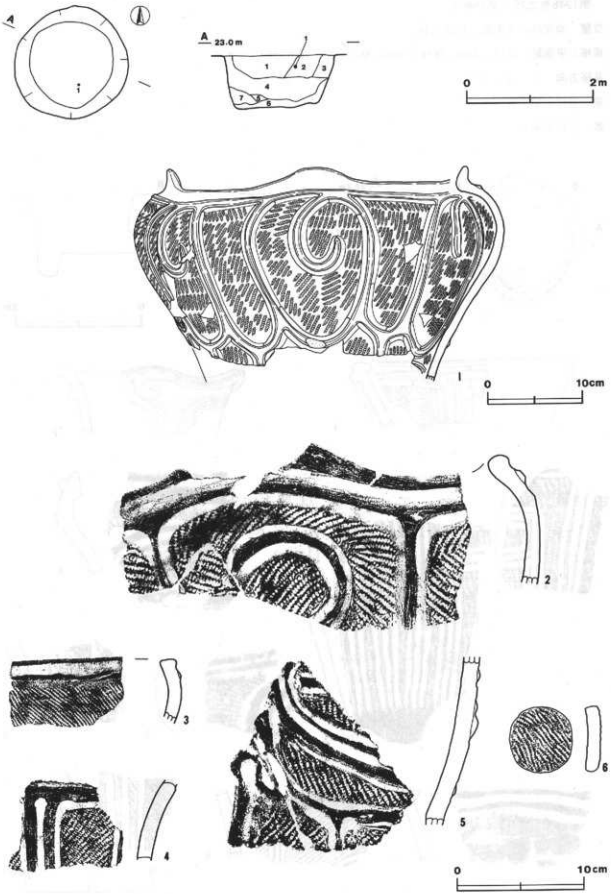
遺物　縄文土器片49点，土器片円盤1点が出土している。1は胴下半部を欠損する深鉢で，覆土上層から逆位の状態で出土している。2は深鉢の口縁部片，5は深鉢の胴部片で，単節縄文を地文とし，隆帯により渦巻文を施している。3は深鉢の口縁部片で，LRの単節縄文を地文とし，口唇部直下に微隆帯を巡らしている。4は深鉢の胴部片で，沈線により逆U字状文を施し，RLの単節縄文を充填している。6は土器片円盤である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。

第1944号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第167図 1	深　鉢 縄文土器	A〔31.2〕 B〔22.7〕	胴下半部欠損。4単位の波状口縁を呈し，口縁部は内彎する。口縁部に隆帯により6単位の渦巻文を施し，区画文内にRLの単節縄文を充填している。	長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P116 60% PL20 覆土上層 加曽利E式

図版番号	器　種	計測値(cm)			重　量	現存率	形状及び文様の特徴	備　考
		長　さ	幅	厚　さ	(g)	(%)		
第167図　6	土器片円盤	5.2	4.9	1.2	36	100	RLの単節縄文。	DP23



第167図　第1944号土坑・出土遺物実測図

第1948号土坑（第168図）

位置　調査区の南東部，F21 j 1区。

規模と平面形　長径2.02m，短径1.56mの楕円形で，深さは92cmである。

長径方向　N－11°－E

壁　袋状を呈する。

底　平坦である。

第168図　第1948号土坑・出土遺物実測図

ピット　1か所。P_1は南壁寄りに位置し，長径38cm，短径34cmの楕円形で，深さ45cmである。

覆土　10層に分層され，遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

1	褐　　色	ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物少量	
2	褐　　色	ローム粒子多量，焼土粒子中量，炭化物中量	
3	褐　　色	ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物少量	
4	明 褐 色	ローム粒子多量，ロームブロック少量	
5	明 褐 色	ローム粒子多量，ロームブロック中量	
6	暗 褐 色	ローム粒子多量，ロームブロック少量	
7	にぶい褐色	ローム粒子多量，ロームブロック中量	
8	暗 褐 色	ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量	
9	暗 褐 色	ローム粒子多量，焼土粒子微量，炭化物微量	
10	褐　　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量，炭化物微量	

遺物　縄文土器片149点が，主に覆土上層から出土している。1・2は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。3は頸部がくびれる深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。4・5は深鉢の口縁部片で，LRの単節縄文を地文とし，2本一組の隆帯により文様を描出している。7は外傾する深鉢の口縁部片で，口唇部直下に隆帯を巡らしている。6・8・9は深鉢の胴部片で，6・9はRLの単節縄文，8はLの無節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。

所見　本跡は，形状と出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅠ式期）の袋状土坑と考えられる。

第1948号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第168図 1	深　鉢 縄文土器	A (17.4) B (5.6)	口縁部片。口縁部は外傾し，口唇部内面は肥厚する。RLの単節縄文を地文とし，隆帯により区画文を施している。	長石・砂粒 橙色 普通	P117 10% PL20 覆土 加曽利EⅠ式
2	深　鉢 縄文土器	A (14.6) B (5.7)	4単位の波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部直下にキザミを有する隆帯を巡らし，波頂部直下に爪手文を垂下させている。Lの無節縄文を施している。	石英・長石・雲母 黒褐色 普通	P118 10% PL20 覆土 加曽利EⅠ式併行

第1950号土坑（第169図）

位置　調査区の南部，G19c7区。

重複関係　本跡は第373号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径2.06m，短径1.96mの不整円形で，深さは24cmである。

長径方向　N－62°－E

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

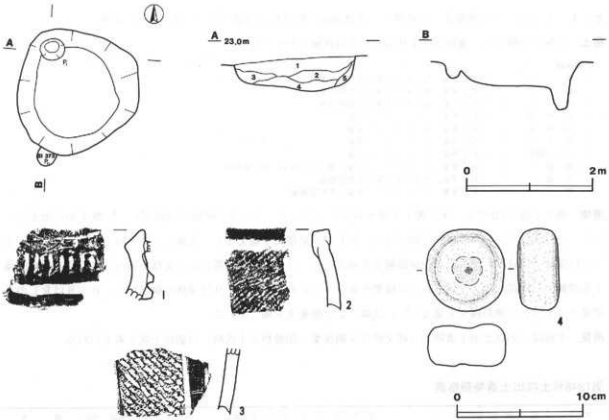
ピット　1か所。P_1は北壁際に位置し，長径40cm，短径34cmの楕円形で，深さ36cmである。

覆土　5層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	褐　　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量	
2	褐　　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量	
3	褐　　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量	
4	褐　　色	ローム粒子中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量	
5	褐　　色	ローム粒子多量，ロームブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量	

遺物　縄文土器片16点，磨石1点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で，隆帯により文様を描出し，縦位の沈線を充填している。2は深鉢の口縁部片で，Lの無節縄文を地文とし，口唇部直下に沈線を巡らしている。3は深鉢の胴部片で，LRの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文間を磨り消している。4は磨



第169図　第1950号土坑・出土遺物実測図

石である。

所見　本跡の時期は，出土遺物が少量であるため明確でないが，出土遺物と覆土が縄文時代中期のものと類似することから縄文時代中期と考えられる。

第1950号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第169図 4	磨石	6.5	6.2	3.3	222	安山岩	Q46 覆土 円石兼用

第1951号土坑（第170図）

位置　調査区の南東部，F21 j 2区。

規模と平面形　長径1.88m，短径1.68mの楕円形で，深さは92cmである。

長径方向　N－5°－W

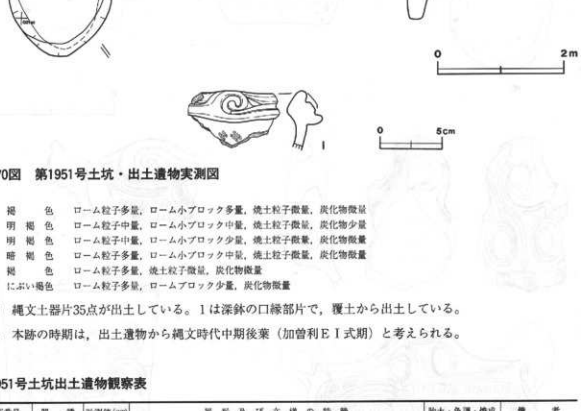
壁　袋状を呈する。

底　平坦である。

ピット　1か所。P_1は北壁寄りに位置し，長径46cm，短径34cmの楕円形で，深さ46cmである。

覆土　8層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量，焼土粒子微量，炭化物微量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量



第170図　第1951号土坑・出土遺物実測図

3　褐　　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量，焼土粒子微量，炭化物微量
4　明　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
5　明　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
6　暗　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
7　褐　　色　　ローム粒子多量，焼土粒子微量，炭化物微量
8　にぶい褐色　　ローム粒子多量，ロームブロック少量，炭化物微量

遺物　縄文土器片35点が出土している。1は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。

第1951号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第170図 1	深　体 縄文土器	B（4.8）	口縁部片。口縁部は内弯する。撚糸により渦巻文を施し，ＲＬの単節縄文を施している。	石英・長石・雲母 橙色 普通	P120　5% 覆土 加曽利ＥⅠ式

第1952号土坑（第171図）

位置　調査区の南部，G19b6区。

重複関係　本跡は第373号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径1.96m，短径1.68mの楕円形で，深さは46cmである。

長径方向　N－19°－E

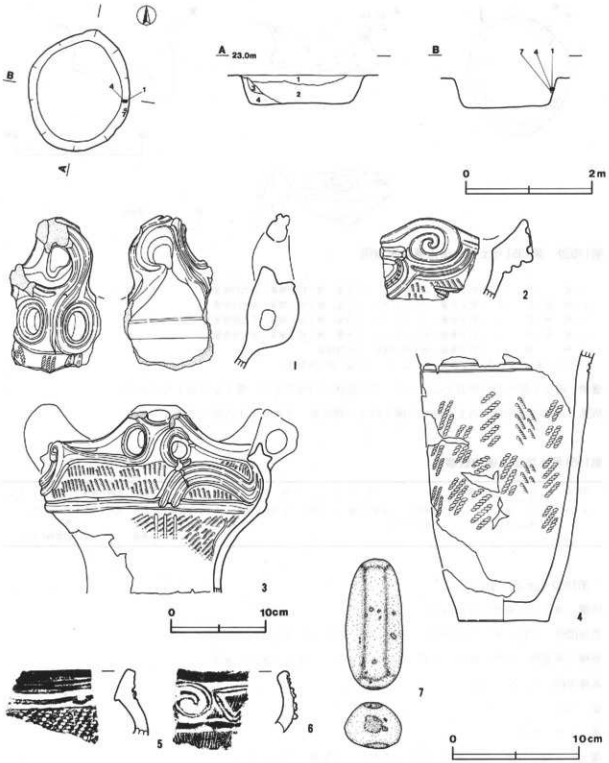
壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

覆土　4層に分層され，遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説
1　暗　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子中量，焼土小ブロック少量，炭化物微量
2　褐　　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
3　褐　　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量
4　にぶい褐色　　ローム粒子多量，ロームブロック中量

遺物　縄文土器片103点，敲石1点が，主に覆土上層（第2層）から投棄されたような状態で出土している。1は眼鏡状把手を有する深鉢の口縁部片で，覆土上層（第2層）から出土している。2は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。3は深鉢の眼鏡状把手を有する深鉢の口縁部から胴部の破片で，覆土から出土している。4は深鉢の底部から頸部の破片で，覆土上層（第2層）から出土している。5は深鉢の



第171図　第1952号土坑・出土遺物実測図

口縁部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線間に交互刺突文を施している。6は深鉢の口縁部片で，撚糸文を地文とし，沈線を有する隆帯により渦巻文を施している。7は敲石である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。

第1952号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第171図 1	深鉢 縄文土器	B (12.3)	鼎鍵状把手を有する口縁部。口縁部は外傾する。孔は沈線を有する隆帯に沿う擦取りしている。	石英・長石・雲母 微色 普通	P121 5% 覆土上層 加曽利EⅠ式
2	深鉢 縄文土器	B (6.4)	波状口縁を呈する口縁部片。波頂部に隆帯による調巻文を施している。Rの無節縄文を地文としている。	長石・砂粒 にぶい橙色 普通	P122 5% 覆土 加曽利EⅠ式
3	深鉢 縄文土器	A [22.0] B (19.3)	3単位の鼎鍵状把手を有する口縁部から胴部片。胴部は外反して立ち上がり，口縁部は内彎する。頂部に隆帯を巡らし，口縁部文様帯を形成している。文様帯内には2本一組の隆帯で文様を描出している。胴部には沈線により懸垂文を施している。地文はRの無節縄文である。	石英・長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P124 40% PL20 覆土 加曽利EⅠ式
4	深鉢 縄文土器	B (21.3) C 7.2	底部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がる。頂部に半截竹管による平行沈線文を巡らしている。胴部にRLの単節縄文とLの無節縄文を施している。	長石・雲母・砂粒 明赤褐色 普通	P123 50% PL20 覆土上層 中峠式

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第171図 7	敲石	10.3	4.6	3.5	241	緑色凝灰岩	Q47 覆土上層

第1954号土坑（第172図）

位置　調査区の南部，G19a5区。

重複関係　本跡は第377号住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形　長径1.82m，短径1.36mの楕円形で，深さは84cmである。

長径方向　N－40°－W

壁　袋状を呈する。

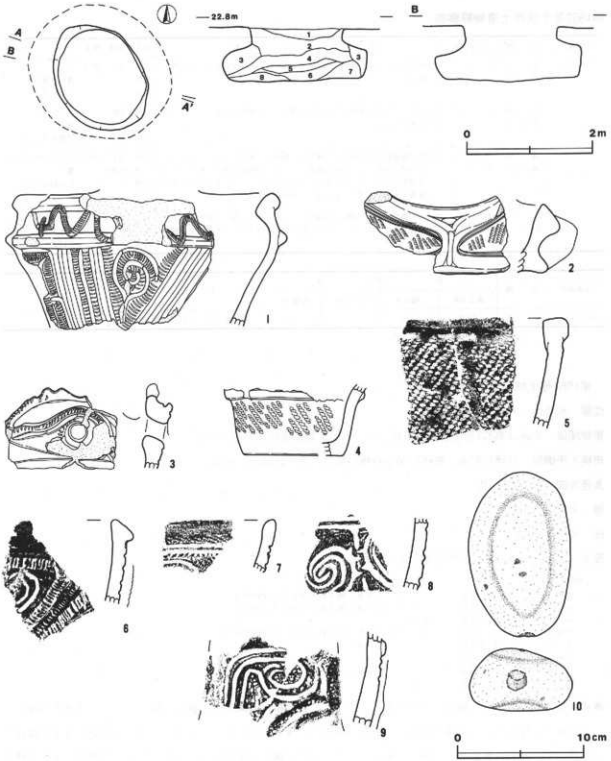
底　平坦である。

覆土　8層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
2　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量，炭化物少量
3　暗褐色　ローム粒子多量，炭化物中量
4　黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子中量，炭化物多量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
8　褐　色　ローム粒子多量

遺物　縄文土器片76点，敲石1点が出土している。1は深鉢の口縁部から胴部の破片，2・3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，4は深鉢の底部から胴部の破片で，覆土から出土している。5は口唇部が肥厚する深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を縦位に施している。6は深鉢の口縁部片で，キザミを有する隆帯により文様を描出し，隆帯に沿って爪形文を施している。7は深鉢の口縁部片で，RLの単節縄文を地文とし，半截竹管による平行沈線文で文様を描出している。8は深鉢の胴部片で，沈線により文様を描出している。9は深鉢の把手部片で，RLの単節縄文を地文とし，沈線により文様を描出している。10は敲石である。

所見　本跡は，形状と出土遺物から縄文時代中期前葉（阿玉台Ⅳ式期）の袋状土坑と考えられる。



第172図　第1954号土坑・出土遺物実測図

第1954号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 1	深鉢 縄文土器	A (20.0) B (10.9)	口縁部から胴部の破片。把手部欠損。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内傾する。口縁部は隆帯により口縁部文様帯を形成し，爪形文を有する隆帯により文様を描出している。胴部には沈線間に爪形文を施している。	石英・長石・雲母 灰褐色 普通	P125 15% PL20 覆土 勝坂Ⅲ式

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第172図 2	深鉢 縄文土器	B（6.2）	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。口縁部は隆帯により区画文を施し，隆帯に沿って半截竹管により平行沈線文を施している。区画文内にはRの無節縄文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P126 5% 覆土 阿玉台Ⅳ式
3	深鉢 縄文土器	B（5.4）	小波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部直下に円孔があり，口唇部より円孔に沿ってキザミを有する隆帯を施している。	石英・長石・雲母 灰褐色 普通	P127 5% PL20 覆土 勝坂Ⅲ式
4	深鉢 縄文土器	B（5.6） C［8.0］	底部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がる。RLの単節縄文を地文にしている。	石英・長石・砂粒 にぶい黄橙色 普通	P128 10% 覆土

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第172図 10	敲石	13.1	8.0	5.0	777	安山岩	Q48 覆土

第1957号土坑（第173図）

位置 調査区の南東部，F20ｊｏ区。

規模と平面形 長径1.90m，短径1.64mの楕円形で，深さは84cmである。

長径方向 N－25°－W

壁 外傾して立ち上がる。西壁の一部が外側にえぐれている。

底 平坦である。

覆土 12層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説

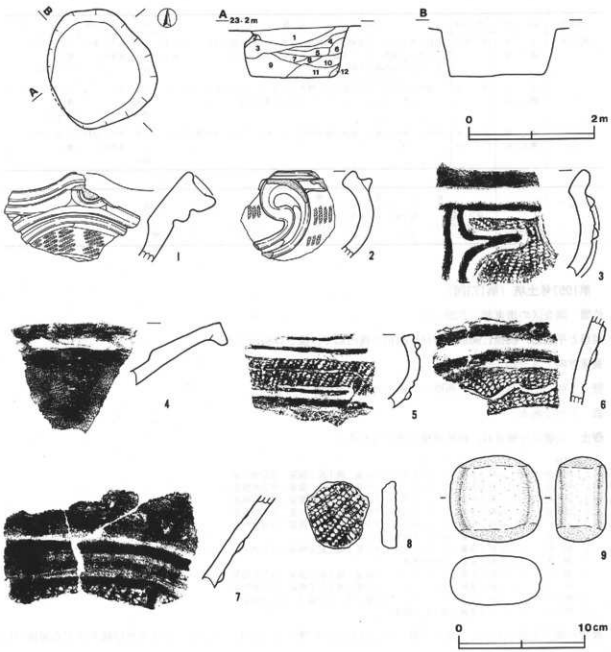
1 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
2 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
3 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
4 黒褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子中量，炭化物多量
5 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
6 褐色 ローム粒子多量，焼土粒子微量，炭化物少量
7 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
8 褐色 ローム粒子多量，炭化物微量
9 褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量
10 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
11 褐色 ローム粒子中量，ロームブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量
12 褐色 ローム粒子多量，焼土粒子微量

遺物 縄文土器片20点，土器片円盤１点，磨石１点が覆土から出土している。１は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，２は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。３・５は深鉢の口縁部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，隆帯により文様を描出している。４は浅鉢の口縁部片で，口唇部が肥厚している。６・７は深鉢の頸部片で，隆帯を巡らしている。８は土器片円盤で，９は磨石である。

所見 本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。

第1957号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第173図 1	浅鉢 縄文土器	B（8.8）	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部直下に隆帯により渦巻文を施している。地文はRLの単節縄文である。	石英・長石・スコリア にぶい赤褐色 普通	P129 5% 覆土 加曽利ＥⅠ式
2	深鉢 縄文土器	B（8.8）	口縁部片。口縁部は外傾する。口縁部直下に隆帯を巡らし，沈線を有する隆帯により文様を描出している。地文はRLの単節縄文である。	石英・長石・スコリア 暗褐色 普通	P130 5% 覆土 加曽利ＥⅠ式



第173図　第1957号土坑・出土遺物実測図

図版番号	器　種	計測値（cm）			重　量	残存率	形状及び文様の特徴	備　考
		長　さ	幅	厚　さ	（g）	（%）		
第173図　8	土器片円盤	5.3	5.1	1.15	(34)	90	RLの単節縄文。	DP24

図版番号	器　種	計　測　値				石　質	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第173図　9	磨　石	6.9	7.3	4.1	366	安　山　岩	Q49　覆土

第1961号土坑（第174図）

位置　調査区の南部，F19ｊ4区。

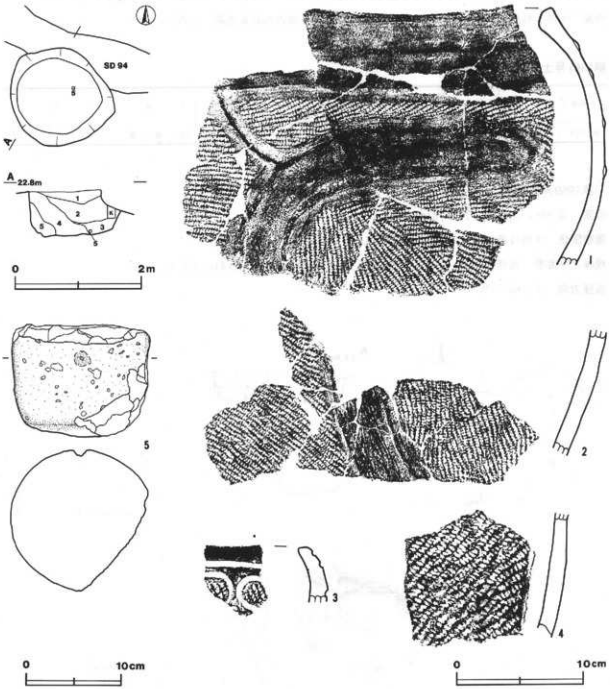
重複関係　本跡は第94号溝と重複する。本跡は第94号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長径1.68m，短径1.50mの楕円形で，深さは72cmである。

長径方向　N－48°－W

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。



第174図　第1961号土坑・出土遺物実測図

覆土　5層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック多量，焼土粒子少量，炭化物少量
2　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック多量，焼土小ブロック微量，炭化物微量
3　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土小ブロック微量，炭化物微量
4　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土小ブロック微量，炭化物少量
5　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物微量

遺物　縄文土器片56点，石棒片１点が出土している。１は深鉢の口縁部片，２は深鉢の胴部片で，微隆帯により文様を描出し，文様内にＬＲの単節縄文を充塡している。３は深鉢の口縁部片で，口唇部直下に沈線を巡らし，沈線により区画文を描出している。文様内にはＲＬの単節縄文を充塡している。４は深鉢の胴部片で，ＲＬの単節縄文を地文とし，沈線による懸垂文を施している。５は石棒片で，覆土下層から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）と考えられる。

第1961号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値				石　質	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第174図　5	石　棒	(11.7)	14.8	14.8	(3520)	安　山　岩	Q50　覆土下層

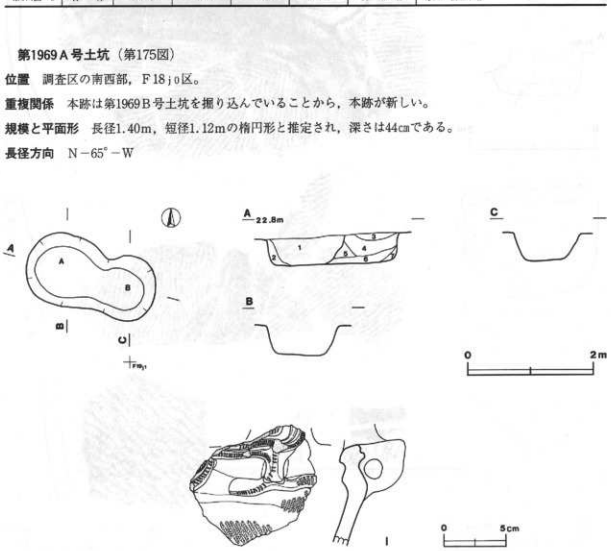
第1969Ａ号土坑（第175図）

位置　調査区の南西部，Ｆ18ｊ0区。

重複関係　本跡は第1969Ｂ号土坑を掘り込んでいることから，本跡が新しい。

規模と平面形　長径1.40m，短径1.12mの楕円形と推定され，深さは44cmである。

長径方向　Ｎ－65°－Ｗ



第175図　第1969Ａ・Ｂ号土坑，第1969Ａ号土坑出土遺物実測図

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

覆土　2層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
2　褐　色　　ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物　縄文土器片13点が覆土から出土している。1は眼鏡状把手を有する深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。

第1969A号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第175図 1	深　鉢 縄文土器	B（9.6）	眼鏡状把手を有する口縁部片。把手上部欠損。口縁部はわずかに外傾する。キザミを有する隆帯により文様を描出している。RLの羽節縄文を施している。	石英・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P131　5% 覆土 中峠式

第1970号土坑（第176図）

位置　調査区の南西部，F18j5区。

規模と平面形　長径1.80m，短径1.54mの楕円形で，深さは50cmである。

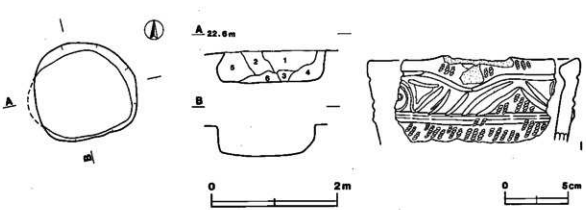
長径方向　N－86°－W

壁　ほぼ垂直に立ち上がる。西壁の一部は内傾している。

底　平坦である。

覆土　6層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
2　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
3　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物微量
4　褐　色　　ローム粒子中量，焼土粒子微量，炭化物微量
5　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
6　褐　色　　ローム粒子多量，焼土粒子微量，炭化物微量



第176図　第1970号土坑・出土遺物実測図

遺物　縄文土器片14点が覆土から出土している。1は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期中葉（中峠式期）と考えられる。

第1970号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第176図 1	深　鉢 縄文土器	A (16.6) B (6.6)	口縁部片。把手部欠損。口縁部に隆帯を巡らし，口縁部文様帯を形成している。文様帯内は沈線により文様を描出している。地文は R L の単節縄文である。	長石・雲母・砂粒に赤い鬆色 普通	P132 10%　P L20 覆土 中峰式

第1976号土坑（第177図）

位置　調査区の南西部，F19ｉ1区。

規模と平面形　長径1.30m，短径1.18mの楕円形で，深さ56cmである。

長径方向　N－35°－W

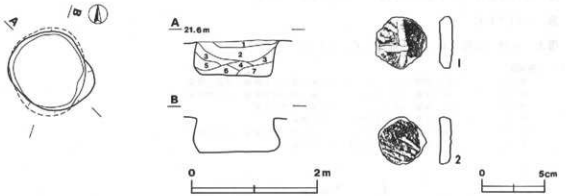
壁　袋状を呈する。

底　平坦である。

覆土　7層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　褐　色　　ローム粒子中量，焼土粒子微量
2　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
3　褐　色　　ローム粒子多量
4　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
5　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量
6　褐　色　　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
7　褐　色　　ローム粒子中量，ロームブロック少量



第177図　第1976号土坑・出土遺物実測図

遺物　縄文土器片178点，土器片円盤２点が覆土から出土している。１・２は土器片円盤である。

所見　本跡は，形状と出土遺物から縄文時代中期の袋状土坑と考えられる。

第1976号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備　考
第177図　1	土器片円盤	4.1	4.0	1.1	21	100	R L の単節縄文。	D P25
2	土器片円盤	3.8	3.8	1.0	15	100	R の無節縄文。	D P26

第1978号土坑（第178図）

位置　調査区の南西部，F19h1区。

規模と平面形　長径1.30m，短径1.20mの楕円形で，深さは60cmである。

長径方向　N－60°－E

壁　ほぼ垂直に立ち上がる。

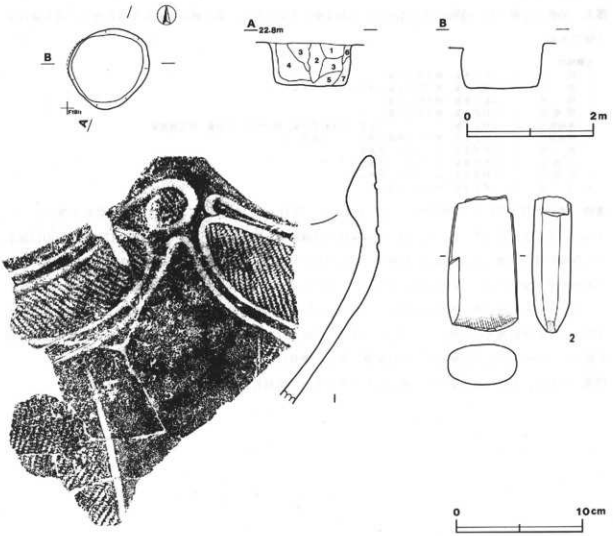
底　平坦である。

覆土　7層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説

1	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
2	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
3	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
4	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
5	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量
6	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック少量，炭化物微量
7	褐　色	ローム粒子中量，ロームブロック中量，炭化物微量

遺物　縄文土器片26点，磨製石斧1点が覆土から出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，波頂下に沈線により渦巻文を描出し，沈線により区画文を描出している。口縁部の区画内にはＲＬの単節縄文を



第178図　第1978号土坑・出土遺物実測図

横位に，胴部の区画内にはＲＬの単節縄文を縦位に充填している。２は磨製石斧である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅢ式期）と考えられる。

第1978号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第178図 2	磨製石斧	(10.8)	5.6	3.1	(382)	緑色凝灰岩	Q51 覆土

第1982号土坑（第179～183図）

位置　調査区の南西部，Ｆ18ｉ8区。

重複関係　本跡は第94号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長径2.14m，短径1.80mの楕円形で，深さは114cmである。

長径方向　Ｎ－10°－Ｅ

壁　袋状を呈する。

底　平坦である。

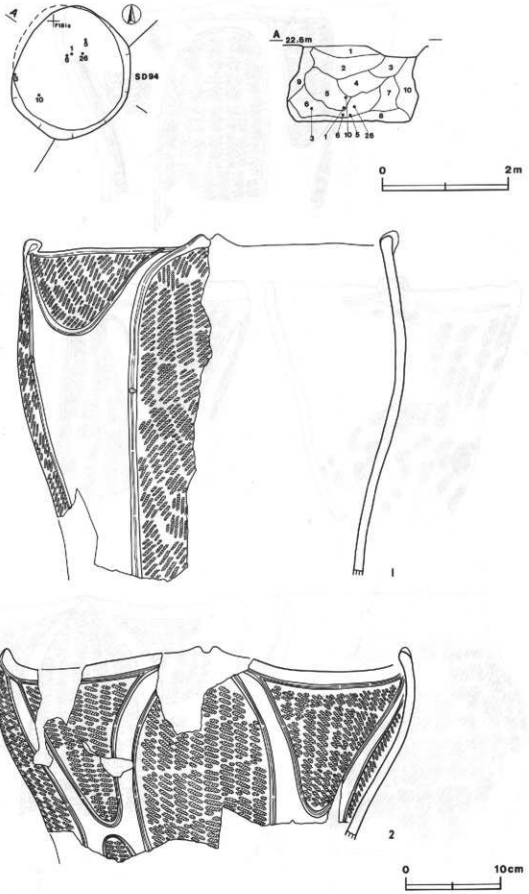
覆土　10層に分層され，遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。第５層は獣骨片を含む層で，第６層は焼土層である。

土層解説

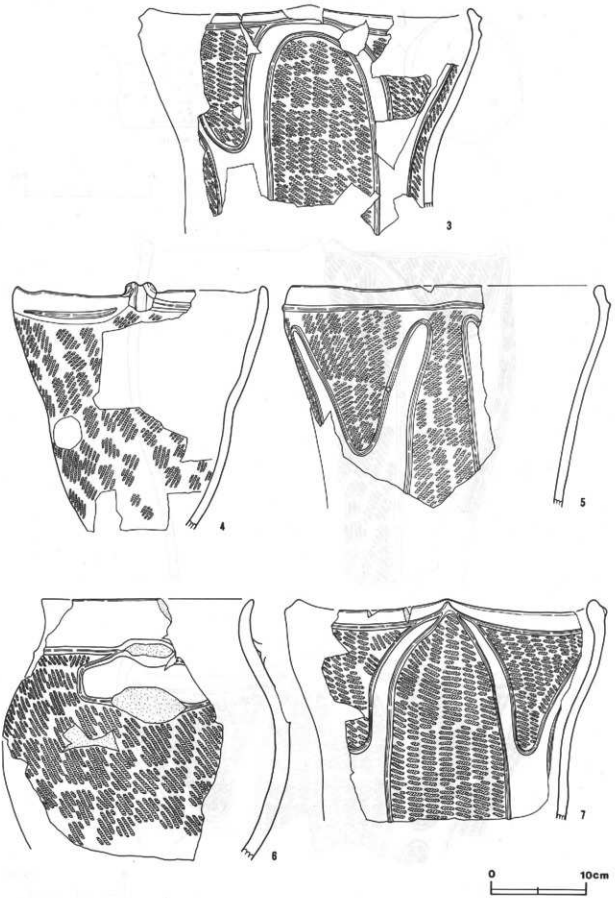
1	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子少量
2	褐　色	ローム粒子中量，焼土粒子中量，焼土小ブロック少量
3	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子中量
4	暗褐色	ローム粒子多量，焼土粒子中量
5	極暗褐色	ローム粒子多量，ロームブロック少量，焼土粒子中量，焼土ブロック中量，炭化物微量
6	暗赤褐色	ローム粒子多量，焼土粒子多量，焼土ブロック多量
7	褐　色	ローム粒子多量，ロームブロック多量
8	明褐色	ローム粒子多量，ロームブロック多量
9	明褐色	ローム粒子中量，ロームブロック多量
10	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子中量

遺物　縄文土器片557点，土製耳飾り１点，石皿４点，磨石１点，石棒１点，石鏃１点，獣骨片が覆土から出土している。１～５，７～11，13・14・16は深鉢の口縁部から胴部の破片，６・12・15・17は広口壺の口縁部から胴部の破片，18・20は深鉢の口縁部片，19は頂部が欠損するものの橋状把手を有する深鉢の口縁部片，22は蛇頭状の突起を有する深鉢の把手部片，21・23は深鉢の底部から胴部の破片である。１・10は第５層から，３・５・６・26は第６層から出土している。24は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，沈線による区画文内にＬＲの単節縄文を充填している。25は深鉢の口縁部片で，Ｌの無節縄文を縦位に施している。26は土製耳飾り，27は石皿片，28は磨石片，29は石鏃である。獣骨はシカである。

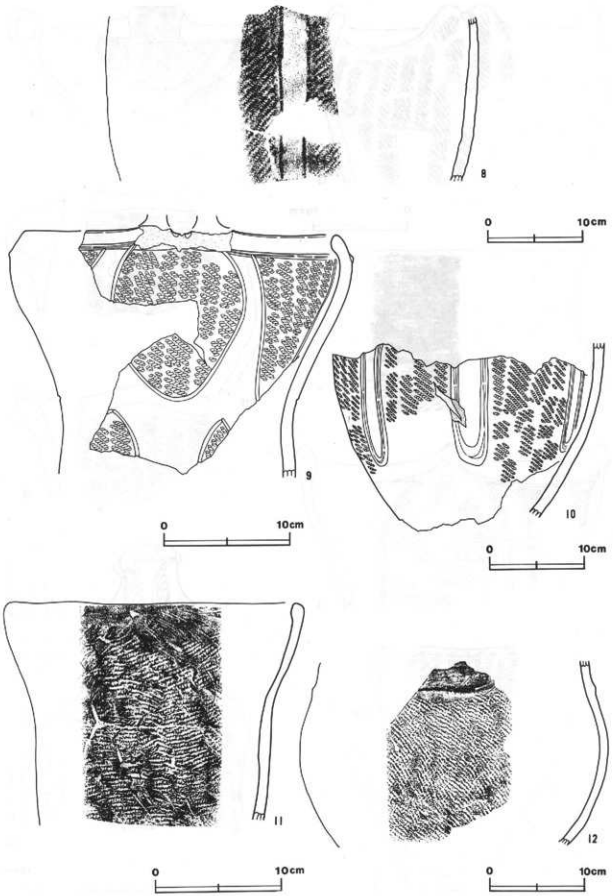
所見　本跡は，形状と出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅣ式期）の袋状土坑と考えられる。



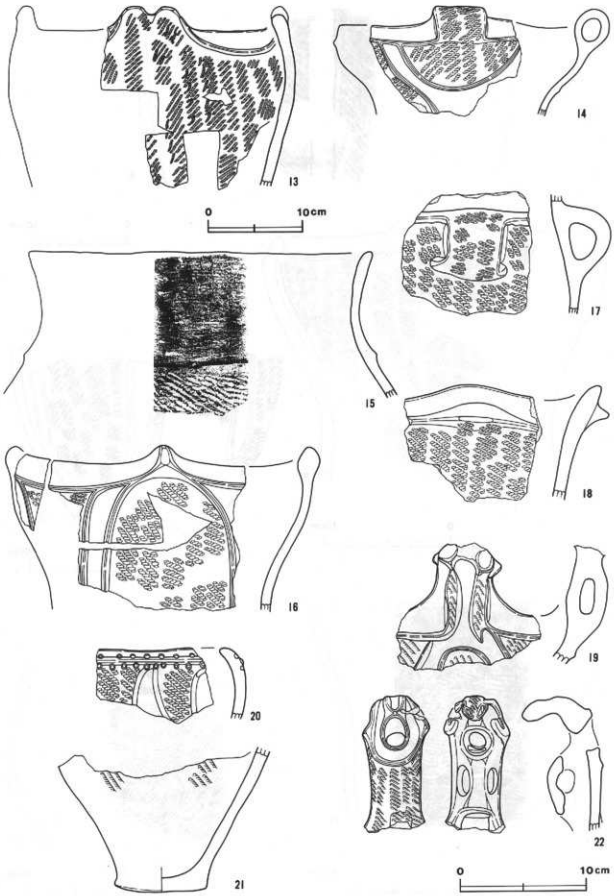
第179図　第1982号土坑・出土遺物実測図（1）



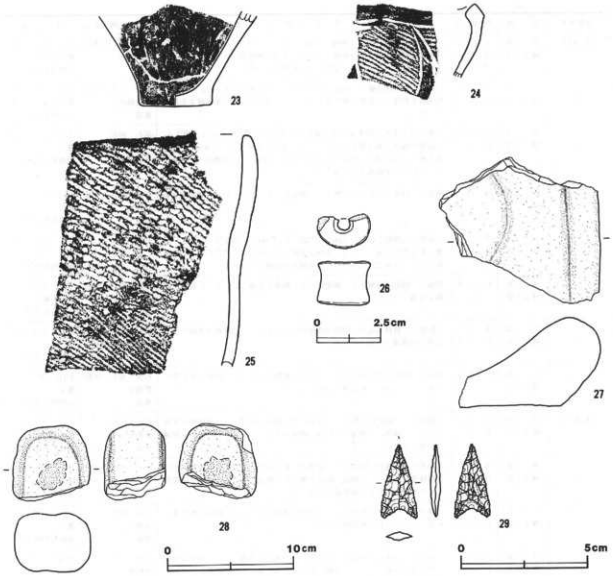
第180図　第1982号土坑出土遺物実測図（2）



第181図　第1982号土坑出土遺物実測図（3）



第182図　第1982号土坑出土遺物実測図（4）



第183図　第1982号土坑出土遺物実測図（5）

第1982号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第179図 1	深　鉢 縄文土器	A〔38.4〕 B〔36.3〕	4単位の小波状口縁を呈する口縁部から胴部の破片。口縁部はわずかに内弯する。波頂部は双頭となる。文様は微隆帯により描出し、波頂部を起点とする逆U字状文とU字状文を入り組ませる1帯構成で、区画文内にはRLの単節縄文を充填している。	石英・長石・雲母 赤褐色 普通	P133 30% PL21 覆土下層 加曾利E Ⅳ式
2	深　鉢 縄文土器	A〔43.9〕 B〔22.8〕	4単位の小波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内弯する。波頂部は双頭となる。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。文様は微隆帯により描出し、波頂部を起点とする逆U字状文とU字状文を入り組ませ、波底部下の文様は2帯となる。区画文内にはLRの単節縄文を充填している。	長石・砂粒 灰褐色 普通	P134 30% PL21 覆土 加曾利E Ⅳ式
第180図 3	深　鉢 縄文土器	A〔32.6〕 B〔24.0〕	4単位の小波状口縁を呈する口縁部から胴部片。口縁部はわずかに内弯する。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。文様は微隆帯により描出し、波頂部を起点とする逆U字状文とU字状文を入り組ませる1帯構成で、区画文内にはLRの単節縄文を充填している。	長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P135 40% PL21 覆土下層 加曾利E Ⅳ式
4	深　鉢 縄文土器	A〔25.8〕 B〔26.5〕	口縁部から胴部の破片。胴部は内弯して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部に双頭の突起を有し、口縁部に微隆帯を巡らしている。胴部にはRLの単節縄文を施している。	長石・砂粒 灰黄褐色 普通	P136 50% PL21 覆土 加曾利E Ⅳ式

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第180図 5	深鉢 縄文土器	A (32.4) B (23.6)	口縁部から胴部の破片。胴部は外傾して立ち上がり，口縁部は内傾する。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。文様は微隆帯によりW字状文を施す1帯構成で，区画文内にはＬＲの単節縄文を充填している。	石英・長石・雲母 暗赤褐色 普通	P137 30% PL21 覆土下層 加曽利ＥⅣ式
6	広口壺 縄文土器	A (22.0) B (27.8)	口縁部から胴部の破片。胴部は球形を呈し，口縁部は外反する。口縁部に無文帯を形成し，肩部に橋状把手を有する。胴部にＬＲの単節縄文を施している。	石英・長石・砂粒 灰黄褐色 普通	P139 40% PL21 覆土下層 加曽利ＥⅣ式
7	深鉢 縄文土器	A (31.0) B (24.0)	4単位の小波状口縁を呈する口縁部から胴部の破片。口縁部は内弾する。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。文様は微隆帯により描出し，波頂部を起点とする逆U字状文とU字状文を入り組ませる1帯構成で，区画文内にはＬＲの単節縄文を充填している。	長石・砂粒 黒褐色 普通	P138 20% PL21 覆土 加曽利ＥⅣ式
第181図 8	深鉢 縄文土器	B (17.4)	胴部片。胴部はわずかに内弾する。微隆帯を垂下させ，ＲＬの単節縄文を施している。	石英・長石・雲母 明褐色 普通	P140 15% 覆土 加曽利ＥⅣ式
9	深鉢 縄文土器	A (24.6) B (19.6)	口縁部から頸部の破片。口縁部は内弾する。口縁部に微隆帯を巡らし，幅狭の無文帯を形成している。文様は沈線により描出し，頸部を境に2帯構成となる。区画文内にはＬＲの単節縄文を充填している。	長石・砂粒 にぶい橙色 普通	P141 20% PL21 覆土 加曽利ＥⅣ式
10	深鉢 縄文土器	B (19.6)	胴部片。胴部は内弾する。微隆帯により懸垂文を施している。ＬＲの単節縄文を施している。	石英・長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P142 20% 覆土中層 加曽利ＥⅣ式
11	深鉢 縄文土器	A (22.7) B (17.2)	口縁部から胴部の破片。胴部は直線的に立ち上がり，口縁部は外傾する。ＬＲの単節縄文を施している。	長石・砂粒 にぶい黄褐色 普通	P143 20% PL22 覆土 加曽利ＥⅣ式
12	広口壺 縄文土器	B (19.6)	胴部片。胴部は球形を呈する。口縁部に微隆帯を巡らし，幅狭の無文帯を形成している。Ｌの無節縄文を施している。	石英・長石・砂粒 黒褐色 普通	P144 10% 覆土 加曽利ＥⅣ式
第182図 13	深鉢 縄文土器	A (23.5) B (19.7)	口縁部片。口縁部は内弾する。4単位の小波状口縁を呈し，波頂部は双頭となる。口縁部には波頂部を起点に微隆帯を巡らしている。ＲＬの単節縄文を施している。	長石・砂粒 黄褐色 普通	P146 20% PL22 覆土 加曽利ＥⅣ式
14	深鉢 縄文土器	A (20.2) B (8.8)	口縁部片。小波状口縁を呈し，波頂部に橋状把手を有する。波頂部を起点に微隆帯を巡らし，口縁部に幅狭の無文帯を形成している。文様は微隆帯により描出し，ＲＬの単節縄文を施している。	長石・砂粒 黒褐色 普通	P152 15% 覆土 加曽利ＥⅣ式
15	広口壺 縄文土器	A (27.0) B (11.4)	口縁部片。口縁部は外反する。口縁部に微隆帯を巡らし，幅狭の無文帯を形成している。Ｌの無節縄文を施している。	長石・砂粒 灰褐色 普通	P145 10% 覆土 加曽利ＥⅣ式
16	深鉢 縄文土器	A (23.6) B (13.1)	口縁部片。4単位の小波状口縁を呈し，口縁部は内弾する。口縁部は幅狭の無文帯を形成している。文様は微隆帯により描出し，波頂部を起点とする逆U字状文とU字状文を入り組ませる1帯構成で，区画文内にはＬＲの単節縄文を充填している。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	P147 5% 覆土 加曽利ＥⅣ式
17	広口壺 縄文土器	B (9.6)	肩部片。橋状把手を有し，ＬＲの単節縄文を施している。	長石・砂粒 黄褐色 普通	P151 5% 覆土 加曽利ＥⅣ式
18	深鉢 縄文土器	B (9.2)	口縁部片。小波状口縁を呈し，口縁部は外傾する。口縁部に隆帯を巡らし，波頂部直下は突出させている。ＬＲの単節縄文を施している。	長石・砂粒 にぶい褐色 普通	P153 5% 覆土 加曽利ＥⅣ式
19	深鉢 縄文土器	B (8.9)	把手を有する口縁部片。把手上部欠損。把手下部は橋状を呈し，把手上部は蛇頭形と推定される。文様は微隆帯により描出し，Ｌの無節縄文を施している。	長石・砂粒 黒褐色 普通	P150 5% 覆土 加曽利ＥⅣ式
20	深鉢 縄文土器	B (9.2)	口縁部片。口縁部に微隆帯を巡らし，円形刺突文を施している。文様は沈線により描出し，区画文内にはＬＲの単節縄文を施している。	長石・砂粒 明褐色 普通	P154 5% 覆土 加曽利ＥⅣ式
21	深鉢 縄文土器	B (11.0) C 7.3	底部片。無文。	長石・砂粒 にぶい橙色 普通	P148 10% PL22 覆土 加曽利ＥⅣ式
22	深鉢 縄文土器	B (8.9)	把手部片。把手上部は蛇頭形を呈し，下部は孔を有し中空となる。Ｌの無節縄文を施している。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P155 5% 覆土 加曽利ＥⅣ式
第183図 23	深鉢 縄文土器	B (7.3) C 5.8	底部片。無文。	長石・砂粒 にぶい橙色 普通	P149 10% PL22 覆土 加曽利ＥⅣ式

図版番号	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第183図 26	土製耳飾り	1.8	2.2	2.2	(4)	60	円柱状で，中央に孔がある。無文。	DP27

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第183図 27	石皿	(11.7)	(12.8)	7.1	(740)	安山岩	Q52 覆土
28	磨石	(5.9)	(6.2)	4.9	(261)	安山岩	Q53 覆土
29	石錘	3.0	1.4	0.3	1	頁岩	Q54 覆土

第1989号土坑（第184図）

位置　調査区の南西部，F18g8区。

規模と平面形　長径1.80m，短径1.50mの楕円形で，深さは74cmである。

長径方向　N－78°－W

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

覆土　7層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説

1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子少量，焼土小ブロック微量，炭化物少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，焼土小ブロック微量，炭化物少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，焼土小ブロック微量，炭化物中量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，焼土小ブロック微量，炭化物少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
6　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量

遺物　縄文土器片479点，土器片円盤2点，磨石1点が出土している。1は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で，覆土下層から出土している。3は小波状口縁を呈する口縁部片で，波頂部を起点に微隆帯を巡らしている。2・5は深鉢の口縁部片，4・6・7は深鉢の胴部片で，微隆帯により文様を描出し，RLの単節縄文を縦位に施している。8・9は土器片円盤，10は磨石である。

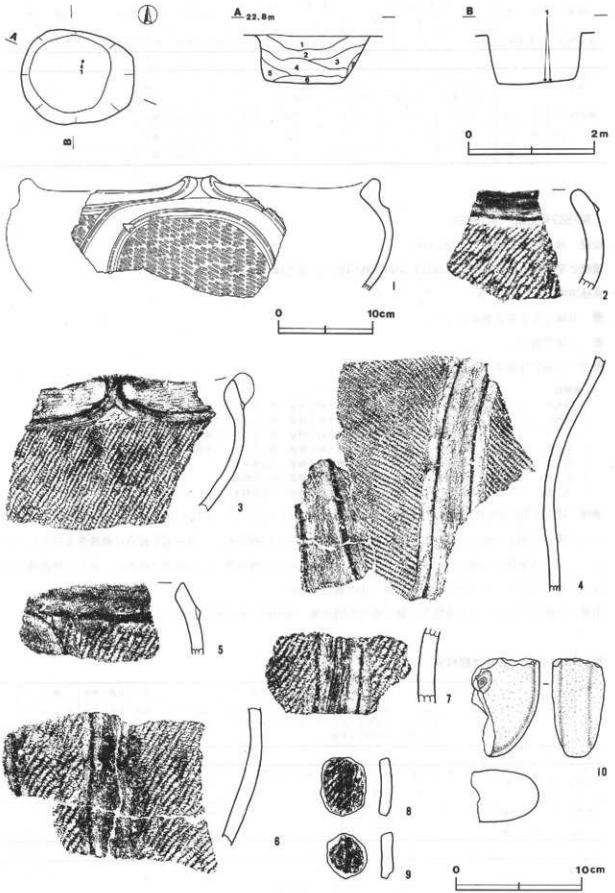
所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅣ式期）と考えられる。

第1989号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第184図 1	深鉢 縄文土器	A [18.3] B (12.0)	口縁部片。口縁部は内弯する。小波状口縁を呈し，波頂部は双頭となる。波頂部を起点に微隆帯を巡らしている。文様は微隆帯により描出し，区画文内にLRの単節縄文を充填している。	石英・長石・雲母に赤い赤褐色 普通	P156 10% PL22 覆土下層 加曽利EⅣ式

図版番号	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	現存率(%)	形状及び文様の特徴	備考
第184図 8	土器片円盤	4.6	3.6	1.0	18	100	Lの無節縄文。	DP28
9	土器片円盤	3.5	3.2	1.0	12	100	無文。	DP29

図版番号	器種	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
第184図 10	磨石	7.8	4.2	5.4	(216)	安山岩	Q55 覆土 凹石兼用



第184図　第1989号土坑・出土遺物実測図

第1999号土坑（第185図）

位置　調査区の南西部，F19ho区。

規模と平面形　径2.70mの円形で，深さは98cmである。

壁　袋状を呈する。

底　平坦である。

ピット　1か所。P_1はほぼ中央部に位置し，長径22cm，短径20cmの楕円形で，深さ32cmである。

覆土　8層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物少量
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子少量，炭化物少量
3　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
4　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，炭化物少量
5　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
6　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量，焼土粒子少量，炭化物少量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量
8　明褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量

遺物　縄文土器片121点，石鏃1点が覆土から出土している。1・2は把手を有する深鉢の口縁部片である。3は深鉢の口縁部付近から胴部の破片で，頸部に隆帯を巡らし，口縁部には縦位の沈線を充填している。胴部にはRの無節縄文を縦位に施している。4は深鉢の口縁部片で，沈線を有する隆帯によりクランク文を施こし，空白部に縦位の沈線を施している。5は石鏃である。

所見　本跡は，形状と出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）の袋状土坑と考えられる。

第1999号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第185図 1	深　鉢 縄文土器	B (13.5)	把手部の一部が欠損する口縁部片。口縁部は内彎する。把手上部は環状を呈し，下部は楕状となる。口縁部は RLの単節縄文を施文とし，沈線により区画文を施している。	石英・長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P157 5% 覆土 加曽利ＥⅠ式
2	深　鉢 縄文土器	B (9.0)	把手を有する口縁部片。口縁部は内彎する。把手部に貫通していない孔を有し，隆帯により文様を描出している。区画文内には縦位の沈線を施している。	石英・長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P158 5% 覆土 加曽利ＥⅠ式

図版番号	器　種	計測値				石　質	備　考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第185図 5	石　鏃	2.9	1.7	0.4	1	チャート	Q56 覆土

第2001号土坑（第186図）

位置　調査区の南東部，F20io区。

規模と平面形　長径2.22m，短径2.16mの楕円形で，深さは60cmである。

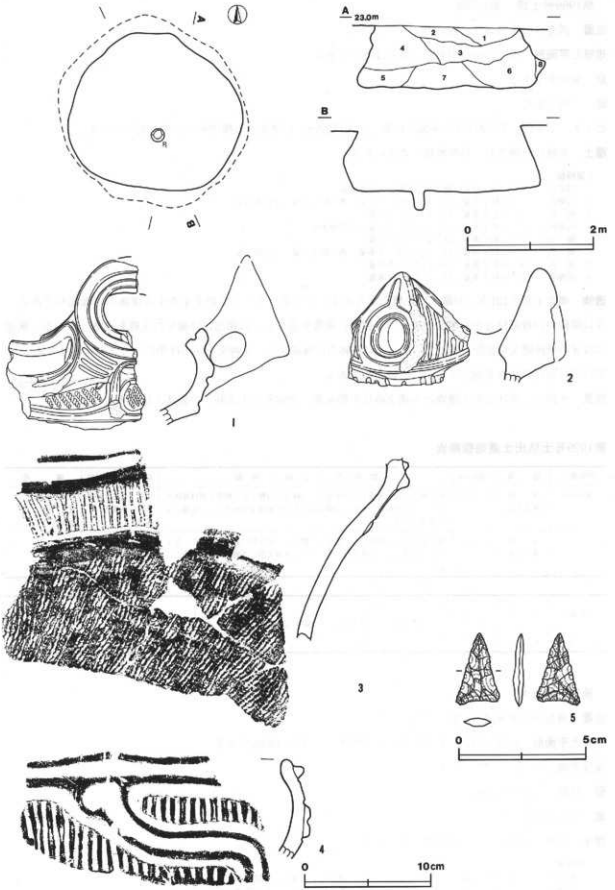
長径方向　N－20°－W

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

覆土　10層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子少量，炭化物微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
3　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
4　褐　色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量

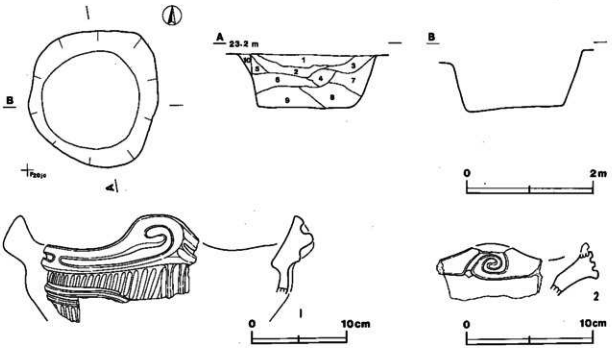


第185図　第1999号土坑・出土遺物実測図

5　褐　色　　ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量
6　褐　色　　ローム粒子中量，ロームブロック少量，炭化物微量
7　褐　色　　ローム粒子多量，ロームブロック少量，炭化物微量
8　褐　色　　ローム粒子中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
9　褐　色　　ローム粒子多量，ロームブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
10　褐　色　　ロームブロック中量，焼土粒子微量，炭化物微量

遺物　縄文土器片61点が覆土から出土している。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，2は波状口縁を呈する浅鉢の口縁部片である。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅠ式期）と考えられる。



第186図　第2001号土坑・出土遺物実測図

第2001号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第186図 1	深　鉢 縄文土器	A〔26.9〕 B〔11.3〕	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内彎する。波頂部に隆帯により渦巻文を施し，口縁部は沈線を有する隆帯により文様を描出している。区画文内には，縦位の沈線を施している。	石英・長石・雲母にぶい褐色 普通	P159　5% 覆土 加曽利ＥⅠ式
2	浅　鉢 縄文土器	B（3.5）	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。波頂部直下に隆帯により渦巻文を施している。	石英・長石・砂粒にぶい赤褐色 普通	P160　5% 覆土 加曽利ＥⅠ式

第2003号土坑（第187図）

位置　調査区の南部，F19$_{j9}$区。

規模と平面形　長径1.58m，短径1.02mの楕円形で，深さは80cmである。

長径方向　N－48°－W

壁　外傾して立ち上がる。北西壁は段を有する。

底　平坦である。

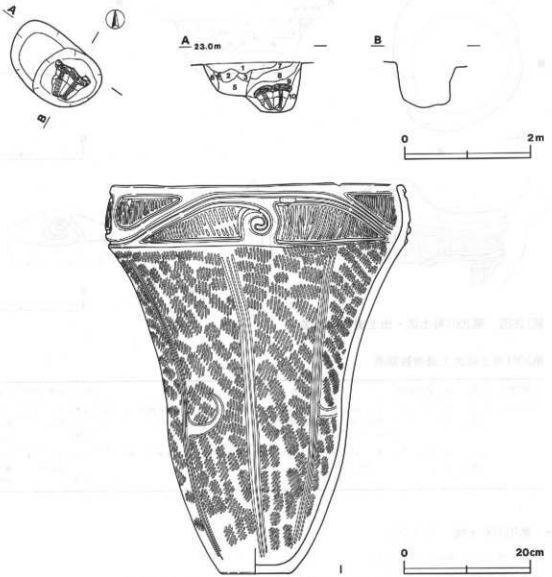
覆土　10層に分層され，自然堆積と考えられる。北西壁の段部には第1～6層が堆積しており，別の遺構となる可能性がある。

土層解説

1	暗　褐　色	ローム小ブロック中量，焼土粒子少量，炭化物微量
2	にぶい褐色	ローム小ブロック中量，炭化物微量
3	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，炭化物微量
4	褐　色	ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
5	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
6	褐　色	ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
7	褐　色	ローム小ブロック多量，焼土粒子微量，焼土小ブロック微量，炭化物微量
8	褐　色	ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，焼土小ブロック微量，炭化物微量
9	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子微量，焼土小ブロック微量，炭化物微量
10	褐　色	ローム粒子多量，焼土粒子微量，炭化物微量

遺物　縄文土器片19点が覆土から出土している。1は大形の深鉢で，ほぼ底面から斜位の状態で出土している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利ＥⅡ式期）と考えられる。



第187図　第2003号土坑・出土遺物実測図

第2003号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・硬軟	備考
第187図 1	深鉢 縄文土器	A (45.2) B (61.7) C (10.8)	口縁部一部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部でくびれ，口縁部は内彎する。口縁部には隆帯による2単位の渦巻文を起点に区画文を施し，区画文内に縦位の沈線を充塡している。胴部はＲＬの単節縄文を地文とし，沈線による3本一組の懸垂文を施している。	長石・砂粒 明褐色 普通	P161 95% PL22 覆土下層 加曽利EⅡ式

第2005号土坑（第188図）

位置　調査区の南部，F19ｊｏ区。

重複関係　本跡は第2000A・B号土坑に掘り込まれていることから，本跡が古い。

規模と平面形　長径1.00m，短径0.86mの楕円形と推定され，深さは28cmである。

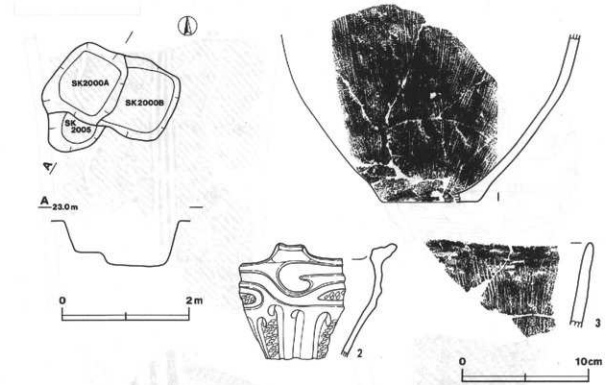
長径方向　N－29°－E

壁　外傾して立ち上がる。

底　平坦である。

遺物　縄文土器片17点が覆土から出土している。1は深鉢の底部から胴部の破片，2は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。3は深鉢の口縁部片で，縦位の条線文を施している。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式期）と考えられる。



第188図　第2000A・B・2005号土坑，第2005号土坑出土遺物実測図

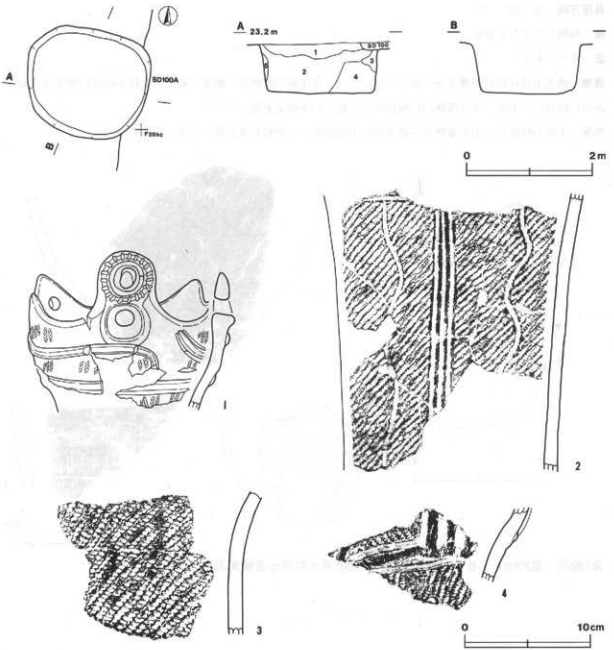
第2005号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第188図 1	深　鉢 縄文土器	B〔13.3〕 C（7.4）	底部から胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。条線文を施している。	石英・長石・砂粒 灰褐色 普通	P162 15% PL22 覆土
2	深　鉢 縄文土器	B（9.3）	小波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は内彎する。口縁部は微隆帯により文様を描出している。胴部はRLの単節縄文を地文とし，沈線による渦巻状文を垂下させている。	石英・長石・砂粒 にぶい赤褐色 普通	P163 10% PL22 覆土 加曽利EⅢ式

第2007号土坑（第189図）

位置　調査区の南部，F20g9区。

重複関係　本跡は第100A号溝に掘り込まれていることから，本跡が古い。



第189図　第2007号土坑・出土遺物実測図

規模と平面形　長径1.96m，短径1.72mの楕円形で，深さは80cmである。

長径方向　N－72°－W

壁　ほぼ垂直に立ち上がる。

底　平坦である。

覆土　5層に分層され，自然堆積と考えられる。

土層解説
1　灰褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物少量
2　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量，炭化物少量
3　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
4　褐　色　ローム粒子中量，ロームブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
5　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック多量

遺物　縄文土器片26点が覆土から出土している。1は把手を有する深鉢の上半部，2は深鉢の胴部片である。3は深鉢の胴部片で，RLの単節縄文を施している。4は深鉢の口縁部付近から胴部の破片で，RLの単節縄文を地文とし，頸部に隆帯を巡らしている。

所見　本跡の時期は，出土遺物から縄文時代中期後葉（加曽利EⅠ式期）と考えられる。

第2007号土坑出土遺物観察表

図版番号	器　種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
第189図 1	深　鉢 縄文土器	A (15.1) B (12.7)	口縁部から胴部の破片。1単位の8の字状の把手と2単位の双頭の把手を有し，口縁部は内弯する。頸部に隆帯を巡らして口縁部文様帯を形成し，隆帯による3単位のクランク文を施している。胴部はRLの単節縄文を地文とし，沈線による3本一組の懸垂文を施している。	石英・長石・砂粒 灰褐色 普通	P154 50% PL22 覆土 加曽利EⅠ式
2	深　鉢 縄文土器	B (21.5)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。RLの単節縄文を地文とし，沈線による3本一組の懸垂文と波状の懸垂文とを交互に施している。	石英・長石・雲母 暗褐色 普通	P155 10% PL22 覆土 加曽利EⅠ式

第2015号土坑（第190・191図）

位置　調査区の南部，F20g7区。

規模と平面形　長径1.96m，短径1.56mの楕円形で，深さは88cmである。

長径方向　N－4°－E

壁　袋状を呈する。

底　平坦である。

ピット　3か所。P_1は中央部に位置し，長径28cm，短径24cmのほぼ円形で，深さ63cmである。P_2とP_3は壁際に位置する。P_2は，長径36cm，短径32cmのほぼ円形で，深さ80cmである。P_3は，長径52cm，短径38cmの楕円形で，深さ52cmである。

覆土　10層に分層され，遺物の出土状況から人為堆積と考えられる。

土層解説
1　灰褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量，炭化物微量
2　暗褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック中量，焼土粒子微量，炭化物少量
3　灰褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物微量
4　灰褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量，炭化物少量
5　灰褐色　ローム粒子多量，ロームブロック微量，焼土粒子微量，炭化物微量
6　灰褐色　ローム粒子中量
7　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，焼土粒子微量，炭化物少量
8　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック多量，焼土粒子微量，炭化物微量
9　褐　色　ローム粒子多量，ロームブロック微量，焼土粒子少量，炭化物少量
10　褐　色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，焼土粒子少量，炭化物少量